

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第212集

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡 11

(池島Ⅱ期地区 07-2 調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2011年1月

財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡 11

(池島Ⅱ期地区 07-2 調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

2011年1月

財団法人 大阪府文化財センター

東大阪市・八尾市

池島・福万寺遺跡 11

(池島Ⅱ期地区 07 - 2 調査区)

一級河川恩智川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

本書は、当センターが平成元年度から進めてまいりました、恩智川治水緑地建設に伴う池島・福万寺遺跡の発掘調査のうち、東大阪市側にあたる池島Ⅱ期地区で行った平成19～21年度の発掘調査報告書です。

治水緑地の発掘調査は、既にⅠ期の調査を終え、現在は福万寺Ⅱ期地区・池島Ⅱ期地区の調査を進めております。

これまでの広範囲に及ぶ継続調査によって、洪水災害を克服しながら発展してきた弥生時代から近世・近代の水田遺構が重複して検出され、農耕の歴史を考える上で重要な遺跡であることが明らかになり、その成果は広く日本国内だけでなく海外からも注目されています。

近年は、調査地の東側を南北に連なる生駒山地に近い池島Ⅱ期地区で、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての竪や掘立柱建物が発見され、今後の調査の進展が期待されています。また、調査区周辺で良好に残る「条里型地割」は、その起源が10世紀まで遡ることが、これまでの調査で明らかにされておりますが、それに先行する正方位の地割の存在も指摘されてきました。今回の調査では古い地割に関連する溝を検出し、この地割が「条里型地割」である可能性が高まったといえます。その他にも、近畿地方でも最古級の弥生時代前期の水田遺構が良好に検出されるなど、多くの成果が得られました。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元の皆様をはじめ、大阪府都市整備部河川室、同部寝屋川水系改修工営所、大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会など関係諸機関、および指導助言を賜った多くの方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後ともセンターの調査事業に、より一層のご理解、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成23年1月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

- 1 本書は、大阪府東大阪市池島・八尾市福万寺に所在する池島・福万寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本事業は、平成19年8月31日付で「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査(その8)」として大阪府都市整備部寝屋川水系改修工管所から財団法人大阪府文化財センターが委託を受け、平成19年9月3日から平成21年10月30日まで大阪府教育委員会の指導のもと、現地調査を実施した。現地調査終了後は、平成21年6月1日付で「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査(その12)」として同様に委託を受け、引き続き平成21年11月2日から平成23年1月31日まで遺物整理を実施した。
- 3 発掘調査、遺物整理は以下の体制で行った。

<平成19年度>

調査部 部長 赤木 克視
調整課 課長 田中 和弘
中部調査事務所 所長 小野 久隆
池島支所 支所長 寺川 史郎
調査第一係 係長 広瀬 雅信
技師 島崎 久恵
技師 後川 恵太郎
専門調査員 乾 哲也

<平成20年度>

調査部 部長 赤木 克視
調整課 課長 田中 和弘
中部調査事務所 所長 寺川 史郎
池島支所 支所長兼係長 金光 正裕
調査第一係 技師 島崎 久恵
技師 福佐美智子
(平成21年2月から)
専門調査員 乾 哲也
専門調査員 飯田 浩光
(平成20年6月～9月)

<平成21年度>

調査部調査課 部長兼課長 福田 英人
調整グループ グループ長 金光 正裕
調査グループ グループ長 寺川 史郎
主幹兼池島総括主査 小野 久隆
副主査 島崎 久恵
技師 福佐美智子
(平成21年10月まで)
専門調査員 藤田 憲司
(平成21年7月)
専門調査員 乾 哲也
(平成21年6月まで)
専門調査員 小林 千夏
(平成21年8月～10月)

<平成22年度>

調査部調査課 部長兼課長 福田 英人
調整グループ グループ長 江浦 洋
調査グループ 主幹 岡本 茂史
調査グループ グループ長 岡戸 哲紀
主幹兼池島・福万寺総括主査 金光 正裕
副主査 島崎 久恵

- 4 本書で用いた現場写真は調査担当者が撮影した。本書に掲載した遺物の写真撮影に関しては、調査グループ主査片山彰一が担当した。出土した自然遺物の同定は、調査グループ主査山口誠治が担当した。また、現地調査の実施及び整理作業にあたっては、当センター職員の多くの協力、教示を得た。
- 5 現地調査の実施及び遺物整理にあたっては、関係諸機関、地元関係各位をはじめ、多くの方々からご指導ならびにご協力を賜った。また、出土土製品の花材に関して財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所 小倉徹也氏に鑑定を頂いた。記して感謝いたします。
- 6 花粉・珪藻・植物珪酸体分析を株式会社古環境研究所に、放射性炭素年代測定（AMS法）を株式会社パレオ・ラボに委託した。その結果は本書第5章に掲載した。
- 7 本書の編集・執筆は鳥崎が行った。
- 8 本調査に関わる図面・遺物・写真などの資料は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

- 1 本書で用いる標高はすべて東京湾平均海面である。
- 2 本書に掲載した遺構分布図・遺構図・その他すべての図の座標は世界測地系の国土座標の第Ⅵ系を使用する。単位はすべてすべてmであり、表記はすべて省略した。
- 3 方位はすべて座標北である。
- 4 発掘調査及び遺物整理については、当センターの「遺跡調査基本マニュアル」（暫定版）に準拠した。地区割りの第Ⅰ区画・第Ⅱ区画はG 6・15、H 6・3である。
- 5 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2004年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
- 6 本書では、本文、挿図、写真図版の遺構番号・遺物番号はすべて一致する。
- 7 遺構図の縮尺は、調査区の遺構分布図が600分の1を基本とし、一部400・1000分の1のものがある。遺構平面・断面図は20・40分の1を基本とするが、その他10・50・60分1の各図がある。出土遺物実測図の縮尺は、原則として土器は4分の1、断面と拓本のみは3分の1、打製石器は3分の2、木製品は2・4分の1、石製品は4分の1とする。いずれも図に付したスケールを参照されたい。
- 8 出土遺物のうち、瓦器・瓦質土器には断面を網ふせ、須恵器は断面を黒塗りて区別している。遺物番号は図毎に1からの連番を付しており、写真図版との整合には、この連番の前に図番号をハイフンで結んで表わしている。また、写真図版のみに掲載した遺物に関しては、aからアルファベットを付して表わしている。。
- 9 引用文献・参考文献は巻末に示した。また、文中には[]表記で執筆者等と発行年を記した。既往調査の土層名、遺構名は「 」で表記している。

目 次

序文
例言
凡例
目次

第1章 調査に至る経緯と過程	1
第1節 調査に至る経緯と過程	1
第2節 調査方法	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3章 基本層序	10
第4章 調査の成果	21
第1節 近代から近世の調査	21
第2節 中世から古代の調査	44
第3節 古代から弥生時代後期の調査	87
第4節 弥生時代の調査	129
第5章 自然科学分析	168
第1節 放射性炭素年代測定(パレオ・ラボAMS年代測定チーム)	168
第2節 珪酸体・花粉・珪藻分析(株式会社 古環境研究所)	171
第6章 まとめ	180
卷末	
遺物観察表	186
杭・自然遺物他観察表	200

挿 図 目 次

図1	池島・福万寺遺跡 調査区配置図	2	図57	第9面関連 出土遺物	83
図2	国土地標地区割図	3	図58	第9層関連 出土遺物	84
図3	07-2調査区 地区割図	3	図59	第10-1a面 遺構平面図	90
図4	池島・福万寺遺跡周辺地形図	6	図60	342溝・343土坑 断面図	90
図5	池島・福万寺遺跡と周辺の遺跡分布図	9	図61	342溝・503ピット 出土遺物	91
図6	調査区東西断面図1 (X=149,960ライン)	14	図62	第10-1a面 土坑・ピット 平・断面図	93
図7	調査区東西断面図2 (X=150,000ライン)	15	図63	第10-2a面 遺構平面図	95
図8	調査区南北断面図(Y=34,040ライン)	16-18	図64	529-622土坑・626ピット 平・断面図	97
図9	第1a-1b面 遺構平面図	21	図65	529-622土坑・626ピット 出土遺物	97
図10	56-13-34井戸 平・立・断面図	23	図66	512土坑 平・断面図	98
図11	118-89-92-119井戸 平・立・断面図	24	図67	512-543-611-581-647土坑・552ピット 出土遺物	98
図12	第1面・1層 出土遺物	26	図68	543-513-558土坑 平・断面図	100
図13	1b土坑・掘溝 出土遺物	27	図69	466土坑・611土坑 平・断面図	101
図14	第2-1a面 遺構平面図	29	図70	出土移動式竈	101
図15	102坪地畦畔 断面図	31	図71	575-605土坑 平・断面図	103
図16	14溝・136-138水口 断面図	31	図72	530ピット・581-520土坑 平・断面図	104
図17	181-38-93土坑 平・断面図	32	図73	575-605-513土坑・530ピット・612落ち込み 出土遺物	104
図18	57井戸 平・断面図	32	図74	微高地1 検出遺構1(土坑・溝)	105
図19	第2-3a面 水口 平・立・断面図(1)	34	図75	微高地1 検出遺構2(土坑・ピット)	106
図20	第2-3a面 水口 平・断面図(2)	35	図76	微高地1 検出遺構3(ピット)	107
図21	第2-3a面 水口出土遺物	36	図77	微高地1 検出遺構4(土坑・ピット)	108
図22	第2-4a面 遺構平面図	37	図78	微高地1 検出遺構5(ピット)	110
図23	第2-4b面 遺構平面図	39	図79	微高地2 検出遺構1(溝)	111
図24	第2-4a-2-4b面 水口 断面図	40	図80	微高地2 検出遺構2(土坑・ピット)	112
図25	183-182-180井戸 平・断面図	40	図81	低地部1 検出遺構(土坑・ピット)	114
図26	第2層関連 出土遺物	41	図82	微高地1以南 検出遺構(土坑・ピット)	116
図27	第3-1a面 遺構平面図	45	図83	第10層関連 出土遺物	116
図28	187-188水口 断面図	46	図84	第11面 遺構平面図	118
図29	第3-2a面 遺構平面図	48	図85	687周辺 遺構平面図・754-755柱列 平・立面図	119
図30	第3層関連 出土遺物	49	図86	687落ち込み・706土坑 断面図	120
図31	第4a面 遺構平面図	50	図87	677土坑 平・断面図	120
図32	第4a面・4a層 出土遺物	51	図88	687落ち込み・677土坑 出土遺物	121
図33	第5a面 遺構平面図	52	図89	652土坑 平・立・断面図	123
図34	第5a面・5a層 出土遺物	53	図90	702-683-660土坑・699-700-703ピット 断面図	123
図35	第6-1a面 遺構平面図	55	図91	652土坑 出土遺物	124
図36	第6-2-1a面 鳥島分布図	58	図92	678-714・713-708-459溝・655流路 断面図	126
図37	第6-2-2a面 鳥島分布図	59	図93	第11面 出土遺物	127
図38	184-185鳥島-X=149,980断面図	60	図94	第11b層流路・杭位置図	129
図39	177鳥島断面図(Y=34,040ライン)	61	図95	第11層 出土遺物	130
図40	179鳥島断面図(X=149,980ライン)	61	図96	第12-1a面 遺構平面図	132
図41	190鳥島断面図(Y=34,040ライン)	62	図97	774-727-768大畦畔・724-725-928高まり断面図	134
図42	第9面 遺構平面図	64	図98	757土坑・722-761-719水口 平・断面図	135
図43	溝群A他 断面図	66	図99	737微高地・716-778溝 平・断面図	134
図44	溝群B他 断面図	67	図100	第12-3a面 遺構平面図	138
図45	溝群Aと第6-1a面鳥島	68	図101	第12-3a・12-3b面 遺構平面図	138
図46	溝群Bと第6-2-2a面鳥島	69	図102	781柱列 平面図	140
図47	329-392-384方形土坑 平・断面図	71	図103	第12-3a・12-3b面 ピット集中部 平面図	141
図48	335-251-283-497-404-500方形土坑 平・断面図	72	図104	828-783-760-804溝・第12面関連土坑・ ピット 断面図	142
図49	386-402-358-363方形土坑 平・断面図	73	図105	第12層関連 出土遺物	144
図50	第8面 遺構平面図	76	図106	第13-1a面 遺構平面図	145
図51	第9面 北側遺構平面図	77	図107	第13-2b面 遺構平面図	147
図52	第9面検出(7層下面・8層下面) 土坑・溝断面図	78	図108	846-845-873-835溝・841-842-844土坑 断面図	149
図53	418ピット 平・断面図	79	図109	第13面関連 出土遺物	151
図54	第6層関連出土遺物(1)	80			
図55	第6層関連出土遺物(2)	81			
図56	第7・8層関連 出土遺物	83			

図110	第14-1a面 遺構平面図	152
図111	第14-2a面 遺構平面図	154
図112	溝・水口断面図	156
図113	911土器廻り 平面図	157
図114	919大畔野内 土器出土状況図	157
図115	916ビット 平-断面図	157
図116	第14-2b面 遺構平面図	159
図117	902-914ビット-918-921-882-901土坑断面図	159
図118	第14層関連出土遺物(1)	160
図119	第14層関連出土遺物(2)	162
図120	第14層関連出土遺物(3)	163
図121	第15a面 遺構平面図	164
図122	第14-2a面 池島地区	167
図123	暦年較正結果	170
図124	植物柱状体分析結果	173

図125	花粉ダイアグラム	175
表1	第1面 井戸 観察表	43
表2	出土投擲 観察表	158
表3	測定試料及び処理	168
表4	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	169
表5	植物柱状体分析結果	173
表6	花粉分析結果	176
表7	珪藻分析結果	178
表8	遺物観察表	186-199
表9	出土杭材観察表	201
表10	出土立木観察表	201
表11	先端炭化材観察表	202
表12	出土土・骨類観察表	202
表13	植物遺体他 観察表	202

挿入写真目次

写真1	118井戸 断面	22
写真2	119井戸 検出状況	22
写真3	1b土坑(Y=-34.040ライン) 検出状況	25
写真4	1b土坑断面 (X=-149.980ライン)	25
写真5	跡付痕跡 検出状況	46
写真6	200擬似島高	56
写真7	2層島高と水田 断面 (Y=-34.040ライン)	62
写真8	190島高 断面 (Y=-34.040ライン)	62
写真9	178島高 断面 (X=-149.980ライン)	62
写真10	255溝 完掘状況	66
写真11	251土坑 断面	71
写真12	387土坑 検出状況	76
写真13	8面 擬似畦畔 検出状況	76

写真14	605土坑 断面	103
写真15	655流路(Y=-34.060ライン)	127
写真16	678溝	127
写真17	擬似(転写)畦畔 検出状況	139
写真18	擬似畦畔 検出状況	139
写真19	782擬似(転写)畦畔 検出状況	140
写真20	782擬似畦畔 断面	140
写真21	737微高地 断面	146
写真22	畦畔 検出状況	146
写真23	772微高地東屑付近 (X=-149.980ライン)	150
写真24	2f区 X=-150.000ライン断面	150
写真25	足跡 検出状況	157
写真26	847溝断面(X=-149.960ライン)	157
写真27	植物柱状体の顕微鏡写真	179
写真28	花粉・胞子の顕微鏡写真	179
写真29	珪藻の顕微鏡写真	179

図版目次

図版1	調査区断面
1	第1b層～2-5b層 Y=-34.040ライン
2	第2-5a層～6層 X=-149.980ライン 断面
3	第11層～12層 X=-149.960ライン 断面
4	第4層～10層 Y=-34.060ライン 断面
5	第12層～14層 Y=-34.040ライン 断面
6	第11層～13-1a層 Y=-34.060ライン 断面
7	第13層～15層 Y=-34.040ライン 断面
図版2	近世の遺構面1
1	1区(北側) 第2-1a面 検出状況
2	2区 第2-1a面 検出状況
3	2区(南側) 第2-1a面 検出状況
図版3	近世の遺構面2
1	2区 第2-1a面 102坪境畦畔 検出状況
2	2区 第2-1a～2-5b層 102坪境畦畔(Y=-34.040)
3	2区 第2-3a面 170水口 検出状況
4	2区 第2-3a面 162水口 検出状況
5	1区 第2-1a面 14溝 断面
6	2区 第2-4b面 検出状況

7	2区(西側) 第2-4b面 検出状況
8	2区(南側) 第2-5b面 検出状況
図版4	中世の遺構面1
1	2区 第3-1a面 検出状況
2	1区 第3-1a面 検出状況
3	1区 第3-1a面 177島高、172・175畦畔 検出状況
図版5	中世の遺構面2
1	1区 第3-2a面 検出状況
2	2区 第3-2a面 102坪境畦畔と186畦畔 検出状況
3	2区 第3-2a面 102坪境畦畔 漆器検 出土状況
4	1区 第3-1a面 172畦畔断面
図版6	中世の遺構面3
1	2区 第5面 島高 検出状況
2	2区 第6-2-1a面 島高 検出状況
3	2区 第6-2-2a面 島高 検出状況
図版7	中世の遺構面4
1	調査区中央 第6-1a面 検出状況
2	1区 第6-1a面 高まり 検出状況
3	2区 第3-1a～7a層 102坪境畦畔(Y=-34.040)

- 4 2区 第4a面 190島高と102坪境畦畔
 5 2区 第5a面 203溝 検出状況
 6 2区 第6-1a面 222-223溝断面
 7 1区 第6-1a面 鉄製品 出土状況
- 図版8 古代～中世の遺構面1
 1 2区 第9面 検出状況
 2 2区 第9面 検出状況
 3 1区 第9面 検出状況
- 図版9 古代～中世の遺構面2
 1 1区 第9面 335土坑 土器出土状況
 2 1区 第9面 418ピット 土器出土状況
 3 2区 第10-1a面 342溝 検出状況
 4 2区 第10-1a面 342溝 断面
 5 1区 第10-1a面 342溝 足跡 検出状況
- 図版10 弥生時代後期～古墳時代の遺構面1
 1 1区 第10-2a面 検出状況
 2 1区 第10-2a面 水田 検出状況
 3 2区 第10-2a面 検出状況
- 図版11 弥生時代後期～古墳時代の遺構面2
 1 2区 第10-2a面 529土坑 遺物出土状況
 2 2区 第10-2a面 622土坑 遺物出土状況
 3 2区 第10-2a面 512土坑 遺物出土状況
 4 2区 第10-2a面 530ピット 遺物出土状況
 5 2区 第10-2a面 微高地1 遺構 検出状況
- 図版12 弥生時代後期～古墳時代の遺構面3
 1 1区 第10-2b面 検出状況
 2 1区 第11面 検出状況
 3 2区 第11面 655流路 検出状況
- 図版13 弥生時代後期～古墳時代の遺構面3
 1 2区 第11面 687落ち込み 検出状況
 2 2区 第11面 755杭列 検出状況
 3 2区 第11面 706土坑 検出状況
 4 2区 第11面 677土坑 断面
 5 2区 第11面 652土坑 遺物出土状況
- 図版14 弥生時代中期の遺構面1
 1 1区 第12-1a面 検出状況
 2 2区 第12-1a面 検出状況
- 図版15 弥生時代中期の遺構面2
 1 2区 第12-1a面 727畦畔と水田
 2 1区 第12-1a面 716溝 検出状況
 3 2区 第12-1a面 760溝 検出状況
- 図版16 弥生時代中期の遺構面3
 1 1区 第12-1a面 719水口 検出状況
 2 2区 第12-1a面 757土坑
 3 1区 第12-1a面 716溝 断面
- 4 1区 第13面 781杭列 検出状況
 5 1区 第12-3b面 783溝、土坑 検出状況
 6 2区 第12-3b面 828溝、ピット 検出状況
- 図版17 弥生時代中期初頭の遺構面
 1 1区 第13-1a面 検出状況
 2 2区 第13-1a面 検出状況
 3 2区 第13-2b面 846-873溝
 4 2区 第13-1a面 772微高地と846溝 断面
- 図版18 弥生時代前期の遺構面1
 1 2区 第14-2a面 検出状況
 2 2区 第14-2a面 水田 検出状況
- 図版19 弥生時代前期の遺構面2
 1 2区 第14-2a面 畦畔 検出状況
 2 2区 第14-2a面 847溝と水田
 3 2区 第14-2a面 871溝と水田
- 図版20 弥生時代前期の遺構面3
 1 1区 第14-2a面 検出状況
 2 1区 第14-2a面 847溝と水田 検出状況
 3 2区 第14-2b面 916ピット 遺物出土状況
- 図版21 地震による地層の変形
 1 1区 第11-3面 噴砂 断面 検出状況
 2 2区 第11-3面 噴砂 断面 検出状況
 3 2区 第14-2a面 噴砂 断面
 4 2区 第15-2b面 噴砂 検出状況
 5 1区 第14-1a層と第14-2a層の乱れ(X=-149940)
 6 1区 第13-1b～15層 側方移動検出状況(Y=-34,040)
 7 2区 第14-2b面 917土坑 検出状況
 8 1区 901土坑 断面(Y=-34,040)
- 図版22 近代～近世出土遺物
 図版23 中世出土遺物
 図版24 出土輸入陶磁器
 図版25 中世～古代出土遺物
 図版26 古代出土遺物・出土瓦
 図版27 飛鳥～古墳時代出土遺物
 図版28 古墳時代出土遺物1
 図版29 古墳時代出土遺物2
 図版30 弥生時代出土遺物1
 図版31 弥生時代出土遺物2
 図版32 弥生～縄文時代出土遺物
 図版33 出土金属製品
 図版34 出土木製品
 図版35 出土木製品・石製品
 図版36 出土石製品・土製品
 図版37 出土石器

第1章 調査に至る経緯と過程

第1節 経緯と経過

本調査は、大阪府都市整備部寝屋川水系改修工営所によって進められている寝屋川流域総合治水対策事業の一つである、一級河川恩智川治水緑地建設に伴うものである。治水緑地建設の目的は豪雨の際に、急激に増水する恩智川の水を緑地内に一時的に貯留することによって、下流域の水量を調整し、河川の負担を軽減するものである。また、平時にはグラウンドや緑地として開放し、有効活用するものである。

治水緑地は、全体計画で40.2haが予定されており、八尾市域の福万寺Ⅰ期地区、Ⅱ期地区、東大阪市域の池島Ⅰ期地区、Ⅱ期地区の4地区からなる。Ⅰ期地区の調査はすでに終了し、現在はⅡ期地区に着手している。

恩智川治水緑地が計画された地域は条里型地割が良好に遺存しており、「池島条里遺構」として知られていた。治水緑地建設に伴って昭和56・57年には大阪府教育委員会によって試掘調査が実施され、条里遺構が重層的に遺存していること、更に下層に弥生時代前期の遺構・遺物が遺存していることが確認された。この成果をうけて大阪府教育委員会は福万寺Ⅰ期地区の施設部の調査を開始し、その後、平成元年から財団法人大阪文化財センター（現、財団法人大阪府文化財センター）が大阪府教育委員会の指導のもと池床部の発掘調査を引き継いだ。調査は福万寺Ⅰ期地区を先行して進め、平成7年までに発掘調査を終了した。池島Ⅰ期地区は平成元年より水路の切り替えなどに伴う調査を実施し、平成6年には池床部の本格的な調査に着手、平成14年に発掘調査を終了した。Ⅰ期地区の調査成果については事業単位に概要報告書を刊行するとともに、平成14年には福万寺Ⅰ期地区をまとめた「池島・福万寺遺跡2」調査報告書を平成19年には池島Ⅰ期地区をまとめた「池島・福万寺遺跡3」調査報告書をそれぞれ刊行している。

Ⅱ期調査の開始にあたっては平成14年より池島Ⅰ期地区・Ⅱ期地区間の施設部、Ⅱ期地区の外周水路、平成15年には福万寺Ⅰ期地区・Ⅱ期地区間の施設部の調査が行われた。その後、平成15年より福万寺Ⅱ期地区で、平成16年より池島Ⅱ期地区で池床部の調査が開始された。大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが大阪府土木部（現都市整備部）寝屋川水系改修工営所の委託をうけ、これまでに福万寺Ⅱ期地区では5調査区、池島Ⅱ期地区では当調査区を含めて5調査区の現地調査を実施、終了している。現在はそれぞれ1調査区の調査が継続中である。Ⅱ期調査では概要報告は作成せず、調査区単位毎に報告書を刊行することになり、既に「池島・福万寺遺跡」4～9の6冊の調査報告書が刊行されている。また、寝屋川流域下水道八尾枚岡線（第3工区）下水管渠築造工事に伴う98-3・99-1調査区の成果は「池島・福万寺遺跡1」として刊行している。

今回の07-2調査区は池島Ⅱ期地区の西端に位置しており、都市整備部寝屋川水系改修工営所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが調査を実施した。平成19年8月31日付で「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その8）」として平成19年9月3日から平成21年10月30日までの受託契約を締結し、平成19年10月から平成21年9月まで現地調査を実施した。平成19年12月より1層のトレンチ調査を実施、その後重機により1層を除去し、第2面より人力

掘削による調査を実施した。主要な遺構についてはヘリコプターによる航空写真測量を行い、効率化を図った。調査は南北に分割して行っており、航空写真測量は9面、計18回実施している。平成21年9月30日、現地調査を終了した。現地調査中には平成20年7月28日今宮高校、平成20年11月18日石切中学校、平成20年10月16、17日和光高校の現地での発掘体験や、関西考古学の日にあわせた公開発掘を実施している。

平成21年6月1日付で「一級河川恩智川治水緑地池島・福万寺遺跡Ⅱ発掘調査（その12）」として受託契約を締結し、現地調査終了後、平成21年11月2日から平成23年1月31日まで遺物整理を行った。また、自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS法）、植物珪酸体分析、花粉分析、珪藻分析を行った。成果については本文第5章に掲載した。平成23年1月、本書の刊行をもって一連の調査は終了した。

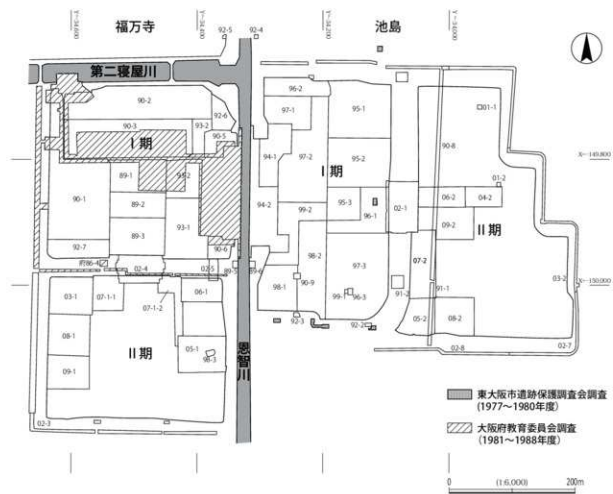


図1 池島・福万寺遺跡 調査区配置図

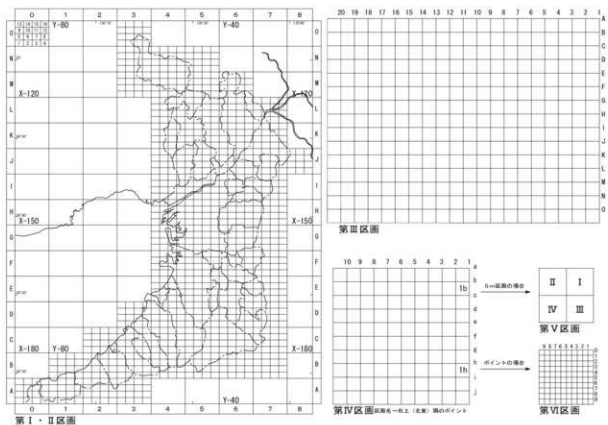


図2 国土座標地区割図

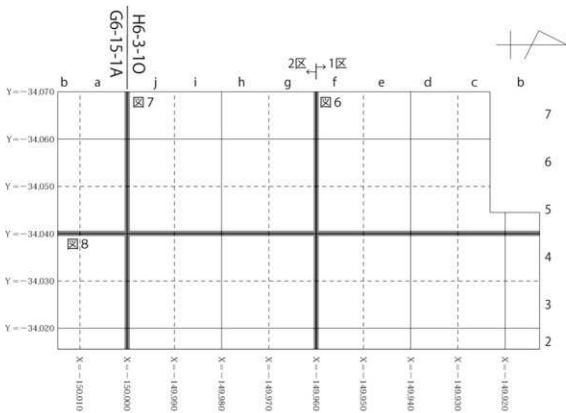


図3 07-2調査区 地区割図

第2節 調査の方法

調査の方法はマニュアル（「遺跡調査基本マニュアル」暫定版 2003（財）大阪府文化財センター）ののって行った。調査区の呼称は調査開始年度（西暦の下二桁）に調査単位のNoを付し、更に調査区Noを付けて表わしている。調査区の位置は図1のとおりで、今回の調査区は07-2調査区となる。各土層から出土した遺物の取り上げは、国土座標第Ⅵ座標系（世界測地系）を基準とした地区割りに基づいて行った（図2）。今回の調査区はG 6-15-1 A・H 6-3-10（第Ⅰ～Ⅲ区画）の範囲に位置しており、遺物の取り上げは更に第Ⅳ区画まで分けて行った（図3）。また、調査区は工程の効率化を図るために南北に分割し、反転しながら調査をおこなった。X=-149.960 ラインを境に北側を1区、南側を2区とした（図3）。

調査区の層序については、土層観察のための断面を、20m毎に設置し記録することを原則としているが、調査区東側は外周水路があることから、観察用断面を設定していない。なお、この水路設置に先立って、平成2・3年に調査が行われ（90-8・91-1調査区）、概要報告書が既に刊行されている。また、調査区北端に関しても観察用断面を設置していない。本報告書では図3に示したようにX=-149.960ラインの観察断面を調査地東西断面1（図6）、X=-150.000ラインを調査地東西断面2（図7）、Y=-34.040ラインを調査地南北断面（図8）として掲載している。

調査はまず20m毎にトレンチを設定し（図3）、トレンチ内を人力掘削し、第1層の堆積状況を確認し、記録をとった。その後、重機で第1層までを除去し、第2面より人力掘削を行った。

各遺構面の記録は、主要な遺構面についてはヘリコプターによる航空測量を行い、その他、平板測量によって補足している。なお、航空測量による図化は世界測地系に準拠したものであるが、近接する調査区が日本測地系で調査を行っていることから、あわせて日本測地系も表記している。ただし、本報告書内ではすべて世界測地系で表わしている。その他、各遺構平面図、断面図、遺物出土状況図など状況にあわせて作成した。

遺構番号は1から付しており、本報告書で使用する遺構番号は調査時の番号と一致している。ただし、同じ遺構が複数面にわたって存在している場合、調査時には、同じ番号を踏襲しているものと新しい番号を付しているものが混在していた。報告書作製の際に最初に付した番号で基本的に統一した。調査区を1区、2区と南北にわけて掘削しているので、遺構面と遺構Noが逆転しているものもある。遺構の種類については番号の後ろに付している。

整理作業にあたっては、遺物は洗浄後、デジタル写真を撮影し、注記を行った。接合・抽出作業を行い、実測図を作成した。必要と判断された遺物については、写真撮影を行った。これらの図面及び写真は本報告書に掲載している。掲載遺物は実測番号を通し番号で付して管理しているが、本報告書では図版ごとに番号を付すことで表わしている（例：図1-1）。

本書の作成にあたっては、航空測量のデーターをもとに、全体図に関してデジタル図化しているものがある。使用ソフトはイラストレーターCS2である。

報告書に掲載された遺物、及びそれ以外の遺物については、マニュアルにしたがって収納作業を行った。その他、各種台帳についてもマニュアルに沿って作成している。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

池島・福万寺遺跡は大阪府東大阪市池島町と八尾市福万寺町にまたがっている。今回の調査区は東大阪市池島地内である(図5)。既に調査が終了している池島Ⅰ期地区と堤防を挟んで東側、池島Ⅱ期地区の西端にあたる(図1)。

当遺跡は河内平野東部に位置する。東の生駒山麓から広がる扇状地と、西の旧大和川水系の玉串川が天井川化して発達した自然堤防に挟まれた低地部に立地する。遺跡の中央には恩智川が南北に縦走している。遺跡が立地する河内平野は沖積作用によって大きく地形を変化させてきた。今回の調査でも現地表下約4mの調査を実施しており、古環境の変遷は遺跡の形成過程と密に関わっている。

縄文時代の気候変動によって海水面は上昇し、当時の河内平野は海の底であった。当遺跡では、縄文海進ピーク時(今から約6000～5000年前頃)には水深5m程度の浅い海であったことが分かっており、その後、海面が引いていく過程で干潟が形成される。その後河川堆積作用が卓越するようになり、汽水～淡水域へ変化し、陸化が進行、約4000～3500年前頃には湿地帯となる。縄文時代中期後様の土器が出土しており、この段階には人間の関与が認められる(秋山・朝田2000)。当遺跡で安定した植生が成立するようになるのは縄文時代後期(15a層)である。離水して、堆積速度が極めて小さくなり、腐食土壌層が形成され、ヨシ属などイネ科植物が生育する環境が復元できる(辻本ほか2007)。その後、河川による堆積が活発化し、縄文時代後期末～弥生時代前期中葉には、安定した土壌が形成されている。

縄文海進最盛期以降の微地形環境の変化を論じた高橋は、河内平野は弥生時代前期末～弥生時代後期に顕著に形成された平野であるとし、当遺跡が立地するのは弥生時代前期末～中期にかけて積極的な堆積がみられ、急速に陸域を拡大させた三角州帯Ⅰaに分類されている(高橋1995)。氾濫堆積物によって形成された自然堤防と後背湿地が、次の洪水では後背湿地が自然堤防化するといった地形の変化が著しい段階である。三角州帯Ⅰaは弥生時代後期末～古墳時代中期には小規模な洪水によって徐々に後背湿地が埋積し、これまで形成された起伏が減少し、古墳時代～古代は、地形的に大きな変化がみられない段階としている。

中世以降の微地形に関しては、表層の地形分類を作成、1880年頃の土地利用図や発掘成果も踏まえ、形成過程を論じた井上の一連の成果に詳しい(井上2010)。遺跡周辺を沖積扇状地と低地部に分類し、低地部は後背湿地と自然堤防・クレバスプレーなどの高まりに細分される(図4)。これらの高まりは「沖積リッジ」と呼称されている。沖積リッジⅠは玉串川の天井化にともなう自然堤防である。沖積リッジⅡは沖積リッジⅠの両側に分布するもので、玉串川によって形成された自然堤防、クレバスプレーと考えられる。沖積リッジⅢは主に玉串川から供給された砂礫(クレバスプレー)によって形成されたとし、発掘調査の成果からその時期は15～16世紀としている。島島の分布とよく対応しており、更に詳細に主に3層の細分層との関連について検討されている。

当調査区を含む沖積リッジⅣは、恩智川に沿って細長くのびており、恩智川からの供給によって中世～近世に形成されたものとされる。池島Ⅰ期地区の成果をみれば、主に3層の細分層によってリッジが拡大している様子が分かり、2面では島高が広い範囲で展開している。ただし、2-5b層などは南東側か

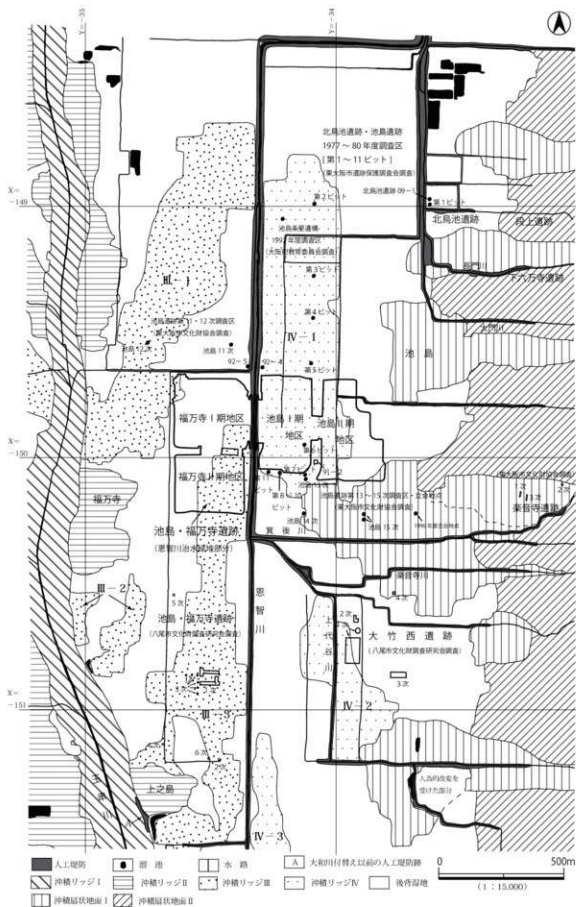


図4 池島・福万寺遺跡周辺地形図

らの供給が考えられ、箕後川がその供給源の候補となろう。沖積リッジⅣの形成過程に関してもリッジⅢで検討されたように、調査成果が蓄積されており、こういったディテールの復元が今後の課題となろう。なお、恩智川の成立については水利系統の変遷過程から10世紀前半～11世紀後半の時期に人工的に整備されたものであるとされている〔井上1995〕。

遺跡の東側には沖積扇状地面Ⅰの張り出しが迫っている。沖積扇状地面Ⅰは生駒山地から流れる箕後川や長門川によって発達したもので、古墳時代以降形成されたものと指摘される〔河角2002〕。箕後川流域の沖積扇状地面Ⅰの緩斜面にあたる葉音寺遺跡の調査では、弥生時代後期～古墳時代後期までに扇状地面低地に箕後川からの氾濫堆積物が累重し、古墳時代中期には調査区付近に張り出すロウプが形成されたと指摘している〔五井・松田2001〕。池島Ⅱ期地区の外周水路に伴う発掘調査では、南東コーナーにあたる02-7調査区で、古墳時代前期を中心とする遺構、遺物が密集してみられた〔田中2006〕。ちょうど沖積扇状地Ⅰの下辺にあたり、地形の形成過程と遺構の分布が密接にかかわると考えられる。今後のⅡ期地区の調査に期待されるところである。

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺の歴史的環境については既刊の報告書に詳しい。ここでは概略を記すこととする。

旧石器時代では生駒山西麓に立地する千住寺山・山畑遺跡でナイフ形石器が、正興寺山遺跡で縦長薄片が採集されている。縄文時代早期には神並遺跡で集積土坑、灰跡、有舌尖頭器、土偶などが見つかり、恩智遺跡では前期～晩期の遺物が出土している。

縄文時代中期～後期は、生駒山西麓の扇状地末端、「河内潟」沿岸に日下遺跡・鬼塚遺跡などが展開し、当遺跡に近い縄手遺跡では堅穴住居・灰跡・配石遺構が検出されている。当遺跡ではこの時期の遺構は確認できないが足跡や縄文時代後期中葉の土器などが出土しており、活動の領域であったことが分かる。

縄文時代晩期には河内潟は汽水の河内湖となり、河川堆積物によって陸化が進む。この時期には遺跡数は増加し、その分布も広がる。生駒山西麓の扇状地では縄手遺跡に代わって前半には馬場川遺跡で、晩期後半には鬼塚遺跡で集落がみられる。低地部でも鬼虎川（水走）遺跡がみられ、当遺跡でも池島Ⅱ期調査で最も東に位置する04-2調査区で当該期の墓塚が見つかった。

弥生時代前期には若江北遺跡・山賀遺跡・志紀遺跡で水田遺構が検出されている。当遺跡でも前期中頃の遺構が良好に検出されている。最新のⅡ期調査では弥生時代前期の集落が検出されており、成果に期待されるところである。

当遺跡の弥生時代中期～後期では、図1の既往の調査区全域で水田遺構が重層的に検出されている。広範に及ぶ灌漑設備の整った水田であるが、集落との関連が不明であり今後の課題といえる。池島Ⅱ期地区06-2調査区では、弥生時代中期初頃の被熱した土坑やピットなどの遺構が集中して検出されており、集落の一端である可能性が高く、今後遺構の広がりが期待される。弥生時代中期、池島・福万寺遺跡で水田が広がっていたころ、平野部では旧大和川の自然堤防上には、亀井遺跡や瓜生堂遺跡といった拠点的な大規模な集落が展開し、方形周溝墓群の墓域や、後背湿地状の低地部には水田遺構が広がっていた。当遺跡の北に位置する鬼虎川遺跡も拠点的な集落のひとつで、青銅器の鋳型が出土している。弥生時代後期には大規模集落は衰退化し、小規模な集落が多数見られるようになる。生駒山西麓の扇状地周辺でも上六万寺・縄手・下六万寺・段上・北島池・鬼塚・芝が丘遺跡などの集落遺跡が多く認められ

る。当遺跡の西側に位置する大竹西遺跡では近畿最古の鋳造鉄剣が出土している。また、標高80～100 mの高所に山畑遺跡、岩滝山遺跡などの高地性集落もみられる。

弥生時代後期～古墳時代前期では、中河内地域の中心となる久宝寺・加美遺跡をはじめとする中田遺跡群が旧長瀬川の堤防上に展開する。古墳時代の当遺跡は弥生時代までとは様相を異にしており、自然堤防上に集落が立地している。古墳時代前期初頭～後期の遺構、遺物が出土しており、Ⅰ期～Ⅳ期の変遷が検討されている。特に福万寺地区では古墳時代中期～後期の集落を検出しており、滑石製玉類が多数出土している。池島地区では西側微高地で庄内式期～古墳時代前期の遺構が集中する他、東側微高地では、古墳時代後期後半の遺物が比較的多く出土している。他に破鏡、小形仿製鏡などの遺物が注目される。

生駒山西麓は古墳が集中する地域である。古墳時代前期～中期の「楽音寺・大竹古墳群」では向山古墳・西ノ山古墳・花岡山古墳・中谷山古墳・心合寺山古墳・鏡塚古墳と継続して首長墓的な墳墓が造営されている。特に心音寺山古墳は中期の大規模な前方後円墳である。5世紀後半には韓式系土器が出土した段上古墳群・植附古墳群や、横穴式石室をいち早く導入した前方後円墳、郡川東塚、西塚古墳が造営され、渡来人との関連が窺われる。5世紀末以降、高安千塚古墳群に代表される群集墳が爆発的に築かれ、当遺跡付近でも6世紀前半ごろから7世紀前半ごろまで、山畑古墳群をはじめ、花草山古墳群・五里山古墳群などが造営されている。7世紀には生駒山西麓の高野街道沿いに古代寺院が数多く建立される。当遺跡の南東1 kmには心合寺跡が位置しており、単弁8葉蓮華紋軒瓦が出土している。また、遺跡の西側の平野部には西郡庵寺が位置する。7世紀後半には古代の山城として著名な高安城が築城される。

当遺跡付近は、「条里型地割」が良好に遺存する地域として知られていたが、発掘調査の成果からこの地割が10世紀まで遡り、これに先行する7世紀代の正方位の地割が施工された可能性が指摘されている〔江浦1992〕。平安時代、当遺跡一帯は「玉櫛荘」の範囲に含まれると想定されており、表層と一致する条里地割の施工に関して、荘園開発に関連した土地の再編成との指摘がなされている〔江浦1992〕。玉櫛荘は当初摂関家の所領であったが、その後平等院に寄進され、以後室町時代にかけて平等院領となる。向山瓦窯では、平等院の瓦を焼成しており、その関連が窺われるところである。当遺跡では10世紀中葉～11世紀後半には排水河川である思智川が整備され、中世以降、地割内では水田と島畠が広がる景観が復元できる。

鎌倉時代には当地は開発領主である水走氏の所領となる。水走遺跡では13世紀中葉～15世紀の集落が確認されている。池島・福万寺遺跡でも13世紀前半から15世紀前半の屋敷地跡が検出されている。室町時代には河内守護の畠山氏が若江城を拠点にこの地域を支配しており、若江城はその後、16世紀に三好氏の居城となり、城郭の整備が行われた。江戸時代には「池之島村」は幕府領に、「福万寺村」は狭山藩北条氏領となる。

宝永元(1704)年には大和川付け替え工事が行われ、周辺の農地に多大な影響をもたらすこととなった。頻発した旧大和川筋の洪水を防ぐとともに、旧河床の新田化によって多くの耕地を生み出すこととなったが、一方では大和川以北の地域では旱害を引き起こすことにもなった。また、排水河川である思智川には、山水や悪水が落ち込み、河床が高くなったことから、排水が困難となり、水難が多くなっていた。享保3(1743)年には、思智川川筋の23カ村より思智川の掘り浚えを公費普請として願ひ出る「思智川掘浚御願 乍恐御訴訟」の文書が公義に提出されている〔六万寺郷土研究会2005〕。

第3章 基本層序

池島・福万寺遺跡ではこれまでの調査によって基本層序が確立されている。今回の調査でも対応関係を検討しながら調査を進めた。当遺跡は複数の氾濫堆積物などの供給によって埋没しており、氾濫堆積層をはじめとする水成層とその上部の土壌化層をセットとして層序を捉えている。各層は水成層上部の作土層や古土壌層といった土壌化層をa層、母材である水成層をb層と表すことを基本としている。なお、a・b層の関係が判断できないものについては、単に第X層と表す。調査では既往の層序と同じ層番号を付すことを前提として行ったが、実際には対応がずれている部分もある。そこで、ここでは調査で用いた層番号のまま示し、文中に池島I期地区との対応について記すこととする。その際、池島I期地区の層序は「」で示した。以下、本文中も同様である。また、ここでは基本的な層序についてまとめることとし、層の認識や詳細については「第4章 調査成果」で述べることとする。

第1層 第1層は近代の作土層である。2層に細分することができる。第1層に関連する調査はトレンチ調査のみで行っている。母材となる第1b層は細砂を主体とする氾濫堆積物で、調査区全体に見られる。

第2層 第2層は細礫混じりシルト層で近世の作土層である。5層に細分した。2-1a層～2-4a層まではb層はほとんどみられない。調査区北西側で、わずかに2-1b層と考えられる細砂を確認した。2-4b層は調査区西側を中心に堆積した氾濫堆積層である。1b層に比して砂粒が粗い。2-4a層は2-4b層が遺存する部分では砂礫を多く含むが、東半ではシルト質であった。このことから2-4b層は西半中心に堆積し、東半は薄くあるいは細粒であったと考えられる。2-4b層は池島I期地区の「第2-5b層」に対応するものと考えられる。

2-5a層は細砂～極細砂が一部ラミナ状にみられる青灰色粘質シルト層で土壌化は明瞭ではない。上面で足跡、耕作痕跡がみられたことから作土層と考えられる。下部には細砂の薄層がみられ、これを2-5b層とした。上層までに比して細粒の堆積物であり、3層に含めるべき土層であった。2-5a層は池島I期地区の「第3-1a層」に対応するものと考えられる。

第3層 中世の作土層である。第3層は2層に細分した。4層以下と比して細粒の堆積物である。3-1a層は灰色の細砂混じり粘質シルト層で、3-2a層は紫灰色の細砂混じり粘質シルト層である。両層の間にb層はほとんど遺存しないが、3-1a層は3-2a層より砂質が高く、比較的層境は明瞭である。調査区北側では2-5層と混じり、分層できない箇所もあった。北に向かって細粒化する傾向にある。池島I期地区の「第3-2a層」、「第3-3a層」にそれぞれ対応するものと考えられる。

第4～7層 中世の作土層である。4a層～7a層はb層を介さず、いずれも暗青灰色系の細礫～細砂を含む粘質シルト層で非常に近似しており、分層が困難な部分も多くみられた。5a・6a層の層厚は薄い。4～7層は基本的に土砂の供給自体が少なく、上層が下層を攪乱している部分が多いと考えられる。傾向として北側に向かって細粒化しているものの、特に6層は下層の堆積物を攪拌しており、下層の土質の影響によるところが大きい。6a層の下部で砂質が高い部分があり細分したが、この部分は10b層を攪拌しており、その結果砂質が強いと考えられたため6層下部として6層に含めた。6a層は大きく2層に細分でき6-1a層、6-2a層とした。6-2a層は6-1a面で島島であった下部にのみ遺存しており、更に6-2-1a

層、6-2-2a層に細分した。細分層に関しては他の調査区との関連は不明である。第7a層は調査区南半で6-2-2a面の島畠にバックされた部分、および坪境畦畔の下面にのみ遺存する砂礫を含んだ粘質シルト層である。第4～6層に比して砂礫を多く含み粗い点特徴的である。調査区北半ではこれに直接対応する粗い粒子の土層は確認できない。西側に位置する97-2-3調査区第8面の坪境溝から粗い粗砂～細礫があふれており、周辺の7a層は砂礫を多く含んでいる。このことから、1期地区の「7a層」と対応すると考えられる。4a・5a・6a層に関しても特に矛盾ないと考えられる。

第8・9層 古代の作土層と考えられる。8・9層は4a層～7a層の中世の作土層に比して細粒の堆積層である。いずれも上層に削られており、遺存状況は悪い。b層を細分することはできない。第8層は灰色細砂混じり粘質シルト層である。北西部を中心にわずかに残る。第9層は灰オリーブ色の細砂混じりシルト層である。8層に比して砂粒の混じりは少ない。島畠下部、坪境畦畔下部で認められる他は北西部でわずかに残る。8層に関しては、第4章で述べるように、課題も残るが、池島1期地区の「第8・9層」にそれぞれ対応するものと考えている。

第10層 第10層は氾濫堆積層である細砂を主体とする10-2b層、及びその上面の土壌化層である10-2a層（オリーブ黒色シルト混じり細砂）から成る。10-2b層は調査区中央の655流路から流出したものと考えられる。第10-2a層は調査区北側の低地部分、島畠下部においてみられるが、大部分では上層によって削られ残存しない。調査区南半では10a層が2層に細分でき、上層を10-1a層とした。第10層は古墳時代前期～古墳時代後期を中心とする時期が与えられる。

第11層 第11層は5層に細分した。この細分層は他の調査区に対応するものではなく、また、細分の原則も最初に示したものと異なっている。当調査区では池島1期地区の「11b層」相当層が非常に厚い。しかしながら、これを母材とする「11a層、第1黒色粘土層」に対応する土壌層が認識できなかった。そのため、11b層の堆積環境を把握するため、便宜的に枝番号を付したものである。第11-3～5層は大きくみれば氾濫堆積層の連続であり、b層と表記すべきではある。しかし、断面観察において堆積の段階があると考えられたため枝番号を付して細分した。11-5層は12層上面を覆うシルト～細砂の互層を主体とするものである。11-4層は細礫～粗砂で粗粒の堆積物を主体とし非常に厚い。12面の低地部分である水田域が流路化して堆積したものである。流路は流芯を移動させながら埋積しているが、対応する地表面（a層）が残っていないことから、各段階での流路の形状は不明である。11-4層の堆積によって微高地化し、その結果生じた凹部を埋める粘質のシルト主体の層を11-3層とした。本文中で11b層と表現しているのは11-5～11-3層である。11-2層は11-3層の上部のやや土壌化している層で、10-2b層の下の層である。土壌化はしているものの、不明瞭で、全体にはほぼそしている。11-1層は調査区北東部分の456溝付近でオリーブ褐色シルト混じり細砂層があり、これを11-1層とした。11-2層は土壌化が非常に不明瞭であったが、上面で足跡が検出できたことから地表面であったことはいえる。

11a層に関しては、02-1調査区の11a層と当調査区の10-2a層が対応する。これについては、11a層と10-2a層が地形的に高い部分では一体化しているのではないかと考える。課題は残るものの、10-2a層は「10層の細分層」11-1・2層を「11a層」と対応すると考えたい。なお、10・11層の認識についての詳細は第4章にそれぞれ記述している。

第12層 第12層は3層に細分した。12-1a層は暗青灰色細砂混じり粘質シルトである。池島1期地区の「第12a層・第2黒色粘土層」に対応する。弥生時代中期後半の時期が与えられる。微高地部分では両層の間に緑灰色シルト層の点在が確認できたことから下層を12-2a層に細分した。また水田部分でも

南西側では暗色が強く砂の混じりが少ない12-2a層に細分できた。12-3a層は灰色粗～細砂混じりシルトである。12-2b層は2区南西側で一部確認できたが他は残存していない。大部分では12-1a～12-3a層がb層を介さず、連続している。12-3b層は細砂～シルトの氾濫堆積層で調査区西側に厚くみられ、この部分では最下層に粗砂～細礫層が薄くみられた。

第13層 第13層は3層に細分した。13-1a層は暗青灰色の粘質シルトである。池島I期地区の「第13a層・第3黒色粘土層」に対応する。弥生時代中期初頭の時期が与えられる。13-2a層は第13-1a層に比して色調がうすい。両層の間にはb層はみられない。13-1a層の攪拌があまり及んでいない範囲と捉えたほうが良いかもしれない。13-3b層は細砂～シルトを主体とする氾濫堆積層である。調査区東側に厚く堆積している。この氾濫堆積層は凸状に堆積しており、低い部分ではその上部に紫灰細砂混じり粘質シルトの土壌層がみられ、13-3a層とした。有機物を多く含んでおり、一体は湿地状の環境が想定できる。13-3a層の上部には緑灰シルトの剥層（第13-2b層）が部分的に残る。

第14層 第14層は2層に細分した。14-2a層は青黒色細砂～細礫混じり粘質シルト層で、地点によって砂礫の含みに多少がみられる。下部は色調が弱く細分できる可能性がある。ピブナイトが多くみられた。下面は生痕が著しく、乱れている。池島I期地区の「14-2a層・第4黒色粘土層」に対応する。縄文時代晩期～弥生時代前期の時期が与えられる。14-1a層は層厚が薄い暗紫灰色粘質シルト層、第14-1b層は緑灰色粘質シルトの剥層である。14-2a層と14-1a層の間に暗青灰色の粗砂混じり粘質シルトの土壌層がみられた。14-2a（上）層とする。14-1a層は有機物を多く含んでおり、湿地状の環境が想定できる。14-2b層は上層が細砂～粗砂を主体とし、中層はシルト、下部は細砂を主体とする氾濫堆積層である。調査区全域で厚く堆積している。

第15層 第15層は2層に細分できる。15-1a層は有機物を多く含む暗灰色粘質シルト層であり腐植土層と考えられる。池島I期地区の「15a層・第5黒色粘土層」に対応する。遺物の出土はなかったが、既往の調査で縄文時代後期の年代が与えられている。15-1b層は灰色～明緑灰色の砂質の高い細砂混じりシルト、細砂～シルトである。15-2a層は15-1a層に比して暗色の弱い灰色細砂混じり粘質シルトである。細礫を含む部分もある。15-2b層は細砂～シルトであるが、掘削限界に達する部分では細～粗砂の堆積がみられた。

地層の変形（図版21）

調査では人為的な攪乱以外に多くの地層の変形をみる事ができた。地震による変形と考えられるものである。ここではその概要を述べる。

1. 液状化による噴砂の流出に伴う砂脈

- ・図版21-1・2は11-4b層が噴出している。1は比較的11-4b層が細粒の部分で、幅の広い砂脈が長く確認できた。11-4b層の砂脈は他にも多くみられた。
- ・図版21-3は14-2b層が噴出している。14-2a層を突き抜けている。
- ・図版21-4は15-2b層が噴出している。最終掘削面の0.9m付近で確認した。非常に分かりにくい写真の断面、下から数cm上で薄く灰色に見えるのが15-2a層である。15-2b層は上部が細粒のシルト質であるが、その下部の粗粒の堆積物が噴出している。

2. 液状化による火焔構造

図版21-5では14-1a層と14-2a層が火焔状に混じっていることが分かる。14-2a面ではマーブル状に14-1a層がみえる。この変形構造は14-2a面の北東低地部のみで確認できる。この部分が湿地状を呈して

いた結果、液状化が顕著におこったものと考えられる。14-1a層が動いていることから、14-1a層形成後の地震痕跡である。

上記ほど明瞭ではないが2-5b層～4層上面は非常に乱れており、地震による変形と考えられる。特に北西側の3-1a面は土層の混じりが著しく、3-1a層が北に向かって細粒化していることがその要因と考えられる。この乱れは2-5b層～4層上面まで連動しているようであり、同一の地震による可能性が高い(図版1-2)。また、従来7面の地震痕跡が報告されているが今回の調査区では7～9層の遺存状況が悪く、ほとんど観察できなかった。調査区北東側で10a層と9層が混じった状況がわずかに確認できた。

3. 液状化による地層の変形

図版21-7・8は下層が回転して盛り上がり、上層が陥没した形状を示すものである。14-2b面で検出している。7・8は同じ遺構ではないが、平面形はほぼ同じであった。全体に盛りあがった楕円形を呈しており、中央に白く見えているのは下層の14-2b層で、その外側を挟むように14-2a層がみえる。図117に8の断面図を掲載している。変形部分の短軸断面である。黒色の土層(土層2)は14-2a層である。14-2b層は図117に示したようにこの部分では大きく3層に分けられ、上層から土層4、土層5、土層6である。土層3は14-2a層の下部層である。変形部分中央では14-2bが滑りながらちぎれて、時計回りに回転し、土層3から5が連転しているようにみえる(上部5'から3')。3'の部分には15a層がちぎれてブロック状に混じっている。北側の14-2a層は5'が滑って隙間に落ち込んでいるようにみえる。5'の部分には15a層のブロックがみられる。層境がよく分からない部分もあるが、北側がちぎれて回転し、北側が滑って隙間に落ち込んでいる状況が考えられる。今回の調査では同様な土坑を4基確認した。平面の検出は14-2b面ではあるが、14-2a層が落ち込んでいること、一方14-2a(上)層が上面を覆っている点から14-2a層形成後、第14-2a(上)層堆積以前に起こったものと考えられる。

4. 側方移動

地盤が上下に切断されて水平方向に滑り動いた痕跡である。14-2b層間にみられた。図版21-6の黒色土は14-2a層であるが、その下、数cmのところ、黒っぽい筋が水平にはしっているのがみえる。これが滑り面であり、14-2a層の下面の生痕も切り離されて滑っていることが分かる。調査区中央の南北断面のX=-149.910～X=-149.940の範囲で確認でき、途中で見えなくなる。なお、14-2b面で検出した882土坑の南北断面も上層が南に10cmほどずれている(図117)。14-2a層の下面の生痕がずれていることから、少なくとも14-2a層形成後の地震と考えることができる。

14層に関連する地震痕跡を多く確認した。同様の痕跡はこれまでの調査でも多く報告されている。1に関しては当調査区では噴砂が面に広がる状況が確認できず、どの段階の地震によるものかは分からなかった。しかし、南接する05-2調査区では14-2b層の噴砂が13b層の下部に達し、そこで高さ5cmの砂丘を形成していることが確認されている(内田2008)。このことから13b層が堆積する段階で起こった地震であることが分かる。同様の時期の地震痕跡としては、噴砂以外では06-2調査区で確認された流路下部での地層の不整合などがあげられる(廣瀬・飯田編2009)。弥生時代前期末～中期初頭の南海地震に伴う可能性が指摘されている(廣瀬編2007)。3に関しては既往の調査で「縄文土坑」と呼称されているもので、14-2b面で多く検出されている。東西方向に軸を持つ馬蹄形を呈していることから、南北方向のゆれであることが指摘されている。14-2a層形成時期に限定でき、縄文時代晩期～弥生時代前期と考えることができる。4に関しては14-2a層形成後のものであり、3と同様の地震による可能性もある。2に関しては14-1a層堆積後のものであり、上記2つの間に起こった地震痕跡と考えられる。

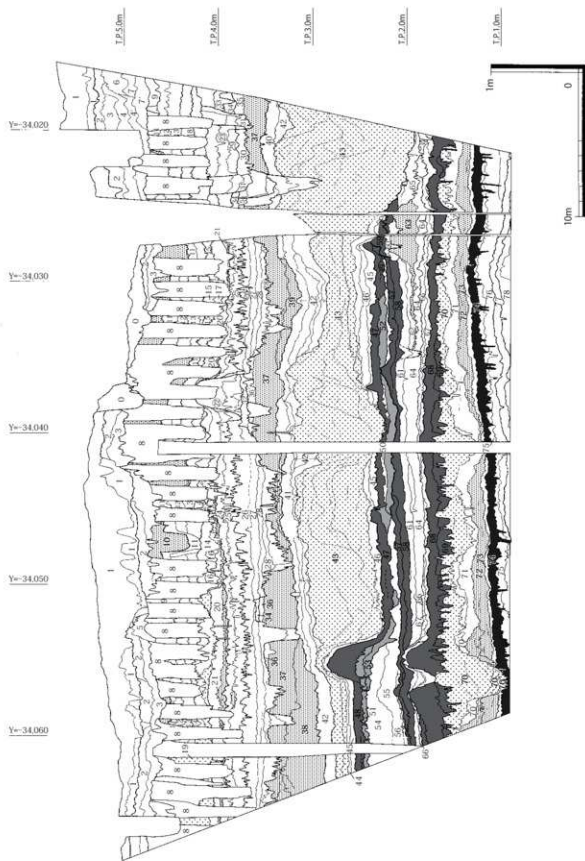


図6 調査区東西断面図1 (X=-149,960 ライン)

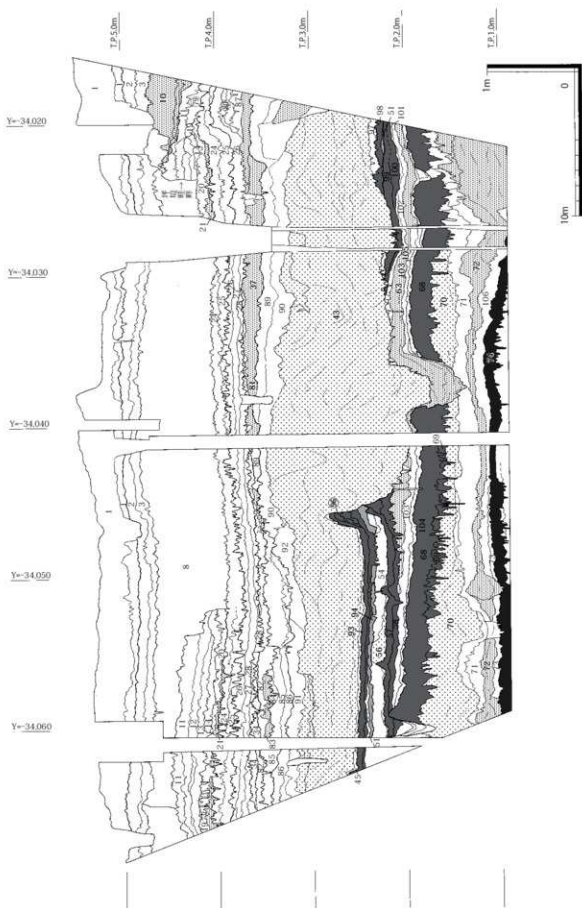
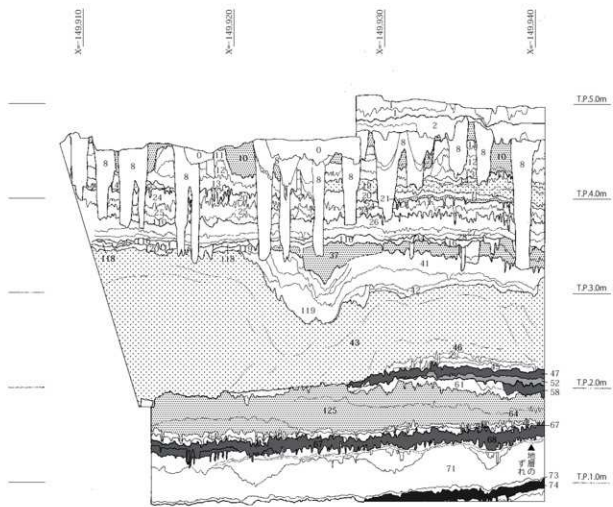


図7 調査区東西断面図2 (X=-150,000ライン)



番号	土色	土質	特徴	備考
	図6・7・8共通			
0		焼土		
1		赤土・及び規準土		
2	灰黄褐色・黄褐色	10YR5/2・2.5Y3/3	シルト混じり細～中砂	細礫含む、場所によってグライ化
3	黒褐色	10YR3/2・7.5Y3/1	細～中砂	細礫含む、場所によってグライ化
4	にぶい黄褐色	10YR5/3	中細砂	細礫含む、砂多く含むこと特徴、Mn斑有り
4	にぶい黄褐色	10YR4/3	シルト混じり細砂～中砂	細礫多く含む、Mn含む
5	褐色	7.5YR4/4	中細砂～粗砂	細砂ブロック混じる、ブロック土
6	明黄褐色	10YR7/6	細砂主体、細礫混じり中細砂	大ブロック10cm大含む、ラミナあり
7	暗褐色	7.5YR3/3	細礫混じり細砂～中砂	Mn含む
8			1b土壌理士	
9			1b土壌(古)埋土	
10	淡黄色	5Y8/3	細砂～中砂	1b層
11	青灰色	5B6/3	砂礫混じりシルト	2-1a層
12	青灰色	10B6/1	砂礫混じりシルト	2-2a層
13	青灰色	10B6/1	砂礫混じりシルト	2-2a層
14	灰色	5Y5/1	細礫混じりシルト	粘性シルトブロック含む
15	灰色	10Y6/1	粘質シルト	細礫層に含む
16	灰オリーブ色	5Y5/2	細礫混じりシルト	2-4a層
17	灰色	10Y6/1	細礫混じり粘質シルト	2-4a層
18	灰褐色	10YR5/2	細礫混じりシルト	2-4a層m3-1a層
19	淡黄色	2.5Y8/3	砂礫	2-4b層
20	青灰色	5B6/1	粘質シルト	細砂ラミナ状にみえる、土壌化弱い
21	淡黄色	2.5Y8/4	灰細砂	2-5b層
22			178号島 詳細は図38参照	
23			179号島 詳細は図40参照	
24	灰色	7.5Y5/1	細砂混じり粘質シルト	3-2a層より砂質高い、調査区北西側は2-5b層と3-1層が混じり混ざり分離できない箇所あり
25	紫灰色	5P5/1	細砂混じり粘質シルト	4層との境が夫々大きく波うち砂礫を含む部分あり
26	暗青灰色	5B4/1	細砂～細礫混じり粘質シルト	粘性強い、炭酸カルシウム含む、Fe管根状に含む
27	暗青灰色	5B3/1	細砂～細礫混じり粘質シルト	粘性強い、炭酸カルシウム含む、4層よりやや砂質強い部分あり、やや暗色強く土色の変化が早い
28	暗青灰色	5B4/1	細砂～粗砂混じり粘質シルト	5a層
29	明褐色	7.5YR5/8	細砂混じりシルト	6-1a層
30	褐色	7.5YR4/3	細礫混じりシルト	6-2-1a層
31	灰褐色	7.5YR4/2	細礫混じりシルト	細～粗砂多く含む 30と似る
32	黒褐色	7.5YR3/2	細礫混じりシルト	6-2-2a層
33	黒色	7.5Y2/1	粗砂～細礫混じりシルト	シルトブロック少量含む
34	灰オリーブ色	5Y6/2～7.5Y3/1	細砂混じりシルト	7層
35	黄褐色	10YR5/6	シルト混じり細砂	粘性あり
36	オリーブ褐色	7.5Y3/1	シルト混じり細砂	10-1a層
36	にぶい褐色	7.5YR5/4	シルト混じり細砂	10-2a層
37	明黄褐色～黄色	2.5Y7/6～2.5Y7/8	シルト～細砂、細砂主体	10-2a層
38	オリーブ灰色	2.5G7/6/1	細砂～中砂主体	10-2b層(上層)
39	灰オリーブ色	5Y6/2	粘質シルト混じり細砂	10-2b層(下層)
40	にぶい黄褐色	10YR6/3	細砂混じり粘質シルト	10-2b層下部
41	青灰色	5P15/1	細砂混じり粘質シルト	11-2層 上面が11面
42	紫灰・青灰色	5P6/1・5P6/5-6/1	粘質シルトの互層	11-2層 上面が11面
43	淡黄色～灰オリーブ色	5Y7/3～5Y4/2	粗砂～細礫主体	11-3層 b層の細分
44	オリーブ灰色	2.5G7/5/1	粘質シルト	11-4層 b層の細分
45	紫灰色	5P15/1	粘質シルト	11-5層 b層の細分
46	オリーブ褐色	5Y3/2	細砂混じり粘質シルト	11-5層 b層の細分
46'	暗青灰色	5P14/1	細砂混じり粘質シルト	11-5層 b層の細分
47	暗青灰色	5B3/1	細砂～粗砂混じり粘質シルト	11-5層 b層の細分
48	暗紫灰色	5P3/1	粗砂混じり粘質シルト	12-1a層
49			48に比して細礫多い	12-1a層(2黒)
50	青灰色	5B5/1	細砂混じり粘質シルト	12-2a層
51	灰色	7.5Y5/1	細砂～粗砂混じり粘質シルト	12-2b層
52	灰色	N5/0	細砂～粗砂混じり粘質シルト	12-3a層
53	緑灰色	10G5/1	細砂混じり粘質シルト	12-3a層
54	青灰色	5B6/1	シルト～細砂	12-3b層の細分
55	灰色	N5/0	細砂混じり粘質シルト	12-3b層の細分
56	黄色	5Y7/6	粗砂～細礫主体	12-3b層の細分
57	暗青灰色	5P13/1	粘質シルト	13-1a層(3黒)
58	暗青灰色	5P14/1	粘質シルト	57より暗色弱い、緑灰色シルトブロック下部に点在、炭化物に含む
59	暗青灰	5B3/1	シルト混じり粗砂～細礫	13-2a層
60	暗青灰	5B3/1	シルト混じり細礫	上部粘質シルト多い
61	紫灰色	5R16/1	細砂混じり粘質シルト	63を攪拌
62	青灰色	5B6/1	細砂混じり粘質シルト	弱い土壌化層
63	オリーブ灰	2.5GY 5/1	細砂主体	13-3b層の細分
				ラミナあり

番号	土色	土質	特徴	備考
64	青灰色	SB6-1	細砂混じり粘質シルト	ビビアナイト含む、炭屑状に含む
65	暗青灰	SB4-1	粗砂-細砂混じり粘質シルト	細礫(13b)ブロック 5-10mm多い カルシウム多く含む、65のF層砂みられる
66	暗赤灰	SP4-1	粘質シルト	土壌化層 粘性強い 炭化物含む 下部砂質強い部分あり
67	暗青灰	SPB3-1	粗砂混じり粘質シルト	緑灰粘質シルトブロック含む 粗砂は多少あり 土壌化層、14-2a層の細分
68	青黒	SPB2-1	細砂-細礫混じり粘質シルト	b層点在する部分あり、水田部分は細礫多く含む、下面流れる、ビビアナイト含む
69			67層の下部 粘性弱い	下面下流砂多し
70	オリーブ灰	25GY6-1	細-粗砂主体シルト	14-2b層の中で最も重い
71	オリーブ灰	25GY6-1	シルト主体	粗砂ラミナ状にあり
72	オリーブ灰	25GY6-1	細砂主体	ラミナあり
73	灰	5Y3-1	細砂混じりシルト	粘性あり 植物遺体含む
74	暗灰	N3-0	粘質シルト	部分的に細砂多く含む 有機物多く含む
75	灰	N5-0	細砂混じりシルト	砂質高い
76	明緑灰	7.5GY7-1	細砂-シルト	
77	灰	N4-0	細砂混じり粘質シルト	細礫含む部分あり 74より粘性弱い
78	オリーブ灰	6GY6-1	細砂-シルト	
図7 追加				
79			シルト混じり細砂	ブロック土
80			粗砂-細礫混じり粘質シルト	埋埋土、埋灰層部
81	灰色	5Y4-1	シルト-細砂	埋埋砂層部
82	明黄褐色	10YR6-6	シルト混じり細砂	9層
83	明黄褐色	10YR6-6	細砂	10-2a層か10-1a層
84	にぶい褐色	7.5YR5-4	粘質シルト	687落ち込み
85	褐色	7.5YR4-3	細砂混じりシルト	687落ち込み
86	にぶい黄褐色	10YR5-4	中砂-粗砂混じりシルト	687落ち込み
87	明褐色	7.5YR5-6	細砂混じりシルト	10-2a層
88	明黄褐色	10YR6-8	粘質シルト混じり細砂	10-2a層 b層の細分
89	灰褐色-明褐色	7.5YR 6/2 ~10YR 6/6	細砂混じりシルト	粗砂ラミナ状に含む部分あり 土壌化
90	暗青灰色	SBG4-1	細砂混じり粘質シルト	かたくしまる
91	青灰-灰オリーブ-灰オリーブ	3BG5-1、 7.5Y4-2、 4-3	細砂混じり粘質シルト	変色著しく場所によって土色異なる
92	青灰色	SBG5-1	粗砂混じり粘質シルト	
93	暗青灰色	SPB3-1	細砂混じり粘質シルト	中砂を含む、47に比して砂の含まれない
94	暗青灰色	SPB3-1	粘質シルト	93とはほぼ同じ、粘性弱く砂の含まれない
95	青灰	SB5-1	粘質シルト	12-2b層
96	暗青灰色	SPB4-1	細砂混じり粘質シルト	中砂ブロック多く含む
97	灰オリーブ灰	7.5Y4-2	粗砂混じり粘質シルト	粗砂ラミナ状に含む
98	暗青灰色	SB4-1	細砂混じり粘質シルト	1区や北より粘性弱い、砂の含まれ少く細かい、Ca下部にのみ、ビビアナイト含む
99	暗赤灰色	SBP4-1	細砂混じり粘質シルト	炭化物含む
100	紫灰色	SBP5-1	細砂混じり粘質シルト	99に比して粘性弱い
101	青灰、緑灰	SB5-1、 25GY6-1	粘質シルト	99-100と102の間に点在する部分もあり
102	暗赤灰色	SB4-1	細砂混じり粘質シルト	土壌化層
103	青灰色	SPB5-1	粘質シルト	13-3b層
104	灰	7.5Y4-1	細砂混じりシルト	ビビアナイト含む、炭化物含む
105	黒色	2.5Y3-1	細-粗砂混じり粘質シルト	1区に比して重い、植物遺体含む
106	青灰	SBG6-1	シルト	14-2b層の細分
図8 追加				
107			177号品 詳細は図3参照	
108			207号品 詳細は図38参照	
109			190号品 詳細は図41参照	
110	暗緑灰色	5G4-1	3-2a層と4a層混じる	3-2a層下部
111	黒褐色	10YR 2/2	粗-砂礫混じり粘質シルト	6-2-1a層
112	オリーブ黒色	5Y3-1	シルト混じり粗-細礫	6-2-2a層
113	灰褐色	10YR4-2	細礫混じりシルト	粘性あり
114	オリーブ灰色	5Y4-2	粗-粗砂混じりシルト	細礫含む
115			シルト	粘性あり、わずかに粗-粗砂含む
116	灰色	7.5Y5-1	細砂混じり粘質シルト	8層
117	黄褐色	10YR 5/6	細砂混じりシルト	下部に細砂の混入あり
118	灰褐色	7.5YR4-2	粗砂混じりシルト	10-2a層
119	灰オリーブ、青灰色	7.5Y5-2、 SB5-1	粗砂-細礫、粘質シルト	10-2b層対応、流路
120	灰褐色	7.5YR5-2	粗砂混じり粘質シルト	11-2層 上面は11面
121	にぶい黄褐色	10YR7-3	細砂混じりシルト	粘性あり
122	暗赤褐色	5YR4-2	細砂混じり粘質シルト	土壌化、89、91と同等だが褐色強い
123	灰色	7.5Y5-1	粘質シルト	11-1a層 上面は11面
124	にぶい黄褐色	10YR5-4	粗砂-細砂混じり粘質シルト	床とは粗砂混じる
125	オリーブ黒色	7.5Y3-1	粗砂-中砂	11-2層 上面は11面
126	緑灰	25GY7-1	粘質シルト	14-2a層直上のb層

第4章 調査の成果

遺構面の呼称は第X層上面を第X面とした。またb層が遺存しない場合、上層（Y層）中から掘り込まれた遺構もX面で検出されることになる。Y層に関連すると判断できるものに関しては、Y層下面遺構という表現をしている。以下、検出した主要遺構面について報告する。なお、本文中では第X層、第X面の「第」を省略している。

第1節 近代から近世の調査

調査区は河内国河内郡二条字河の二十一ノ坪と二十二ノ坪にまたがっている。「池島村地引図」における地割りをみれば、二十一ノ坪の北半は東西方向の、南半は南北方向の地割、二十二ノ坪は東西方向の地割を基本としており、調査においても同様の地割が復元できた。

第1面（図9）

第1面はトレンチ調査のみで、全面調査は行っていない。第2-1a面の調査で上面遺構と判断された遺構を図9に示した。またトレンチ調査及び断面観察から第1面の坪境畦畔、及び島畠を復元したものを追加している。

1面では島畠、水田、坪境畦畔、溝、井戸を検出した。1層は2層に細分できるが、上記のような調査によるもので、各遺構の帰属の詳細は不明であり、2-1a層より上面の遺構として扱うこととする。

坪境は二十一ノ坪と二十二ノ坪を区画するものであり、畦畔である。先に触れたように、二十一ノ坪北半は東西方向、南半は南北方向の地割となっており、長地型と半折型が混在したような地割となっている。二十二ノ坪は東西方向の地割を基本としている。

復元できる島畠は二十二ノ坪では東西方向に長い島畠が1基、二十一ノ坪では南北方向に長い島畠4基・東西方向に長い島畠3基である。島畠は1b層の遺存状況を目安に、断面等から復元した。1-2面から1-1面にかけて同じような分布であったと考え

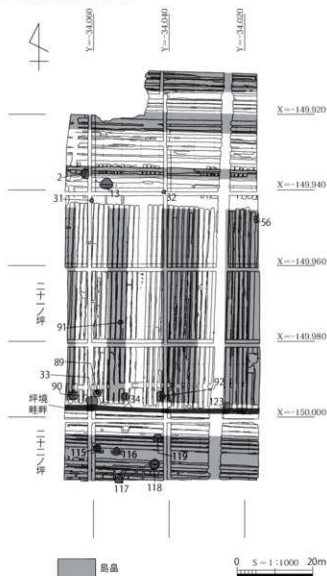


図9 第1a・1b面 遺構平面図

られる。図示していないが、トレンチ調査では島高間で溝を検出した。特に二十一ノ坪南側では幅0.4m前後、深さ0.1m前後の溝が平行して1～1.5mの間隔で並んでいるのが確認できた。溝は1b面で検出しており、埋土は1-2a層であるが、1-1a層下面でも溝が確認できる。

他に井戸を検出した。井戸は非常に多く17基を数える。分布の傾向としては、坪境畦畔の北側に平行して帯状に分布する。二十一ノ坪では地割の方向が変わるあたりにも分布が集中する。二十二ノ坪では西半に集中している。

井戸の構造は素掘りのものと構造物を伴うものがみられた。1面に帰属すると考えられる井戸は構造物を伴うものが多かった。詳細は節末の一覧表(表1)に示し、ここでは代表的なものを図示した。

56井戸(図10) 調査区東法面に位置する。方形の掘方に構造物を伴うものである。最上部はコンクリートで現代まで使用されていたことが分かる。その下は井戸瓦を組み、土管が差し込まれている。法面により完掘していない。

13井戸(図10) 構造物はみられない。断面は二段に落ちて、上部は緩やかに落ちている。下部は垂直に近い。杭が南側に偏って打たれており、土留めである可能性が高い。

34井戸(図10) 井戸側に籠を用いたものである。僅かに籠の痕跡が残る。断面図の埋土3～5は裏込め土、埋土1、2は埋め戻し土である。

118・89井戸(図11) やや不整形な円形の掘り方に構造物を伴うものである。井戸側の下段は桶を積み上げ、上段は井戸瓦を組む。118井戸では桶が3段に積み上げられており、最下層に水溜めの痕跡が残る(写真1)。西側が崩れており、流入土がみられ、瓦は大部分が井戸内部に落ち込んでいた。89井戸は桶が2段積み上げられている。内部は粗い砂層で埋まっており、塩化ビニール製の管が突き立てられていた。おそらく、井戸を埋める際の息抜きと考えられる。この井戸は、現代まで継続して使用されていたことが分かる。

92・119井戸(図11) 隅丸方形の掘り方に構造物を伴うものである。水溜には桶が使われる。井戸側は隅柱と横棧をほぞでつなぎ、縦板を組んだ方形の木枠を下段に、その上に桶を1段積み、上段は井戸瓦を組むものである。下段の方形の木枠上部は桶をのせるために蓋をしており、92井戸では横棧に対して平行に板を並べて、中央を円形に削り貫いているが、119井戸では45度の角度で板を組み合わせて、中央を削り貫いている(写真2)。いずれも縦板に墨書がみられた。

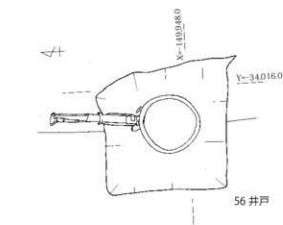
他の構造物としては、115井戸は痕跡のみではあったが、籠の井戸側が用いられていると考えられる。56・89井戸のように現代まで使用されているものもある。



写真1 118井戸 断面(南から)



写真2 119井戸 検出状況(南から)

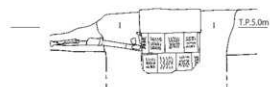


56井戸

1. 灰色 (7.5Y5/1) シルト～粘土主体 細砂 (1b層)・粘質土 (3層か) をブロック状に含む

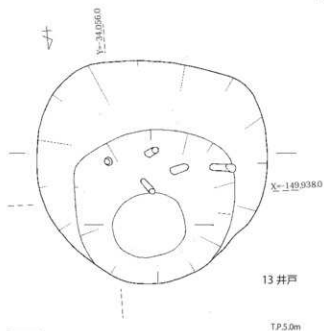
13井戸

1. 緑灰色 (10G5/1) ブロック混合土 細砂混シルト (3・4層か)・細～中砂 (1b層) ブロック
2. 緑灰色 (10G5/1) ブロック混合土 緑灰色シルト (3・4層か)・細～中砂 (1b層) ブロック 1より砂ブロック小
3. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂 ラミナあり シルト混細砂～細礫ブロック 20cm 大径石
4. 明赤褐色・浅黄色 (5YR5/6・2.5Y7/4) ブロック混合土 細～粗砂主体のブロック 細礫含む
5. 青灰色 (5B5/1) ブロック混合土 中細～粗砂・シルトのブロック
6. 暗緑灰色 (5G4/1) ブロック混合土 極細砂混粘質シルト・細～中砂ブロック
7. 明黄褐色・青灰色 (2.5Y7/6・5B6/1) ブロック混合土 細～粗砂ブロック
8. 青灰色 (5B6/1) ブロック混合土 シルト～細砂・中～粗砂ブロック

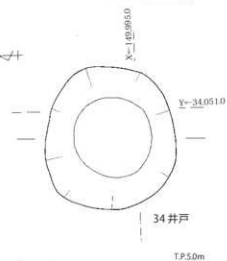
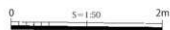


34井戸

1. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) ブロック混合土 シルト混中砂・シルトブロック
2. 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) ブロック混合土 シルト混中砂・粘質シルト・細～中砂混じりシルトブロック (14層)
3. 灰色 (N5/0) ブロック混合土 シルト混細砂・粘質シルトブロック
4. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) ブロック混合土 シルト混細砂・粘土ブロック
5. 暗緑灰色 (5G4/1) ブロック混合土 細砂混シルト・細砂混じりシルト (12層)・細砂～シルトブロック



13井戸



34井戸

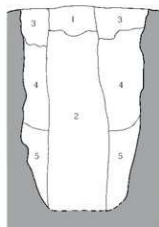
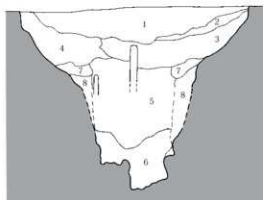


図10 56・13・34井戸 平・立・断面図

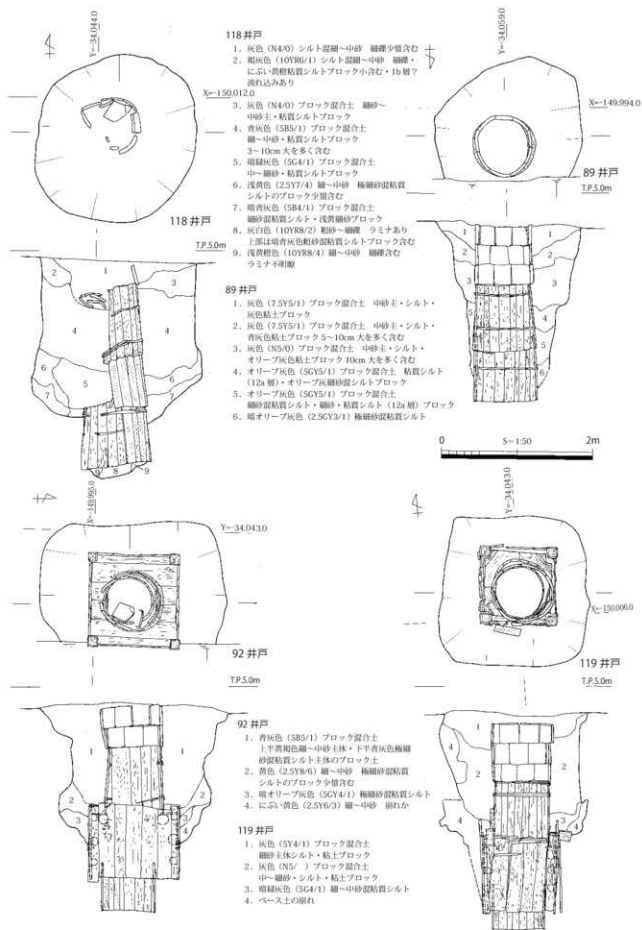


図11 118・89・92・119井戸 平・立・断面図

第1b面 (図9)

第1b面はトレンチ調査のみで、全面調査は行っていない。第1層の母材である1b層は調査区全面に広がっている。その上面では多数の整然と並ぶ溝状の土坑を検出した(図版2)。既往の調査で「1b土坑」と呼称されているものである。

土坑はこれまで指摘されているように、1b層堆積後間もなくして掘削され、ブロック土で埋め戻されている。ブロックは形が分かるものでは写真3・4のように方形を呈しており、写真3では1b層と2a層がセットになったブロックが横になって並んでいる状況がみられる。横に整然と並んでいるものはブロックの単位が非常に明確である。平面ではブロックが整然と横1列に並んでいる間にブロックが不揃いにみえる部分がある。1b土坑を埋め戻した後に再度上部を掘り起こしているため、掘削されていない部分は1b層と2a層がそのまま横倒しになって、ブロックが交互に並び、土坑内は埋土が既にブロック土であるため、乱れて見えるのではないだろうか。調査区断面でも、土坑の肩部で1b層と2a層が上下逆になっている部分が観察できた。北側の土坑には埋土が自然堆積層を挟んで上下に分かれるものがみられた。下層は1b層を主体とする細砂ブロックで、上層は2層系のブロックを主体としている。間に水成層が認められることから、埋没までの時間幅を認めることができる。ただし、多くの土坑は写真4のようにブロックの単位は認められるが、一度に埋め戻されている。土坑の分布をみると2-1a面の島畠の方向と一致しており、ほぼ島畠上部を掘削していることが分かる。土坑の深さは様々だが、ある程度の間隔で同じような深さのものが並ぶ。また一続きの土坑の中で底が一部掘り残されるものもみられた。作業単位の一つを表すものであろう。2-1a面の63・69・70島畠の上では島畠に対して直交方向に先行する土坑が掘削されており、2時期あることが分かる。先行する土坑は浅く、細砂を主体とするブロック土で埋められている。

土坑の性格については、1b層が享和2(1802)年の洪水に推定されており、災害復旧土坑(転地返し)の可能性が指摘されているほか、土取り穴の可能性も指摘されている。土坑の埋土の状況や、土坑を掘削していない部分で、1b層と2a層が反転、あるいはセットになって90度傾いている状況から、1b層の洪水砂と2層の耕作土を混ぜることに目的があると考えられ、前者の可能性を考えたい。

出土遺物(図12) 1層に関連する遺物である。1層はトレンチ調査を行ったのみではあるが、比較的遺物の出土が多い。1～3は土製品。1・2は泥面子で1は魚を模したもので、2は型抜きである。3は用途不明品で、被熱を受ける。4～6は灯明具。4は陶磁器信楽焼、5・6は土師器で底部外面に糸切り痕



写真3 1b土坑 (Y=-34,040ライン) 検出状況
(西から)



写真4 1b土坑断面 (X=-149,980ライン)
(南から)

が残る。7～8は磁器染付碗、9は皿。7は一重網目文が描かれる。10～12は陶器。10は皿で底部には糸切り痕が残る。11は皿、12は碗でいずれも内面に砂目がみられる。13は青磁蓋で、唐草が陽刻される。香炉の蓋と考えられるが、口縁端部を一樣に打ち欠いている。14は磁器染付皿で口紅の装飾がみられる。15は磁器で内面に凸帯を貼り付けている。16は土師器搦鉢か。17は瓦質土器焙烙。18は銭貨で遺存状況は悪いが寛永通宝である。19は石製硯で非常に薄く小形である。20は骨角製の歯ブラシである。

1b土坑からからは多くの遺物が出土した(図13)。下層の遺物も比較的多く含まれる。1は土人形猫。2～4は陶磁器の転用円盤である。5は肥前系白磁皿である。口縁部の欠けた部分に煤が付着し、灯明皿として使用されている。6～9は染付碗、10は染付皿である。11・12は陶器碗。12は底部外面、高台の内側に刻印がみられる。13は青磁碗である。14は陶器搦鉢、丹波焼。器壁が薄く、口縁部に2条の沈線を施す。15は平瓦で、凸面には縄目タタキが、凹面には布目が残る。16は巴文軒丸瓦である。瓦当面に離れ砂が付着する。17は漆製品。内面の長軸側、両側縁が凹み、それより内側に赤色の漆が塗布される。18は木製品底板。19～27は筋掘り(1～3層)出土の遺物である。20・21は青磁碗。20は見込みに印花をあしらう。21は蓮弁文。22・26は土師質土器で22は焙烙、26は五徳である。23は陶器搦鉢。備前か。24・25・27は瓦質土器。24・27は火鉢である。25は風炉である。透かし穴があく。

1層に関連する遺物は下層の混入品も多い。土人形や転用円盤、灯明具、硯、歯ブラシなどバラエティーに富んでいるが、碗・皿類は肥前系染付が多い。大形の器種では陶器搦鉢や、瓦器火鉢、土師質土器焙烙、五徳などがみられた。

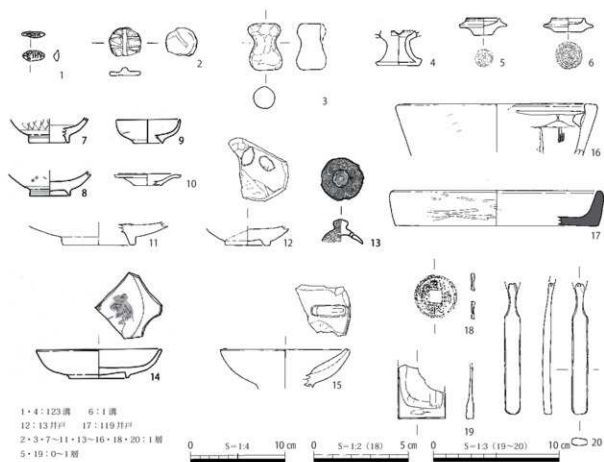


図12 第1面・1層 出土遺物

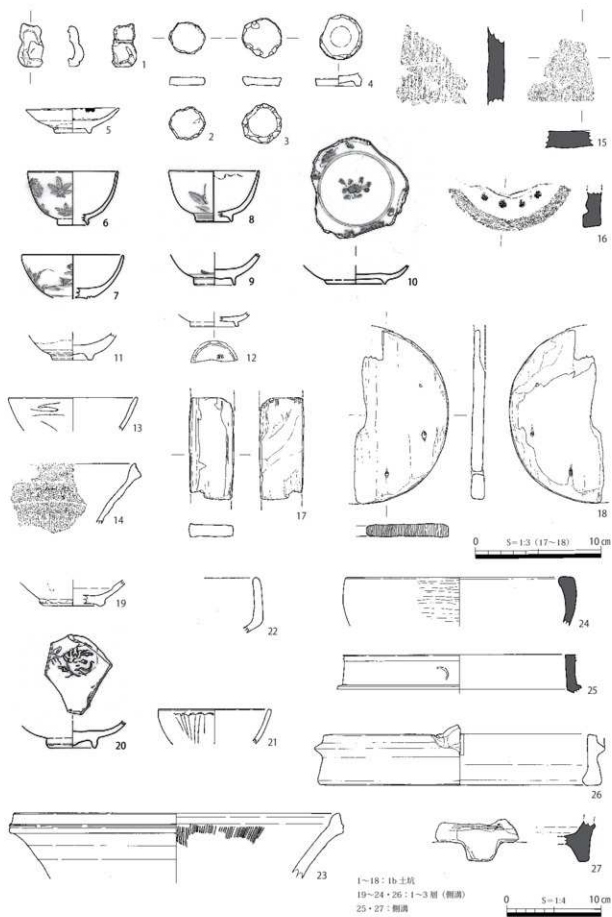


图13 1b 土坑·侧沟 出土遗物

第2面

2-1a～2-4a面、2-4b面の調査を行った。2層は近世の耕作土であり、各面において坪境畦畔、島畠、水田を確認した。これまでの調査で指摘されているように2面は島畠の拡張が特徴づけられるが、今回の調査でも、島畠が拡張していく過程が明らかとなった。また、二十一ノ坪、二十二ノ坪の地割の方向は第1面と同様であり、二十一ノ坪では南北で地割の方向が異なっている。坪境は2面を通して畦畔によって区画されている。なお、102坪境畦畔に関しては図15に7a層までの断面を图示している。

2-1a～2-4a層はb層を挟まず、いずれも近似した砂質の強い層である。2-4b層は1b層に比して粗い氾濫堆積物であり、調査区西半で厚く堆積している。これをもとに2-4a面で島畠が造成されている。2層の各層は1b土坑が密集して掘削された結果（図版2）、土層は細かく分断されて、攪乱の間で残存する2層も鉄分の沈着や乾燥によって、細分は困難な部分が多かった。地点によって土質が異なる部分もあったが、2-1a面で水田であった部分や1b土坑でかく乱されていない部分、2-4a面で島畠であった部分以外では基本的に4枚の作土層に細分でき、上から2-1a～2-4a層に相当すると考えた。2-4a面の島畠上部は2-1a面の作土層以下は数cmほどの作土層が残るのみで、何層に対応するのか判断しきれない部分が多かった。

2-1a面は1b層に覆われていることから、1b土坑の攪乱以外の部分では遺存状況が良好で、島畠など復元することができた。また2-1a面の水田部分では2-2a、3a層が残存せず、2-1a層によって削平されたものと判断される。このようなことから、2-2a、3a面に関しては全体的な状況を復元することができなかった。2-4a面は2-4b層の遺存状況と2-4a層の分布状況から、島畠の範囲など推定することができた。なお、2-4b層は1期地区の「2-5b層」に対応する。2-4a層については「2-4b層」が調査区内で確認できないことから、「2-4a層、2-5a層」のいずれに対応するものか判断できない。以上のことからここでは2-1a面、2-4a面、2-4b面に関して全体図を提示し、第2-2a、2-3a面に関しては、坪境に関連する遺構を示すこととする。

第2-1a面（図14）

調査区全域において、島畠が卓越した状況がみられる。1b土坑によって島畠の肩部はかく乱される部分が多かったが、1b層の状況から、ほぼ調査区全域で島畠の分布が復元できた。

坪境畦畔の北側で101溝を検出した。幅0.7m、深さは坪境畦畔から約0.3mを測る。埋土は1b層の細砂である。2箇所水口を検出した。いずれも埋土は1b層である。

坪境畦畔の北側、調査区の西端で181土坑を検出した。土坑は101溝にきられている。

181土坑（図17） 約1.1×1.4mの方形を呈する。深さは1mを測る。埋土にはブロックが多くみられ、埋め戻されている。水溜めか。

二十一ノ坪 二十一ノ坪は北半と南半で地割の方向が異なっている。

・二十一ノ坪北半

東西方向に細長い島畠を8基検出した。69、71島畠は幅が広く約8～9m、これより東に位置する63・70・72・73・74・131島畠は幅が狭く2～4m前後を測り、島畠間の水田も同じような幅である。東側の幅の狭い島畠は水田部分を掘り下げ、島畠部分をかき上げる「地下げ」によるものである。西側の幅の広い島畠は、2-4b層を芯にした島畠の上部にあたる。地下げを行わずに、拡張して幅広の島畠としている。69島畠と63・70島畠の境界部分で南北方向にのびる37溝を検出した。37溝は幅約0.5

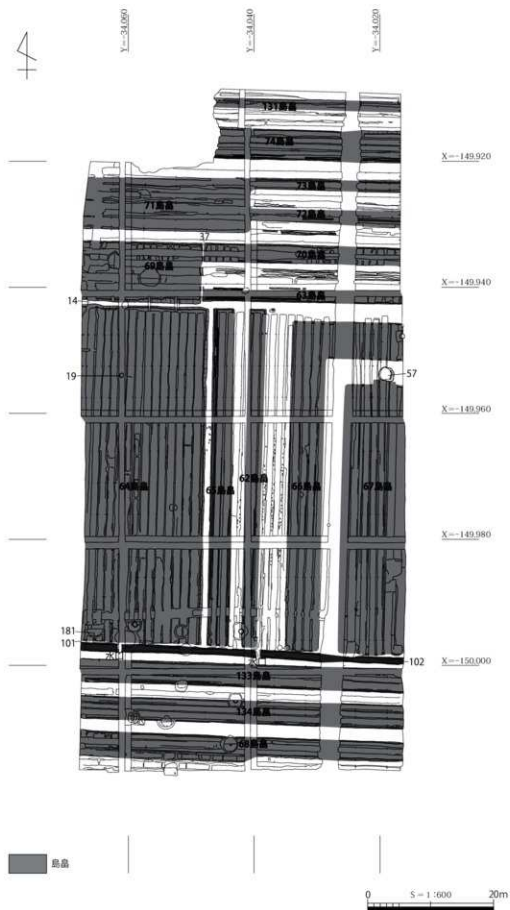


图14 第2-1a面 遺構平面図

m、深さ0.3mを測る。埋土は1b層の細砂である。その他、水田部分を中心に鋤溝を検出した。

・二十一ノ坪南半

南北方向に長い島島を5基検出した。64島島は検出した中で最も大きい島島で西側は更に調査区外にのびている。幅20m以上ということが出来る。北半と同様に2-4a面の島島が位置していた部分で、地下げを行うことなく、大きな島島となっている。東側では幅が3～5mと狭い65・62・66島島を検出した。島島間の水田も同様に狭い。この部分は地下げによって島島を造成している。最も東に位置する67島島は幅が広く、東側にさらに広がっており、幅10m以上である。この島島は他の島島に比して標高が高く、T.P.4.7～4.8mを測り、他の島島上面と0.1～0.2mの比高差をもっている。この島島は第3面でも島島であり、2層の堆積によって平坦になることなく、島島として踏襲されている。67と66島島間は低く、水田と考えられるが、北にぬげずに、逆L字状に東に屈曲して67島島を分断している。この屈曲した部分には57井戸が位置している。

57井戸 (図18) 直径約2.2mの円形を呈し、深さは1.8mを測る。埋土は3層に大分でき、下層は機能時の堆積層で、中層はブロック混合土、上層は1b層で埋没している。井戸は0.6mほど埋め戻した後、最終的に1b層で埋没している。井戸は島島に対しての水溜めの意味合いが強いと考えられる。

南北の境界部分では14溝を検出した。この部分は一見、水田のようにみえるが、64島島と69島島の間は底部が丸みを帯び、肩部も緩やかである。水田というよりも水路として機能していたと考えられる。

14溝 (図16・図版3-5) 幅1.3m、深さ0.35mを測る。1b層で埋没している。(土層5)は14溝の機能時の堆積層と考えられる。南肩にはこの周辺で僅かに残る2-1b層が遺存しており、2-2a面段階も水路であったことが分かる。断面図の(土層14)は2-1b層である。南肩は2-1b層が堆積しており、2-1b層の下面が2-2a面の水路である。北肩は2-1b層がなく、(土層8・10)の盛土をして2-1a面を高くしている。おそらく、埋没した水路の2-1b層と土層11～13部分に本来あった2-2a・2-3a層などを盛土にしたと考えられる。(土層11・12・13)は水路の肩部を拡張したものであろう。

37溝は14溝の東端に合流する。西半は島島が大規模であり、水路が必要であったと考えられる。64・65島島間の水田は他に比して幅が狭く、約1.5mを測る。底部は平らで足跡がみられた。肩部の傾斜が他の水田と異なって、なだらかである。この範囲は水田ではなく、14溝と合流して水路として機能していた可能性も考えられる。

二十二ノ坪 二十二ノ坪では東西方向にのびる3基の島島を検出した。幅は3.5m前後と狭く、間の水田も同じような幅である。北側の133・134島島は地下げによるものである。68島島は2-4a面で島島であった部分を踏襲している。

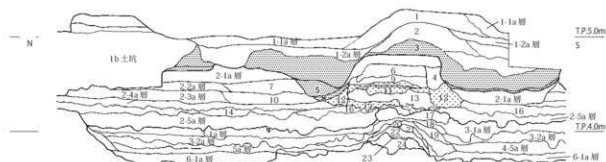
第2-2a面

102坪境畦畔北側では上面と同様に溝が平行して位置する(図15)。水口を2箇所検出した。

136・138・137水口 (図16) 136水口は幅1.0m、深さ0.4mを測る。2-1b層で埋没している。138水口は幅0.7m、深さ約0.1mを測る。137水口は幅0.2m、深さ0.25mを測る。138・137水口はブロックを含む埋土であり、埋め戻されている。

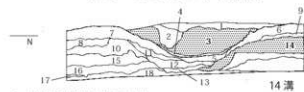
2-1a面の118土坑と同様の規模の方形の遺構を検出した。井戸あるいは水溜めと考えている。なお、38・93土坑の平面位置は図22、第2-4a面の平面図に示した。

38土坑 (図17) 二十一ノ坪北半で検出した。約1.3×1.4mの方形を呈する。深さは約0.9mを測る。埋



1. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 細礫粗砂 シルトブロック含む Mn風含む 1-1a層
2. 黒灰色 (10YR5/1) 細砂と明黄褐色中砂ブロック混合土 1-2a層
3. 青灰色 (5BG5/1) 砂礫混シルト 2-1a層
4. 青灰色 (5BG5/1) 細礫混シルト 3とほぼ同じ 2-1a層
5. 橙～浅黄色 (7.5YR6/6～5Y7/3) 砂礫混シルト 2-1a層
6. 緑灰色 (10GY6/1) 砂礫混シルト 極細砂ブロックを含む 2-2a層
7. にぶい青褐色 (10YR7/3) 細～中砂 砂礫混シルト (2.2a層) を多く含む 2-2a層
8. 中～粗砂 細礫含む 2-2b層
9. 青灰色 (5B6/1) 砂礫混シルト 2-3a層
10. 青灰色 (5B5/1) 砂礫混シルト 2-3a層
11. 浅黄色 (5YR/4) 砂礫 2-3b層
12. 緑灰色 (10GY6/1) 砂礫混シルトブロックを含む 2-3b層
13. 青灰色 (5BG6/1) 砂礫混シルト シルトブロック含む 2-4a層
14. 青灰色 (5BG6/2) 砂礫混シルト 砂礫混シルトブロック・粘質ブロック含む 下部1.5と似る 2-4a層
15. 浅黄色 (5YR/4) 細礫 シルトブロック含む 2-4b 粘混じりあり
16. 青灰色 (5BG5/1) 砂礫混シルト 2-4a層細砂
17. オリーブ黒色 (5Y3/2) 細砂～粗砂混じりシルト 粘性ややあり、細礫多く含む、シルトブロック含む 3-1a層
18. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 細砂～粗砂混じりシルト 粘性あり、細礫・シルトブロック含む 3-2a層
19. オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 粗砂混じりシルト 粘性あり、(13c)より細礫を多く含む 4a層
20. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 細礫混じりシルト 粘性あり、5a層対応
21. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 粗砂混じりシルト 粘性あり、細礫含む 6層対応
22. 黒色 (7.5Y2/1) 粗砂～細礫 シルトブロック少量含む 7層対応
23. 灰色 (10YR4/1) シルト 粘性あり 7層
24. 灰色 (5Y5/1) 細～中砂混粘質シルト 僅かに細礫含む 8・9層

図15 102坪境畦畔 断面図

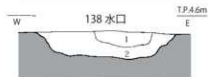


1. 青灰色 (10BG6/1) 砂礫混シルト
2. 緑灰色 (10GY6/1) 砂礫混シルト 細砂～極細砂を含む
3. 灰白色 (N8/) 細砂～極細砂
4. 灰白色 (N6/) 粘質シルト
5. 緑灰色 (10GY6/1) 砂礫混粘質シルト
6. 青灰色 (5B5/1) 砂礫混シルト 2-1a層
7. 青灰色 (5B5/1) 砂礫混シルト 砂礫の含有量多い 灰白色極細砂～細砂ブロック土を含む 2-1a層



1. 明赤褐色 (5YR3/3) 細～中砂 細礫多く含む 鉄分沈着著しい
2. オリーブ黄色 (5Y6/3) 細砂～シルト 部分的に細砂～ミナ状に含む
3. 灰色 (5Y5/1) シルト 細～中砂多く含む 部分的に細砂～ミナ状に含む

8. 緑灰色 (5G5/1) 砂礫混シルト 2-1a層
9. 灰白色 (N8/) シルト混細砂～極細砂 2-1a層
10. 灰色 (N6/) 砂礫混シルト 砂礫を微量に含む ブロック土
11. 青灰色 (5BG5/1) 砂礫混シルト 細砂を少量含む
12. 青灰色 (5BG6/1) 粘質シルト 緑灰色砂礫混シルトを含む
13. 青灰色 (10BG6/1) 砂礫混シルト 粘性あり
14. 灰色 (N8/) 細砂
15. 青灰色 (10BG5/1) 砂礫混シルト
16. 青灰色 (10BG6/1) 細砂～中砂混シルト 砂礫を微量に含む
17. 青灰色 (5BG6/1) 砂礫混シルト 2-4a層
18. 灰白 (5YR/2) 細砂



1. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト 粘性あり
2. 黄褐色 (2.5Y5/3) 中砂～シルト 粗砂一部ブロック状に含む



図16 14溝・136・138水口 断面図

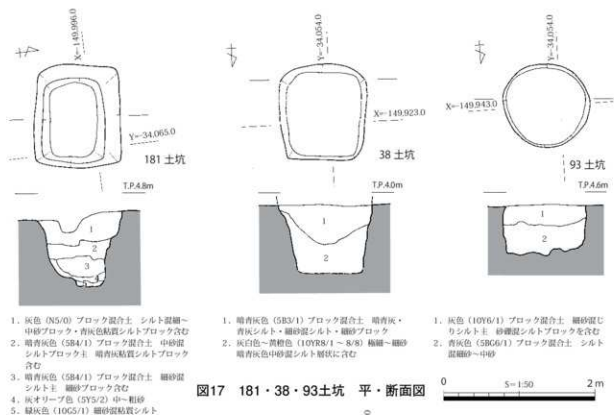


図17 181・38・93土坑 平・断面図

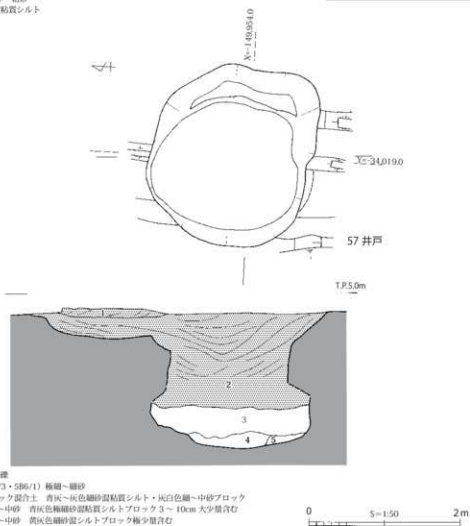


図18 57井戸 平・断面図

土下半は自然堆積層が見られる。上半はブロック土で、埋め戻している。

93土坑（図17） 直径約1.2mの円形を呈する。深さは約0.7mを測る。埋土はブロック土で埋め戻されている。

38・93土坑はほぼ同じような規模であり、2-1a面の181土坑を含めて、ブロック土で埋め戻されている。土坑の底部は11層の湧水層に達しており、小規模ではあるが水溜めの機能が考えられ、 unnecessary 段階で埋め戻されたのであろうか。

第2-3a面

坪境畦畔北側には上面と同様に溝が平行して位置する（図15）。水口を6箇所で見出した。そのうち、3基は瓦・土管を用いた暗渠である。暗渠は丸瓦を転用しており、一部平瓦も使用されている。また、自然礫が伴うものもある。輪郭を見出したのは2-3a面段階であるが、暗渠はいずれも本来の状況を失っており、破壊されている。このことから、2-3a面の段階で廃絶し、設置、使用しているのは2-4a面から2-3a面の間のいずれかと考えられるが判断できなかった。

162水口（図19・図版3-4） 丸瓦を転用した暗渠である。丸瓦を2対一組で円柱にしたと考えられる。2列が出土した。瓦が遺存しているのは、畦畔の裾に近い部分のみであり、掘り込みがよく分らなかった。断面で示した掘り方は暗渠設置に伴うものではなく、瓦を撤去して埋めたものと考えられる。瓦は崩れてはいるが、北側の瓦が南側に乗っており、二十一ノ坪から二十二ノ坪へ水を流していると考えられる。

170水口（図19・図版3-3） 瓦質の土管を使用したものである。3列復元できる。170水口は現代の水路に切られており、坪境畦畔に対して直交する方向で断面を作成してしまった。2-3a面では埋土1を確認したが、これは上層が落ち込んだものと考えられる。埋土中の礫は40cmと大きく加工などはみられない。もともとは畦畔の上に置かれていたものが、暗渠がつぶれた際に落ち込んだものか、この礫によって暗渠がつぶされたのか判断できなかった。土管の下にみられる埋土2は土管設置の際のものと考えられる。裾際には礫が置かれている。北側は石皿で4分の1が残存したものである。南側の礫は加工など施されていない。畦畔の裾部に設置していたと考えられ、暗渠を固定していたのであろうか。土管はつぶれてはいるが、ほぼ元位置を保っていると考えられ、162水口と同様、二十一ノ坪から南の二十二ノ坪に向かって水を流している。

163水口（図20） 丸瓦、平瓦を使用したものである。かなり崩れており、平瓦と丸瓦の組み合わせを復元できなかった。南側では瓦の手に人頭大の自然礫が置かれている。暗渠を塞ぐためであろうか。埋土は上層と下層に分けられるが、暗渠に伴うのは上層（埋土5）であり、暗渠が壊れた後、埋め戻していると考えられる。下層（埋土7）は別の掘り込みと考えられ、163水口より深く掘りこまれている。少なくとも暗渠が設置される前のものである。底が楕円形に窪んでおり、人頭大の礫2点と、それよりやや小ぶりな礫1点が置かれている。下層は2-4a面に伴う水口である可能性が高い。

他に139・159・160水口（図19）を見出した。埋土の状況からいずれも埋め戻されたと考えられる。

出土遺物（図21） 水口から出土した遺物である。

1、2は162水口で暗渠に転用された丸瓦である。凹面にはコピキAの痕跡が残り、布目及びつり紐の圧痕が残っている。凸面は工具によって長軸方向に丁寧になでており、タタキ目はすり消されている。1は縄目タタキ目が僅かに残る。3は163水口で暗渠に転用された丸瓦である。1・2に比して玉

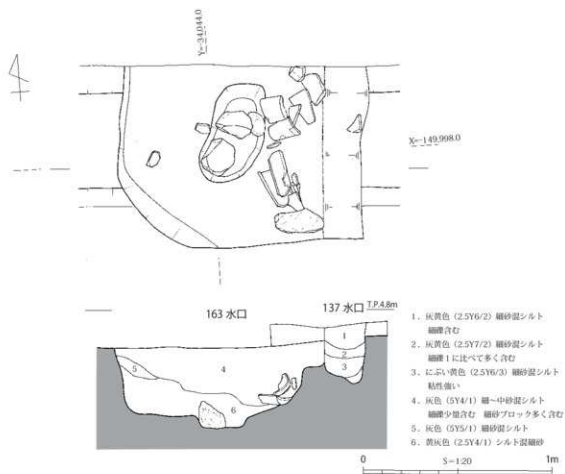


図20 第2-3a面 水口 平・断面図(2)

縁部が短く、長さも短い。凹面にはコビキBの痕跡が残り、布目も残るが、別の布を当てて補修している。同様の布袋の圧痕が170水口から出土した別の丸瓦にもみられた。凸面は工具によって長軸方向に丁寧になる。3は1・2に比して新しい特徴を有しており、17世紀以降、1・2は16世紀の時期が与えられる。転用品であるため、時期差が生じたものと考えられる。4は170水口で暗渠に使用された瓦質の土管である。5は170水口で出土した石臼である。挽き臼で約4分の1が遺存している。

第2-4a面 (図22)

調査区西側を中心に2-4b層の中~粗砂が堆積し、これを芯にして島島がつくられる。調査区東側は2-4b層の堆積が薄い。特に二十一ノ坪南半の東側では2-4b層は遺存せず、2-4a層がシルト質であることから2-4b層は東ほど細粒であったと推測する。

坪堤畔の両側で溝を検出した(図15)。幅25~30cm、深さは水田面からは約5cmを測る。溝は2-3b層で埋まっているが、シルトブロックが若干泥じっている。4箇所水口を検出した(158、161、168、169水口)。いずれも水口も埋め戻されている。

158水口(図24) 幅1.3m、深さ0.3mを測る。自然堆積層は認められない。

168・169水口(図24) 168・169水口は非常に近接している。168は169に比して規模が小さい。169は規模が大きく、幅1m、深さ約0.2mを測る。ブロック土で埋まっている。北側の水口延長上では人頭大の自然石が置かれていた。水口を塞ぐためのものと考えられる。

161・167水口(図24)は規模の小さな水口である。

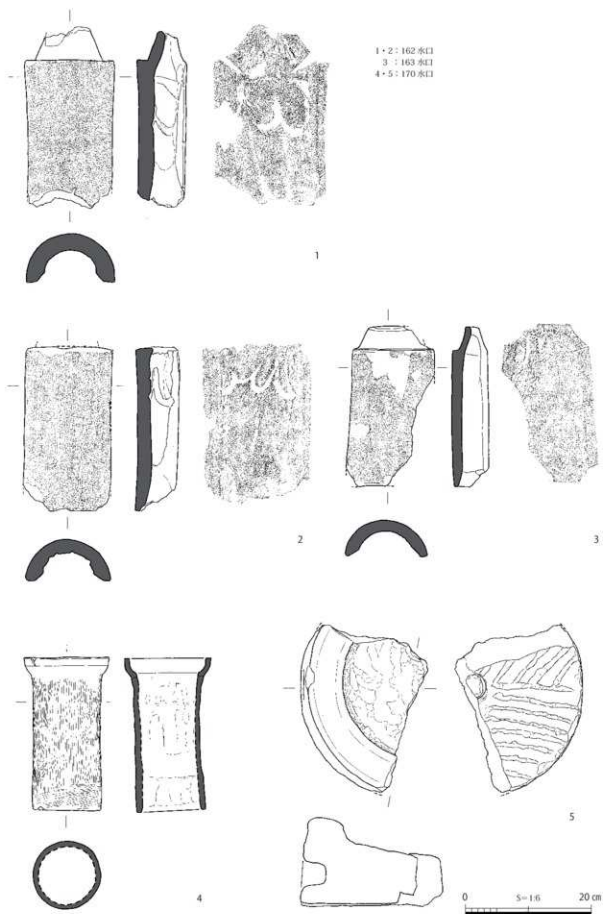


图21 第2-3a面 水口出土遺物

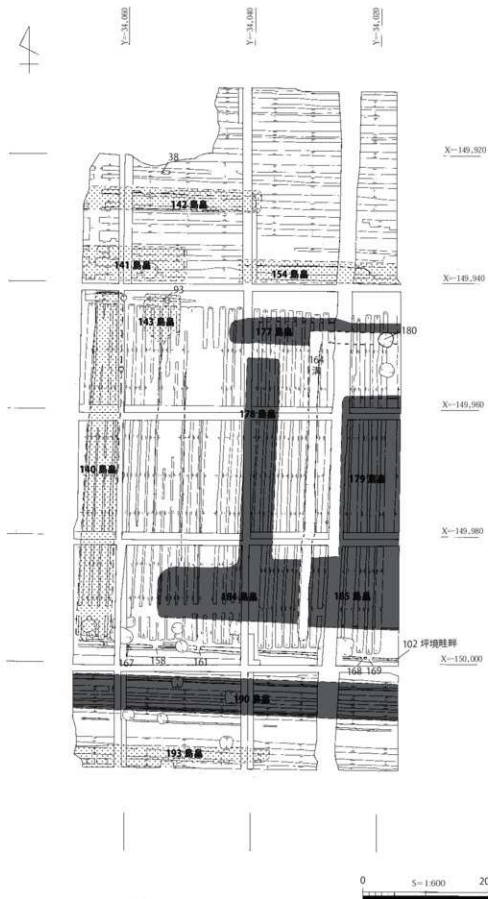


图22 第2-4a面 遺構平面图

二十一ノ坪 二十一ノ坪は北半と南半で地割の方向が異なっている。

・二十一ノ坪北半

東西方向に長い3基の鳥島を検出した。2-4b層を芯にした鳥島である。幅3～5m前後を測る。141・142鳥島は2-4b層が厚く残っているが、上部の作土層は残っていない。東にいくに従って2-4b層の堆積は薄くなっているが、154鳥島の下部は2-4b層が周囲の2-4a層より高く遺存しており、その範囲から2-4a面の鳥島を復元した。

・二十一ノ坪南半

前段階までは基本的に南北方向の地割であったが、東西方向の鳥島も検出した。

西側では2-4b層を芯にした南北方向に長い140鳥島を検出した。幅約5mを測る。調査区東端では南北方向に長い179鳥島を検出した。この鳥島は2-1a面でも触れたように3面段階の鳥島を2層堆積中も踏襲するものである。179・177鳥島間はやはり低く、2-1a面で検出した57井戸の北側で180井戸を検出している。この部分では2面を通して同様の状況であったと推測できる。

180井戸 (図25) 2-1a面の井戸の北側で検出した。直径約2.3×2.4mのやや崩れた隅丸方形を呈する。深さは1.1mを測る。埋土の下層は自然堆積層で機能時の堆積層、上層はブロック土で埋め戻し土と考えられる。

ここで問題となるのは140・179鳥島間の状況である。先に示したように2層の細分は非常に困難であったうえに、この部分では2-4a層がシルト質な部分や、2-3・4a層が砂質な部分、更に2-4a層より下部に砂礫層とシルト層が混じった層があるなど、層序の把握が困難であった。3-1a面の鳥島は2-5a面では明らかに鳥島として踏襲されている。このことは、2-4b層の薄層が3-1a面の鳥島にすりついていて、あるいは、砂礫質な鳥島の上部が2-4b面で露出することから想定できる。2-4a面でも鳥島として踏襲されるならば、疑似鳥島として2-4a面で検出できるはずである。しかし、部分的には露出していたものの、2-4a層を把握できなかった部分もあり問題が残った。そこで、調査区断面から再度検討した結果、2-4a面で鳥島上部が露出する部分が多く、この段階でも鳥島であると判断した。184・185鳥島は東西方向に長い鳥島で、幅約10mを測る。177鳥島も東西方向に長い鳥島である。幅約4mを測る。178鳥島は南北方向に長く幅約4mを測る。144鳥島と178鳥島間の水田では2-4b層が帯状に高く残っている部分を検出し、疑似畦畔と考えた。なお、178鳥島では杭を検出した。打設面は不明である。杭は直径約0.3m、長さは約0.35mを測る。

二十二ノ坪 東西方向に細長い鳥島を2基検出した。193鳥島は2-4b層を芯にして造成されたもので、幅2mと狭い。190鳥島は2-5a面(3面の鳥島を踏襲)の鳥島を2-4b層によって拡張したものである。幅約4mを測る。

以上のように2-4a面では2-4b層を芯にした鳥島が調査区西側中心に分布し、調査区東側を中心に下面の鳥島が埋没せずに、そのまま鳥島として利用されていることがわかる。

第2-4b面 (図23)

2-4b面の状況から、先に示したように、2-4a面、2-5a面の鳥島の状況を推定した。もうひとつ、2-4b面で、鳥島の変遷を考えられる遺構を検出した。3か所で検出した土坑状の窪みである。262疑似畦畔を挟んで両側は幅3～5mの範囲で2-4b層と2-5a層と考えられる作土層がブロック状に混じった落ち込みがみられた。上部には2-4a層相当層があるので、2-4a面の作土層形成前の整地の痕跡と考えることができよう。しかし、2-4a面では周囲は水田に復元でき、その一部だけにこのような整地痕跡があ

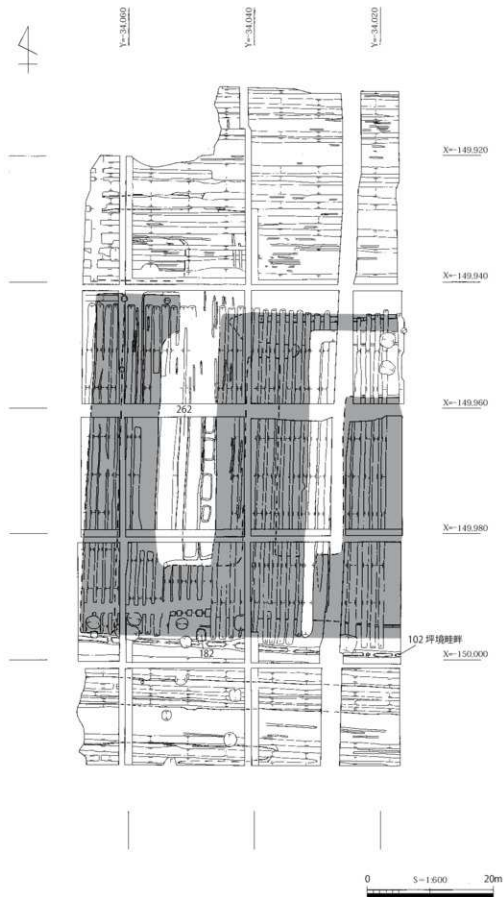


图23 第2-4b面 遺構平面図

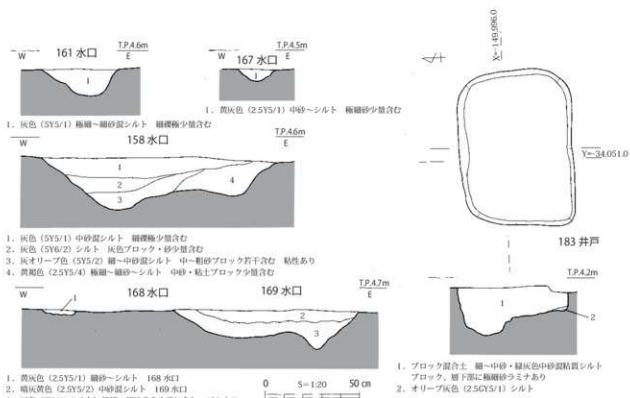


図24 第2-4a・2-4b面 水口 断面図

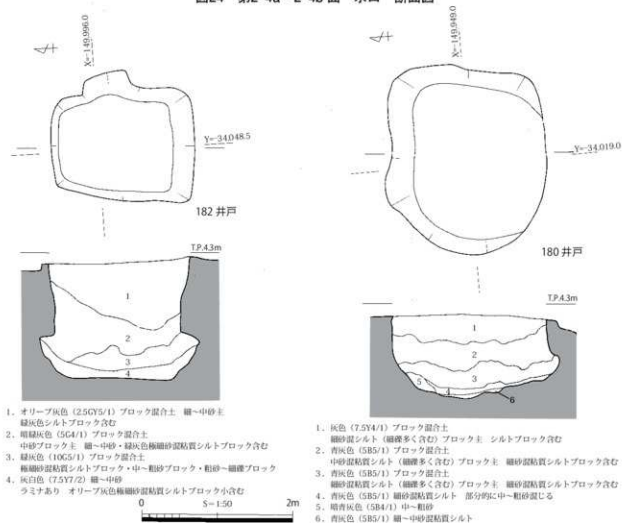


図25 183・182・180水口 平・断面図

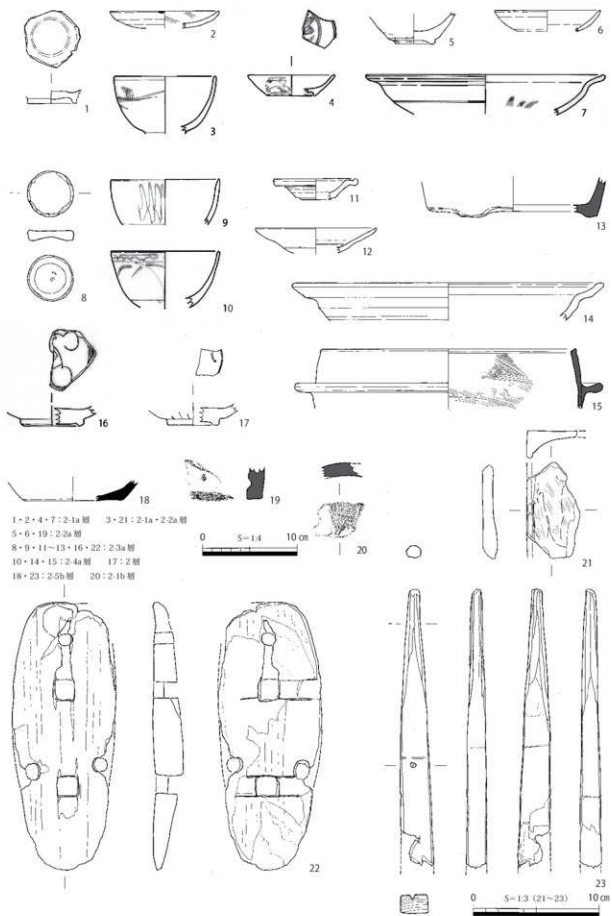


図26 第2層関連 出土遺物

るのは矛盾するように思われる。そこで、2-4a面で復元した景観に至る前に、以下のような段階があったと考えた。先の落ち込みは2-4b層を鳥島に盛り上げた結果、生じた痕跡であり、これを境に鳥島があったと考えられる。164溝は先の土坑のようにブロック土ではないが、2-4a面の水田内に溝があるのではなく、2-4a層形成前の整地の痕跡と考えれば図23に示したように復元できる。これはあくまでも、最終的に残った痕跡から復元した1案であり、不確定な要素も多い。また変遷の方向が逆行することから、違和感もある。周辺調査における同様の痕跡について十分検討できなかったが、今後合わせて考える必要がある。

182井戸（図25） 坪境畦畔北側で検出した。1.5m×1.8mの方形を呈し、深さ1.5mを測る。埋土は最下層に自然堆積層がみられ、他はブロック土で埋め戻されている。

他に耕作に伴うと考えられる溝を多く検出した。いずれも、浅く細い。溝は二十一ノ坪北半では主に東西方向に長い溝である。中央付近には南北方向に延びるものもある。二十一ノ坪南半では南北方向に長い溝である。二十二ノ坪では東西方向の溝である。鳥島上部には2-4a層は遺存しておらず、2-3a・4a層の下面遺構と考えられる。

第2-5a面

基本層序でも述べたように2-5層は2-4層まで大きく土質が変わり、細粒でシルト質を呈する。調査当初、ラミナが確認できる部分があったことから、b層と認識し2-5b層としていたが、調査を進める中で、足跡や鋤溝などが検出されたことから、再度検討したところ、ラミナがちぎれている状況がみられ、最下層の細砂～シルトのみをb層とし、それより上部の土壌化は弱いものの作土層であると認識を改めた。土質的には3層に似通っており、本来ならば3層の細分として捉えるべきものであり、既往の調査の「3-1層」に相当するものと考えられる。

2-4b面の状況からほぼ3-1a面と同様の景観が復元できる。

183井戸（図25・27） 坪境畦畔北側で検出した。182井戸の東側に位置している。1.5×2mの隅丸方形を呈し、深さ約0.6mを測る。ブロック土で埋め戻されている。

出土遺物（図26） 2層に関連する遺物をここでまとめて記述する。

1～4・7は2-1a層から出土した。1は肥前系青磁の転用円盤。見込みは蛇ノ目軸刺である。2は陶器皿。内面にはハケを施す。口縁の一部を打ち欠いており、煤が付着している。灯明皿として使用されたものである。3は染付碗である。4は磁器皿。景德鎮窯系である。7は陶器皿である。20は2-1b層から出土した丸瓦片で、凹面に布目が残る。5・6・19は2-2a層から出土した。5は底部のみであるが、天目茶碗である。6は土師器皿で下層の混入。19は軒丸瓦で巴文か。8・9・11～13・16・22は2-3a層から出土した。8は天目茶碗で円盤に転用されている。9は磁器碗で鋸歯状の網目文を施す。11・12は陶器。11は瀬戸折縁皿である。13は瓦質土器火鉢。16は青磁碗。22は木製品の下駄。ほぞ穴に歯をはめ込む差歯下駄で、左足と考えられる。10・14・15は2-4a層から出土した。10は磁器碗。14は陶器皿。15は瓦質羽釜である。18・23は2-5b層から出土した。18は須恵器鉢底部、下層混入品。23は木製品で柄杓の柄である。他に2層に関連して17の青磁碗、21の石製の硯が出土した。摩滅が著しい。

1層に比べて遺物の出土は少なく、バラエティーにもかける。肥前系の陶磁器などが多く、17～18世紀を中心とする。11の瀬戸皿は16世紀末ごろ、輸入陶磁器は15世紀後葉～16世紀前葉、15の羽釜は16世紀の時期が考えられ、16世紀代の遺物も含んでいる。

小結

第2面の島島の変遷を考えれば、島島の拡大の過程とすることができる。2-4b層が調査区西側を中心に堆積し、これを芯として島島が作られる。災害を契機に島島が拡大していることがわかる。この堆積は西半分を中心にするもので、調査区東半分に分布している2-5a面の島島（これは後で述べる下面の島島を踏襲したものであるが）は埋没せずに、2-4a面でも島島として利用されたと考えられる。また、これに先行して2-4b層を掘削した痕跡があることから、もう一段階変遷過程を想定した。

2-3a面の状況はよく分からなかったが、2-4b層を芯にした島島は高く、2-3a面でも島島であったことが推測できる。一方、2-5a面から踏襲した島島は2-3a面では高低差がない部分もあり、全体に平坦化している。2-1a面では、前段階までは島島が顕著ではなかった二十一ノ坪北側においても島島がつけられ、調査区全域で島島が卓越した環境となる。2-4b層を芯にしてつくられた島島上部では「地下げ」による水田はほとんどみられず規模の大きな島島としており、島島間は水田ではなく、水路を掘削している。水田も水路としての機能を併せ持つと考えられるが、水路に特化している点が注目できる。また、二十一ノ坪の南半分は完全に南北方向の地割りに統一されている。ここで問題となるのは2-2a面の段階である。2-3a層以降、全体に平坦化に向かうようであるが、14溝は2-2a面でも機能していたと推定できる。2-1a面でも水田であった部分の2-2a層の状況は分からないが、2-2a面でも水田である可能性は十分に考えられ、地下げの契機が平坦化した2-2a面である可能性も否定できない。

2面を通して特徴的なのは坪境畦畔の水口が非常に多いという点である。2-1a面は2-1b層で覆われているため、2箇所で検出した水口は同時に空いていたことが分かる。2-1a面と2-2a面では、近接した位置に水口があり、作り直していると考えられる。2-3a～2-4a面にかけては多くの水口を検出した。規模は幅1m前後の大きいものから20cm前後のものがみられ、暗渠の施設を伴うものもみられる。自然堆積層で埋まった状態ではなく、埋められたり、暗渠が壊されたりしており、何度も作り直していると考えられる。また水口に伴って礫が出土している。水口を塞ぐ際や、暗渠の固定などに使用されたと考えられる。水回りは分かるものでは二十一ノ坪から二十二ノ坪へ向かって水を落としている。

1面でも最も目立つのは井戸の集中である。2面以下の井戸では構造物を有していないが、1面あるいは現代まで使用されたものを含めて、井戸側の構造物をもつものが多いことが指摘できる。また、井戸の分布は坪境畦畔の北側と二十一ノ坪の南北境に多く見られることから、当然のことながら耕作単位を意識したものであるといえる。

表1 第1面 井戸 観察表

遺跡	地区	図	平方規模	深さ(m)	底標高(T.P)	現状での構造(上から)	その他
2	10-7c		不(2.2×0.95以上)	2.3	2.3m	不明-桶(3)	
13	10-6c	図10	不(2.9×3.0)	2.4	2.3m	蓋面り	執行設
31	10-6-7c		円(径1.4)	2.7	2.6m	蓋面り	
32	10-4-5c		不(0.9×1.0)	—	—	蓋面り	側溝内不明
33	10-6		方(2.6×3.2)	2.7以上	未定	不明-木枠	
34	10-6	図10	不(1.7×1.9)	2.7	2.6m	蓋面り	
56	10-2c	図10	方(3.2×3.7)	1.7以上	未定	コンクリート(1)-瓦(2)	土管
89	10-6	図11	不(1.9×1.6以上)	2.4	2.3m	瓦(1)-桶(2)	
90	10-7		不(2.4×1.8以上)	1.3以上	未定	蓋面り	
91	10-6b		不(1.1×1.3)	1.8	2.9m	蓋面り	
92	10-5	図11	方(2.5×1.7以上)	2.8	2.0m	瓦(2)-木枠-桶(木源)	横木-縦板蓋書
115	1A-6a		不(1.8×2.0)	3.1	1.7m	蓋 蓋跡	
116	1A-6a		不(2.3×1.3以上)	1.7	3.0m	蓋面り	
117	1A-6b		不(2.0×2.5)	2.2	2.0m	瓦(崩れ)-桶(木源)	縦板蓋書
118	1A-5b	図11	不(2.1×2.2)	2.9	2.0m	瓦(1)-桶(3)-水踏蓋跡	
119	1A-5a	図11	方(1.9×2.0)	2.9	1.8m	瓦(3)-桶(1)-木枠-桶(木源)	縦板蓋書
123	10-3		方(2.6×3.1)	2.8	1.6m	不明-木枠-桶(木源)	横木-縦板蓋書

第2節 中世から古代の調査

3-1a、3-2a、4a、5a、6-1a、(6-2a)、7面の調査を行った。3～6層は中世の耕作土である。島島、水田、坪境畦畔を検出した。3-1a面から5a面までは遺構分布に大きな変化はみられない。7a層も中世の耕作土であると考えられるが、一部島島・坪境畦畔下部においてのみ遺存するものである。調査区の大部分では中世の耕作土である6a層を除去した時点で10～11層が露出する状況であった。第9層は池島1期地区との対応を考えれば古代の堆積層に相当すると考えられるものの、9面で検出した多数の遺構は、複数の時期のものを含んでおり、遺構の埋土の状況からは下面検出遺構として中世期のものが大部分を占めていると考えられる。そこで、9面で検出した遺構をここで提示し、9層の上層の状況、遺構の埋土およびまとまりから、6層下面遺構、7層下面遺構、8層下面遺構、9層上面遺構に分けて扱うこととする。

今回の調査区では中世期において、池島1期地区とは異なった状況がみられた。7面廃絶後、池島地区を通して最古段階の島島が造成され、その後、2-5a面あるいは2-4a面まで島島は踏襲される。このことはこれまでの島島の拡張とは違った意味合いを持っていると考えられ、非常に注目できる。

第3面

3層は2層に細分した。3-1a層は池島1期地区の「3-2a層」に3-2a層は「3-3a層」にそれぞれ対応するものと考えられる。ここでは調査時点での呼称で記述を進めることとする。

第3-1a面 (図27)

3-1a面は2-5b層の薄層に覆われ、以下、中世の遺構面のなかでは最も遺存状況がよい。坪境は第2面と同様、畦畔で区画されている。坪境畦畔は2面のものと比べてやや北西方向に傾いている(図15)。2-4b層で削られた部分があった。東端で水口が1箇所切られている。

188水口(図28) 幅0.6m、深さ0.1mを測る。水口は人為的に埋められている。

二十一ノ坪 173畦畔を境に北半・南半とする。

・二十一ノ坪北半

北半では島島はなく、全面が水田として利用されていたことが分かる。この部分は地震による変形が著しく、2-5a～3-1a層が混じり合っていた(図版4-2)。そのため畦畔は検出することができなかったが、2-5b層が落ち込む足跡を検出した。その他東西方向に直線的に2-5b層(細砂)が落ち込んでいる部分が複数観察された。耕作痕跡と考えられる。T.P.4 m前後を測る。

・二十一ノ坪南半

島島・畦畔を検出した。173畦畔は102坪境畦畔から北に54～55mを測り、二十一ノ坪を南北に半分にした位置にあたる。これに直交して、坪境畦畔にとりつく174畦畔は二十一ノ坪と二十八ノ坪を区画する坪境畦畔より西に約57mを測り、東西を半分にした位置にあたる。この2本の畦畔で区画された二十一ノ坪の南東4分の1の範囲で島島を検出した。島島はいずれも下面を踏襲するものであり、2-4a面でみられたような洪水砂を芯にするようなものはない。島島は東西に長いものと南北に長いものがみられる。

184・185島島は大きくみれば、坪境畦畔に平行する一連の東西に長い島島で、幅11～13mを測る。177島島も東西に長い島島で幅6mを測る。2基の東西に長い島島間では南北に長い178・179島島が位

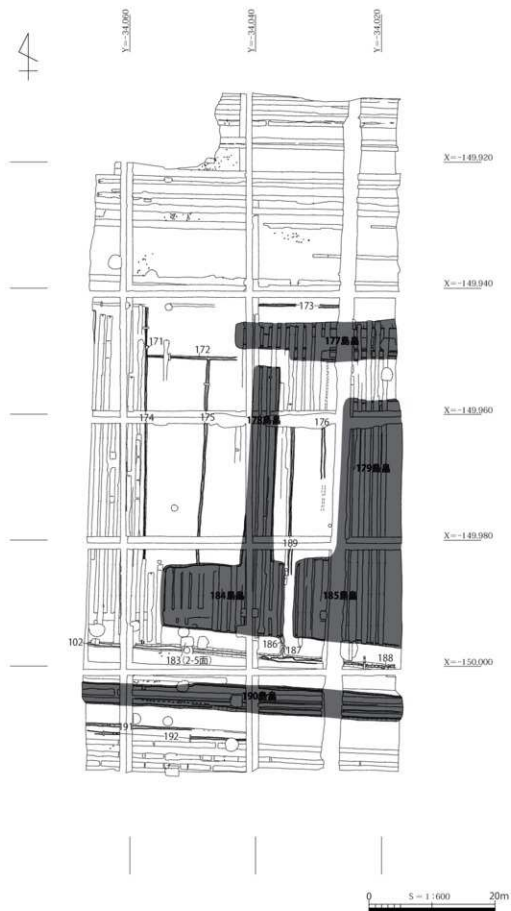


図27 第3-1a面 遺構平面図

置している。2基の島畠はそれぞれ184島畠、185島畠と接しており、「L字」を呈している。

当調査区の3-1a面は池島1期地区の「3-2a面」に相当するが、その成果をみると畦畔が良好に検出されている。各坪内は細長くほぼ10等分するような「長地型地割」が復元できる。それと比較すると二十一ノ坪南半は一見、不規則な印象をうける。しかし、無秩序に作られているわけではない。

先に示したように、島畠が分布するのは南東4分の1の範囲である。この内部をみてみると、東西方向に長い184・185島畠、177島畠はそれぞれ外側に位置しており、177島畠は途中で途切れているが、その延長上には東西方向の172畦畔が位置している。これによって、北側、南側は東西方向に区画されている。この島畠間は南北方向に区画され、西から175畦畔、178島畠、189畦畔、(176畦畔)、179島畠が位置している。189畦畔は184島畠の北東コーナー付近で途切れており、この延長上には184島畠の南東コーナーから坪境畦畔に延びる186畦畔が位置する。この畦畔には187水口が切られている。177島畠は途中で途切れているようにみえるが、西端は178島畠の西辺にはほぼ一致している。184島畠と185島畠間や、178・179島畠と177島畠の間が空いているのは、水回りのためと考えられる。

187水口 (図28) 186畦畔は他の畦畔より規模が大きく、高さも水田面から約0.2mある。砂礫を多く含んだシルト質の土を盛土して作られており、島畠の盛土とよく似ている。187水口は幅0.6mを測る。埋土は上層に2-5b層と考えられる自然堆積層が残る。下層は礫を多く含んだシルト質であり、畦畔の盛土とよく似ている。畦畔が崩れたものか。

水田面はT.P.4 m前後を測り、178島畠西側の水田は東側が高く、西側が低い。174畦畔には171水口が切られている。2-5b層で埋まっていた。

二十二ノ坪

二十二ノ坪では東西方向に細長い190島畠を1基検出した。幅4 m前後を測る。下面の島畠を踏襲するものである。二十二ノ坪は05-2調査区の成果と合わせて、東西方向に長い「長地型地割」となっている。191は畦畔である。西半でしか検出できなかった。この部分では191畦畔を境に水田面の高さが5 cmほど異なっており、南側が高い。192も2-5b層がすりつく帯状の高まりであったが、2-5b層や2-4b層が筋状に落ち込んだ耕作痕跡や足跡が多く残っており、こういったものが両側にあり、高まりとして認識できたもので、畦畔ではないと判断した。

水田面はT.P.4 m前後を測る。

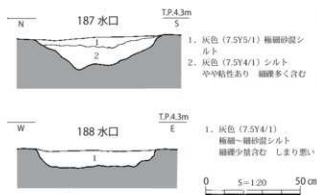


図28 187・188水口 断面図



写真5 耕作痕跡 検出状況 (南から)

第3-2a面 (図29)

3-2a面は3-1a面とほぼ同様の景観であったと考えられる。3-1a層と3-2a層の間にはb層の堆積がほとんど確認できず、3-2a面で検出した畦畔は3-1a面とほぼ同じであり、3-1a面の擬似畦畔である可能性も考えられる。しかし、部分的にはあるが3-1a層の畦畔の下部で、砂(3-1b層)が3-2a層にすりつく部分もあり、検出した3-2a層の帯状の高まりは第3-2a面の畦畔として掲載した。

坪境は畦畔である。漆器碗が畦畔裾付近で出土した(図版5-3)。水田面より上部で検出しており、3-1a層中に埋まっていたと考えられる。漆器碗は遺存状況が悪く図化することができなかった。

二十一ノ坪

3-1a面で畦畔が検出できなかった二十一ノ坪北半では、水田面の高低差による段を検出した(A・B)。水田の区画を示すものと考えられる。b層を挟まないことから3-1a面の擬似遺構の可能性は完全には否定できない。しかし、3-1a面では東西方向に耕作痕跡が確認できたが、3-2a面では段Aより西側で南北方向の耕作痕跡を検出している(写真5)。段Aは西側に、段Bは東側に僅かに落ちており、この間がやや低いことが分かる。よって、この段差は3-2a面の水田区画を示している可能性が高いと考えた。段Aが9175畦畔、段Bが9174畦畔の延長上にそれぞれ位置していることも、このことを補強し、この部分が南北方向に長い水田区画であったことが考えられる。段Aは直線的ではなく、197畦畔と接する部分でずれており、同様のずれは南側にもみられる。このずれた部分と176畦畔の途切れた部分を結ぶと、197畦畔に平行する。段Aのずれは、支線畦畔のあり方に似ており、本来は東西方向の地割がやはり基本であったのであろう。南半は3-1a面の鳥島が3-2a面を踏襲しているため、同様の景観がみられる。この状況は5a面までほとんど変わらない。

二十二ノ坪

190鳥島は東半が西半に比してやや広くなる。鳥島の南には191畦畔が平行してみられた。

出土遺物 (図30) 3-1・2a層、及び対応する鳥島盛土内から出土した遺物である。小片が多いが、土師器皿が比較的多く出土した。特に3-2a層からの出土が目立つ。1は陶器転用円盤である。側面を研磨している。2～10は土師器皿である。2は小形の皿である。3・4は口縁端部を強くナデ、端部が尖る。体部は丸みを有している。5～8は低部が小さく、口縁部が大きく開き、口縁端部は尖る。体部には指頭圧痕が明瞭に残る。9・10は大形で口縁部は強くヨコナデし、体部は指頭圧痕が明瞭に残る。11・12は瓦器碗である。内面にはミガキを粗に施す。11は13世紀末から14世紀の時期が与えられる。13は白磁碗である。底部の内面に胎土目が見られ、高台はえぐりがみられる。15世紀。14は瓦質土器羽釜である。15は須恵器鉢である。器壁が薄い。14世紀前半。16は丸瓦の細片である。内面に布目が残る。17は不明木製品。断面円形の棒状を呈し、片側の先端が細い。18は下層の混入遺物でサヌカイト製の石鏃である。

池島I期地区の97-3調査区では「3-1b層」から文明13年(1481年)の卒塔婆が出土しており、「3-2a面」の廃絶時期を15世紀末とすることができる。当調査区の「3-1a面」に対応する。鳥島盛土からは14世紀以前の遺物が出土しているが、下層の遺物の巻き上げと考えられ、5～8の土師器皿から、15世紀後半～16世紀の年代が与えられる。

他に3-2層からはモモ核が多く出土した。3-1a、4層などでも出土しているが、3-2a層からの出土が多い。土質的に遺存しやすかったこともその要因の一つと考えられる。他にウマの前歯が出土した。

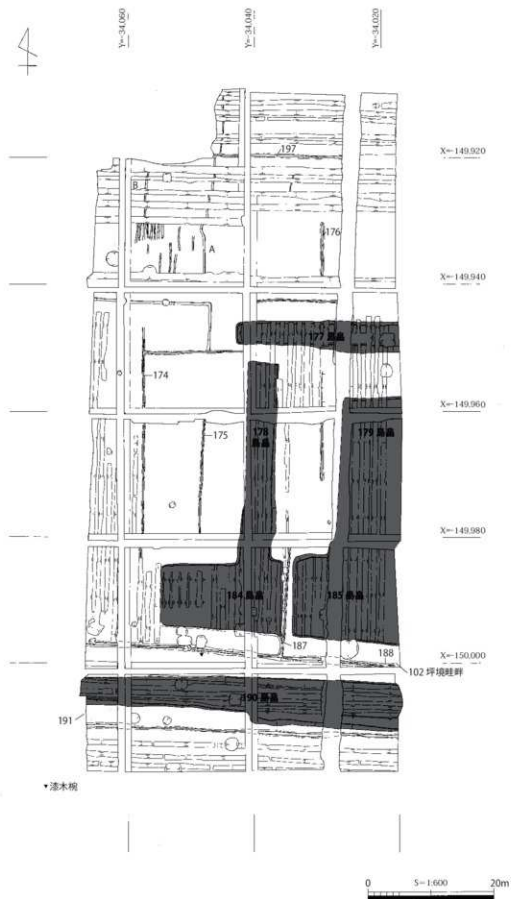


图29 第3-2a面 遺構平面図

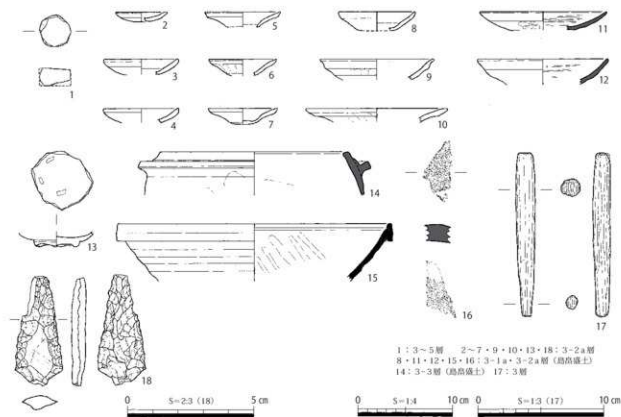


図30 第3層関連 出土遺物

第4a面 (図31)

4a層は砂礫を多く含み、3層とは土質が大きく変わる。4層上面は乱れており、3-2a層との境にはb層は挟まないが、層境は明瞭であった。畦畔、島崙を検出した。坪境は畦畔である。

3-2a面とほぼ同じ景観が復元できる。検出した畦畔は3-2a面とほぼ同じ位置にあり、擬似畦畔の可能性も考えられた。しかし、やや位置がずれる部分もみられ、4面に帰属すると判断した。

島崙の分布は3-2a面と同様である。178島崙北東コーナーと177島崙をつなぐ畦畔を検出した。184島崙は南側の裾部に沿って溝を検出した。溝は途中で途切れる。190島崙は3-1a面より小さく、3-2a面の段階に肩部を拡張したものと考えられる。北側の裾部に溝状の窪みを検出した。窪み内には小ビット状の痕跡が多くみられた (図版7-4)。島崙肩部の土留めの痕跡と考えられる。

出土遺物 (図32) 1~6は土師器皿である。4~6は3層と同様、底部が小さく、口縁部が大きく開くものであるが、6はやや直径が大きい。7~10は陶磁器である。7は磁器端反碗。8は陶器端反碗である。9は白磁皿で口縁端部の軸をかきとる口禿。13世紀中頃~14世紀初頭の時期が与えられる。10は青磁碗である。12は瓦質のミニチュア土器である。13は土師器の椀である。外面はケズリ調整が顕著である。14は陶器、備前插鉢である。15は陶器、瀬戸・插鉢である。15世紀初頭の時期が与えられる。16・17は瓦質土器の插鉢である。16は口縁部に段を有する。17は底部から体部片である。18~20は須恵器である。18は須恵器杯蓋で、口縁端部にキザミを施す。19は杯身である。20は短頸壺である。21~23は鉄製品である。21・22は鎌。基部にはかえりが付く。23は鉄釘。24は木製品である。2箇所に並んだ孔を有している。用途は不明。25は砥石である。よく使用されている。

出土遺物は古墳時代後期の須恵器を始め、下層の混入品も多い。15の瀬戸插鉢や、瓦質插鉢、土師器皿から15世紀を中心とする時期が考えられ、17の瓦質土器插鉢などはやや新しい特徴を有している。

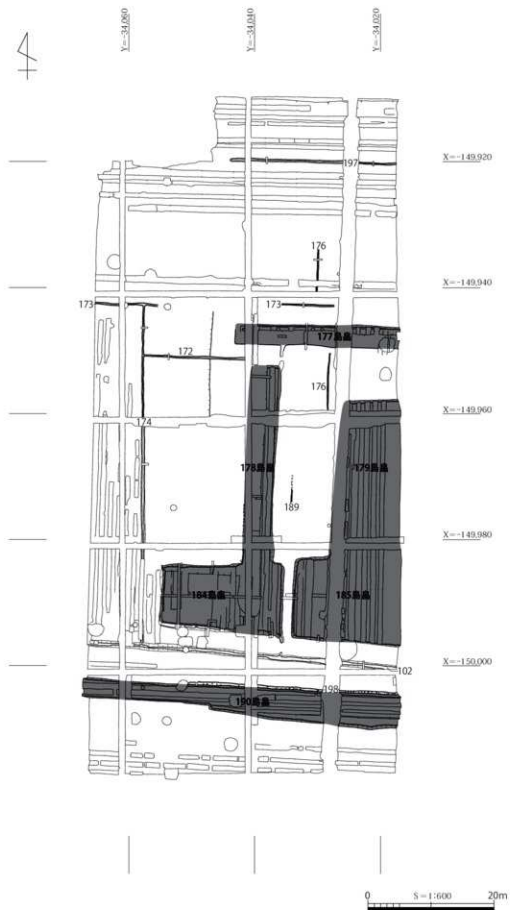


图31 第4a面 遺構平面図

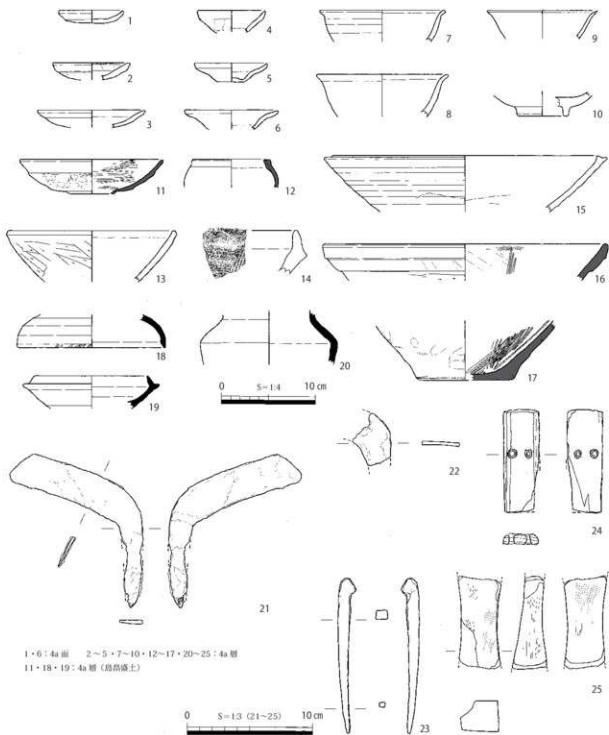


図32 第4a面・4a層 出土遺物

第5a面 (図33)

5a層は上部を4a層に攪乱され、遺構面の遺存状況は悪い。畦畔などは検出できなかったが、基本的には4a面と同様の景観であったと考えられる。破線は下層が露出した部分である。この部分については6面で述べることにする。

二十一ノ坪北半では畦畔は検出できず、水田の区画を反映すると考えられるわずかな段を確認したが、4a面の擬似遺構の可能性が高い。

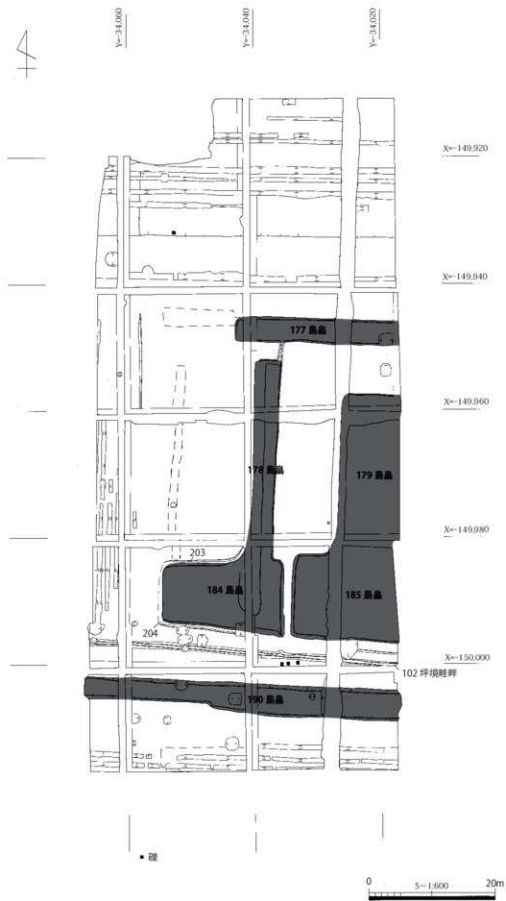


图33 第5a面 遺構平面図

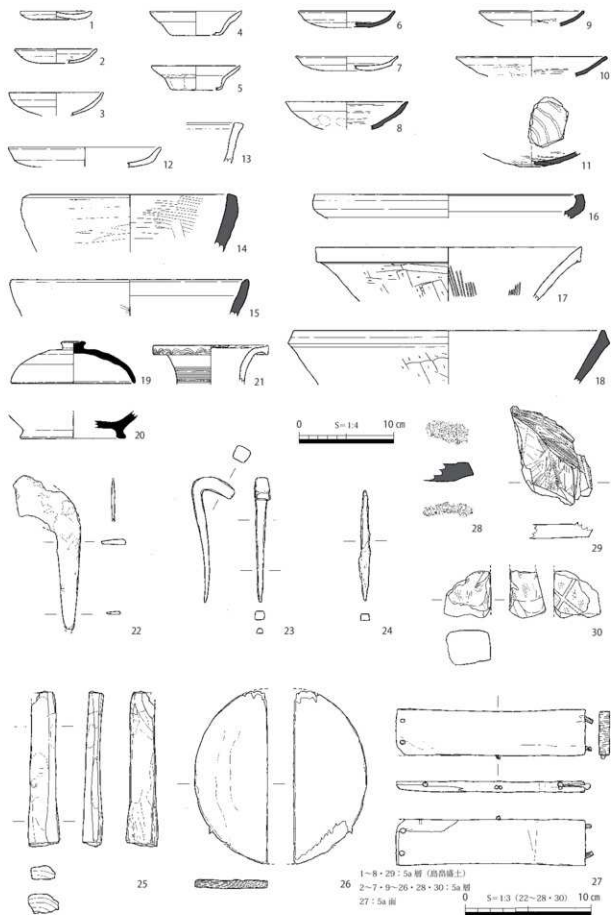


图34 第5a面・5a層 出土遺物

184島島の周囲で溝を検出した。203溝は北側に位置する溝である。溝の埋土は褐灰色シルト混じり粗～細砂である。204溝は南側に位置する溝である。埋土は灰オリーブ色粗砂～細礫混じりシルトである。いずれの溝も深さは水田面から約5 cm前後と浅く、溝というより、窪みといった様子である。4a面の島島の肩部の盛土で埋まっている。西側が1b土坑で切られているため、島島を全周するかは不明である。その他、5面以降、拳大、あるいはその2倍くらいの大きさの礫が出土している。既往の調査でもこのような礫の出土がみられ、坪境に集中する傾向があり、地割の目印との指摘がある。作土層の上面が残っておらず、帰属は判断できないものが多いが、検出した遺構面にドットを落としている。

出土遺物 (図34) 5層は上層までに比して瓦器皿・碗の出土が目立つ。1～5は土師器皿である。4・5は口縁部が大きく開く皿であるが、3・4層で出土したものより底径が大きくなり、器高も高い。口縁部の開きは縮小している。6～11は瓦器である。6・7は皿、8～11は碗である。11は見込みに螺旋状の暗紋を施す。高台は非常に小さく、退化したものである。14～16・18は瓦質土器である。14・15は火鉢である。16は鍋、18は捕鉢である。17は土師器捕鉢である。19・20は須恵器である。19は坏あるいは高坏の蓋、20は壺底部である。21は弥生土器の壺である。口縁部に波状文をあしらい、頸部には直線文を施す。19～21は下層の巻き上げである。

22～23は鉄製品である。22は鍬か、23・24は釘。28は平瓦の小片である。内面に布目が残る。29・30は石製品の砥石である。29は石鍋の転用品である。底部を再利用している。底部外面には煤が著しく付着している。2点の破片が接合したが、この割れ口にも煤が付着しており、石鍋として使用中にひびが入ったと考えられる。底部と体部の境辺りで割れており、この部分には粗い削痕が著しい。底部内面にも多くの削痕がみられるが、前者より深くはない。砥石として転用されたと考えられる。30は砥石である。25～27は木製品である。25は用途不明品であるが、丁寧に面取りが施されており、柄であろうか。26は底板である。27は銅板か。長片端面に3カ所の釘孔を有し、短片側の片方は銅緑に、片方は端面に上下2カ所に釘孔を有している。木釘が一部差し込んだまま遺存している。

瓦器碗は13世紀末～14世紀初頭頃のもののみられ、瓦質土器は14世紀後葉～15世紀前半の特徴を有している。

第6面

6a層は上部を5a層に攪乱されており、遺存状況は良好ではない。ただし、下層が幅広い帯状に露出する部分が数箇所のみられた。これらは擬似遺構であると判断した。また島島部分を詳細にみると第7面以降、拡張していることが分かった。以下ではその変遷を中心にのべることにする。なお、島島の変遷過程において7層から6層に至る過程で作土層が細分される。全面的にみられる6層を6-1a層とし、島島下部で遺存するものを6-2a層とした。更に6-2-1a、6-2-2a層と細分した。6-2a層に関しては既往の調査区との対応は不明である。

第6-1a面 (図35)

島島、坪境畦畔を検出した。坪境は畦畔である。

二十一ノ坪

・二十一ノ坪北半

東西方向に下層が露出する部分を検出した。北半では7層が遺存せず、露出しているのは8・9層である。下層が露出しているのは、本来この部分が高かった、ということであり、凸遺構の擬遺構の可能

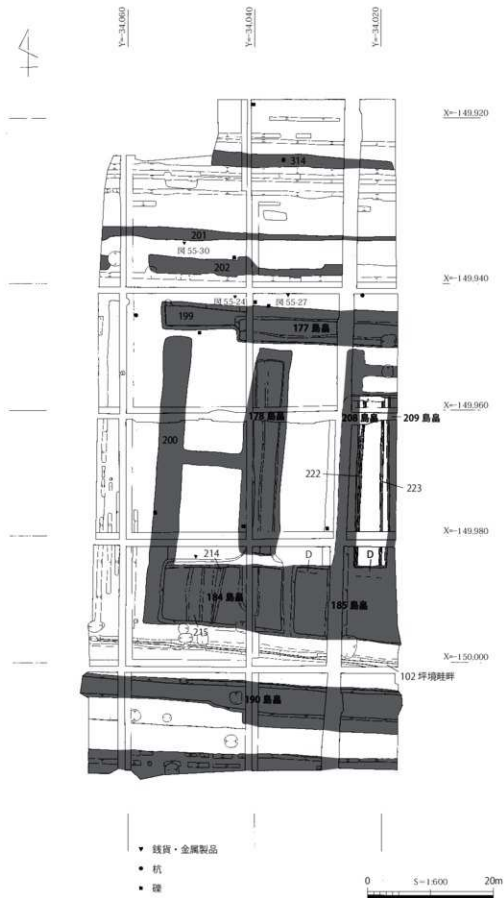


圖35 第6-1a面 遺構平面圖

性を考えることができる。図35では下層の露出範囲を含めてトーンで示した。201は調査区を東西に横断しており、幅は0.5～2m弱を測る。この位置は5a面で段を検出した部分にあたり、擬似畦畔と考えられる。6層の遺存状況がよくないために、幅広になったものと考えられる。202・314も東西方向に長い範囲で下層が露出した。

・二十一ノ坪南半

島島を検出した。5a面の179島島は208・209島島と2基の島島に分かれる。177島島の北側及び西側に延長した範囲(199)、178島島に平行して西側で下層が露出する部分がみられた(200)(写真6)。下層露出範囲は6-1a層がないということになり凸状の遺構の擬遺構と考えられる。検出した位置からも、島島が本来存在していたものと考えた。178島島・184島島でも、下層の露出する部分がみられ、これを元に6-1a面の島島を復元したのが図35のトーンの範囲である。なお、5a面でもこの部分で土色の違いがみられた(図33破線の範囲)。しかし、調査区断面で確認したところ、6面で下層が露出すると判断できた。5a層が薄いために、また、周辺の5a層とはかき混ぜる土が異なるなどが土色の違いの要因ではないかと考えている。また、200擬似島島と178島島を結ぶ範囲も周囲とは土色が異なっていた。この部分は10b層の微高地部分にあたり、他に比して砂質が強い部分である。先の5a面の状況と同様、擬似遺構ではないと判断した。

復元した6-1a面の島島の配置をみると、3-1a～4-1a面で検出した二十一ノ坪を東西半分に分ける畦畔の東側に200擬似島島が位置し、同様に南北に分かつ畦畔の南側で177島島が延長している。一町の南東4分の1の範囲を囲むように島島が配置され、その内部を南北方向に島島が位置する整然とした様子を見て取ることができる。

南半の状況から、北半で検出した202、314の下層露出範囲も擬似島島の可能性が指摘できる。

二十二ノ坪

南北方向の島島を2基検出した。190島島は第5面でも島島として残るが、南側の314下層露出範囲は5a面で一部下層が露出している。しかし、5a層が部分的ではあるがこの範囲で遺存しており、6-1a面の擬似島島であると判断した。

6-2a面から6-1a面の島島の変遷(図36・37)

6-1a面で検出、復元した島島は7面以降、構築され、拡張している様子がみられた。大きく3段階の変遷をみることができ、古い段階から6-2-2a面、6-2-1a面、6-1a面とする。これらの島島は池島1期地区で「5面」まででみられる洪水砂を芯にして拡張する島島とは異なり、周囲を削って、あるいは掘り下げて盛り土をしている。6-1a面で水田部分は作土を除去すると調査区北側で8層が露出する以外、10b層が露出する部分が大部分であり、7～9層の堆積が薄いこともあるが、4層～6層までの土砂の供給も少なく、下層を攪拌して作土が形成されていることが分かる。一方、6-1a面の島島のうち半分以上は2-4a面まで、島島として踏襲されていることから、その下部では、6-1a層より古い作土が削り残されていると考えられた。しかし、4～5層及び6層の細分層はいずれも近似しており、単独では何層であるのか判断しにくい。また、盛り土も洪水砂を芯にするのではなく、周囲の耕土



写真6 200擬似島島(北から)

を盛り上げているので、作土層との区分が不明瞭な部分もあった。こういった状況から、まず鳥島の基底部に着目し、次に盛り土の違いも含めて3段階の変遷を考えた。調査過程では判断を誤った部分があり、再度、検討しなおした。煩雑な記述になるが、以下これも含めて記したい。

まず、最も遺存状況のよい6-1a面の184・185鳥島の変遷についてみていくこととする。図38は184・185鳥島の東西断面である。6-1a層の状況と比較できるように調査区東西断面（X=-149.980ライン）を並べて配している。184・185鳥島の断面をみると、明らかに中世の作土層である細砂～砂礫混じりシルト層の下面が、段をもって高低差を持つことが分かる。最も標高が高くシルト質の9層相当層が遺存する部分では、この上部に7層である砂礫を非常に多く含んだ砂礫混じりシルト層がみられた（▲部分）。最も古い鳥島の基底部であり、この段階の鳥島をAとする。このことにより、205・212・206鳥島は7面以降、造成されたことが分かる。

次に盛土部分を見ると、最上層の1層を除去すると（同鳥島は2-4a面以降踏襲しており、上部の作土層は6-1a面以降の作土層である。調査では3層として掘削した。）、砂礫を多く含む部分（土層8・8'・13・22）と砂質が高い部分に大きく2分できる。このうち前者は先のAを含んでおり後者より古いことが分かる。このうちA以外の部分をB、砂質の部分をCとする。184・185鳥島は6-1a面の鳥島であり、この下部にある作土は当然これより古いといえる。また、最も古いAの鳥島が7面を基底面としていることから下部の作土層を6-2a層とした。Aに対応する作土層を6-2-2a層（土層10・10'・26）とし、Bに対応する作土層を6-2-1a層（土層7）とした。Cは6-1a層に対応する盛土となる。

他の鳥島も基本的には同様の解釈でもって対応層を判断したが、いくつか異なる点もある。図40は5a面の179鳥島の東西断面であるが、6-1a面では208・209鳥島と2本の鳥島になる。断面図をみると、A（▲部分）は一目瞭然であった（333・334鳥島）。しかし、これより内側については、Cとは異なっている。図版6-1、5a面の検出状況を見ると、（土層1）を除去した段階で南北方向に南からB・Cの境界があり、更にD・Eの違いが確認できた（Dの範囲は図35に示している）。Cは6-1a面の鳥島盛土であるので、Eを5a面の鳥島盛土とし、Dに関しては6-1a面の184・185鳥島の肩部の盛土、あるいは拡張と考え、大きな変遷の過程としては捉えていない。Eの範囲（図40土層3）は細礫が少なく、明褐色を呈しており、他の盛土とは比較的明瞭に異なっていた。この範囲までを5a面の盛土Eとし、（土層4）を6-1a面の作土層、（土層8）を6-2-1a面の作土層と考え、Aと6-2-1a層の間の（土層9）を6-2-2a面の作土層とした。よって5a面の179鳥島は6-2-2a面A333・334鳥島→B224・225鳥島→C208・209鳥島（D）→E179鳥島の4段階の変遷をとることが分かる。

調査当初もAからCの3段階の変遷を考えていたが、B=D、C=Eと誤った判断をしまった。更にこの3段階を、5a面、6-1a（及び5-2a）層、6-2a層と対応させていた。しかし、調査が進む中で6-1a層の下面と6-2-1a層の下面はわずかではあるが不自然に段をもって高低差があり、6-2-1a面のほうが高いこと（上面では、明らかに6-1-1a層が高かったが、削平の条件が異なるためと考えた）、後で述べる溝との関係において矛盾が生じた。このことから、C段階の鳥島は6-1a面のものであるとし、CからAの変遷は6-1a面から6-2-2a面の変遷、EはCより新しく5a面に対応する盛土と改めた。よって、図版とは異なる部分があるので注意されたい。

177鳥島、190鳥島では2段階の変遷が確認できた（断面図39・41）。177鳥島では9層より上層の粗砂をやや含んだ作土層である7・8層が高く削り残されておりA（▲部分）とした。これにすりつく作土層が6-2-2a層である。190鳥島では最も高くケズリ残された▲部分には溝が位置しているため、7層は

残っていないが、これをAに対応させた。両島嶼は6-2-2a面では幅が狭いだけでなく、調査区中央のY=-34.042付近で途切れてしまう点も共通している。6-2-1a層は確認できない。

以上の状況から6-2-1a面、6-2-2a面の島嶼の平面状況を示したのが図36・37である。6-2-2a面→6-2-1a面→6-1a面と島嶼が徐々に拡大していく様子が見える。208・209島嶼の肩口には6-1a、6-2-2a面で溝が掘削されている。316島嶼の下部の▲部分は幅が狭く、擬似畦畔と考えられる。

6-1a面で水田であった部分は図38～41をみても分かるように、7層の上面はほぼ4a層上面にあたり、4層以下の作土層が下層を攪乱して形成されている状況がよく分かる。

以上が大きな変遷過程であるが、細部では他に盛土の違いが認められる。先の断面図38に戻ると、Cの盛土を切って、白色のシルト質の盛土がみられる（図38土層1'）。3層に類似したシルト質土であったことから、図示していないが、3-3層として調査を行った。この盛土の肩には溝状の窪みがみられた。また、（土層2）はややシルト質の盛土で、Cの細分層である（図35に示した214・215の範囲である）。Eとした黄色の盛土と似通っており、その下部の（土層6）は細礫を多く含んだ褐色系の砂質土であり作土層と考えられた。調査では5'層も含めて、5層の細分層としたが、5'はやや大きいシルトブロックを含んでおり、作土層ではないと判断、6-1a面の盛土とした。土層3に関しては、5層に関連した作土層の可能性も残るが、島嶼の変遷を考えると、うまく説明できない。つまり、6-1a面で拡張した島嶼を掘り下げて、また埋めることになる。よって、この部分に関しては、判断がつかず、Cの

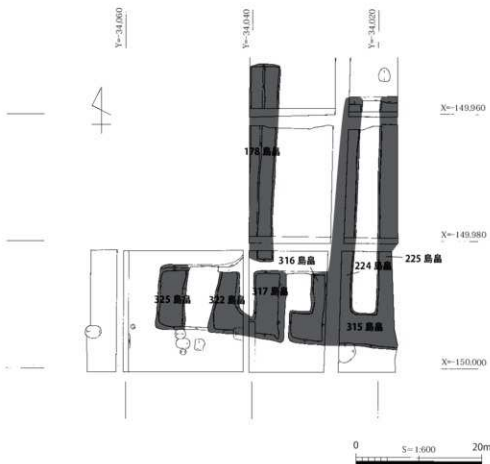


図36 第6-2-1a面 島嶼分布図

盛土の細分層としているが、5層の細分層である可能性も挙げておきたい。なお、土層4上面で杭の痕跡を4箇所確認した。

変遷は以上のとおりであるが、作土層を除去した段階で鳥島造成に関連する遺構を検出している。これらの遺構は便宜上第9面として遺構検出をしているので、先にその概要を述べたうえで、鳥島の変遷を再度まとめることとする。なお、図41は190鳥島付近Y=-34.030ライン調査区断面であるが、2層からの鳥島の状況も、この図で合わせて示しているので参照されたい。

第6a面から9面

6層を除去した時点で2調査区では大部分が10b層以下の層が露出し、6-2-2a面の鳥島下部には7層が削り残される状況であった。現地の調査ではこの一部のみ遺存する7層、あるいは北側の8層遺存範囲のみ、上面を7、8面として調査したのち、これも除去した全体を9面として調査した。9面で検出

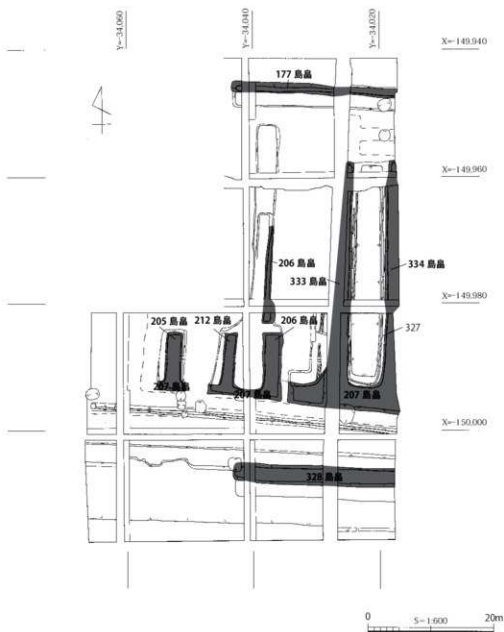


図37 第6-2-2a面 鳥島分布図

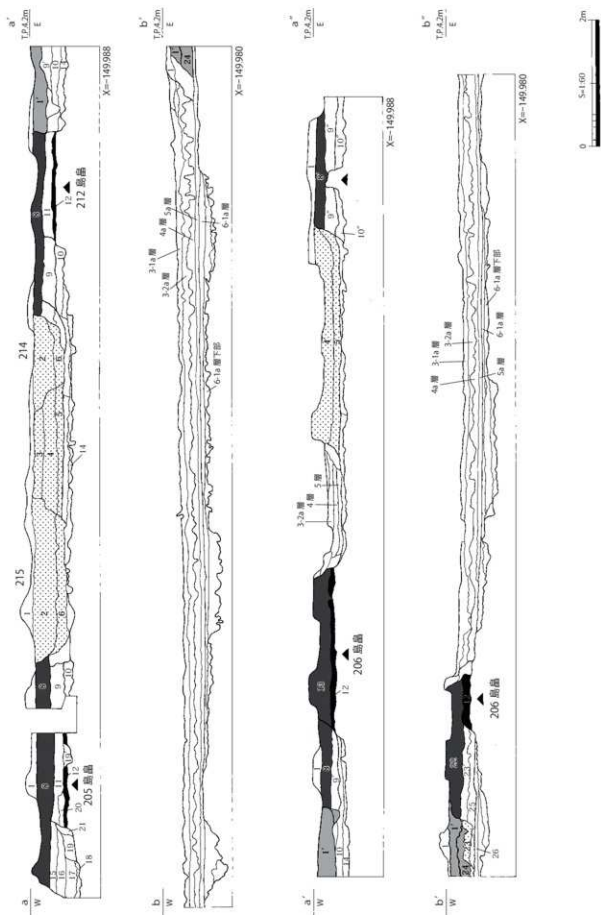
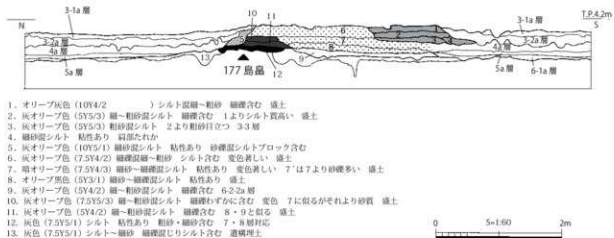
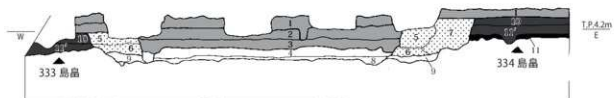


图38 184·185島嶼、X=-149,980断面図



1. オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト混礫～粗砂 礫混含む 盛土
2. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 細～粗砂混シルト 礫混含む 1よりシルト質高い 盛土
3. 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粗砂混シルト 2より粗砂目立つ 3-3層
4. 礫砂混シルト 粘性あり 礫部たれか
5. 灰オリーブ色 (10Y5/1) 礫砂混シルト 粘性あり 砂礫混シルトブロック含む
6. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 礫混～粗砂 シルト含む 変色著しい 盛土
7. 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 細砂～礫混シルト 粘性あり 変色著しい 7'は7より砂礫多い 盛土
8. オリーブ黒色 (5Y3/1) 細砂～礫混シルト 粘性あり 盛土
9. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細～粗砂混シルト 礫混含む 6-2.2a層
10. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 細～粗砂混シルト 礫混わずかに含む 変色 7に似るがそれより砂質 盛土
11. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細～粗砂混シルト 礫混含む 8～9に似る 盛土
12. 灰色 (7.5Y5/1) シルト 粘性あり 粗砂・礫混含む 7・8層対応
13. 灰色 (7.5Y5/1) シルト～細砂 礫混混りシルト含む 遺構埋土

図39 177 島断面図 (Y=34,040 ライン)



1. 黄褐色 (10YR5/6) シルト混中～細砂 礫混多く含む 3層対応層
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 細砂～礫混シルト 礫混多く含む Fe 沈着あまり粘性強い 盛土
3. 明褐色 (7.5YR5/6) 粗～細砂混りシルト 粘性あり 礫混わずかに含む 盛土
4. 明褐色 (7.5YR5/8) 粗砂混りシルト 粘性あり 6-1a層
5. 明褐色 (7.5YR4/6) 粗砂混りシルト やや粘性あり 層分できる 盛土
6. 明褐色 (7.5YR5/6) 細～粗砂混りシルト 礫混含む 砂質高い 盛土
7. 暗茶色 礫分不揃い 層分不明瞭 盛土
8. 褐色 (7.5YR4/3) 礫混混りシルト 細～粗砂多く含む 礫混多く含む 8・9は似ている 6-2.1a層
9. 灰褐色 (7.5YR4/2) 礫混混りシルト 細～粗砂多く含む 6-2.2a層
10. 明褐色 (7.5YR5/6) 礫砂～礫混シルト 礫多い 盛土
11. 黒色 (7.5Y2/1) 礫混混りシルト 礫混非常に多い 7層
- 11'. 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂混り細砂～シルト 礫混非常に多い Mn 粒多く含む 盛土と7層が層分できず 盛土

図40 179 島断面図 (X=-149,980 ライン)

図38の土色

1. 灰色 礫混混り～細砂 3層相当層
- 1'. 灰オリーブ (7.5Y4/2～5/2) 細～粗砂混シルト 礫混多く含む 3層相当層
2. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂～シルト 礫混含むが他より少量 盛土
3. 明褐色 (7.5YR5/6) 粗～細砂混シルト 礫混含む 2と非常に似る 盛土
4. 褐色 (7.5YR6/6) ブロック混合土 細砂 (10層) ～シルト (9層?) 主体 礫混混り粗砂ブロックわずかに含む 盛土
- 4'. 明黄褐色 (10YR6/8) ブロック混合土 シルト～細砂と礫混混りシルト (10層) ブロック 盛土
5. 褐色 (7.5YR4/4) 粗～細砂・礫混混りシルト 粘性あり 礫混含むが下より少ない 盛土
- 5'. 褐色 (7.5YR4/4) 礫混混りシルト 粘性あり 灰色シルトブロック 5cm前後と比較的多く含む 盛土
6. 褐色 (7.5YR4/4) 粗砂混りシルト 粘性あり 礫混含む 5に似るやや礫混少ない 盛土
7. 褐色 (7.5YR4/4) 礫混混り細砂～シルト 礫混非常に多い 6-2.1a層
8. 褐色 (7.5YR4/4) 礫混混り 細～中砂 シルト含む Fe 沈着著しい 盛土
- 8'. 褐色 (7.5YR6/6) 礫混混りシルト 礫混含む 盛土
9. 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂混りシルト 粘性あり 礫混含む 盛土
- 9'. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細～粗砂混りシルト 粘性あり シルトブロック小含む 盛土 9'は5に似るがやや砂質高い 盛土
10. 黄褐色 (7.5YR4/2) 細砂～礫混混りシルト 礫混比較的多く含むが6層より多少少なくシルト質 6-2.2a層
- 10'. 暗灰色 (5G3/1) 礫混混り 粗砂～シルト 6層に似るがそれより砂礫少ない 6-2.2a層
11. 褐色 (10YR4/4) ブロック混合土 7層礫混と10層のシルトブロック 盛土
12. 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト混礫砂～礫混 7層
13. 黒褐色 (7.5YR3/1) 礫混混りシルト 礫混非常に多く含む 盛土
14. 土層とはほぼ同じ 遺構埋土含む
15. 濃い黄褐色 (10YR4/3) 礫混混り細砂～シルト主 ブロック混合土 盛土
16. 灰黄褐色 (10YR4/2) 礫混混り細砂～シルト 盛土
17. 濃い黄褐色 (10YR4/3) 礫混混りシルト 9層シルトブロック含む 遺埋土
18. 黄褐色 (2.5Y5/1) 粘質シルト 礫混混りシルトブロック含む 遺埋土
19. 灰色 (5Y4/1) 細～シルト 粘性あり 黄 (10層) ブロック含むシルト～細砂
- 19'. 黄褐色 (2.5Y5/1) 粗砂混りシルト 粘性あり
20. 灰オリーブ色 (5Y4/2) 細砂混り粘質シルト
21. 濃い黄褐色 (10YR5/4) シルト混 細～中砂 質よくずれ
22. 濃い黄褐色 (10YR5/4) 細砂～礫混混りシルト
23. 濃い黄褐色 (10YR6/4) 細砂 礫混混りシルト 23'はやや礫混多い
24. 灰褐色 (10YR4/1) 礫混～細砂混りシルト
25. 灰褐色 (7.5YR4/2) シルト (粘性あり) 粗砂～礫混混りシルトブロック含む
26. 黒褐色 (7.5YR3/2) 礫混混りシルト 6-2.2a層

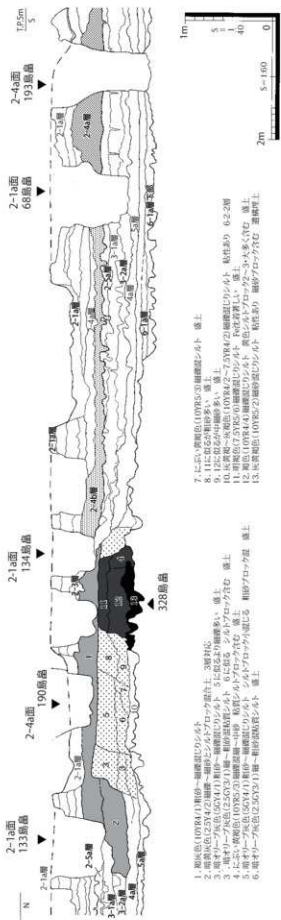


図41 190島嶼断面図 (Y=-34,040 ライン)



写真9 178島嶼 断面 (X=-149,980 ライン)
(南西から)

写真8 190島嶼 断面 (Y=-34,040 ライン)
(南西から)

写真7 2層島嶼と水田 断面 (Y=-34,040 ライン)
(南西から)

した遺構の多くは6層の下面遺構と捉えられ、他に7層下面、8層下面遺構が検出された。それぞれの遺構の帰属時期を判断するのは困難ではあるが、上層の遺存状況、および埋土の状況、遺構の分布状況、出土遺物などからそれぞれの遺構の帰属時期についてまとめた。図42は第9面として検出した遺構面である。順序としては逆になるが、全体の検出状況を提示したうえで、遺構の帰属についてまとめていくこととする。二十一ノ坪南半・二十二ノ坪では7層が遺存していた部分で検出した遺構は少なくとも7～9層に関連した遺構であり、それ以外で検出した遺構の大部分は6層下面から9層、あるいは10層、11層に関連する遺構と判断される。検出した遺構はいくつかのグループに分けることができる。

- 1、まず、幅1～2m前後と幅が広く、長く平行する溝状の土坑群である。これらの溝状土坑からは多くの須恵器が出土するものの、瓦器碗、瓦器皿など中世の遺物も出土している。土坑を検出した範囲は6層除去後、一部を除いて10b層が露出し、7・8層は遺存しない。6層から7層下面遺構と考えることができる。
- 2、1の溝の間の低い部分で多くみられる溝である。この溝は浅く、いくつかが平行したり途切れたり、あまり明瞭なものではなく、鋤溝であると考えられる。埋土は6層下部層と同じであり、6層に関連する遺構と判断できる。
- 3、1m以上の方形の土坑である。埋土に砂礫を含む比較的大きいシルト質のブロック土がみられ、砂礫を含む埋土の特徴からは4～7層のいずれかが含まれていると考えられる。6層上面まではこれらの遺構は検出できなかったことから、6層、7層下面遺構であると考えられる。検出した遺構のうち、切りあい関係から最新の遺構群である。土坑が全て同時期のものとはいえないが、335土坑から瓦器碗が出土したことから、6層下面遺構と考えられる。
- 4、7層が遺存していた部分で検出した溝である。これは7層上面では確認できず、7層下面遺構として捉えることができる。
- 5、二十一ノ坪北半では8層が遺存しており、第8面として図50のように遺構検出を行った。9面で検出した遺構は8層下面遺構と考えられる。
- 6、10面の微高地1に当たる部分ではほぼ10b層が露出しており、ここで検出した遺構は10層に関連する遺構が大部分を占めるものと考えられた。これについては10面で扱うこととする。

以上、非常に錯綜しているが、地形的に高く、各層序が収斂する、あるいは上層にかく乱される状況から、各層序を明確に追うことができないが、これまで面的な広がりをもって提示される標準層序との対応はできる限り行う必要があると考えた。特に池島Ⅱ期地区は地形的に高く、先の島高で見たように、7層上面とほぼ同じレベルに4層上面があるなど、後の攪乱が著しい。安易に帰属面をもって提示することは後々の混乱につながると考えたため、検出状況に即して提示し、帰属面について検討を行った次第である。ここで提示した解釈の如何については今後の調査で更に検討されたい。

まず、6層下面遺構と判断した1～3の遺構について述べる。

1、溝状遺構（図43・44）

南北方向に伸びる溝状土坑を検出した。一つは溝の南端、北端がほぼ揃っているもので西から293・294・255・253・252・276溝状土坑である。A群とする（図43・45）。

溝状土坑は幅1.5～2.0mを呈し、深さは検出面から0.1～0.2mを測る。埋土のうち上層は6-1a層下部と同様でやや砂質が高い砂礫混じりシルトである。下層は10b層の細砂が混じった状況であり、底部は非常に凹凸が著しい。単層とした部分でも下部は凹凸が著しい状況であり、直下の10b層が混じった状況

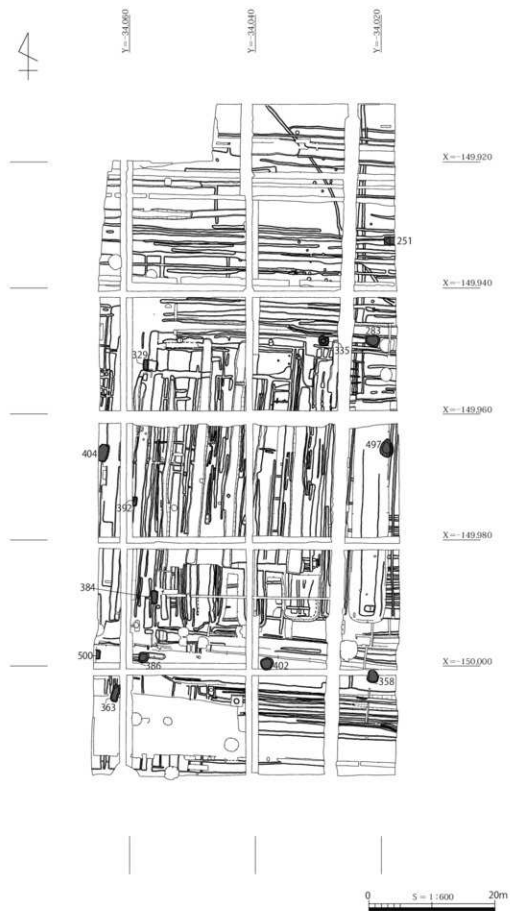


图42 第9面 遺構平面図

がみられた（写真10）。下層は加工時形成層と考えられる。溝は内部で掘り残されている部分もあった。

これらの溝状土坑の分布をみると、第6-1a面の島畠に沿って位置していることが分かる。図45に合成図を作成した。溝状土坑は6-1a面では検出できないことから、第6層下面遺構と捉えることができ、島畠造成に関わる遺構と考えることができる。つまり、島畠の周囲を溝状に掘削し、その掘削土を盛って島畠を拡張、その後、溝は周辺の水田面を平坦にならしながら埋める。水田部分を下げて平坦化するには、広い範囲から土砂を集めて盛土するよりも溝状に一部を下げて、ならしながら埋めるほうが効率的であると考えられ、時期が全く異なるが、当調査区の弥生時代の水田で大畦畔に沿って溝状の土坑がみられたが、これとまさに同じことである。

6-1a面で拡張された部分の盛り土（C）は砂質が強いことは先に述べたが、溝状土坑は10b層に達しており、これを主体にした盛り土が行われたと考えられ矛盾しない。

この溝状土坑に直交する368・295溝も同様のグループと考えられる。

もう一つのグループは溝状土坑の北端、南端が前者より南に位置するもので、西から256・254・265溝状土坑である。B群とする（図44・46）。A群より幅は1m前後と狭いが深さがある。256溝状土坑は幅0.7～0.8m、深さは0.15～0.25mを測る。254溝状土坑は幅1.0～1.4m、深さ0.25～0.35mを測る。261溝と交わる部分は浅く、そこから深くなる。265溝状土坑は幅0.9m、深さ0.15mを測る。埋土のうち下層は上層に比して粘性の高いシルト質の埋土で、上層は細砂～中砂を含むシルトである。

これらの溝状土坑北端に直交する261（313）溝状土坑（図43）もこのB群に属すると考えられる。幅0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は同様である。どちらも下面は乱れている。

B群の溝状土坑もA群と同様、島畠との関連が考えられる。第6-2-2a面段階の島畠と合成したのが図46である。254溝状土坑が205島畠に沿って西側に位置していること、256・254溝状土坑の南端が6-2-2a面の島畠207北肩延長に位置していることから、6-2-2a面の島畠との関連が考えられる。6-2-2a面の盛土の下部（図38土層11）は10層に7層の細礫ブロックが混じっており、溝の掘削土を盛土したものと考えられ、溝群Aと同様の機能が推測できる。図38の254溝の断面をみると、9面で溝とした範囲は（土層18）の範囲であるが、本来は（土層17・18・19・21）が溝状に掘削した範囲と考えられ、（土層19・21）は10層と考えられる黄色シルトブロックを明瞭に含んでおり、島畠上部の（土層11・20）と似通っている。掘削土を盛る際に肩部付近は溝に盛土が崩落するか、あるいは肩口を固めて、その後、周辺の土層を溝に埋め戻したのが（土層17）と考えられる。（土層17）は10層相当の黄色シルトのブロック土ほとんど認められず、灰色系のシルトが混じった細礫主体の土層であった。

二十二ノ坪の6-1a面の190島畠の南肩には、359溝が位置している。やや幅広で、浅いが底面はやはり乱れており、A群と同様の性格が考えられる。

溝から出土した遺物は図57に掲載しており、後ほど他の遺物とまとめて記述することとする。

2、鋤溝群（図45）

鋤溝と考えられる溝群は先述のA群の255・253溝間、252・276溝間、つまり6-1a面の水田部分で検出した。溝の特徴は、先に述べたとおりで、水田の下面に残る鋤溝などの耕作痕跡と考えられる。図38の断面図をみても6-1a層の下面は凹凸が著しいのが分かる。6-1a面の下面遺構と判断できる。

また、逆に、A群の294・255溝間、253・252溝間では6-1a面の島畠の外周にほぼ沿って、先の鋤溝に比して、しっかりと掘り込んでいる溝がみられる。395・369・306・268溝の南北方向溝、311などの東

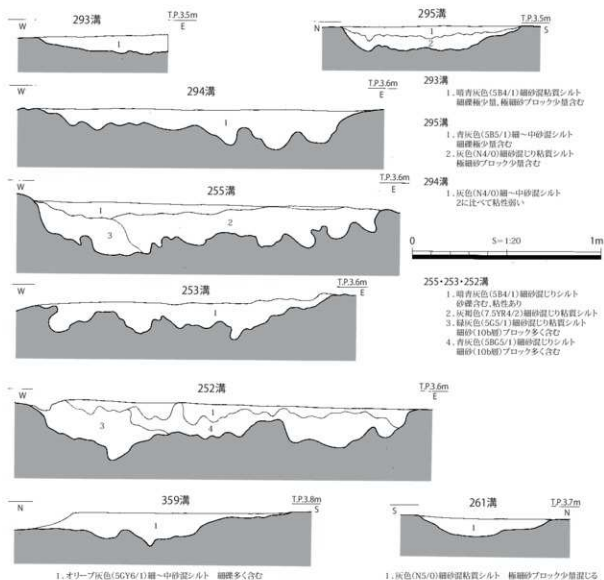


図44 土色

256溝

1. 灰色(5B5/1)中砂混シルト 細礫少量, 極細砂(10μm)ブロック大少量含む
2. 青灰色(5B6/1)細砂混粘質シルト

405溝

1. 灰色(7.5Y5/1)層~中砂混シルト 細礫多く含む
黄灰色細砂混シルトブロック大含む

254溝

1. 灰色(N5/0)細砂~中砂混シルト 細礫を多く含む
2. 灰色(N4/0)細砂~中砂混シルト 極細砂(10μm)のブロック少量含む
3. 灰色(N4/0)細砂混粘質シルト 細礫極少量 10μmブロック大含む
4. 灰色(N4/0)細砂混粘質シルト 3に比べて粘性強い

265溝

1. 灰色(N5/0)中砂混シルト 細礫・細砂(10μm)ブロック少量含む
2. 青灰色(5B6/1)細砂混粘質シルト 10μmブロック少量含む

407・408溝

1. 灰色(7.5Y5/1)層~中砂混シルト 細礫極少量含む, 10μmブロック少量含む
2. 灰色(7.5Y5/1)層~中砂混シルト 細礫やや多く含む
3. 灰色(7.5Y6/1)細砂混シルト 細礫極少量含む



写真10 255溝 完掘状況(南から)

図43 溝群A他 断面図

西方向の溝などがこれにあたる。溝の機能は不明であるが、6-1a面の島島に関連するのではないかと考えられる。例えば、6-1a面や6-1-2a面の208・209島島、5面の184島島の肩口に溝を検出しているが、同様に島島の周囲に溝が掘削されていたと考えられる。

3、方形土坑 (図42・47～49)

方形の土坑を12基検出した。南北に長いもの、東西に長いもの、ほぼ正方形、あるいは円形に近いものもあるが、軸は正方位にほぼ一致している。規模は長辺が2.5～3m前後の大形のものから、1.5m前後の小形のものがある。深さは浅いもので0.5m、深いもので1m前後を測る。湧水層である11b層を掘り込んでいる。いずれも埋土は中世作土層と判断できる粗砂～細砂混じりシルトのブロック土、10～12層のブロック土である(写真11)。このことから、掘削後ほどなくして掘削土で埋め戻されていると推測できる。335土坑で瓦器碗が出土している他は、いずれも遺物を含まない。

329・392・384土坑は調査区西側に位置する。329土坑は東西に長く、2×2.5mの隅丸方形を呈し、深さは0.9mを測る。392土坑は1.4m×0.7m以上を測り、深さは0.6mを測る。384土坑は1×2.2mの南北に長い隅丸方形を呈し、深さは0.7mを測る。

404・500土坑は調査区西端に位置する。法面にかかるため、500土坑の全容は不明である。404土坑は南北に長い2.7×1.5m以上の隅丸方形を呈し、深さは0.5mを測る。

251・283・497土坑は調査区東側に位置している。251土坑は東側の法面にあたるため、全体は不明である。1.2×1.5m以上の隅丸方形を呈する。深さ約1mを測る。283土坑は東西方向にやや長い1.8×2.2mの隅丸方形を呈する。深さ0.5mを測る。497土坑は南北方向が長く3×2mの方形というより楕円に近い形を呈している。深さ0.7mを測る。

335土坑は283土坑の西側約8mで検出した。掘り方がくずれており、ややいびつではあるが、約1.5mの隅丸方形を呈し、深さ0.9mを測る。埋土のうち下層は細砂を主体としたブロック土で上層は細砂混じりシルト・細砂のブロック混合土である。上層と下層の境で瓦器碗が出土した(図48・図版9-1)。瓦器碗はほぼ完形で、口縁部がかけているのは故意に打ち欠いたものと考えられる。12世紀末

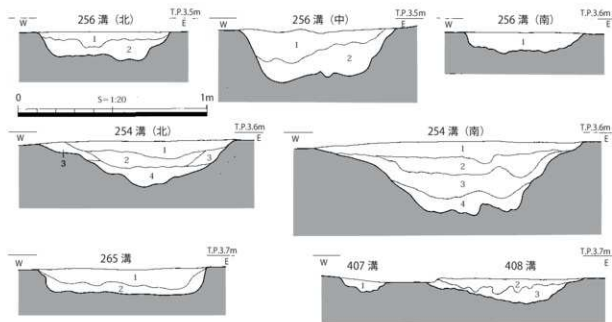


図44 溝群B他 断面図

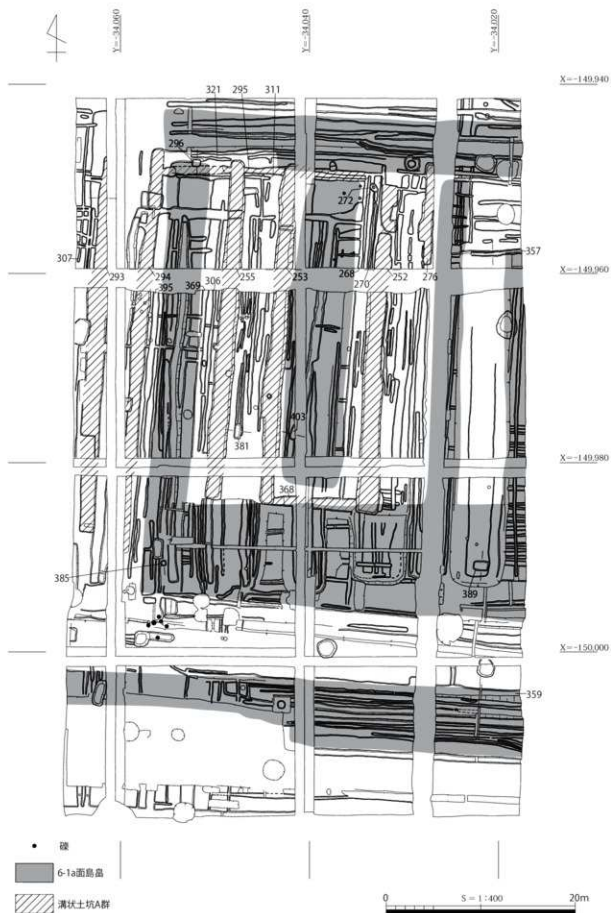


図45 溝群Aと第6-1a面島晶

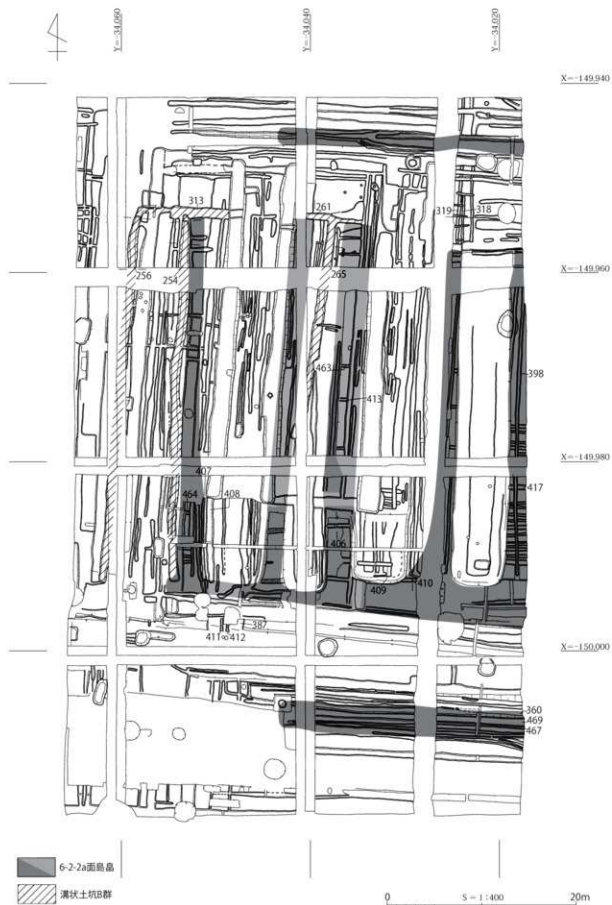


図46 溝群 B と第6-2-2a 面島畠

～13世紀初頭の時期が与えられる（図57-1）。

386・402・358・363土坑は坪境畦畔の南側に位置する。386・402・358土坑は約1.5～2mの円形、あるいは隅丸正方形を呈している。386・358は深さ1m、402土坑はやや浅く0.7mを測る。363土坑は2.7×1.2mの南北に長い隅丸方形を呈し、深さは0.6mを測る。

土坑は遺物をほとんど含んでいないため時期は不明であるが、335土坑から出土した土器から12世紀末～13世紀初頭の時期が与えられる。土坑の掘削時期が全て同じではないだろうが、中世作土層をブロック状に含んでいること、検出した遺構をほぼ切っていることから、6-1a面下面遺構と判断し、335土坑の土器をもって第6層の年代観と矛盾しない。

土坑の分布をみると、坪境畦畔の南側に直線的に並んでいる他、島畠を集中的に検出した二十一ノ坪南東4分の1の範囲の外側に並ぶように分布している。6-1a面の島畠上に位置するのは363土坑のみで他は島畠の肩付近、水田側に掘削されている。このような特徴を有する遺構は既往の調査でも主に6・7層関連遺構として検出されている。西に位置する97-3調査区6面では坪境畦畔付近に集中して多く検出している。遺構の性格については、1面の井戸の分布と似た傾向があり、井戸に類する灌漑用の水だめの可能性が考えられる。島畠上部から掘削するより、水田はレベルが低く、深く掘削できることから、島畠上部ではなく、水田に掘削するのだろうか。水路の整備が進んだ段階ではあるが、地形的に高く水がかりが悪い当調査区付近では、水の確保は困難であったと考えられる。

他に小規模な土坑を6基検出した。上記のものとは異なるが、ここであわせて述べることとする。（図45・52）。

272土坑は、6-1a面の178島畠の北東隣近くに位置している。幅0.6×1.0mの楕円形を呈し、深さは約0.2mを測る。土坑は中央部分が窪んでいる。296土坑は、6-1a面の200島畠の北側に位置している。0.7×0.9mの方形を呈し、深さは0.1m以下と浅い。381土坑は200・178島畠の間に位置しており、0.6×1.6mの方形を呈し、深さは0.25mを測る。下層は自然堆積層で、シルトと砂の互層、上層はブロック土で埋まっている。403土坑は、側溝に切られて全体は不明であるが、深さ0.2mを測る。385土坑は384方形土坑に近接して位置している。約0.5mの方形を呈し、深さは0.1mを測る。

土坑の性格は不明であるが、403・385土坑は7層下面遺構と考えられる。

島畠まとめ

以上6層に関連する遺構について述べたので、ここで島畠についてまとめることとする。

当調査区における島畠の造成は6-2-2a面である。島畠は幅約2～2.5mと狭く、島畠というよりは、大畦畔といった様相である。この段階の高まりが、畠として使用されていたかの根拠は示せず、島畠とってよいものか、呼称についての議論も必要だが、ここでは島畠と呼称しておく。島畠は溝を掘削し、掘削土を盛土することによって造成される。この溝はおそらく周囲の耕作土をならすことによって埋められる。島畠の基底面である7面は傾斜がかなりあり、図38をみると、7層上面の高さは西側205島畠の下部ではT.P.3.7mを測り、206島畠下部ではT.P.3.9m、最も東に位置する334島畠下部では図40をみるとT.P.4.1mを測り、東西40mの間で0.4mの比高差があり、西に向かって下降している地形が復元できる。島畠が作られたのは、二十一ノ坪南東4分の1の範囲、及び二十二ノ坪である。二十一ノ坪北半に関しては、この段階の状況は不明である。島畠が作られるのは主に、10面の微高地1に相当する。地形の凹凸が解消できず、大畦畔的な島畠によって区画することによって、比高差のある水田が機能し、また島畠間を平らにならすことによって水田を確保したものと考えられる。その際、溝状に掘削するこ

とによって両方の作業が効率的に行われたものと考えられる。当遺跡では長地型地割が明瞭であり、坪内は畦畔によってほぼ10等分されている。当調査区においては、南北で方向が異なっており、ばらつきはあるものの、南東4分の1の範囲に5基の南北方向の島島が作られており、10等分の意識はあるものと考えられる。

6-2-1a面、6-1a面では島島が拡大する。図38では6-2-1a面の水田上部の高さが、西側322・325島島間でT.P.3.7m、317・316島島間で3.8m、224・225間でも3.8mを測り、高低差が解消に向かう様子が窺える。6-1a面では再度、溝状に掘削して島島の盛り土をしており、大規模に拡張していることが分かる。

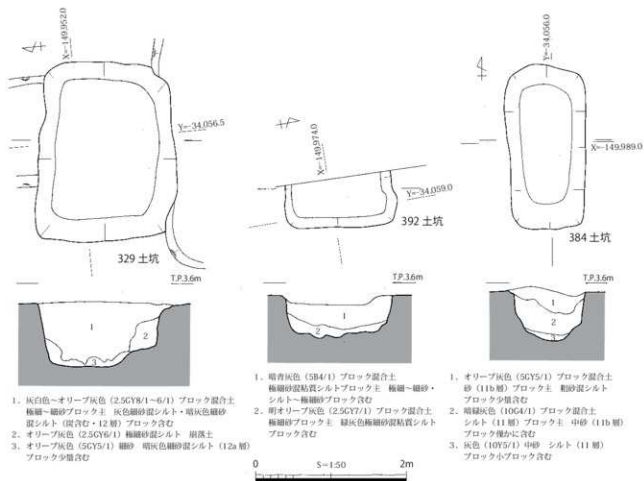
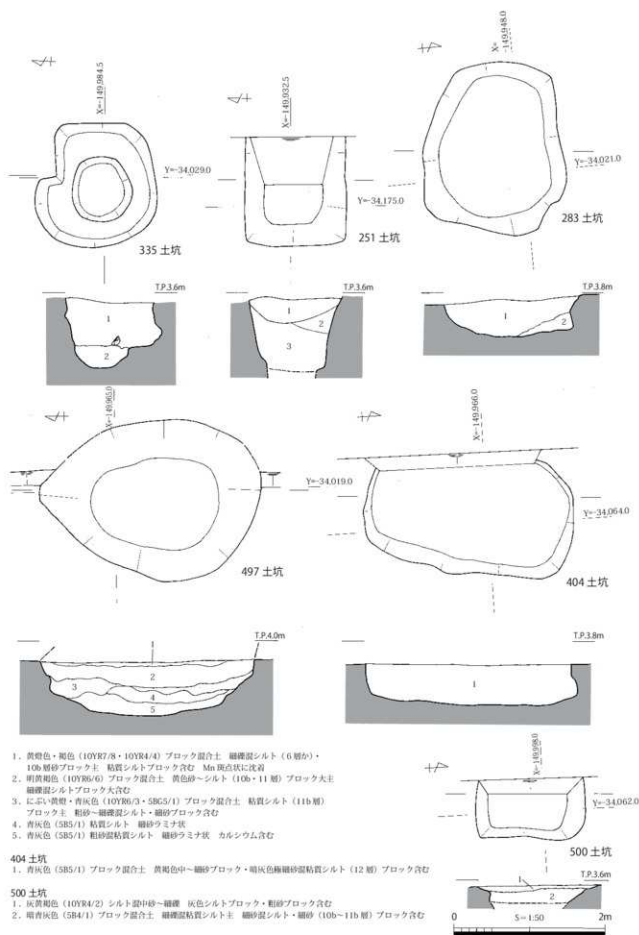


図47 329・392・384方形土坑 平・断面図



写真11 251土坑 断面 (西から)



1. 黄褐色・棕色 (10YR7/8・10YR4/4) ブロック混合土 細礫混シルト (6層)・10b 粗砂ブロック主 粘質シルトブロック含む Mn 灰点状に沈着
2. 明黄褐色 (10YR6/6) ブロック混合土 黄色砂-シルト (10b・11層) ブロック大主 細礫混シルトブロック大含む
3. にがい黄褐色・青灰色 (10YR6/3・5B6.5/1) ブロック混合土 粘質シルト (11b層) ブロック主 粗砂-細礫混シルト・細砂ブロック含む
4. 青灰色 (5B5/1) 粘質シルト 細砂ラミナ状
5. 青灰色 (5B5/1) 粗砂混粘質シルト 細砂ラミナ状 カルシウム含む

404 土坑

1. 青灰色 (5B5/1) ブロック混合土 黄褐色中-細砂ブロック・明灰色極細砂混粘質シルト (12層) ブロック含む

500 土坑

1. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト部中砂-細礫 灰色シルトブロック・粗砂ブロック含む
2. 暗青灰色 (5B4/1) ブロック混合土 細礫混粘質シルト主 細砂混シルト・粗砂 (10b-11b層) ブロック含む

図48 335・251・283・497・404・500方形土坑 平・断面図

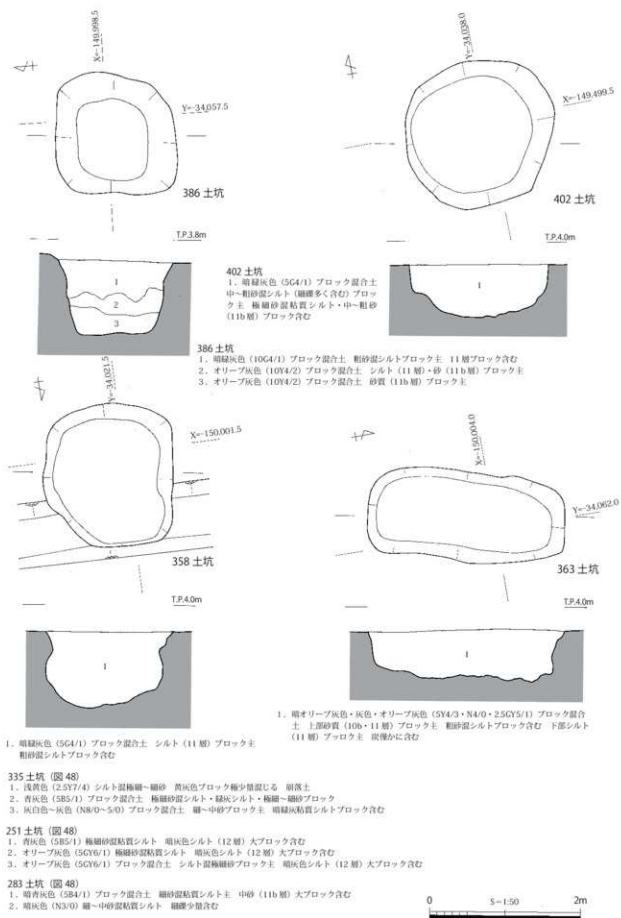


図49 386・402・358・363方形土坑 平・断面図

水田作土層は下層を大きく攪拌しており、更に水田面は低くなっている。なお、二十一ノ坪北半でも下層の露出状況から鳥島の存在が推定できる。鳥島が拡大したことによってその上部も鳥として有効に利用できたものと考えられる。ただ、やはり水がかり的に問題があるのであろうか。鳥島を囲むように、方形土坑が掘削されており、おそらくは水溜であり、鳥島に対しての簡易な灌漑施設と考えられる。5面以降、標高的に高い東側に鳥島を残し、西側の水田を大きく広げている。この際、6-1a面の鳥島があった部分を挟むように畦畔が作られており、当初の地割を踏襲していることが分かる。

7・8層の認識

7a層は先に述べたように一部分でしか遺存していないが、X=-149.990ライン付近で東西40mの間で0.4mの比高差があり、西に向かって下降している地形が復元できる。また、南北でみると、北に向かって低くなっている。全体として北西方向に向かって標高を減じる地形であったと考えられる。7a面では遺構は検出できなかった。

7層は6層に比して粗砂～細礫を多く含んでおり、粗い印象を受ける。当調査区の西側に位置する97-3調査区の状況を見ると、8面の坪境溝が7b層（粗砂）で埋没している。11世紀末～12世紀頃の瓦器碗が溝直上の7b層から出土しており、8面の廃絶時期はこの時期に求められている。7b層は広範囲にみられるものでなく、坪境周辺に限られているようであり、これを芯にする7a面の東西坪境畦畔も西にいくほど、低くなっている。当調査区では、坪境畦畔の下部に7層は遺存していたが、8面の東西坪境溝は検出できなかった。二十一ノ坪南半の6-2-2a面の鳥島下面に遺存する7a層は粗く、坪境溝からあふれた7b層をベースにしていると考えられる。一方、177鳥島下面では、同様な粗い層はみられず、粗砂を僅かに含んだシルト層となる。上面はT.P.3.8mを測る。坪境から離れるほど細粒となったものと考えられる。先述したように、4a層から6層は7層以下の層を攪拌しており、10面で微高地であった部分では鳥島基部以外、8～10層は残らない。調査区北東、北西は10面段階の低地部であり、6-1a面以降、平坦化に向かうが、低い部分では下層が遺存していることが考えられた。この範囲では6-1a面以下はシルト質であり、先の7a層とは土質が異なっていたため、7層は遺存せず8・9層に相当すると判断した。シルト質土のうち上層の8層は9層に比して暗色な灰色で、砂粒を含んでいる。なお、北西側で8層上面はT.P.3.5～3.6mを測る。

だが、8層に関しては問題も残る。177鳥島下部の7a層としたものは8層に似通っていること、北半で8層とした土層からは細片ではあるが12～13世紀の遺物が混じっていることである。また、8層下面で検出した遺構群（図51）は、既往の調査の二十一ノ坪においても検出されているが、西側に位置する97-3調査区では7層下面遺構と、北接する02-1調査区では8層下面遺構とされていることである。この点に関しては、02-1調査区では、溝の切り込みが8層上部では分らないが途中までは立ち上がりが見えるものもあるとの指摘があり、97-3調査区で溝を検出した部分は7層が遺存せず8層も上部が削平されていることから、溝群の帰属は8層中として矛盾しないと考えられる。ただし、8層の遺物の混入は問題として残る。薄い作土の連続であり、上層の踏み込みなどによる混入や、これまで指摘されているように7層堆積中に起きたとされる地震の影響も考えられる。もう一つの解釈として、7b層の堆積自体が薄く、8層と7層が細分できない可能性である。当調査区では上層が連続しておらず、この点に関しては解決できなかった。課題は残るが、低地部分に遺存している点を重視し8層として報告したい。

第7a面 (図46)

9面検出遺構のうち、先の分類の4は7a層下面遺構と考えられる。図46の6-2-2a面鳥島の下部で検出した遺構で、この範囲は7a層が残っていた範囲に重なる。

溝(図46・52) 幅0.3m程度の東西方向に平行する溝を検出した。調査区東側の334鳥島下部で最も良好に検出した。溝の深さには若干ばらつきがあり、5～10cmを測る。埋土は7a層とほぼ同じである。

406・410・413・417・463溝などは分断されているが、本来は東西方向に長い溝であったと推測できる。398溝をはじめとして南北方向の溝も検出した。東西方向の溝を切っている。この溝は調査区断面にかかっており、7層上面付近まで溝の立ち上がりを確認できた。この他には328鳥島の下面では469溝をはじめとして南北方向の溝を検出している。469溝は467・360溝に先行していて規模も大きい。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトで細砂ブロックを含んでいる。

4とした遺構は以上であるが、二十二ノ坪では西半で南北方向に平行する溝を検出した。溝が検出できた範囲は6-1a面で鳥島であった下部である。溝はいずれも浅い。埋土が7a層に似て、比較的粗いことから、7a面下面遺構と考えられる。328鳥島下面は遺構が密集しているため、7層が不明瞭ではあったが、7層除去面と6-2-2a層除去面とさほど高さが変わらず、約T.P.3.8mを測る。そのため、7層下面遺構がこの範囲にも残ったものと考えられる。

7a面の坪境畦畔は6層までに削られており、6層坪境畦畔の下部で7層が遺存していた。ただし、207鳥島の北側の辺を延長したラインと坪境のラインにかなりずれがあり、本来の7面の坪境畦畔を示していないと考えられる。この7層を除去した部分で、約4mの幅で畦畔が途切れている部分を検出した(387土坑・写真12)。底部では南北方向に平行する溝を2条検出している(411・412溝)。この溝は土坑の埋土に類似しており、灰色シルトブロックを比較的多く含んでいる。遺構の性格についてはよく分からない。7層下面で検出したものの、6-2-1a面の325・322鳥島間の延長に位置しており、これに関連した遺構である可能性が考えられる。坪境周辺をみると、土坑の北側約5mで礫が数点まとまって出土している。この位置は184鳥島の西端の延長に位置しており、繰り返になるが二十一ノ坪の東西半分の位置にあたる。これまでの調査でも、坪境付近に拳大～人頭大の礫が出土しており、地割の目印ではないかとの指摘がなされている。时期的には新しいが、2面の水口の状況から、坪境付近に出土する礫の一部は水口に関連したのも含まれている可能性も考えられよう。

第8面 (図80)

二十一ノ坪北半には先述のように、6-1a層除去面を8面として調査を行った。6-1a面で検出した下層の露出範囲は8層ないしは9層が露出したものであり、8面では高まりとして認識できるようになる。201高まりは8層がすりついていることから8面でも畦畔であると考えられる。10面の地形を反映して、中央付近では11b層が露出するなど、下面の遺構がすでに露出している。上部は削平されていることから、本来は更に高低差があったものと考えられる。201高まり以外については、地形的な凹凸と6・8層が非常に薄いことから8層がすりついているのか判断できない。314高まりの北側で320溝状土坑を検出した。幅2m前後、深さ0.1mを測る。土坑は9面で掘削したが、8面でも既に遺構の輪郭が見えており、埋土も6-1a層に類似する。二十一ノ坪南半の溝群Aと類似したものと考えられる。

調査区東側では南北方向の下層の露出が確認できた。擬似畦畔であると考えられる。この範囲は(写真13)でみるように中～粗砂が帯状に点在することから、調査当初は11b層が露出しかけていたと考え

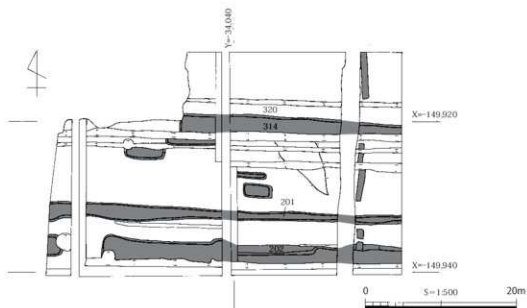


図50 第8面 遺構平面図

ていたが、実際には下面に溝が位置しており、その一部が見えていることが分かった。この溝については次節で詳細を記すが、下層が露出していることに変わりはなく、8面の擬似畦畔と考えられる。8層を除いた9面では東西方向の平行する溝を多く検出しているが、擬似畦畔上部では、東西方向の溝がすでに露出していた。擬似畦畔以外の8層上面ではこの溝の延長が検出できないことから、下層が露出した擬似畦畔であるといえる。

第9面 (図51)

多くの溝を検出した。先述の5にあたる。溝は東西方向に平行するものが多く、これに先行して8面の擬似畦畔付近を南北にはする溝、斜め方向にはする溝がみられた。若干ばらつきがあるが、幅0.3m前後を測るものが多い。この中で規模の大きな溝を2本検出した。

242・243溝 (図52) この溝は東西方向に平行しており、溝間の距離（溝の端から）は約3.5mを測る。いずれも調査区西端から15m・14mの東で一段浅くなり、調査区中央の側溝より先には続かない。幅は1.1mを測り、深さは0.25～0.3mを測る。埋土の上層は8層が落ち込んでおり、下層は青灰色の粘質シルトである。242溝の最下層は細砂を多く含んでいる。



写真12 387土坑 検出状況 (南東から)



写真13 8面 擬似畦畔 検出状況 (北から)



図51 第9面 北側遺構平面図

東西方向の溝群は幅0.3m前後を測る。調査区の端から端までのびる溝と、途中で短く途切れるものがある。226溝などは底が深い部分が途切れながら直線的に並んでいる。312・229・233溝なども同様のものであろう。この溝は西端には延びない。一方、直線的に調査区をのびる溝は228・230・231・232溝などである。以上の溝は8層下面遺構と考えられる。

溝の分布をみると、242・243溝間、及びその東延長部分では溝はみられない。242溝より北側でも密度は薄い。また溝が途切れる部分がちょうど、二十一ノ坪の東西半分的位置にあたる。南半の水田下面でみられた鋤溝とは異なり、掘り込みはしっかりとしており、畝に関連する耕作痕と考えられる。

東西方向以外の溝では南北方向に平行する257・341溝がある。この溝は東西方向の溝に先行している。溝の上部は8面の畦畔であり、地割に関連する遺構であると考えられる。

249溝は南東—北西方向に斜めにのびる溝である。途中で東西方向の237溝と繋がる。249溝は幅0.4

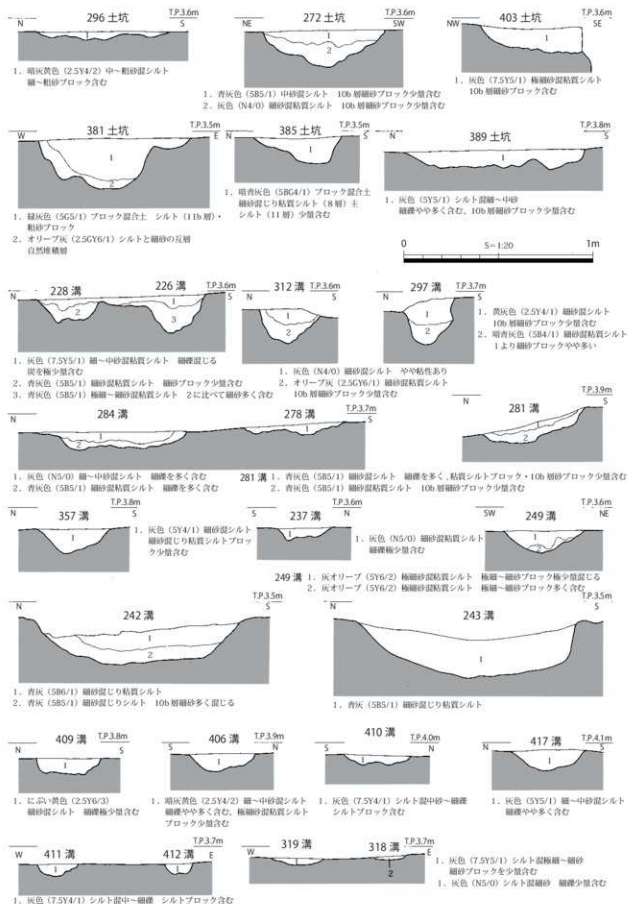


図52 第9面検出 (7層下面・8層下面) 土坑・溝断面図

m、深さ0.1mを測る。237溝はこれよりやや規模が小さく、幅0.3m、深さ0.1m以下である。埋土は他の溝より暗い灰色の粘質シルトである。249溝が位置するのは10面の微高地2緑辺にあたり、9面でも溝から北東側に向けて僅かであるが低くなっている。9層の遺存状況が悪く、微高地部分では既に10層以下が露出している状態を考えれば、もう少し高低差があったと考えられる。地形に沿った溝であり他の溝とは区別できる。微高地と低地部を画する溝と考えられる。この溝と切り合い関係にある東西方向の溝の全てに先行しており、繋がる237溝は南北方向の257・341溝を切っている。このことから、時期幅は不明であるが、少なくとも3時期はあることが分かる。257・341・249・237溝は埋土が8層とは異なっており、東西の溝群より先行することから、9層に関連する遺構である可能性が高い。

なお、10面の微高地2ではピットを多く検出している。これらの遺構は10層に関連すると判断した。しかし、その中の1基は10世紀中頃の土器埋納ピットであった。8層下面遺構としてここで記述する。**418ピット** (図53・図版9-2) 直径0.25mの円形を呈し、深さは約0.1mを測る。ピット内からは口縁部を上にして、ほぼ完形で復元できる土師器碗 (図57-13) が出土した。土器埋納ピットと考えられる。10世紀中葉の時期が与えられる。

9面は古代に比例されているが、古代の遺構は次の10面で下面検出遺構として確認した。これについては、次の節で述べることとする。

出土遺物 (図54~58)

6~9層から出土した遺物についてここにまとめて記述する。先述したように、6層は以下の層を大きく攪乱しており、そのため、下層の遺物を比較的多く含んでいる。また、8・9層出土の遺物は全体として少なかったが、上層の破片と接合する個体も多い。鳥島盛土、溝状土坑などからも下層の遺物が多く出土している。上下層が接合した個体については原則、下層に帰属させた。

図54・55は6層から出土した遺物である。

図54-1~3・6~9は土師器皿である。6は口縁部が大きく開くものである。4・5は瓦器皿である。10~15は輸入陶磁器である。10~13は青磁碗。10・11は同安系青磁碗である。12世紀中頃~後半。13・14は白磁碗である。13は11世紀後半~12世紀前半。15は壺である。接合しないが、同一個体と考えられる。16~26は瓦器碗である。16~21は器高が低く、13世紀後半、22~26は内面のミガキも比較的密で、前者より器高も高く、12世紀末~13世紀前半の時期が与えられる。22・23は体部外面にもミガキを施し、この中では古層を示す。24・25は体部外面の指頭圧痕が目立つ。24・25・26は見込みに平行線状暗紋を施す。27は土師器皿である。底部に糸切り痕が残る。28~32・34は土師器羽釜である。33は瓦質羽釜である。35~37は瓦質挿鉢である。38~42は須恵器鉢である。40は口縁部内面に沈線がめぐる。12世紀末~13世紀。

全体的な傾向としては、碗・皿類では瓦器皿や瓦器碗が多く出土し、瓦器碗は12世紀末~13世紀のものがみられる。また、輸入陶磁器もみられる。大形品では、5層と比して須恵器鉢が目立ち、瓦質土器は挿鉢、羽釜がみられる。羽釜は図化できるものが少ないが、13世紀~14世紀前半の土師器羽釜が出土している。河

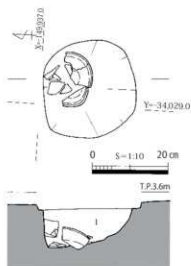


図53 418ピット 平・断面図

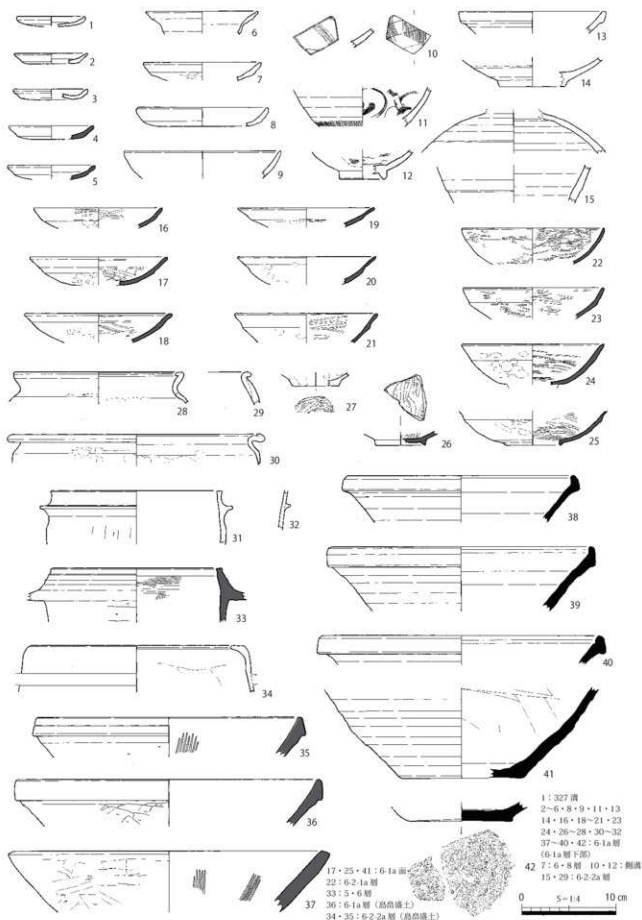


図54 第6層関連出土遺物(1)

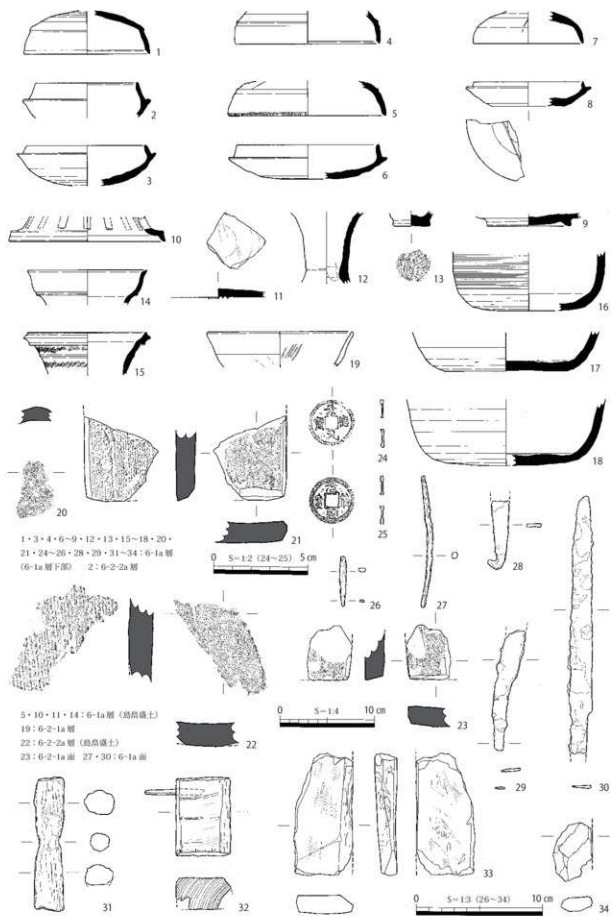


図55 第6層関連出土遺物(2)

内型、大和型、山城型?とバリエーションが豊富である。瓦質採録は14世紀後葉～15世紀前半と考えられ、出土遺物の中では時期的に新しい。

図55-1～18は須恵器である。1～8は須恵器蓋坏である。5の口縁端部には刻みが施される。7の天井部、8は底部にはヘラ記号がみられる。8の底部外面はヘラオコシ後未調整。1・2はTK47～MT15型式。3・4はTK10型式、5・6はTK43型式の特徴を有する。7・8は飛鳥I式。9は高台付坏の底部である。

10・11は硯である。10は小片ではあるが、円面硯の脚部である。11は須恵器坏蓋の転用硯である。つまみは欠損している。12は長頸壺頸部である。13は小形の壺底部である。底部外面に回転糸切り痕が残る。14は甕口縁部、15は壺口縁部である。端部は断面四角形を呈し、頸部には波状紋を2段に施す。16～18は壺底部である。16は体部下半をヘラケズリ調整、上半はカキメを施す。平砥底部か。

19は土師器杯である。内面に放射状暗紋を施す。小片につき、直径・傾きとも不明。8世紀か。

20～23は瓦である。20は丸瓦、21～23は平瓦である。平瓦は凸面には縄目タタキが、凹面には布目が残る。22は布面がほぼすり消される。凹面に摸骨痕と考えられる凹凸があり、古相を示す。

以上の遺物は下層からの巻上げによるものであり、特に須恵器の出土が目立つ。蓋坏はTK47～飛鳥I式のものまで含んでおり、14～18も同時期のものと考えられる。古代の遺物も出土しており、硯や22の平瓦などが注目できる。

図55-24・25は銭貨である。24は「景德元宝」で初鑄は1004年、25はつぶれており、判読しにくい「元祐通宝」か。初鑄は1086年である。26～30は鉄製品である。26・27は釘。28は鉄鎌の基部か、29・30は刀子である。31・32は木製品である。31は木錘である。32は用途不明品。角材に木釘がうたれている。33・34は石製品で砥石である。図化していないが、6層を中心に先端が炭化した棒状の木片が出土している(図版13上)。特に丁寧な加工がさえていたわけではなく、棒状のもので、太さ、大きさはほぼ似通っている。火をつける為の棒と考えられる。樹種はヒノキ、マツ料が多い(表11)。他にウマ臼歯が出土している。また、6e地区6-1a層下部からヒトの大腿骨が出土した。周囲には関連するような遺構はない。

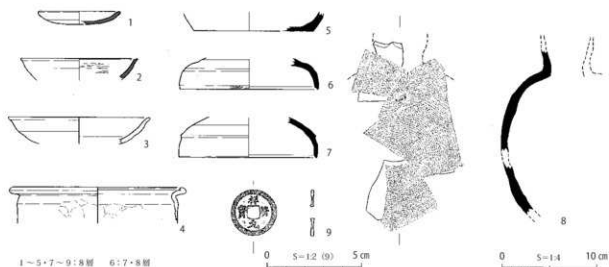
図56は7・8層から出土した遺物である。6は7層から出土、他は8層からの出土である。1は瓦器皿。摩滅が著しく、調整は不明。2は瓦器椀で口縁端部内側に段をもつ。3は土師器皿。胎土は緻密である。摩滅が著しく調整は不明である。4は土師器羽釜。5～8は須恵器である。5は壺底部片である。6・7は坏蓋である。6は口縁端部に刻みを施す。6・7とも天井部との境は凹線状になっている。8は提瓶である。腹面にはカキメ調整を施す。腹面は丸みを帯びており、新しい様相がみられる。接合した破片は広範囲に及んでいる。6～8はTK10～MT85型式の時期が与えられる。9は銭貨で「祥符元宝」である。初鑄は1009年である。

8層からは遺物の出土は少なかったが、1・2・4など12～13世紀代の遺物が混じっている。

図57は9面で検出した遺構出土の遺物である。前述のとおり、6～9層に帰属するものが含まれており、遺物の時期も多岐にわたる。

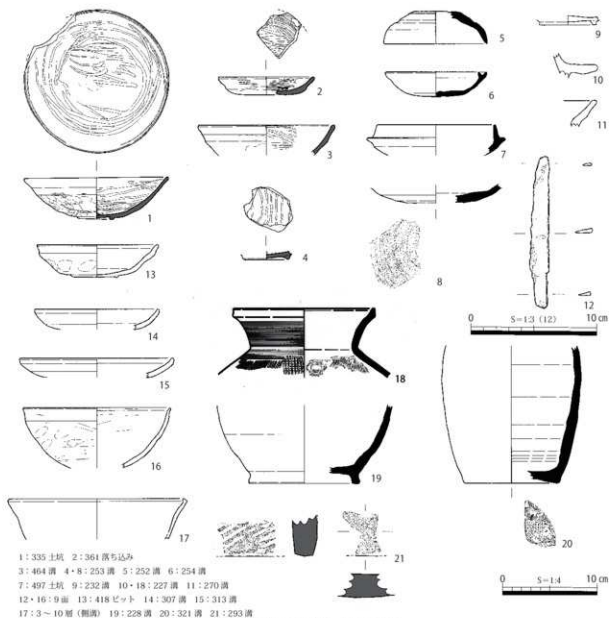
1は335方形土坑から出土した瓦器椀である。見込みには平行線状の暗紋を施す。外面は指頭瓦痕が著しいがわずかにミガキがみられる。12世紀末～13世紀初頭の時期が与えられる。

7は497方形土坑より出土した須恵器杯身である。下層の巻上げである。4～6・8・15・21は溝状土坑から出土した遺物である。4は瓦器椀底部片で、見込みには螺旋状暗紋を施す。5・6・8は須恵



1~5・7~9:8層 6:7・8層

図56 第7・8層関連 出土遺物



1:335土坑 2:361灰土込み
 3:464溝 4・8:253溝 5:252溝 6:254溝
 7:497土坑 9:232溝 10・18:227溝 11:270溝
 12・16:9面 13:418ピット 14:307溝 15:313溝
 17:3~10層(側面) 19:228溝 20:321溝 21:293溝

図57 第9面関連 出土遺物

器蓋環。5・6は飛鳥Ⅰ～Ⅱ式、8はTK209型式か。8は底部外面にヘラ記号がみられる。15は土師器皿。21は平瓦である。凸面に平行タタキ、内面に布目が残る。11・14・20は6層下面の溝から出土した遺物である。11は土師器甕口縁部、14は土師器皿である。20は須恵器壺。底部外面に回転糸切り痕が残る。

3は7層下面の464溝から出土した瓦器椀である。

9・10・18・19は8層下面の溝から出土した遺物である。9は黑色土器A類の底部、10は土師器羽釜である。18・19は須恵器である。18は甕で、体部外面にはタタキを施し、口頸部から体部上半はカキメを施す。TK10型式前後。19は壺底部で、高台がつくものである。

13は9面418ピットから出土した土師器高台付椀である。外面の指頭圧痕が著しい。10世紀中頃の時期が与えられる。

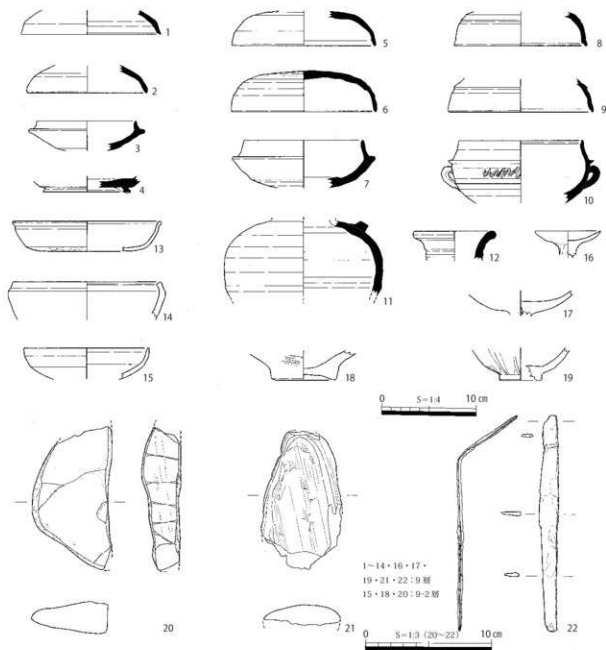


図58 第9層関連 出土遺物

12・16は9層上面で出土した。12は鉄製品刀子である。16は土師器椀である。器高が高い。外面は指頭圧痕が明瞭に残る。

7は側溝から出土した遺物である。土師器杯。摩滅が著しい。2は調査区南半で6層が混じっている部分を361として再度掘削した際に出土した瓦器皿である。ヘラミガキを密に施す。

図化した以外にも、8層、8層下面遺構とした遺構からは瓦器片も細片ではあるが、出土している。図58は9層出土遺物である。

1～12は須恵器である。1～3・5～9は蓋坏である。8・9は天井部と体部の境界が沈線状ではあるが明瞭で、5・6では不明瞭となる。2はTK209型式、3は飛鳥Ⅰ式、5・6はTK43型式、7～9はMT15～TK10型式の特徴を有する。10は須恵器有蓋高杯である。把手が付くもので、体部に波状紋を施す。細片であり、把手が両側に付するかは不明である。TK23型式。11は須恵器壺体部片である。上半部の自然軸の付着が著しい。また須恵器片が窯着している。12は須恵器壺口縁部である。13～15は土師器である。13は杯である。8世紀後半。14は口縁部が内側に屈曲し、端部は面を有する。16はミニチュアの高杯、17は土師器高杯である。18は弥生時代後期甕底部片である。19は青磁碗である。上層の遺物が落ち込んだものと考えられる。

20は砥石である。側面が砥面で、よく使用されている。21は結晶片岩で、用途不明。石棒か。22は刀子である。先端が折れ曲がっている。

6層から9層の遺物は下層の遺物が多く含まれており、特に古墳時代後期後半の遺物が多く出土している。また飛鳥Ⅰ・Ⅱ式の遺物も比較的多く、8世紀代の遺物も出土する。当調査区では10-1a層の遺存状況が悪く、9層の上限、10-1a層の下限は明らかにし得ないが、既往の調査成果より、前者は下層巻上げ遺物、後者は9層の年代の一点を示す遺物と考えられる。なお、黒色土器の出土は非常に少なく、1点が図化できたのみである。

小結

第9面では多くの遺構を検出し、埴塚面についての検討を行いながら6～9面の状況を見てきた。非常に錯綜してしまっただが、3～9面についてここで簡単にまとめておきたい。

まず、7a層下面・8層下面検出遺構として東西方向の溝を多数検出した。これらの溝は畠に関連する耕作溝と考えられ、8層の認識には問題が残るが、7・8面では水田ではなく、もっぱら畠として利用されていたことが分かる。この段階では二十一ノ坪・二十二ノ坪は、ともに東西方向の地割である。南半では東西の溝をきる南北方向の溝を数条検出しており、7面では当初、二十一ノ坪全域は東西方向の地割を基本としていたものが、南半では南北方向に変化したことが分かる。北半では8面で畦畔（擬似畦畔）を検出していることから、二十一ノ坪の中でも、地形的に低い北側で先行して水田が作られたと考えることができる。こういった開発段階の違いが坪内の地割の違いとして現れたものだろう。既往の調査をみても、7・8面に関連して同様の溝群が検出されており、水田開発が遅れている部分をみる事ができる。いずれも10面の微高地に位置しており、地形的に高く水がかりが悪いこと、7層までの堆積が薄いことから、地形の凹凸が解消されていないことにその要因が求められよう。北半では斜め方向の溝を検出した。上記の溝に先行することから9面に関連する溝の可能性が考えられる。この溝は10面の微高地2の縁部に沿っており、地形に即した溝である。なお、10世紀中頃の土器埋納土坑を1基検出した。この時期は表層の「糸里型地割」施工期に近く、既往の調査でも埋納遺構が多くみられる。

7面から6面に至る段階は非常に重要で、畠として使用されていた南半でも水田開発が行われる。既往の調査をみても、7・8面で見たような溝群はみられなくなり、全城で水田化が推し進められたと考えられる。水田として利用するためには、地形の凹凸の解消が必要であり、6-2-2a面でみられた大畦畔的な島畠がつくられた。これまで、池島I期地区では島畠は5面以降確認されており、氾濫堆積物の堆積を契機に島畠が拡大していく景観が復元されている。こういった災害を契機とした造成ではなく、水田確保のための土地への積極的な関わりとみることができる。6-1a面の景観は一見、島畠が卓越しているようにみえるが、その目的は、大きく溝を掘削し、溝を周囲の水田面をならしながら、埋めることによって、水田面を平坦にすることにあり、その際の掘削土を島畠に盛り上げる。当然、島畠上面も、畠として十分に利用されたものと考えられる。地下げの結果、島畠で囲まれた水田の比高差も解消に向かい、5面では二十一ノ坪西側の島畠、二十二ノ坪南側の島畠を水田に変更し、二十一ノ坪北半では全面が水田となっている。二十一ノ坪北半では詳細は不明だが、6面で疑似島畠を検出しており、先行して水田化したものの、南半と同様の開発が行われたと推測できる。その後は2-4b層の堆積まで、当調査区では大きな変化はみられない。I期地区では3層の各段階に、氾濫堆積物を芯にした島畠の造成が行われている状況がみられる。当調査区では3層の氾濫堆積物の供給が少なく、前節で触れたように、2-4b層「2-5b層」の堆積によって島畠が造成されている。

ここで出土遺物についてまとめると、耕作土である3層から6層ではいずれも細片で遺物の出土自体少ない。また、出土した遺物も4層以下、特に6層からは、古墳時代後期後半から7世紀の須恵器が多く出土している。このことは再三述べているように、4層以下の層は下層を攪拌して形成されていることによる。特に古墳時代後期は遺物を包含するプライマリーな層は遺存しないもの(10-1層)、多くの遺構が検出されており、上層への遺物の混入も目立つと考えられる。また、中世の各耕作土は近似した連続する土層であり、5・6層などは層厚5cm前後のところが多い。そのため、上層との掘り分けが厳密にできない部分や、あるいは踏み込みなどによって上層の遺物の混入が避けられない部分があった。よって個々の遺物では耕作土の時期を考えにくい。しかし、出土遺物を概観することによってある程度の傾向がみられた。3-2層で比較的多く出土した底部が小さく、口縁部が大きく開く土師器皿は4層ではさほど差は見られないが、5層では底部が大きくなる変化がみられる。6層ではこういった土師器皿はほとんど出土しない。瓦器椀は6層では出土量も多く、12世紀後半～13世紀のものが出土している。5層からも出土しているが、器高が低く、内面の暗紋は渦巻状で新しい特徴を有している。大形品では6層では須恵器東播系鉢の出土が特徴的で、5層でも須恵器鉢は出土するが、瓦質の播鉢が中心となっている。6層では島畠の盛土で瓦質播鉢など新しい遺物が混じる傾向が見られ、肩部の拡張など、上層と掘り分けられなかったことが要因の一つと考えられる。4層では瀬戸・播鉢の出土がみられた。羽釜、甕は出土しているが、細片で図化できない資料が多い。その他、各層から輸入陶磁器が出土しているが6層での出土が目立つ。6層は上層の遺物の混入を一定認めれば、13世紀を中心にその前後、3層は16世紀～15世紀後半と考え、その間の4層は15世紀、5層が14世紀から15世紀前半を中心とすると概ね考えられる。その他、鉄製品は鎌、釘、刀子、石製品では砥石の出土がみられた。

7～9層の遺物に関しては7・8層からは遺物がほとんど出土していない。先に触れたように8層には瓦器片などが混じっており、黒色土器はほとんど出土していない。9層は古墳時代後期～古代の遺物を含んでおり、古墳時代相当層である10層と一体化しているものと考えられる。

第3節 古代から弥生時代後期の調査

第10面

9層除去面を第10面として調査した。前述のように、7～9層の遺存状況が悪く、中世耕作土である6層除去段階において、すでに10b層、あるいは11b層が露出する部分も多く、10a層が遺存しない部分も多い。前節までで、中世に関連する遺構については述べてきた。ここでは10層に関連すると判断される遺構を述べることにする。10層は古墳時代の年代が与えられる。また10a層が遺存している部分では、古代の時期が与えられる9層下面遺構も検出しており、それも含めて述べることにする。

検出した各遺構の詳細に先だって、第10層に関する認識についてここでまとめておきたい。

既往の調査では弥生時代後期の時期が与えられている11a層が安定した土壌層として確認されており、第1黒色粘土層と呼称されている。しかし、今回の調査ではこれに対応する明瞭な土壌層は確認できなかった。当調査区で10-2a層とした土層は、北接する02-1調査区の11a層に相当する可能性が高い。そこでまず、11層と10層の層境について記すことにする。

第2黒色粘土層と呼称される第12a面廃絶後の堆積層である11b層は非常に厚い。この氾濫堆積物は、微高地を形成し、第11面以降の土地利用に大きく影響を与えている。微高地間の低地部分ではシルトを主体とした堆積が見られ、湿地状を呈していたと考えられる。この段階で調査区周辺は安定した環境となり、11a層「第1黒色粘土層」が形成され、既往の調査では低地部を中心に水田が広範囲に検出されている。当調査区では、同様な安定した土壌層は確認できず、その後、655流路（図84）が調査区中央を東西に横断する。この流路を中心に土砂が堆積して流路上面は微高地化し、周囲の低地部分を埋める。11b層の堆積はこれによって形成された微高地の方向、また第12-1a面の削平された状況を見ても南東から北東方向を指向しており、655流路とはその方向が異なっている。また、655流路が11b層による微高地を削って横断している箇所もみられる。このことから、655流路を起源とする氾濫堆積物を11b層より上層に位置づけ10b層と判断し、これを母材とした土壌層を10a層と考えた。

次に10a層についてみていくことにする。10層は、I期地区の成果をみれば、低地部分では細分されている。しかし、それぞれの母材となる氾濫堆積物は周辺一帯に大きく広がるというより、低地部においてわずかに確認できるのみであり、微高地上では前述のとおり、土壌自体が遺存しないことも多い。そのため、微高地を挟んだ低地間の層序対比や、微高地上の遺構の帰属時期の想定が困難なものになっている。加えて、各層が遺存していても薄いことも遺構面の把握を難しくしている。I期地区の本報告でも、10層の細分層の対応に関しては、慎重にならざるを得ないとしている。小規模な氾濫堆積物が一様に遺構面を更新させたとは考えにくく、ある部分では更新され、ある部分では継続して使用されている状況が想定できる。しかし、新たに更新された遺構面が継続している土層とどのように対応するのか、ある程度は推測できよう。ここでは10層の細分層に関して、I期地区の東側の成果を再度考えてみた。概要報告書をもとに各調査区での10層をみると、大きく3層に細分可能と考えられる。弥生時代後期末～古墳時代初頭を中心とする層（A）、古墳時代中期（布留式期Ⅲ・Ⅳ）を中心とする層（B）、古墳時代後期を中心とする層（C）である。特に微高地を越えての堆積を検証するのは困難であると考えられたため、I期地区11面「微高地3」を境に南西側、北東側の低地部に分けて考えることとした。

南西側（98-2調査区、97-3調査区、96-1調査区南半）：第1黒色粘土層である11a層（以下11a層）の上面にb層を介して（A）層がみられる。その上部には（B）層がみられる。（C）層は上層の遺物出

土状況から考えて、おそらく9層と一体化していると考えられる。

北東側(97-2調査区、95-2調査区、96-1調査区北半、95-3調査区はほぼ微高地上なので省いた)：97-2調査区では11a層の上面にb層を挟んで(B)層がみられる。その上部にはb層(10-1b層)を挟んで(C)層が遺存する。これより南の2調査区では10層は1層のみで、9層との間のb層が97-2調査区の10-1bに相当することから(B)層である可能性が高く、(C)層は9層と一体化してしまっていると考えられる。(A)層は細分できず(B)層と一体化していると考えられる。更にここで注意すべきは、11a層との間にb層を介していない点で、11a層が10層(A)ないしは(B)に攪拌されている、あるいは一体化している状況も考慮しなければならない。96-1、95-2調査区では11面で時期の異なる畦畔が検出されており、1枚の遺構面に複数時期のものが現れる可能性は十分に考えられる。

今回の調査区の低地部1は北東側の低地部に連続する箇所であるが、1期地区の「微高地3」、「微高地4」を形成した11b層の流路は調査区に南接する05-2調査区では1本の流路となっており、当調査区南側で2本に分かれていることが推測できる。また、合流付近ではクレパスプレーによる高まりもあり(図94)、調査区南半は全体的に高くなっている。加えて、先の655流路による微高地が調査区中央付近を東西にのびるため、10a層と判断した土壌層はパッチ状に点在し、対応関係の把握が困難であった。まず、10a層相当層と判断できる土壌層は低地部1・2で確認することができる。低地部1の10a層は655流路の氾濫堆積物を母材としているため砂質が高い。低地部2では9層を除去した段階で黒褐色系のシルト質土がみられたため、これを10a層とし、低地部1と対応させた。鳥島下部では10a層が遺存している箇所があり、微高地1より北側に関しては、同一の層序と考えられる。10a層からは遺物の出土はほとんどなかったが、9層より上層では前節でもみたように、多くの古墳時代後期の遺物が出土している。古墳時代後期を中心とする土層(C)層は削られた結果、上層に混入したと考えるほうが自然である。以上のことから、この土壌層を10-2a層とした。北東で接する02-1調査区との対応関係を整理すると、当調査区の10-2a層は「11a層(第1黒色粘土層)」に9層が「9層」・「10層」にそれぞれ対応する。前者に関しては当調査区では10-2b層が及んでいない北東端では10-2a層が11a層を攪拌していると考えられる。後者に関しては、02-1調査区の10層は古墳時代後期を中心とするものであり、当調査区では9層との細分ができなかったと判断した。

微高地1・2では土壌層は基本的に遺存していないが、調査区西側、6-2-2a面の鳥島下部で、土壌層が確認できた。微高地1から南側に向かって、地形的に下がっており、土壌層は2枚に細分できる。10-1a・10-2a層とする。10-1a層は、微高地上では褐色系の砂質土で、暗色が強い部分がみられるが、この部分では10-1a層と10-2a層が同化してしまっていると考えられる。調査区南側では鳥島下部で10-2a層に対応すると考えられる明褐色細砂混じりシルト(調査区断面土層87)の上部に薄い砂層がわずかにみられる。687落ち込み(11面検出)上部の砂層に相当し、周辺には部分的にはあるが10-1a層とすべき明黄褐色シルト混じり細砂が遺存していた。なお、調査当初この10-1b層を10-2b層と判断してしまったこと、更に南東側の10-2a層を土壌層として認識できなかったことで層序の混乱を起こしてしまった。南東側の10-2a面は、10層下として調査を行っており、上層を10-1a層、下層を10-2a層と改めた。遺物についても南側で10b層とした遺物は基本的に10-1a～1b層の遺物と判断した。

10-1a層は先の理由により古墳時代後期を中心とする時期が与えられ(C)層と考えられる。10-2a層は(B)あるいは(A)層と考えられる。

第10-1a面 (図59)

10-1a層上面で検出した遺構は、溝、土坑、ピットである。上面で検出した遺構は9b層を挟まないため、9層下面遺構、あるいはそれより上層に関連するものを含んでいる。

調査区東側で南北方向に縦断する342溝を検出した。南側に接する05-2調査区でもこれにつながる「162溝」を検出しており、総延長170m以上となる。北側は現在発掘調査が行われており、更に溝が伸びることが確認されている。

342溝 (図59) 幅約1.2m、深さは0.15～0.3mを測る。溝の底面は南から北に向かって下降している。2区では333島島の肩部に位置しており、342溝の西肩はかろうじて10-1a面で検出できたが、溝の大部分は6層で攪乱されており、5cm前後の深さであった。207島島の下面、坪境畦畔、328島島下面では遺存状況がよく図60-B・Cに断面を示した。1区の8面で検出した擬似畦畔はこの溝の上部にあたり、溝埋土の一部が露出したものである。0.15m程度の深さであった。断面はAである。

溝の埋土は大きく3層に分けられる。まず、断面B・Cについて記す。下層は342溝の埋土で、中層はこの溝を切る342-2溝の埋土、上層は9層に類似した土層である。下層は更に2層に細分でき、(埋土8)は極細砂を主体としておりラミナがみられる。(埋土7)は(埋土8)に比して粗く、中～粗砂を主体としており、やはりラミナが確認できる。いずれも自然堆積層である。溝の底部には偶蹄目の足跡が確認できるが、断面をみると、(埋土7)と(埋土8)が同じように窪んでおり、(埋土7)堆積時の足跡であることが推定できる。(埋土8)は機能時の堆積層で、(埋土7)によって埋没したと考えられる。中層とした342-2溝埋土(埋土2～4)は上下2層に分けられ、下層(埋土4)は(埋土7・8)と似た粗い砂ブロックを多く含んで全体に砂質であり、加工時形成層と考えられ、342溝埋土が崩落したものと考えられる。上層(埋土2・3)は砂のブロックを含む細砂混じりシルトで、342-2溝が埋め戻されていると考えられる。断面Aの(埋土4)はB・C断面の下層(埋土8)に対応する。(土層3)はB・C断面の(土層7)にシルトが混じっており、342-2溝と一連の遺構埋土の可能性が考えられる。(土層1)は9面で検出した341・257溝の埋土である。

342-2溝は幅0.4m、深さ0.25～0.4mを測る。検出時には342・342-2溝が別の溝であることが分らず、2区の遺存状況が良好な部分を掘削した際に342-2溝とは別であることが分かった。そのため、342-2溝の輪郭は遺構の途中のもので、破線で示している。342-2溝が当初検出できなかった理由としては、最上層の埋土1上面では立ち上がりが検出できず、一連の溝埋土と認識してしまったことにある。2区の9面では359溝より北側で342-2溝を検出している。この部分は既に10層が露出している部分にあたる。342溝は多くの切り合い関係がみられ、さらに言えば、10-1a層を除去した段階で、ほぼ同じ位置に溝状の611土坑が位置しており、複雑であった。10-1a面より上面での変遷を考えれば、まず9面の古い段階に342溝が掘削され、流水堆積が見られることから、水路として機能していたと考えられる。溝はその後、粗～中砂で埋没するが、この堆積中に偶蹄目が溝の中を歩行していることが分かる。207島島下部、333、334島島下部では7層除去面のシルト質土を9層としたが、その下に更に砂礫が混じる土層が確認できる部分があり9-2層として掘削した。(土層7)が周囲にあふれたものをベースとしている可能性も考えられる。範囲が非常に限られているため、ここでは可能性を指摘するにとどめたい。この後、342-2溝が掘削されるが、この溝は人為的に埋められる(342-2溝が確認できたのは破線の範囲)。最終段階には北半では342溝の肩部に沿って浅い溝(341・257溝)が掘削されている。南側島島の下部では浅い溝状の窪みが9層相当層で埋まっている。1区北側では溝埋没後、8面で溝上部に畦畔

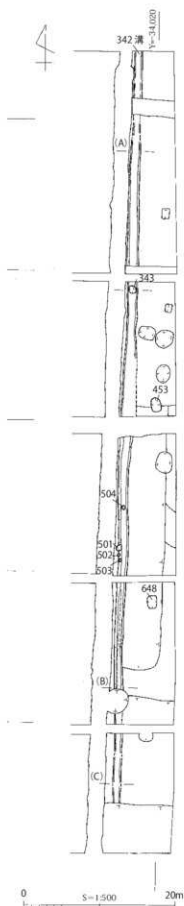


図59 第10-1a面 遺構平面図

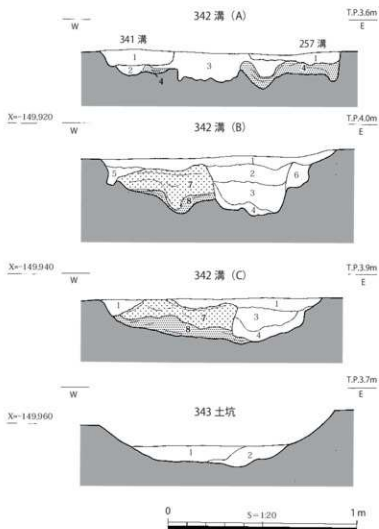


図60 342溝・343土坑 断面図

- 342溝 (A)
1. 青灰色 (S86/1) 極細砂混シルト 極細砂ブロック少量含む
 2. 青灰色 (S86/1) 細砂混シルト 1の踏込み
 3. 灰色 (7.5Y5/1) シルト混じり細砂 粗砂ブロック状に少量含む、極細～中砂のラミナ含む
 4. 青灰色 (S86/1) 細砂～シルト ラミナあり
- 342溝 (B・C)
1. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂混シルト 極細少量含む
 2. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト 極細少量含む、細砂ブロック少量含む
 3. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂混シルト 中砂ブロック少量含む
 4. 灰黄色 (2.5Y6/2) 極細砂混粘質シルト 3と8混じる
 5. 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂～中砂混シルト 中砂ブロック少量含む
 6. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂混シルト 細～中砂多く含む
 7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～粗砂 ラミナあり
 8. 淡黄色～黄色 (2.5Y6/4～6/6) 極細砂 ラミナあり
- 343土坑
1. 灰色 (5Y5/1) 細砂混シルト 細～粗砂ブロック多く含む
 2. 青灰色 (S85/1) 細砂混シルト 極細少量含む

が作られる。2区では8層が遺存していないため、8面の状況は不明である。

出土遺物（図61） 342溝からは比較的多くの遺物が出土したが、破片が多い。また、遺物の出土は10-2a面で検出した611土坑上部、微高地1に集中しており、下層の遺物が混入したと判断できる。よって、この中で最も新しい遺物が、溝が機能していた時期の1点を示すものと考えられる。なお、342溝と342-2溝の遺物は区別して取り上げることができなかった。1～8は須恵器である。1は坏蓋である。つまみ部分は欠損している。2は坏身である。飛鳥Ⅱ～Ⅲ式。3は高台付坏身の底部である。断面台形の高台が底部外側にハの字状に張り出している。4は坏蓋である。5～8は坏身である。細片で径、傾きに不安がある個体もある。4～8はMT15～TK43型式と考えられ、古墳時代後期である。下層の混入遺物と考えられる。9～13は土師器である。9・10は土師器杯である。摩滅しており、調整等は不明である。11・12は土師器皿である。11は口縁端部を強くヨコナデし、内面にはわずかであるが放射状暗紋が残る。12は口縁端部が肥厚するものである。細片で調整等不明ではあるが、8世紀の時期が与えられよう。13は土師器高杯の脚部である。14は丸瓦である。凹面に細かい布目が残る。胎土は密で、白色を呈する。古代のものである可能性が高い。

再三述べているように、7層以下の土層は4層から6層にかけての削平が著しく、島畠下部や、10面が地形的に低い部分でしか確認できない。このような条件であり、各層の広がりも十分に確認できないため、7～9層に関しては前述のとおり既往の調査との対応関係が困難な部分も多い。05-2調査区では342溝に繋がる162溝を瓦器椀や土師質の羽釜が出土したことから、中世期の遺構としている。溝の深さは0.15m未満で上層が削平された状況であり、わずかに出土した遺物より判断せざるを得ない状況であったと考えられる。条件が悪い中での遺構の帰属は困難ではある。しかしながら、1区の第9面で検出した東西方向の溝群との切り合い関係から、342溝が先出すること、同じくこの溝群より先行する微高地に沿って斜めにのびる溝にとりつく東西方向の溝よりも先出することから、少なくとも中世期の遺構ではないと考えられる。当調査区の出土遺物は、細片であり、年代決定するには心もとなない資料である。また、342溝、342-2溝を分けて掘削できていない点は、反省せねばならない。古墳時代後期のものは下層巻上げでと考えられ、8世紀代のものが溝の時期の1点を示すと考えられる。下面の611土坑

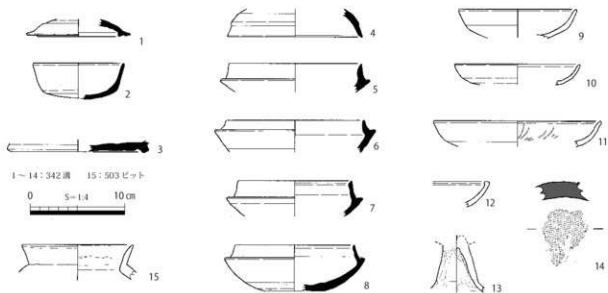


図61 342溝・503ピット 出土遺物

からは飛鳥時代の遺物も出土していることから、1・2の7世紀代の遺物に関しては、下層の巻き上げの可能性も考えられる。しかし、溝は繰り返し掘削されている状況もあり、7世紀代まで遡る可能性を指摘しておきたい。

表層の条里地割が施工されたのは10世紀前半、第8面段階であることがこれまでの調査で指摘されているが、第9面でこれに先行する7世紀代の正方位の地割の存在が指摘されている。その根拠となるのが福万寺1期地区で検出した「水路35」である。「水路35」は表層の条里地割に一致する坪境畦畔の西約20mの位置で南北に3町にわたって検出されている。また、「水路35」から約110m東で土器埋納遺構が南北方向に列をなしており、このことも根拠の一つとなっている（推定南北地割）。その後、置き石や銭貨の分布から旧地割に関する考察がおこなわれていたが、水路35以外には遺構として明確に地割を示すものは検出されていなかった。当調査区で検出した342溝は第8面の坪境畦畔から約20mに西に位置する南北方向の溝であり、坪境を越えてのびており、水路35と同様に旧地割の存在を示唆するものといえよう。なお、「水路35」までの距離は約447mである。ほぼ4町にあたることから、この地割が「条里型地割」である可能性を補強するものと考えられる。また、「水路35」は8面段階にも畦畔として存続しており、新しい地割導入後も併存している。同様に342溝も上部では8面の擬似畦畔を検出しており、その後、6-2-2a面の鳥冨もこの位置を踏襲しており、興味深い。

微高地1では10-2b層上面で8世紀初頭頃の土器埋納遺構を検出している。これに関しては次の10-2a面で述べることにする。

その他にピットを5基、土坑を2基検出した。

343土坑 (図60) 342溝底部で検出した土坑である。直径約0.8の円形を呈し、深さは約0.1mを測る。土坑から遺物の出土はない。

501土坑 (図62) 0.65×0.85mの隅丸方形を呈し、深さ0.45mを測る。埋土はブロック混合土で、人為的に埋め戻されている。

453土坑 (図62) 1.05×1.8mの隅丸方形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土はブロック混合土であるが、埋土2はあまりブロックが明瞭ではない。遺物の出土はみられなかった。

648土坑 (図62) 1.15×1.55mの隅丸方形を呈し、深さ0.48mを測る。10-2b面で検出したが、埋土に中世の作土層と類似した砂礫混じり細砂のブロックを含んでおり、6a層下面遺構とした方形の土坑と類似したものである可能性が高い。

501・453土坑も648土坑と同様、ブロック土で埋め戻されており、隅丸方形を呈し、規模も似ている。同様の土坑である可能性が指摘できる。

666土坑 (図62) は溝342の上面で検出した土坑である。直径0.7mの円形を呈する。深さ0.2mを測る。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトで、10-2a面で検出した周辺のピット、土坑とは埋土が異なっている。遺物の出土はみられなかった。

503・504ピット (図62) 溝342の上面で検出しており、これより後出する遺構である。503ピットは直径0.35mの円形を呈し、深さ0.15mを測る。504ピットは0.5mの円形を呈し、深さは0.1mを測る。503ピットからは土師器壺片が1点出土している(図61-15)。壺は口縁部が直線的のびており、先端は尖る。時期の詳細は不明である。501・648土坑・503・504ピットからは他に土師器細片や須恵器片などが比較的多く出土したが、いずれも細片である。10-2b面の611土坑出土遺物と接合するものもあり、下層の遺物が混入している可能性が考えられる。

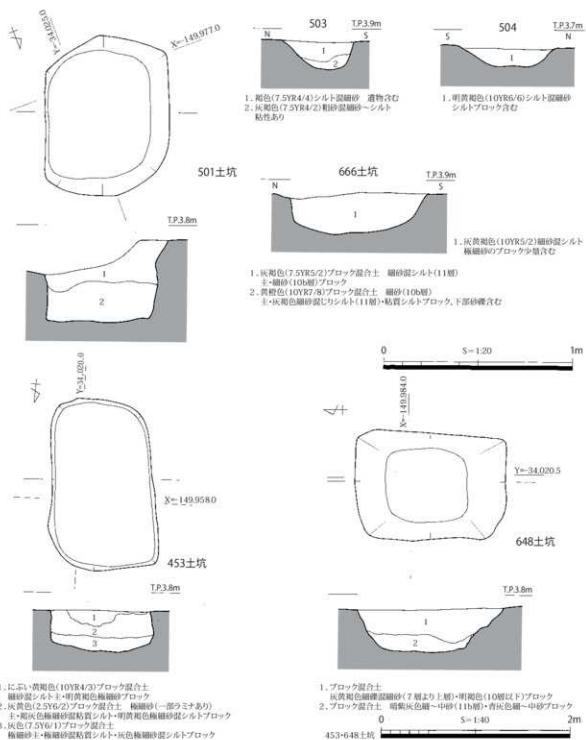


図62 第10-1a面 土坑・ピット・断面図

10-2a面 (図63)

10b層、及び11b層によって形成された2か所の微高地とそれに挟まれた低地部からなる起伏に富んだ地形を呈する。調査区中央に東西方向に位置する10-2b層による微高地を微高地1とし、調査区北半側で南東-北西方向に伸びる11b層によるものを微高地2とする。微高地1と2に挟まれた低地部を低地部1、微高地2の北東側を低地部2とする。調査区南側は全体的に高いが、微高地1に比して相対的に低い。微高地を中心に多くの遺構を検出した。しかし、微高地では6層、及び8層を除去した段階で10-2b層、あるいは11層が露出する状況であった。そのため、6層下面から10-2a層下面までの遺構が同時に検出されている。ただし、中世に関連する遺構に関しては埋土や、遺構の繋がりによって9面検出時に掘削しており、概ね9層下面~10-2b面の遺構が含まれていると考えられる。10-2a層が遺存するのは低地部1・2、及び、調査区南半である。部分的に残る10-2a層と分離すると全体の遺構の広がりが不明瞭となるため、図63ではまとめて図示し、10-2a層が遺存している部分(低地部1・2、6-2-2a面鳥島下部)に関しては下面で検出した遺構番号を斜体で表記している。

低地部1・2は10-2a層が遺存しており、T.P.3.3~3.4mを測る。微高地1・2は下層が露出しており、現状で3.4~3.55mを測る。微高地1のうち、10-2a層が残る鳥島の下部、調査区中央はT.P.3.6~3.7m、調査区東側はT.P.3.7~3.8mを測る。10-2a面で微高地と低地部は0.3~0.4mの比高差があったと考えられる。調査区南側は10-2a層が遺存する部分ではT.P.3.6~3.7m前後を測り、西側が低い。10-2a面では0.1m程度の比高差で高低差はさほどなかったと考えられる。6層で水田であった部分ではT.P.3.4~3.6mで下層が露出している。

1、微高地1

微高地1では調査区西側・鳥島下部で10-2a層が遺存していたが、他は10-2b層が露出する状況であった。また、中央付近では11層が一部露出している。ピット、土坑、溝など、集中して遺構を検出した。

7~8世紀の土器埋納遺構を3基検出した。10-1・2a層は遺存しておらず、9層下面遺構と捉えられる遺構である。

626ピット、529・622土坑 (図64・図版11-1・2) 626ピットは直径0.4m、深さ0.15mを測る。ピット内からはほぼ半分が割れた土師器杯が出土した。529土坑は直径0.5m、深さ0.35mを測る。土坑の埋土は2層に細分でき、上層は灰色細砂混じりシルト、下層は暗青灰色の細砂~シルトである。土坑底部付近で土師器杯が出土した。622土坑は上部が0.75×2mの細長い楕円形を呈し、下部は直径0.75mの円形を呈し、深さは1mを測る。当初は2基の遺構が切り合っていると考えていたが、埋没状況から一連の遺構であると判断した。土坑の埋土は2層に大分され、上層(埋土1・2)は細砂混じりシルトを主体としたブロック混合土で砂礫を含む。中層(埋土3・4・5)は暗青灰色~暗オリーブ灰色のシルト質土で比較的大きなブロック土を含む。下層(埋土7・8)は砂質土である。完形に近い土師器杯が土坑の壁に近い部分で出土した。埋土5上面付近にあたる。この他に土師器杯片など少量の遺物が出土している。この3基はいずれも完形に近い土器が出土しており、土器埋納遺構であると考えられる。

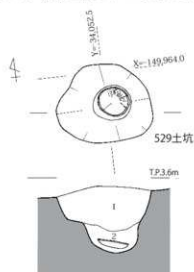
出土遺物 (図65) 1は626ピットから出土した土師器杯である。ほぼ半分が残る。内面に放射状暗紋を施す。2は529土坑から出土した土師器杯である。ほぼ完形である。内面に放射状暗紋を施す。外面下半は指頭圧痕が残る。3・4は622土坑から出土した土師器杯である。4は約3分の2残っている。口縁部の欠損(図版25)は打ち欠きの可能性が考えられる。内面は放射状暗紋を施しており、外面下半には指頭圧痕が残る。出土した土器はいずれも土師器杯で、杯Cに分類されるものである。8世紀初頭

图63 第10-2a面 遗構平面图

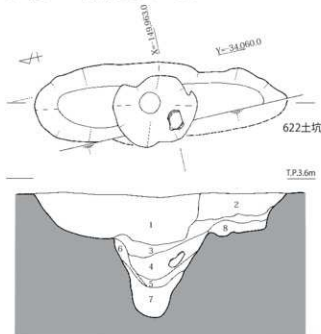
頃の時期が与えられる。

3基はいわゆる「土器埋納遺構」であり、その分布をみると、直線上に並んでいることが分かる。このラインはやや北に振った東西方向で、10面の微高地を形成した655流路の北の肩にほぼ沿っている。言い換えれば、微高地の高い部分に並んでいるといえる。同じように、これよりやや北に振ったラインで大形の土坑が3基並ぶように位置している。うち2基は、出土遺物から古墳時代後期～飛鳥時代の時期が与えられる。

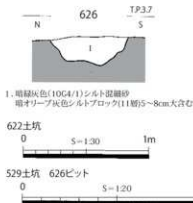
512土坑（図66） 直径約2mのやや形がいびつではあるが、円形の土坑である。深さは0.9mを測る。ベースが砂層であるため、土坑下半は肩が崩れている。そのため埋土下層には周辺のベース土がブロック状に流入している。土坑底部中央には人頭大の自然礫が置かれており、その下には須恵器環蓋が出土した（図版11-3）。環蓋は口縁部を上に向けている。口縁部は打ち欠きがみられた。土坑内からは他にも比較的多くの土器が出土した。出土遺物には時期幅があり、最下層で出土した須恵器は6世紀後半～末と考えられ、土師器はこれより新しく7世紀前半の時期が与えられる。土坑の掘削は前者の時期が与えられ、最終埋没までの時期差と考えられよう。他にモモ核が出土している。



1. 灰色(7.5Y5/1)細砂混シルト 細礫少量含む
2. 暗青灰色(SB4/1)シルト混細砂 遺物含む



1. 灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト～細砂・ブロック混粘土 上部粗砂含む
2. 灰色(7.5Y5/1)細砂混シルト 細礫やや多く含む 土器多く含む Mn沈着黄しい
3. 暗青灰色(SB4/1)極細砂混粘質シルト
4. 暗オリーブ灰色(SG5/1)細砂混シルト 細礫少量 極細～細砂混シルトブロック少量含む
5. 灰色(N4/0)極細砂混シルト 細礫少量 極細～細砂混シルトブロックやや多く含む
6. オリーブ灰色(SG5/1)極細砂 4のブロック少量含む
7. オリーブ灰色(SG5/1)極細砂 極細砂混粘質シルトブロックやや多く含む
8. 明黄褐色(10YR6/6)シルト混極細～細砂 細礫少量 極細～細砂混シルトブロック少量含む



1. 暗緑灰色(10G4/1)シルト混細砂 暗オリーブ灰色シルトブロック(11割)5～8cm大含む

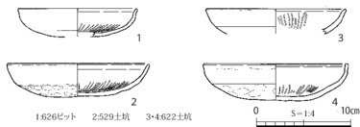
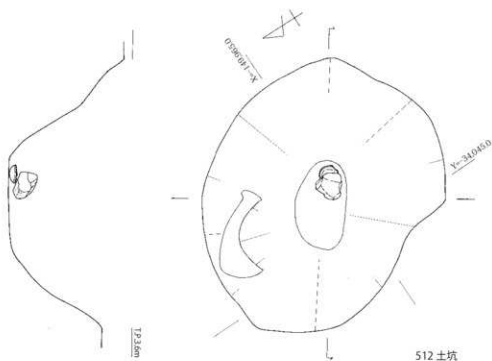
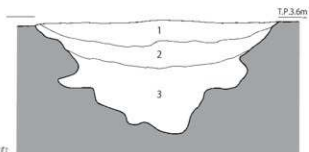


図64 529・622土坑・626ピット 平・断面図 図65 529・622土坑・626ピット 出土遺物



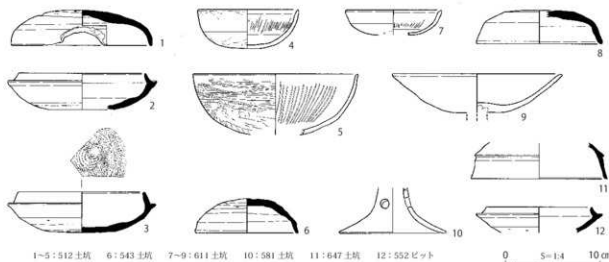
512 土坑



1. 灰色 (7.5V5/1) 細砂質シルト 細礫少量含む
2. 暗緑灰色 (5G4/1) 粘細～細砂質シルト
細礫少量、極細砂ブロック極少量含む
3. 暗灰色 (N3/O) 粘細砂質シルト
極細砂質シルト・極細砂・極細砂質粘質シルトブロック含む



図66 512土坑 平・断面図



1～5:512土坑 6:543土坑 7～9:611土坑 10:581土坑 11:647土坑 12:552ピット

図67 512・543・611・581・647土坑・552ピット 出土遺物

543土坑(図68) 512土坑の西側、約6mに位置している。1×1.4mのやや南北に長い楕円形を呈する。深さは0.6mを測る。埋土はいずれもブロック土を多く含んでおり、下層は砂質が強い。人為的に埋め戻されている。土坑内からはほぼ完形の須恵器環蓋が出土した。

513土坑(図68) 543土坑の西側、約5mに位置している。直径約1.3mの円形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土の上層はブロック土を多く含んでおり、下層は粘質シルトで細砂がラミナ状にみられる。下層は自然堆積層、上層は人為的に埋め戻されたと考えられる。513土坑からは細片の遺物が出土している。下層の巻上げの弥生時代後期と考えられる高杯が1点図化できたが、土坑の時期を特定できるような遺物の出土はなかった。

出土遺物(図67・73) 図67-1～5は512土坑から出土した土器である。1～3は須恵器の蓋環である。1は環蓋で土坑底部、自然礫の下から出土したものである。口縁部には打ち欠きが見られる。2・3は杯身である。3は底部内面に当て具痕が見られる。いずれもTK43型式の特徴を有する。4・5は土師器杯である。4は外面の調整は不明であるが、内面には放射状の暗紋を施す。底部は丸みを持っている。5は4より大きい杯である。内面には放射状の暗紋を有する。外面下半はヘラケズリを、上半はヘラミガキを施す。飛鳥Ⅰ～Ⅱ式の時期が与えられる。図化していないが、土坑底部から出土した礫はいびつな形状をし、20×25cm、厚さ15cmを測る。加工の痕跡などはみられなかった。斑レイ岩か。6は543土坑から出土した須恵器環蓋である。天井部外面はヘラオコシ未調整である。飛鳥Ⅰ式の時期が与えられる。

図73-6は細片で詳細は不明であるが、口縁部が短く外反する弥生時代後期の高杯の口縁部と考えられる。下層の混入と考えられる。

出土遺物より512・543土坑は6世紀後半～7世紀前半の時期を与えることができる。これらの土坑は土器埋納遺構と同様に、微高地にそって同じようなラインに位置している。出土遺物からは、512土坑が古く、最終埋没時期と考えられる土器と543土坑の出土遺物がほぼ同様の時期を示している。512土坑の須恵器は検出状況、口縁部の打ち欠きから祭祀的なものと考えられる。543土坑出土の須恵器はほぼ完形であり、土器埋納遺構に含めてもよいかもしれない。古墳時代後期末以降、8世紀にかけて同じような場所で祭祀的な行為を行っていることは興味深い。

微高地1では上記以外にも大形の土坑を数基検出している。7世紀代の遺物を含むものから、布留式期の遺物を含むものがみられた。

558土坑(図68) 512土坑の南東に位置する土坑である。直径約0.9mの円形を呈し、深さは0.65mを測る。土坑の周囲が11b層(砂層)であるために壁が崩れて、抉れた状況がみられる。出土遺物は細片で時期は不明であるが、上記の土坑と規模、埋没状況が類似している。

現代水路より東側は、10-1a層が部分的に遺存しており、10-1a層を除去した面で611土坑を検出した。466土坑は611土坑の底部で検出している。

611溝状土坑(図69) 幅1.6m、深さ約0.3mを測る。南北方向に長い溝状を呈しており、10-1a面で検出した342溝とほぼ位置が一致している。そのため、土坑の上部は342溝で攪乱されており、土坑の北端は不明であるが、466土坑が位置するあたりで途切れるものと考えられる。溝状土坑の南端には644土坑が位置しており、深くなっている。611・466・644土坑は両端が深くなる一連の土坑の可能性も考えられる。埋土は10-1a層に似た褐色細砂混じりシルトで下層は10b層が多く混じっている。またマンガン斑点が多くみられる。遺物の出土はあるものの、細片となっており、図化できるものは少ない。図化

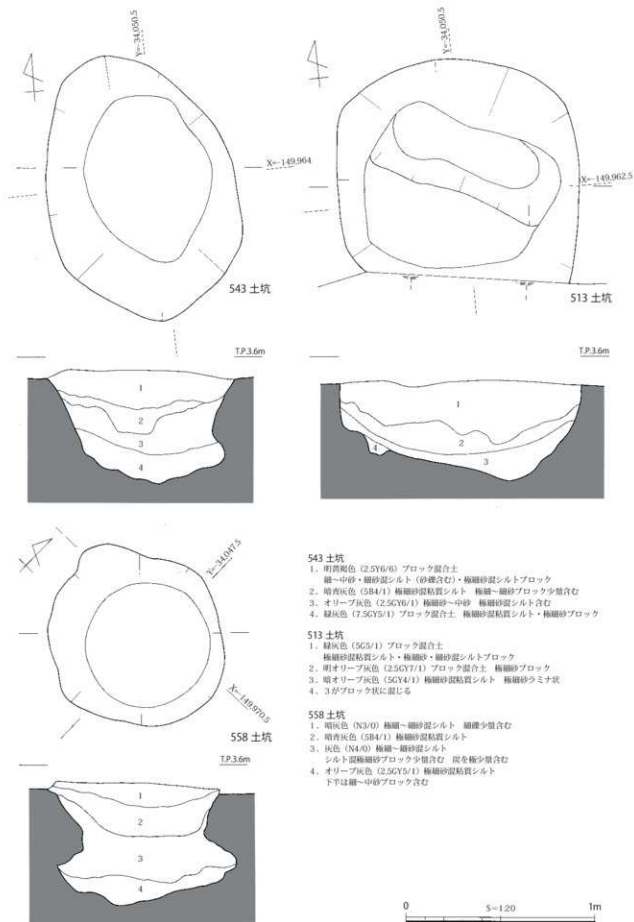


図68 543・513・558土坑 平・断面図

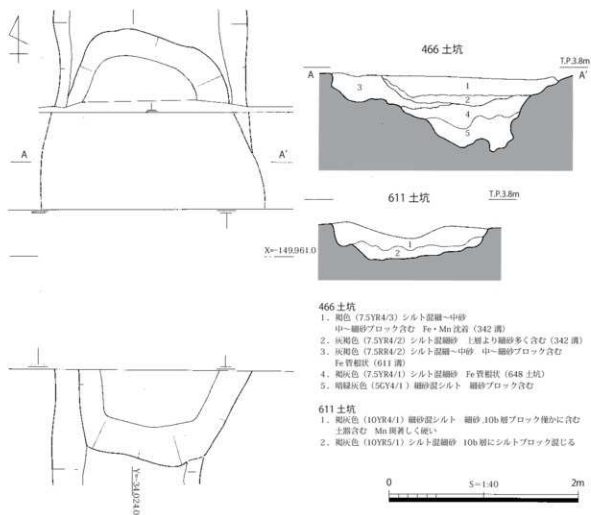


図69 466土坑・611土坑 平・断面図

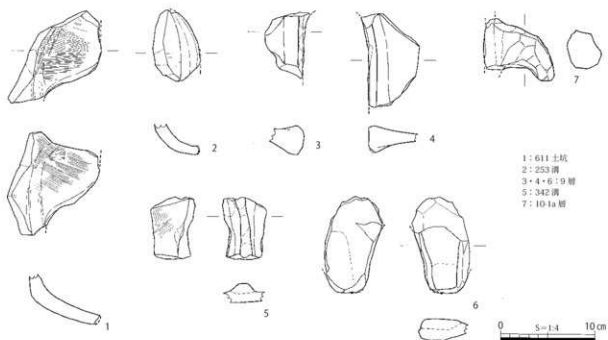


図70 出土移動式甕

した他は須恵器は甕体部・坏片など4点で、それ以外は土師器で、土師器片が多い傾向がみられた。

466土坑 (図69) 611溝状土坑の底部で検出した。調査区佃溝にかかってしまい、全容は不明であるが、幅1.4×4.6mの長楕円を呈すると推測できる。611土坑に一致していることから、一連の遺構の可能性も考えられる。深さは611土坑底部より約0.5mを測る。遺物は土師器片が出土しているが、小片で図化できるものはない。

出土遺物 (図67) 7～9は611土坑から出土した。7は土師器杯である。全体に摩滅しているが、内面には放射状暗紋がわずかに残る。飛鳥Ⅲ式。8は須恵器坏蓋である。天井部のヘラケズリは非常に狭い。TK209型式。9は土師器高杯の杯部である。底部は比較的平らで口縁部は直線的に開く。下層の混入か。611溝状土坑の時期は6世紀末～7世紀前半と考えられる。

他に611溝状土坑からは移動式甕の破片と考えられる土器片が出土しており、周辺の9・10層でも出土が目立った。ここであわせて示すこととする。

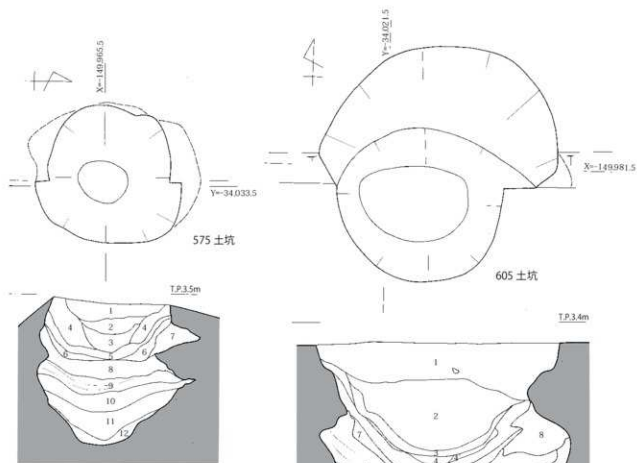
移動式甕 (図70) 1～7は移動式甕の破片である。1は611溝状土坑から出土した。甕の底部分にあたる。外面には粗いハケメを施す。2は253溝(9面)から出土したものである。底部分である。3～6は焚口部分である。5は342溝(10-1a面)、他は9層から出土している。粘土帯を張り付けて補強している。3・4は接合痕が不明瞭であるが、内外面に粘土を補強している。5、6は内面に凸状に張り付けている。6は焚口の端部に接するように凸帯を張り付ける。下部は脚となっており、若干下に張り出して丸く取めている。5は把手。甕の把手の可能性もある。いずれも生駒西麓産の胎土を有する。他に図化していないが、凸帯が張り付いた破片や、厚手の体部片が出土しており、甕の一部である可能性が高い。上層に巻き上がって出土しているものが多いが微高地1の特に東側に集中している。複数個体あると考えられる。

575・605土坑 (図71) 575土坑は先の大形土坑と同様に、微高地の中央部に位置しており、直径0.8mの円形を呈し、深さ0.75mを測る。605土坑は調査区東側に位置し、佃溝で切られているが、直径約1.3mの円形を呈すると考えられる。深さ1.3mを測る。10-2b層が露出している。いずれも似通った堆積状況を示しており、非戸と考えられる。575土坑は605土坑より全体に一回り小さい。埋土は大きく4層に分けられ、最下層(575土坑埋土11・12、605土坑埋土13)はブロック土が混じり、加工時形成層と判断できる。下層は自然堆積層であるが、周囲が砂層(11b層)であるために、崩れて大きく抉られている。この部分では周囲の土が流れ込み、土層が乱れている(写真14)。中層は(575土坑埋土5・6、605土坑埋土3～6)で、上部の層に炭化物が多く見られるのが特長である。土坑は中層上面で、一旦開放した状況であったと推測できる。これより上層は埋め戻し土と考えられる。605土坑からは布留式期Ⅳ段階と考えられる遺物が出土しており、575土坑も非常に似通った埋没状況を示すことから、同様の遺構と考えられる。605土坑からはモモ核が出土している。

他に布留式期の遺物を含む遺構には530ピット、581・520土坑があげられる。

530ピット (図72) 微高地西半の遺構が密集する中央部に位置する。0.4×0.5mの楕円形を呈し、深さ約0.4mを測る。埋土は2層に細分できる。上層は黒褐色の細砂混じりシルト、下層は暗青灰色の細砂混じり粘質シルトである。土坑底部で土師器甕の体部下半が出土した。甕の上半部はなく、下半のみであった。土坑内にちょうどおさまっており、故意に埋められたものと考えられる。

出土遺物 (図73-1～3・7) 1は575土坑から出土した。土師器鉢と考えられる。口縁部は短く外反し、外面は縦方向に、内面は横方向にミガキを施す。細片であり、時期の詳細は不明であるが弥生時代



1. 暗紫灰色 (5P4/1) シルト混細砂 炭含む
2. 暗紫灰色 (5P4/1) シルト混細砂 1よりシルト質で粘性あり炭多く含む
3. 暗青灰色 (5B4/1) 細砂混シルト 粘性あり
4. 暗紫灰色 (5P4/1) シルト混細砂 シルトブロック含む炭わずかに含む 1より砂質
5. 暗紫灰色 (5P3/1) 粘質シルト 粘質シルト粒子状に含む 炭層状に含む
6. 暗青灰色 (5B4/1~6/1) 細砂混シルト~細砂 下層は細砂が主
7. 灰黒泥岩
8. 暗緑灰色 (5G4/1) 極細砂混粘質シルト~粘土
9. オリーブ黒色 (5Y3/1~6/2) シルト~極細砂互層 ラミナあり
10. オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト混極細砂シルト混極細砂ブロック小含む
11. オリーブ黒色 (5Y3/1・2.5GY 5/1) シルト~極細砂シルトブロック状在
12. 灰白色 (2.5Y7/1) 極細~中砂 ラミナ不明

1. 暗赤褐色 (5YR3/2) 細砂混シルト 土混含む Mn 多く含む
2. 紫灰色 (5YR4/1) 細砂混シルト 下層は紫灰色 粘性あり粘土・炭粒子状に含む
3. 暗紫灰色 (5P3/1) 粘質シルト 炭粒子状に多く含む
4. 青灰色 (5B5/1) 細砂混粘質シルト 4'はシルトブロック含む
5. 靑灰色 (5YR5/1) 細砂 10% 砂砂ブロック含む 炭含む Mn 含む
6. 青灰色・暗緑灰色 (5BG6/1・5G4/1) 細砂~細砂混粘質シルト互層
7. 青灰色 (5B6/1) シルトと細砂互層
8. オリーブ黒色 (10Y3/1) 極細砂混シルト 極細砂のラミナ 炭含む
9. 灰色 (N4/0) 粘質土 植物遺体ラミナ状
10. 緑灰色 (7.5GY5/1) 極細砂混粘質シルト
11. オリーブ黒色 (10Y3/1) 極細砂~粘質シルト: 極細砂ラミナ状、粘質シルトブロック含む
12. 灰白色 (N7/0) 極~中砂
13. 灰色 (10Y4/1) 細砂混粘質シルト 細~中砂混じる
14. 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 極細~中砂の互層 ラミナ見れる



写真14 605土坑 断面(北から)

図71 575・605土坑 平・断面図



後期～古墳時代前期のものと考えられる。2・3は605土坑から出土した土師器甕である。2・3とも口縁端部は内傾する面を有する。3は体部外面に煤の付着が著しい。布留式Ⅳ段階と考えられる。7は530ピットから出土した土師器甕の体部下半である。外面は煤の付着が著しい。器壁は非常に薄く、外面はハケメ、内面は指頭圧痕が著しい。時期の詳細は不明であるが、布留式甕と考えられる。

520土坑(図72) 微高地西半、530ピットの西側に位置する。直径0.7mの円形を呈し、深さは0.15mを測る。土器が土坑の肩部で出土した。土器は細片につき図化できなかったが、体部外面に粗いハケメを施している。古墳時代中期の壺の破片と考えられる。

581土坑(図72) 微高地東半、中央からはずれたところに位置する。0.6×0.5mの楕円形を呈し、深さ0.35mを測る。埋土上層(1)は灰色のシルト混じり細砂で1'の部分は炭を含んでおり、図67-10の

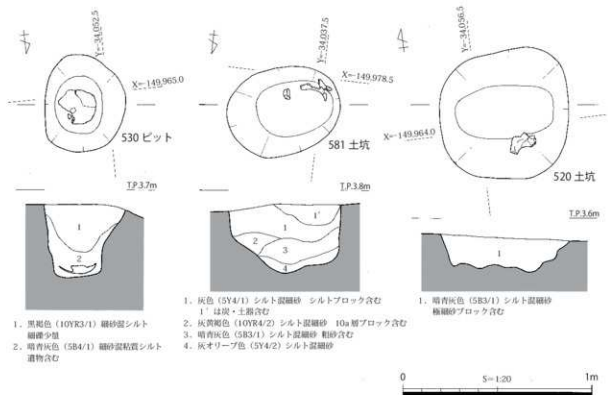


図72 530ピット・581・520土坑 平・断面図

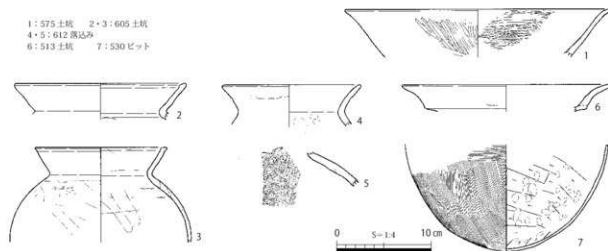


図73 575・605・513土坑・530ピット・612落ち込み出土遺物

土師器高杯が出土した。脚部のみである。脚柱部からの屈曲は緩やかで、裾部は大きく開く。透かし穴が1箇所確認できる。摩滅が著しく調整は不明である。

その他にも多くの土坑、ピットを検出した。また、微高地と軸をそろえて溝を検出した。

542・603・616・507溝は微高地と軸をそろえてのびる溝である(図74)。

542溝 幅0.55m、深さ0.25mを測る。底部の高さは西側が約T.P.3.3m、東側は約T.P.3.4mを測り、西に向かって下降している。埋土の状況からは流水堆積は認められない。微高地の南縁辺に位置していると考えられる。I期地区でこの溝に繋がるものは不明である。

調査区南東側では542溝周囲が落ち込み状を呈しており(612落ち込み)、その底面で溝を検出した。遺物が出土している。図73-4・5は612落ち込みから出土した。4は土師器甕である。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は上方外にのびる。5は土師器壺の肩部で外面に列点文がみられる。

603溝 542溝の北側約9mに位置する東西方向の溝である。644土坑に接してそれより西側は不明であ

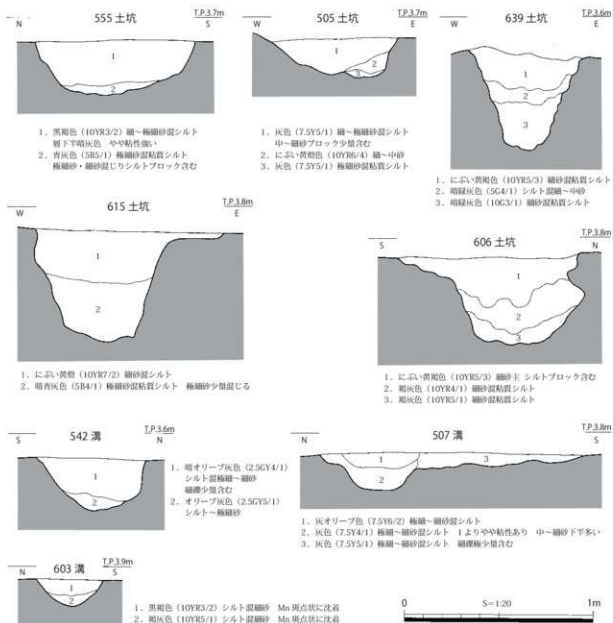


図74 微高地1 検出遺構1(土坑・溝)

る。幅0.35m、深さ0.15mを測る。埋土の状況からは流水堆積は認められない。

620溝 542溝の2m南に位置する溝である。幅0.3m、深さ0.1mを測る。この溝は10-2a層下面で検出した遺構である。542・603溝より先行する溝といえる。

507溝 微高地中央で検出した溝である。幅0.5m、深さは0.2mを測る。中世の遺構に攪乱され、一部を検出したのみである。

542溝は微高地の南縁辺部に位置しており、これを境に南側では遺構の密度が低い。一方、溝より北側では密集して土坑、ピットが分布している。微高地を画する溝と考えられる。土坑、ピットに関して、埋土や、底部の深さなどから規則性やグルーピングができないか検討したが、顕著な傾向はつかめなかった。埋土はピットの位置する周辺の土層の違いによるものが大きい。また、遺構からは帰属時期を特定できるような遺物はほとんど出土していない。まず、前述以外に比較的大形の土坑について述べ、その後には微高地西側、東側の遺構について述べる。

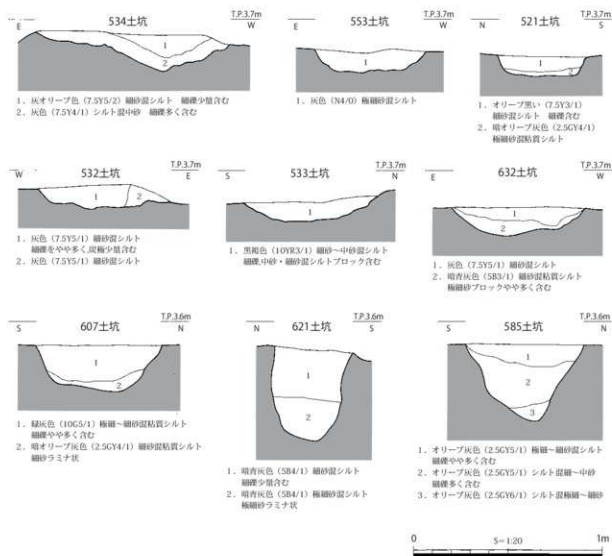


図75 微高地1 検出遺構2 (土坑・ピット)

555・505・606・639土坑は比較的規模の大きい土坑である（図74）。

555土坑は512土坑の東側に位置している。直径0.8mの円形を呈し、深さ0.3mを測る。埋土の上層は黒褐色の細砂混じりシルトで、下層は青灰色の粘質シルトと細砂が混じっており、加工時の形成層と考えられる。土師器、須恵器片が出土している。505土坑は555土坑の南東に位置している。0.7×1.3mの長楕円形を呈し、深さは0.2mを呈する。埋土上層は10-2b層の細～中砂、シルトの混合土、下層はこの砂層が薄く堆積しており、加工時形成層と考えられる。505土坑からは、園化していないが、古墳時代後期の須恵器坏片の他、土師器片が出土した。606土坑は505土坑の南側に位置している。側溝に切られているため、全形は不明であるが直径1.0m前後、深さ0.45mの土坑と考えられる。埋土上層は細砂を主体とし、下層は粘質シルトである。639土坑は542溝より南側に位置している。側溝により切られているが、直径0.6m、深さ0.5mを測る。埋土上層にはぶい黄橙色の細砂混じりシルト、下層は暗青灰の粘質シルト層である。615土坑は調査区東側、542溝より南側に位置している。直径約0.7mの円形を呈し、深さは0.6mを測る。

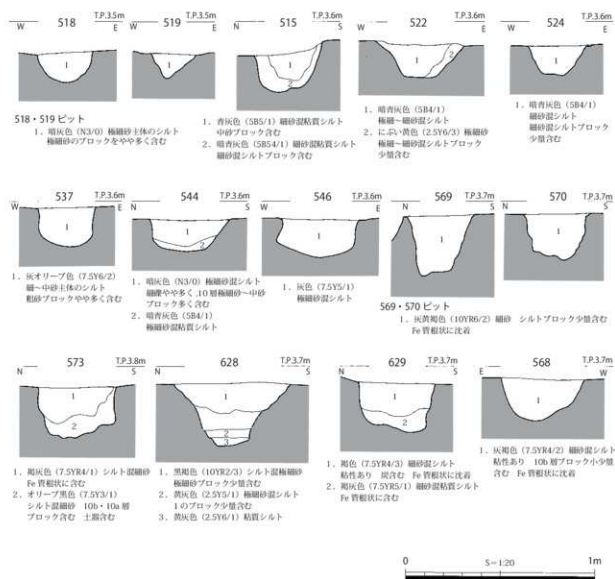


図76 微高地1 検出遺構3 (ピット)

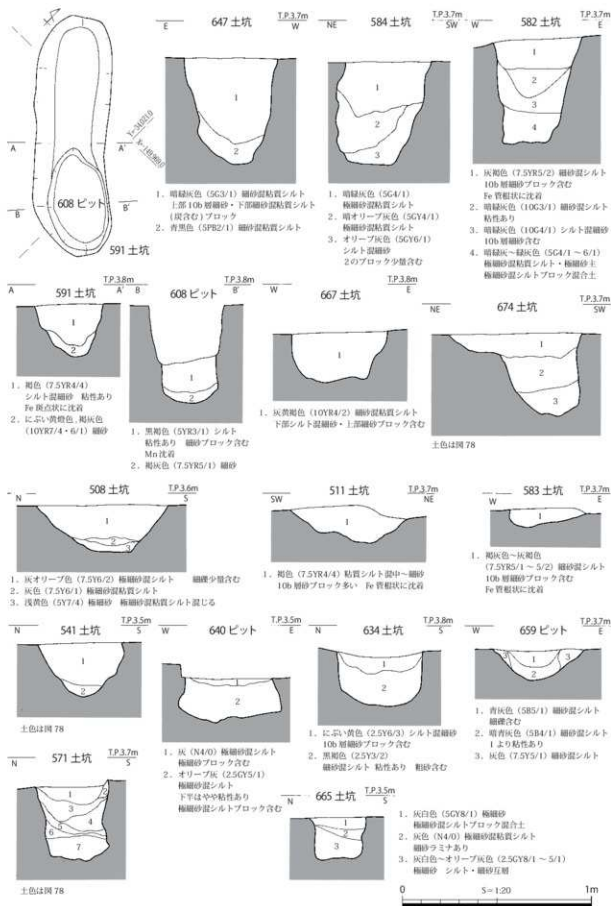


図77 微高地1 検出遺構4 (土坑・ピット)

・**微高地西半** (図75・76) 微高地の西半では土器埋納遺構などが位置するラインに集中してピット・土坑が見られた。しかし、建物等は復元できない。ピット (図76) は直径0.3~0.4m、深さ0.2m前後のものが多い。この範囲は上層に削平されており、ピットも同時に削平された可能性は十分考えられる。しかし、検出したピットの深さが0.2m前後あることを考えれば、建物が復元できない理由が、削平によるものだけなのか、疑問も残る。ピットからの遺物の出土は概して少なく、図化できたのは僅かに1点である。図67-12は552ピットから出土した須恵器坏身である。TK209型式の特徴を有する。

土坑 (図75) は直径0.7m前後の円形を測り、深さ0.15m以下のものも多い。埋土は灰色系の細砂混じりシルトが主であるが、533土坑は黒褐色の細砂~中砂混じりシルトで、埋土が他と目立って異なっていた。遺物は土器の細片のみで時期は不明である。607土坑は直径0.65mの円形を呈し、深さ0.25mを測る。621土坑は直径約0.4m、深さ0.5mを測る。621土坑からは図化できなかったが、土師器壺口縁部が出土している。布留式期のものと考えられる。585土坑は直径0.6m、深さ0.4mを測る。

・**微高地東半** (図77・78) 微高地東半では西半に比して広い範囲に遺構が分布しているのが分かる。現代水路の攪乱付近で比較的深さのある土坑を検出した。その他に、埋没状況が他と異なる土坑を検出した。

647・584・582土坑 (図77) Y=-34.028m付近で比較的深さがあり、類似する土坑を3基検出した。直径約0.5mを測り、深さ約0.55mを測る。647土坑からは図67-11の須恵器坏蓋が出土した。細片であるが、体部と天井部の境は明確に線を有しており、MT15型式の特徴を有する。

667・674土坑 (図77) 水路より東側に位置する。土坑は10-2a層より下面で検出している。674土坑は上面では直径0.7m、中ほどでは直径約0.4mの円形を呈する。深さは0.45mを測る。667土坑は直径0.5m、深さ0.25mを測る。いずれも10b層がブロック状に含まれており、人為的に埋め戻されている。

591土坑、608ピット (図77) 水路より東側に位置する。591土坑は幅0.35m、長さ1.3mの長楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。土坑の底部では0.3×0.5mの楕円形の608ピットを検出した。591・608は一連の遺構の可能性もある。608ピットは591土坑底部より深さ約0.2mを測る。

571・665土坑 (図77) 2基の土坑は近接して位置しており、他と埋土の状況が異なっていた。自然堆積層が認められ、掘削後開放状態であったことがわかる。571土坑は直径0.4mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土中層は自然堆積層で、細砂が北側から流入したような状況である。上層は埋め戻されている。遺物の出土はない。665土坑は直径0.3mの円形を呈し、深さ約0.2mを測る。埋土下層は自然堆積層、上層埋土Iはブロック土で埋め戻されている。遺物は土師器の小片のみで時期は不明である。

ピットは直径0.4m前後のものが多い。**640ピット、634ピット** (図77) からは須恵器坏片が出土している。いずれも古墳時代後期のものである。

現代水路の攪乱より東側では10-2a層が遺存している。10-2a層上面、及び、下面いずれでもピットを検出した (図78)。10-2a面上で検出したピットは**601・602・604・609ピット** (図78) である。直径0.3~0.5mの円形を呈し、深さは0.15~0.25mを測る。遺構の底部はT.P.3.6~3.55mを測り、すぐ西側、6層で攪乱されている部分とは約0.1mの高低差がある。このことから、削平され、残っていないピットも多いと想定できる。10-2a層を除去して検出したピットには668~671・673・664ピットがあげられる。そのうち、**668・670・671・673ピット** (図78) は542溝より南側に位置している。直径0.3~0.4mの円形を呈し、深さは0.15~0.3mを測るが、ピットの底面の高さはT.P.3.4m前後とはほぼ同じである。周辺の614ピットは10-2b面検出であるが、直径0.4mの円形を呈し、深さは約0.3mで底面の高さは先のピット

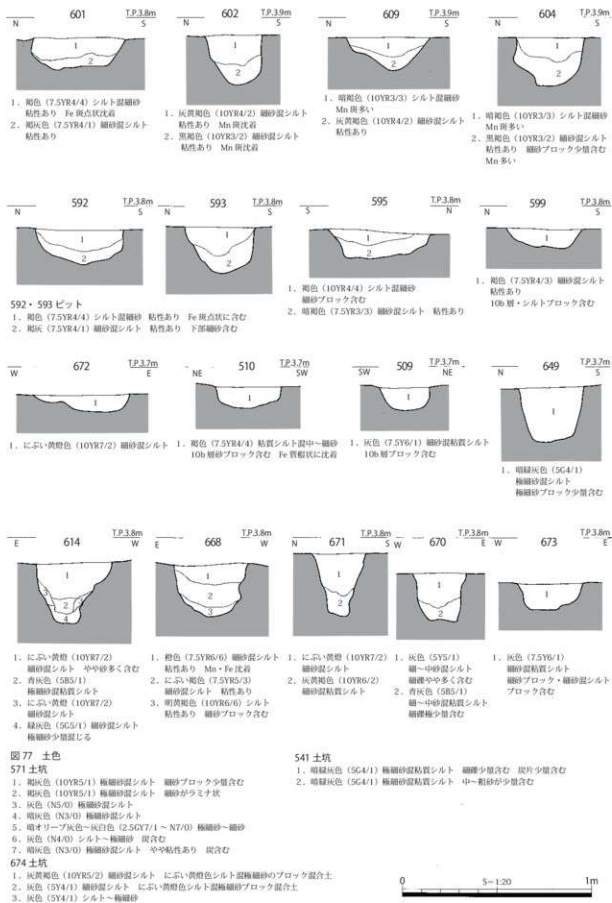


図78 微高地1 検出遺構5 (ビット)

トとはほぼ同様のレベルである。614・671はピットの形状から柱穴と推測でき、建物を構成するピットの可能性が高い。

ピット、土坑からは既して遺物の出土が少なく、時期を明確にはできなかった。しかし、水路より東側の状況から、ピット・土坑は10-2a層の上面と下面に帰属するものがあることが分かり、上面のものは10-1a層に関連するものと考えられる。10-2b面が露出している部分では、両者の区別はできないが、東側では、深いピットが10-2a層に関連していることが分かる。また、10-2a層下面で検出した遺構が、微高地を区画すると考えられる542溝より南側に広く分布している点は興味深い。ピットの分布からは、微高地1の東側には本来建物があつた可能性は高いといえる。

2、微高地2

微高地2上面は8層を除去した段階でほぼ11層が露出する状況であった。よってここで図示した遺構の大部分は9面検出時に既に露出していたものである。また、9面検出時に微高地縁辺に褐色の帯状に10-2a層が確認できた。これは10-2a層の高まりではなく、10-2a層が高まりにすりついている部分と判断し、微高地縁辺にあたると思われる。

微高地の中ほどで、微高地に平行する溝を数条検出した。

345～347溝（図79） 幅0.3m、深さは5cm以下と浅い。溝間の距離は0.4mを測る。溝は周辺のピットとはやや埋土を異にしており、白色に近い印象を受け9層に類似する。作土は確認できなかったが、畝の畝溝と考えられる。埋土より9層下面遺構と考えられる。348・350溝も一連の溝と考えられる。

356溝は微高地を斜めにのびる溝である。埋土は10-2a層で輪郭は不明瞭で溝というより浅い落ち込み状である。この溝は11b層が放棄流路化したものが、10面でも浅い窪みとして残っていたと考えられる。

微高地上では他に土坑及びピットを多数検出した（図80）。

微高地1と同様、建物等を復元できるものはなく、微高地1に比して規模の大きなものは少ない。微高地の中心部には希薄で、縁辺部に帯状に分布する傾向が認められる。ピットの埋土は灰色系のシルト質のものが主体を占め、黄色系のものも僅かに認められた。8層下面遺構とした溝群や418ピットの埋土とも似るが、それに比してやや明るく、砂粒も少ない。ピットからの遺物の出土は極めて少なく、時期を特定できるものはほとんどないが、上層で出土している遺物が古墳時代後期を主としていることから、この時期の遺構が大部分を占めると推測できる。微高地上ではピットが浅いことから、本来は微高地と低地部との比高差が更に大きかったと考えられる。

微高地北東縁辺に位置する444・443・485・432・486・495ピットは比較的規模が大きい。直径0.3～

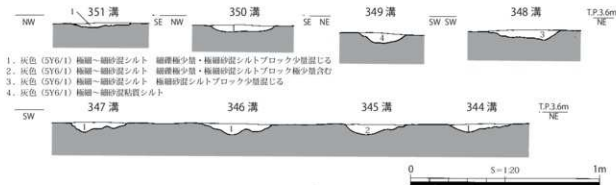


図79 微高地2 検出遺構1（溝）

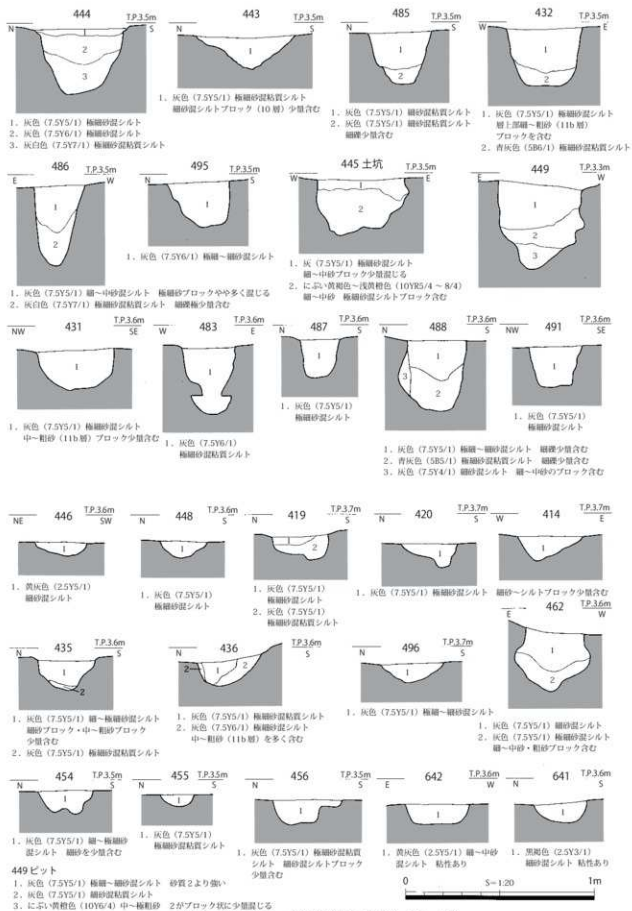


図80 微高地2 検出遺構2 (土坑・ピット)

0.5m前後、深さ0.25～0.3m前後を測る。486ピットは特に深く、0.4mを測る。443ピットは0.15mとやや浅い。

微高地中央部に位置する431・483・488・449ピットは比較的規模の大きなピットである。431ピットは直径0.4m、深さ0.2mを測る。483・488ピットは直径0.3m、深さ0.35mを測る。483ピットは11b層が砂層であるため、途中で掘り方が崩れている。449ピットは0.25×0.45mの楕円形を呈し、深さは0.45mと深い。449ピット最下層は粗砂を主体とし、シルトブロックを含んでいる。

445土坑は0.45×0.7mの長楕円を呈し、深さは約0.3mを測る。埋土の下半はピットとは異なり、細～中砂を主体とし、灰色のシルトブロックが混じる。

微高地北西縁辺部では454～456ピットを検出した。ピットの埋土は微高地上部のものとはほぼ同じ灰色系の極細砂混粘質シルト層である。これらのピットは10-2a層を除去した段階で検出したが、埋土の特徴から本来は10-2a面に帰属する遺構であると考えられる。これより5mほど東側で微高地に沿って、ピットがやはり帯状に分布している。446・448・419・420・414・435・436ピットである。直径0.3m前後を測り、深さは0.15m以下と概して浅い。641・642ピットはこれより下面、11層掘削時に検出したが、検出の際に見落とすと判断しここに掲載した。

3、低地部1

低地部1では10-2a層が遺存している。わずかではあるが畦畔状の高まりを検出した。ほとんど高さはなく痕跡程度のものである。9層と10-2a層間には9b層～10-1b層は確認できなかったため、畦畔に関しては9面、あるいは10-1a面の擬似畦畔の可能性も考えられた。しかし、畦畔の断面ではわずかではあるが、10-2b層が畦畔の下部でもりあがっている部分もあり、10-2a面に伴う畦畔であると判断でき、10-2a面は水田域として利用されていたと考えられる。水田は東西方向に伸びる大畦畔状の高まりによって2分されている。この高まりは、11面の微高地縁辺の高まりを踏襲したものである。この高まりより南側は小区画の水田が復元できる。水田1筆全体が分かるものはないが、一辺3～5mと考えられる。高まりより北側は矢板を引き抜く際に地層がずれてしまったこともあり、畦畔の遺存状況は悪い。この畦畔は11面検出の際にも痕跡的に残っている。11面で検出した畦畔は転写した状況と判断した。標高は調査区北西に向かって高くなっており、調査区外は微高地になると想定できる。

低地部でも土坑、ピットを検出した(図81)。

353土坑は側溝に切られているため、全体の形状は不明であるが、直径1.3m前後の円形を呈すると考えられる。土坑は二段に落ちており、最も深い部分では深さ約0.6mを測る。埋土はブロック土で中層には10a層のブロックも含まれている。下層は10b層が多く混じっている。遺物の出土はみられない。

大畦畔状の高まりではピットを3基検出した。493・494・701ピットである。493ピットは小規模なピットである。494ピットは直径0.4m、深さ0.35m、701ピットは直径0.3m、深さ0.4mを測り、深い。調査区北西で検出した492ピットは調査区外の微高地縁辺に位置している。493ピットとはほぼ同じ規模のピットである。ピットの埋土は灰色系の細砂混じりシルトである。下層は暗緑灰色で上層より粘性が高い。458ピットは水田域の中で検出したピットである。直径0.55m、深さ0.3mを測る。埋土の上層は暗緑灰色の粘質シルトである。他に水田域内、10-2a層上面で検出したピットは421・422・429ピットがある。いずれも直径0.3m以下、深さ0.15～0.2mと規模の小さいピットである。

450～452ピットは微高地1と微高地2の交わる付近に位置している。ピットは直径0.2m、深さ0.2m前後と小規模なものである。10-2a面より数cm上で検出しており、9層、あるいは10-1a層からの掘り込

みと考えられる。埋土は灰色系で砂礫を僅かに含んでいる。ピットに近接して屈曲する溝を検出した。425・427ピットは微高地1と低地部1の境目付近で検出したものである。上記のピットとはほぼ同じ規模のものである。埋土も共通している。

423・424・426・433・439ピットは10-2a層を除去して検出したピットである。423・424・426ピットは水田域と微高地の境に位置している。433・439は先述の454～456と同様、微高地縁辺に位置するといえる。いずれも、直径約0.2～0.3m、深さ0.1m前後と小規模なものである。遺構からの遺物の出土はみられない。

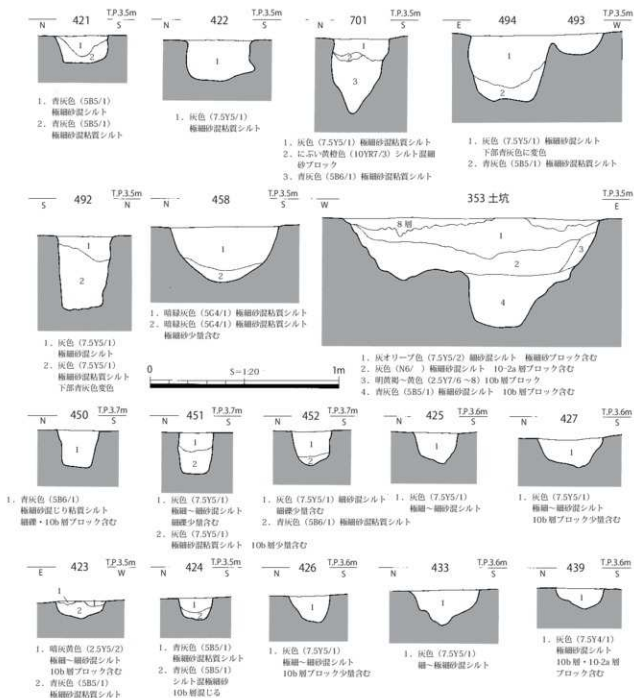


図81 低地部1 検出遺構(土坑・ピット)

4、低地部2

低地部1同様、10-2a層が遺存していた。10-2a面では上層（9層）がマーブル状に混じっており、地震の痕跡と考えられる。低地部1と同様、水田域である可能性が高いと考えたが、畦畔は検出できなかった。

5、調査区南半

微高地1で検出した542溝より南側の範囲である。調査区南半は本来の地形がよく分からないが、微高地1より若干低かったと推測できる。さらに11b層の堆積状況から判断して、中央部分が高く、南東、南西側が低くなっていく地形であったと考えられる。この範囲は鳥島下部を中心に10-2a層が遺存していたがうまく把握できず、また、10-1a層相当層と判断される土層がわずかに遺存していたために、他の部分と整合した遺構検出を行うことができなかった。10-2a面の航空測量の段階で10-1a層が部分的に残存しており、再度遺構検出を行っている。

遺構の密度は微高地1に比して希薄である。

西半で657・658・656・682・684・676・705ピットを検出した。657・658・652ピットは直径0.35～0.45m、深さ0.2～0.25mを測る。埋土の上層は灰色系の細砂混じりシルト、下層は暗青灰色、暗緑灰色の粘質シルトである。676ピットは上記のピットより深く、直径0.5mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。埋土の上層は灰色のシルト、下層は青灰色の粘質シルトである。705・684ピットは11面で検出したものであるが、埋土の状況は676ピットに類似していることから、10面に関連する遺構と考えられる。

680・681・686ピットは11面で検出したピットであるが、10面に関連するピットと判断しここに掲載した。直径0.25mの円形を呈し、深さは0.2m前後を測る。680ピットは埋土に粗砂を多く含んでおり、他のピットと埋土が大きく異なっている。685ピットは砂粒の含みが多い。680ピットは埋土が青灰色の粘質シルトで、他のピットの下層と類似している。

697土坑は直径0.4mの円形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土はブロック混合土である。

遺構からの遺物の出土は697土坑から土師器の細片が出土したのみである。

出土遺物 (図83) 10層から出土した遺物である。調査区東側の10-1a層からは遺物の出土は目立ったものの、大部分が攪乱されていることもあり、細片で図化できるものは2のみである。10-2a層からの遺物の出土は極めて低く、特に水田域からの出土はない。調査区南半の10-2a層からも遺物の出土は少ない。4j付近、5～7a 付近で古墳時代後期の遺物が出土している。調査時点では先述のように南半部の層序が混乱しており、10-1・2層の区別ができていないが、10-1a・b層に関連するものと考えられる。3・5・7・9～13の遺物がこれに相当する。6は同じく南半部の10-2a層から出土した遺物である。4・8は10-2b層から出土した。1は調査区北側微高地付近で出土している。

1・5・6・8・9は須恵器である。1・5・9は須恵器坏蓋である。1は天井部との境界は不明瞭で、天井部にカキメを施す。5は天井部との境界は凹線状を呈する。口縁端部にキサミを施し、天井部内面には当て具痕が残る。9は天井部との境は凹線状を呈する。6は坏身である。底部外面には「×」のヘラ記号を施している。これらの須恵器はTK10～209型式の特徴を有している。8は壺口縁部である。

2・3・7・10～12は土師器である。2・7は摩滅により調整は不明である。古墳時代中期の杯か。3は高杯脚部である。10は把手。11は高杯の杯部である。12は土師器甕である。口縁部は短く外反する。4は小型鉢である。弥生時代後期後半～庄内式期。13は鉄製品である。錆が著しいが、釘か。古墳時代後期のものが中心に出土し、僅かに古墳時代前期～中期のものを含んでいる。

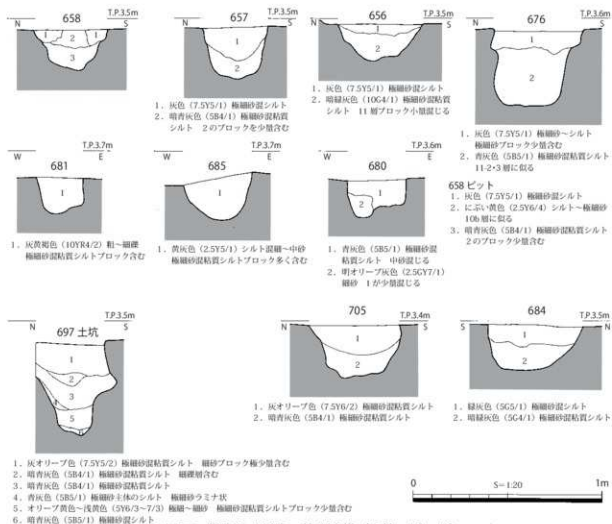


図82 微高地1以南 検出遺構(土坑・ピット)

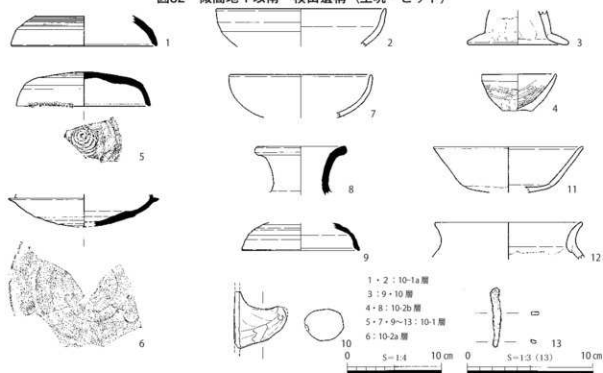


図83 第10層関連 出土遺物

第11面 (図84)

10面の微高地1を形成した655流路を中心にもたらされた氾濫堆積物を10b層として、これを除去した面を11面とした。既往の調査の11面は第1黒色粘土層上面で、弥生時代後期の水田が検出されている。しかし、今回の調査区では調査区全体を通して明瞭な土壤層が確認できず、11層の認識が問題となった。調査では11b層の最上部の土壤化した層を11-2層とし、この上面を11面としている。11-2層としたのは、1. 従来の水田作土層を中心にした「11a層」は10-2a面の低地部では10-2a層によって削平されたと考えられたこと、2. 10-2b層で覆われた部分は、水田作土層である11a層が遺存していると判断されたが、土壌化が弱く、従来の11a層との関係が判断できなかったことによる。

10面の最初でも触れたが、調査区南側は11b層によって微高地化している。そのため、調査区中央の低地部も非常に狭く、足跡が多くみられたものの先に述べたように水田畦畔は検出できない。調査区南側では比較的土壌化が明瞭であったものの、11-2層は従来の「11a層」と比して土壌化は弱く、全体にしまりが悪い。以上のことから、当調査区の11a面は地表面ではあるものの、水田作土層ではなく、その結果、土壌化があまり明瞭ではないのではない、とするのがもっとも妥当ではないかと考えた。よって従来の11面に対応する遺構面と判断する。

11面では10-2b層が遺存しない調査区南側で、古墳時代の遺構を検出している。10-2a層下面遺構と判断される。他に調査区中央では古墳時代前期の土坑を検出した。これも、従来の標準調査では10面に帰属する遺構であり、10-2a層下面遺構と判断できる。図84には11-2面および、除去した面で検出した遺構を合成している。

687落ち込み (図85・図版13-1) 調査区南半で東西方向に長い落ち込みを検出した。落ち込みは断面付近で幅4m、深さ0.3mを測る。途中で二股に分かれ、調査区中央付近より東には延びない。落ち込み底部は西端でT.P.3.2m、東端では3.4mを測り、西に向かって下降している。埋土は最下層(埋土5)に細砂、下層(埋土4)は中～細砂混じりシルトで砂質が強い。中層(埋土3)は10-2a層に対応する黒褐色細砂混じりシルトで、その上部に薄い砂層(埋土2)がみられる。上層(埋土1)は明黄褐色のシルト混じり細砂である。10-1a層に相当する。当初、上層と中層間の砂層(埋土2)を10-2b層に対応させてしまい、11面としてこの砂層のみを除去してしまった。しかし、出土遺物から判断すると矛盾が生じたため、再度周囲の土層との検討をしたところ、10-2a面より上部にあたることが分かった。下層まで除去した段階で、落ち込み内には706土坑、及び、幅の狭い溝を4条検出した。溝は幅0.3m前後を測り、深さは5cm以下と浅い。溝の埋土は最下層の細砂である。落ち込みに沿って延びている。

706土坑 (図85・図版13-3) 土坑は687落ち込み底部の溝を切っており、これより後出することが分かる。直径3.5m前後の円形を呈し、深さは落ち込み底部より0.5mを測る。土坑の肩部や底部は不明瞭で、埋土には人為的に埋められた痕跡はない。自然堆積層で埋没したと考えられる。土坑内からは土師器高杯の裾部、小形の壺と考えられる体部片、甕の口縁部などが出土しており、図化できなかったが、布留式期の遺物と考えられ、687落ち込み出土の遺物と同様な時期と考えられる。

687落ち込みの北肩にそって杭列が2か所で見られた(754・755杭列)(図版13-2)。図で示した以外にも杭の痕跡がみられた。754杭列は706土坑の北側に位置している。755杭列は677土坑の西端付近、落ち込みが浅くなった部分に位置している。杭は直径5～10cm前後の自然木の先端を尖らせたもので、種皮が残るものが多く、他に加工はみられない。754杭列では現状で最も長いもので1.28mを測り、他にも0.5m以上のものが7本みられる。非常に深く打設されており、T.P.2.3m前後に達するものが多

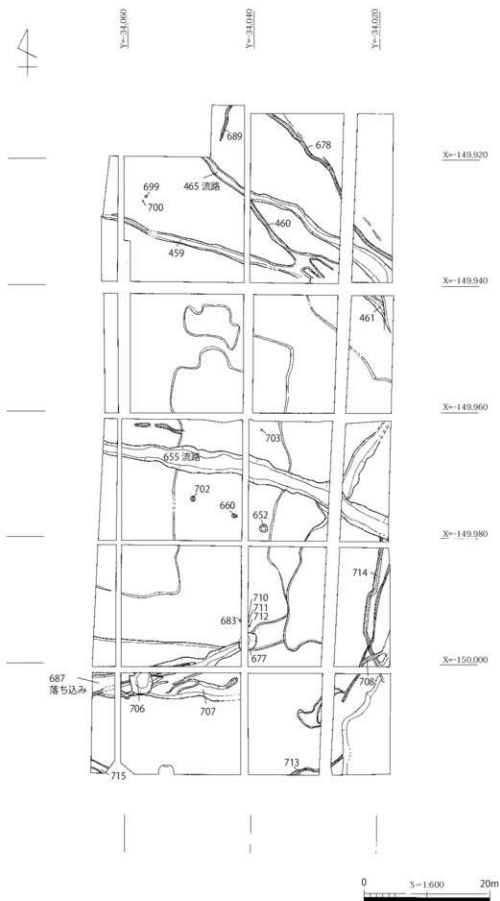


图84 第11面 遺構平面図

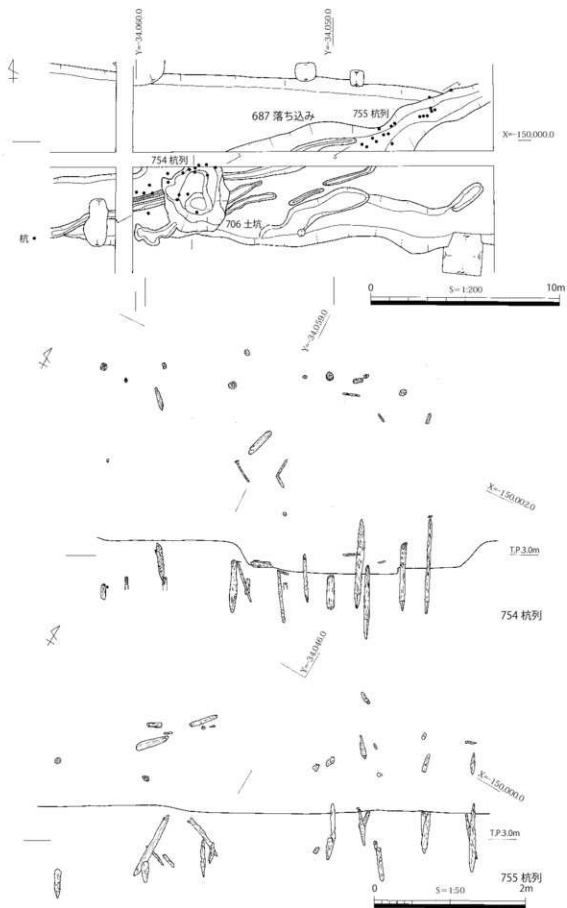


图85 687周边 遺構平面図、754・755杭列 平・立面図

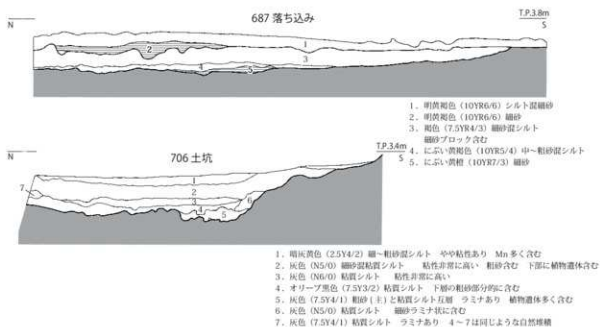


図86 687落ち込み・706土坑 断面図

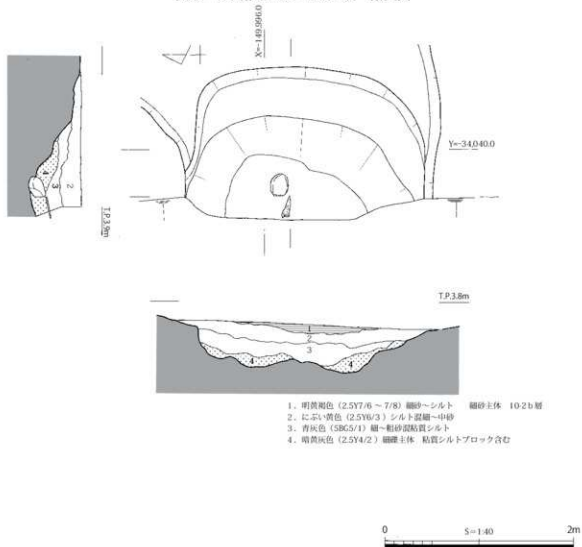


図87 677土坑 平・断面図

く、第12面に至っている。755杭列では現状で最も長いもので0.93mを測り、0.5m以上のものが6本みられる。杭の先端はT.P.2.8-2.6mに達しているものが多く、最も深い杭で2.2mに達している。この部分は11b層が厚く、12面には至っていない。落ち込みの底部が西に向かって下降しており、杭の達する深さも754杭列より浅いのかも知れない。任意に杭をサンプリングして樹種同定を行った。754杭列はクスノキ、スギ、アカガシ亜属、755杭列はスギ、ヒノキである。各杭に関しては表9を参照されたい。

687落ち込みは人為的に掘削されたものではないと考えられる。10-1a・10-2a層が落ち込んでいることから、11面段階にも落ち込みであり、先行する細い溝は人為的に掘削されたというより、雨列といったものであろうか。出土遺物から古墳時代前期～中期にはほぼ埋没し、その後は浅い凹みを残すのみであったと考えられる。落ち込みが位置しているのは11b層の流路が分岐する部分に近く、本来の景観では微高地と低地の境にあたると思われる。落ち込みの北側に杭が集中していることから、落ち込み北側を意識したものと考えられる。図化できなかった遺物も含めて、高杯の出土が多く、器種の偏りが目立つ。三連壺の出土など、祭祀的な意味合いが強い。

出土遺物 (図88) 遺物は687落ち込み中・下層から主に出土している。1～5は土師器高杯である。いずれも摩滅が著しく、調整は不明瞭である。1は有稜外反口縁高杯である。2は直径、傾きとも不安がある個体であるが、有稜のもので、直線的に開く口縁部を有している。4は口縁部が欠損しているが、平らな底部から外湾気味に体部が開くと考えられる。5は脚柱部である。柱部はやや膨らみをもって、裾部は大きく屈曲する。摩滅が著しいが、外面には僅かに横方向の細かいミガキが残る。6は土師器三連壺に復元できる。残存しているのは3連のうち、2個体である。口縁部は複合口縁を呈し、体部

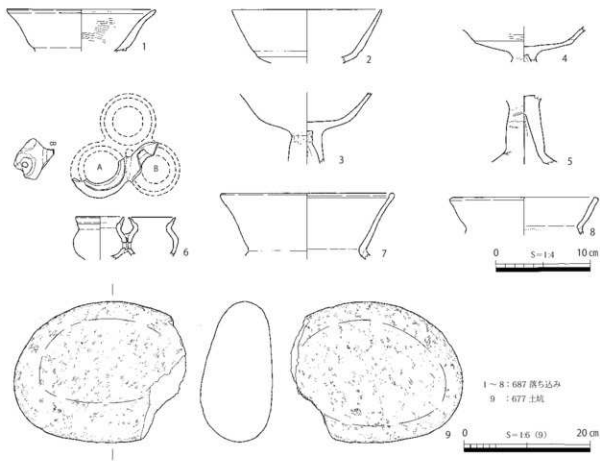


図88 687落ち込み・677土坑 出土遺物

中程より、やや上部が最大径を測る。Bは体部中程に2箇所の穿孔が穿たれており、Aは1箇所の穿孔が残存している。Aの穿孔部分外面には円形に剥離痕跡がみられ、Bの穿孔部分外面には接合粘土が遺存していた。摩滅はしているが、この部分で接合すると推定できる(図版29)。また、Bの穿孔の位置から、本来は3連であったと考えられる。胎土には角閃石を含む。なお、Bは10-2a面、調査区東端542溝周囲の612落ち込みからの出土である。7は土師器直口壺の口縁部である。口縁部は肥厚する。8は土師器布留式甕である。口縁部は内湾しており、端部の肥厚はほとんどない。土坑は出土遺物から布留式期Ⅲ・Ⅳ期の時期が与えられる。

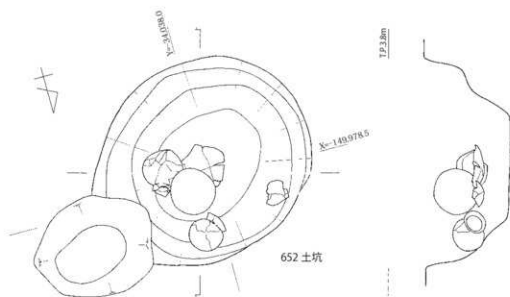
677土坑(図87) 土坑は落ち込みが途切れた辺りで検出した。直径2.5mの円形を呈すと考えられ、深さ約0.5mを測る。上層(埋土1・2)は砂層であり、中層(3)は青灰色の粘質シルトで、下層(4)は11b層と考えられる細礫層にシルトの小ブロックが混じるもので、加工時の形成層と考えられる。自然堆積層で埋没している。土坑底部で人頭大の礫、自然木が出土した(図版13-4)。

出土遺物(図88-9) 礫は一部欠けがみられるが、27×22cmの楕円形を呈し、厚さは11cmを測る。花崗岩製で表面はよく研磨されている。他はわずかに土師器片が見られたのみで、時期を示すものではない。687落ち込みと関連した遺構の可能性が高い。

715溝 調査区南西隅で検出した溝である。溝は05-2調査区「214溝」、I期地区「7溝」に繋がるものである。幅約0.2m、深さ0.2mを測る。調査区南端が大きく崩れており、遺構検出が困難な状況もあり、調査では誤って溝の上層のみを掘削してしまった。埋土はオリープ黒色シルト混じり細砂である。この埋土の両側には細～粗砂混じり粘土が堆積しており、10-2a層相当層と判断してしまった。下層は粗砂・シルト・細礫混じりシルト層であり、シルトをブロック状に含んでいることから、溝の埋土の一部であったと考えられる。遺物の出土はなかったが、05-2調査区の成果から布留式期Ⅲ・ⅣからTK23～TK47型式までの遺物が出土している。

652土坑(図90) 土坑は10-2a面(11層が露出)では埋土1の範囲のみ検出したもので、遺構全体の輪郭を検出することができなかった。埋土1は10-2a層に相当するものであったので、10-2a面段階に凹みになっていた、あるいは10-2a層が陥没したと判断した。11面検出の際、遺構が密集した部分の11-2層を数cm程掘削して再度輪郭を確認した。直径約2.3mの円形を呈し、深さ1.1mを測る。下層の埋土6上面で、土坑中央に完形の庄内式甕が口縁部を下に向け配置され、周囲に甕、壺が置かれていた。周囲の壺、甕は横位であった。中央の甕は内部が空洞になっており、故意に埋められたものと推測できる。中央の甕の南側には甕の下半部が出土しているが、上半部はない。もともと破片であった可能性が高く、中央の土器を固定させたものであろうか。

出土遺物(図91) 1～3は甕である。1は庄内式甕である。2に比して体部が丸みを帯びているが、中央よりやや上部に最大径を持つ。体部外面は上半には細かいタタキ目が残し、その後ハケメが施されている。内面はヘラケズリし、器壁は薄い。2は土坑の中心に配置された庄内式甕である。口縁部の一部が欠けており、打ち欠きと考えられる。口縁部は端部をつまみあげる。体部中程より上部に最大径をもつ。体部外面は上半には細かいタタキ目が残し、その後ハケメが施されている。体部下半にはヘラミガキを暗紋状に施している。内面は横方向にヘラケズリを施す。胎土には角閃石を含む。3は甕の体部下半である。1～3はいずれも底部が丸底に近い。4は直口壺である。体部中程よりやや上部に最大径を持ち、底部は丸底である。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリを施す。底部外面には5本のほぼ平行する直線が線刻されている。これらの遺物から土坑は庄内式期Ⅳの時期が与えられる。



652 土坑

652 土坑

1. 暗緑灰色 (5G3/1) 極細砂質シルト 10-2a 層に散在
2. 浅黄色 (2.5Y7/3) シルト混じり極細砂
3. 浅黄色 (2.5Y6/2) 極細砂質シルト
4. 暗緑灰色 (5G4/1) 極細砂質シルト
5. 緑灰色 (5G5/1) シルト混じり極細砂 層→中砂ブロック層部に少量あり
6. 灰色 (7.5Y4/1) 極細砂質シルト

699 ビット

1. 灰色 (N6/0) 極細砂質粘土シルト 暗灰色砂混じりシルト・極細砂ブロック少量含む

700 ビット

1. 灰色 (N6/0) 極細砂質粘土シルト
2. 灰色 (N6/0) 極細砂質粘土シルト 灰白色極細砂ブロック含む

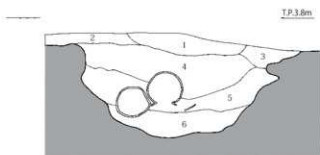
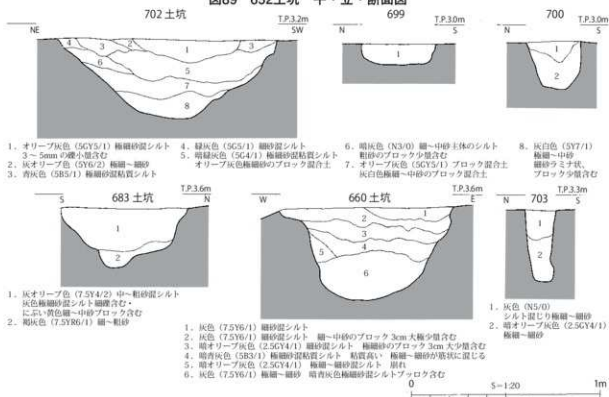


図89 652土坑 平・立・断面図



- 702 土坑
1. オリーブ灰色 (5GY5/2) 極細砂質シルト 3~5mm の礫少量含む
 2. 灰オリーブ色 (5Y6/2) 極細→細砂
 3. 青灰色 (5B5/1) 極細砂質粘土シルト
 4. 緑灰色 (5G5/1) 細砂質シルト
 5. 暗緑灰色 (5G4/1) 極細砂質粘土シルト オリーブ灰色極細砂のブロック混入土
 6. 暗灰色 (N3/0) 細→中砂主体のシルト 粗砂のブロック少量含む
 7. オリーブ灰色 (5GY5/1) ブロック混入土 灰白色極細→中砂のブロック混入土
 8. 灰白色 (5Y7/1) 極細→中砂 細砂→ミナチ、ブロック少量含む
- 683 土坑
1. 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) 中→粗砂質シルト 灰白色極細砂質シルト混入含む 上→黄白色層→中砂ブロック含む
 2. 暗灰色 (7.5Y6/1) 細→粗砂
- 660 土坑
1. 灰色 (7.5Y6/1) 細砂質シルト
 2. 灰色 (7.5Y6/1) 細砂質シルト 細→中砂のブロック 3cm 大程度含む
 3. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細砂質シルト 極細砂のブロック 3cm 少量含む
 4. 暗青灰色 (5B3/1) 極細砂質粘土シルト 粘質高い 極細→細砂が階状に散在
 5. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細→細砂質シルト 混在
 6. 灰色 (7.5Y6/1) 極細→細砂 暗青灰色極細砂質シルトブロック含む
- 700
1. 灰色 (N5/0) シルト混じり極細→細砂
 2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 極細→細砂

図90 702・683・660土坑・699・700・703 ビット 断面図

660土坑(図90) 土坑652と同様、10-2a面(11面露出)では埋土1部分のみを検出した。直径約0.8mの円形を呈し、深さ0.5mを測る。652土坑と同様に上面を数cm掘り下げて輪郭を検出した。下層(埋土6)は細砂を主体とし、シルトブロックを含む。遺物の出土はない。

この2基の土坑は11b層の高い部分に位置しており、10層相当層は基本的に遺存していない。10-2a層が上部に落ち込んでいることから、10-2a層堆積前、あるいは堆積途中に掘削されたと考えられる。

この他のピット、土坑は11-2層を除去して検出したものである。ここでまとめて述べる(図90)。

702土坑は調査区中央付近で検出した土坑である。直径1.1mの円形を呈し、深さは0.4mと深い。埋土は3層に分けられる。上層(埋土1・2)は1・2細砂を多く含むシルトで、中層(3・5・7)はブロックを含む埋土で、埋め戻されている。3は青灰色のシルト質土でブロックはほとんど含まない。下層(埋土8)は細砂を主体としておりシルトブロックを少量含む。加工時形成層と考えられる。埋土のうち、4・6は埋没後、土坑の肩が崩れて周辺の土砂が流れ込んでいると考えられる。遺物は出土していない。土坑を検出したのは9面の溝状土坑で攪乱された部分であり、本来は上面に帰属する可能性が高い。700・699ピットは調査区北西部で検出した。700ピットは直径0.3m、深さ0.25mを測る。埋土は灰色の粘質シルトである。699ピットは直径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は灰色の粘質シルトであ

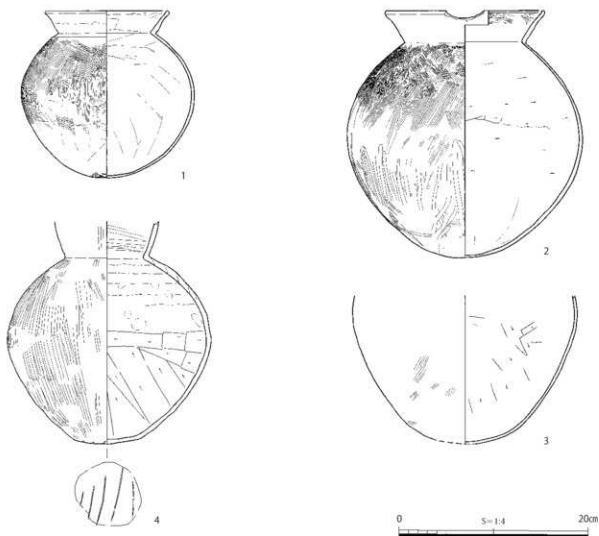


図91 652土坑 出土遺物

る。703ピットは調査区中央付近で検出したピットである。直径0.15m、深さ0.35mを測る。

その他、溝・流路を検出した。溝は11b層によって形成された微高地の縁辺に沿うものが多い。

459溝 (図92) 調査区北西側、10-2a面の高まり北肩部分で459溝を検出した。10-2a面に伴う可能性も考えられたが、特に東側ではわずかに遺存している10-2a層を除去した段階で溝の輪郭が明瞭となったこと、断面では10-2a層の下部に僅かに土壌層が確認できた(土層2)ことから、10-2a層下面、あるいは11面に伴うものと判断した。溝の埋土はシルト混じり細～中砂で下部には粗砂がみられた。幅1m前後を測り、深さは0.3mを測る。11面ではこの溝より南側が低地部となっており、溝より北側は北西に向かって高くなっている。よって北西に展開する微高地の縁辺に位置すると考えられる。埋土4は盛土の可能性も考えられる。微高地2付近では不明瞭となり、460溝と合流する。I期地区ではこの溝につながる遺構は不明である。溝は2時期あり、高まりを除去した段階でこれに先行する溝を検出している(土層7・691溝)。幅1m、深さ0.2mを測る。残存するのは15mである。

出土遺物 (図93-1・2) 溝内からは遺物の出土がみられたが、いずれも細刃である。2点を図化した。1は高杯である。短い脚柱部は柱突で裾部への屈曲は大きい。外面は縦方向にやや太いヘラミガキを施す。杯部は平らな底部をも持たず、碗形高杯と考えられる。2は甕の体部片である。外面は粗いハケメを施し、なで肩の肩部に刺突紋を施す。内面はナデ。図化していないがタキ甕の体部片が複数点出土している。弥生時代後期後半でも新しい段階のものと考えられる。

655流路 (図92) 調査区中央付近で東西方向にのびる流路である。再三述べるように、当調査区の10-2b層はこの流路を中心にもたらされている。幅2～4m、深さは深い部分で約0.6mを測る。流路は11面の微高地を下刻して(図92断面上)西に伸びており、流路からあふれた砂は周辺の低地部を埋積している。埋土は大きく2層に細分できる。下層は比較的粗く、上層は細粒である。調査区西側の低地部ではこの2層の堆積が細分可能で、上層と下層の間にわずかに土壌化した部分が認められる(土層4)。流路周囲はやや盛り上がり小規模な自然堤防を作っている。その後、上層の細粒の堆積物によって流路周辺は微高地化し10面の微高地1を形成する。この流路からは図95-10の木製品以外、遺物の出土はない。流路周辺の低地部では足跡が多くみられた。I期地区ではこれに繋がる流路は確認できない。調査区中央付近で直交する窪みが見られるが、この部分は主に砂礫層で埋まっており、11b層堆積後、放棄流路化した窪みと考えられる。砂礫層を除去すると、足跡が多くみられた。

調査区北側、10面の微高地2を斜めに延びる**465流路**を検出した。最上層は10-2a層で10-2a面356溝はこの流路の10-2a層が落ち込んだ範囲である。細砂～シルト層を10-2b層相当層として掘削したが南東に向かって溝の幅は広くなり、肩部も不明瞭となった。人為的に掘削されたものではなく、11b層堆積後の放棄流路と考えられる。遺物の出土はみられない。461流路もこの放棄流路の一部と考えられる。図93-3の手焙形土器が出土した。覆部は欠損している。体部上半と下半の粘土の継ぎ目に突帯を貼り付けており、突帯にはキザミを施す。弥生時代後期後半の時期が与えられる。

460・678溝 (図92) 2微高地西縁辺にそってのびる溝である。460溝は微高地の南西側に位置している。幅約0.3m、深さ0.1mを測る。溝埋土は459溝の下層の砂質土と類似する。459溝と合流した付近から不明瞭になる。溝からは図93-4の外反口縁鉢が出土した。口縁部は外湾気味に開き、端部は面を持つ。口縁部外面は縦方向にハケメ、体部外面は縦方向にミガキを施す。内面は摩滅により調整は不明である。弥生時代後期後半でも新しい段階のものと考えられる。678溝は微高地北東側に位置している(写真16)。幅0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は細砂を主体とし、ラミナが認められる。

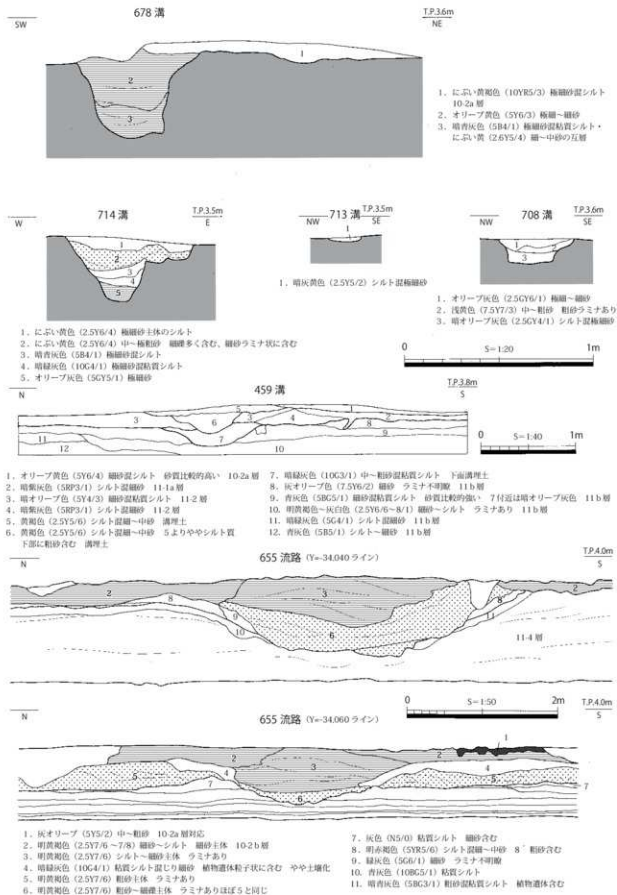


図92 678・714・713・708・459溝・655流路 断面図

714・708・713溝（図92） 調査区南東部、微高地の東縁辺に位置する溝である。この範囲の11-2層はしまりが悪く、細砂をラミナ状に含んでいる部分もみられた。これを除去して検出した。溝の立ち上がりは不明瞭で非常に検出しにくい。714溝は幅0.35～0.7m、深さ0.35mを測る。埋土は自然堆積層で、中層（埋土2・3）は粗砂～細礫層、その下はシルトと細砂の互層となる。下層は暗緑灰色の粘質シルトである。708溝はこれより先出の溝で幅0.4m、深さ0.1mを測る。埋土上層は砂質土で、下層は暗オリーブ色のシルトである。713溝は調査区南端に位置している。幅0.15m、深さは5cmと浅い。いずれの溝も自然堆積層で埋没しており、低地部分には続かない。遺物の出土はみられなかった。これら微高地縁辺部に位置する溝は、直線的というより、蛇行しており、溝の輪郭も不明瞭なものが多かった。人工的に掘削されたものではない可能性が高い。

小結

弥生時代後期の水田面である11面以降、それまでの分厚い氾濫堆積物がもたらされる環境から一転し、安定した土砂の供給が少ない段階になる。11面では氾濫堆積物による微高地、低地といった起伏に富む地形がみられ、その後の土地利用に大きな影響を与えている。その中でも当調査区は全体的に微高地化が顕著な箇所にあたる。微高地間の平坦な低地部が狭いため、水田として利用されていなかった可能性が高い。微高地上也放棄流路が窪み状に残るなど、凹凸のある地形が復元できる。足跡や微高地縁辺で溝がみられるものの、弥生時代後期の遺物も非常に少なく、調査区北側の459・460・461溝からわずかに弥生時代後期後半の遺物が出土したのみで、積極的に土地を利用していなかったと考えられる。

その後、東西方向に流れる655流路によって11面は埋没し、調査区中央付近に東西方向の微高地1が形成されるとともに、調査区北東側は相対的に低くなり、水田として利用されたと考えられる。南に位置する05-2調査区でも11b層によって形成された微高地をきる南東から北西方向の「280流路」が検出

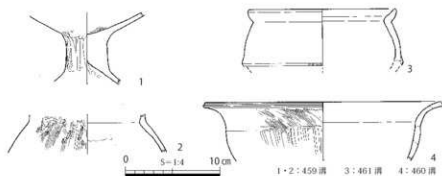


図93 第11面 出土遺物



写真15 655流路 (Y=-34,060 ライン) (北西から)



写真16 678溝 (北から)

されており、655流路と同様、11a層形成後の流路として注目できる。「280流路」からは弥生時代後期後半の土器が出土しているが、655流路からは時期を決定づける遺物の出土はなく、現段階では11a面形成後の10層の細分に収まるものと考えておきたい。

当調査区の10-2a層は層内からの遺物の出土は少ないものの、微高地1より南側においては、11面で検出した10-2a層下面遺構の時期から布留式期Ⅲ・Ⅳの(B)層に対応する可能性が高い。一方調査区北側は10面の最初に述べたように1期地区の「微高地2」の東側に繋がる。10-2a層は(B)、(A)のいずれかということになる。水田の時期については、459溝を10-2a層下面遺構と捉えて、弥生時代後期末～前期初頭頃(A)の可能性が高いと考えている。

微高地を中心に古墳時代の遺構を多く検出したが、主に布留式期の遺構と古墳時代後期を中心とする遺構に分けられる。

微高地1、及び調査区南側では10-2a層に伴う布留式期Ⅲ・Ⅳの遺構が確認できた。715溝は既往の調査区でも検出されており、当該期の水路と考えられる。当調査区では水田畦畔は検出できなかったが、南接する05-2調査区では水田を検出している。687落ち込みは北側に杭を打設しており、水田域と微高地を区画するようなのかもしれない。三連壺が612・687落ち込みで出土していることから、関連した遺構である可能性が高い。687落ち込みから出土する遺物は高杯が多く、三連壺の出土など、祭祀的な様相もみられる。調査区の西に位置する91-2調査区では、この落ち込みに近接して破鏡を出土した土坑が位置しており興味深い。上層からの出土遺物には当該期のものや、庄内式期のものも出土してはいるが概して少なく、縁辺部の様相を示していると考えられる。10-2a層下面遺構は微高地1の縁辺を画する542溝より南側に広がっており、遺構は調査区外東側に広がる可能性が高い。542溝も612落ち込みの遺物から、当該期に帰属する可能性が高い。

微高地1・2を通して検出した多数のピットは、上層に巻き上げられた遺物から古墳時代後期後半を中心とすると考えられる。7世紀前半の遺物の出土も目立ち、10-1層の下限は幅を持たせる必要があるかもしれない。この点に関しては遺存状況が悪く今後の課題である。建物等を復元することはできなかったが、東側では遺構の分布が広がっており、集落の中心が東側に展開する可能性は十分に考えられる。微高地2に関しては、細長い微高地の縁辺にピットが列をなすような状況で、北接する02-1調査区でも同様の状況である。建物など検出できておらず、ピットの性格は不明である。

7・8世紀に関しては、微高地1に沿って8世紀初頭の土器埋納遺構を検出した。同様の遺構は05-2調査区では飛鳥時代、06-2調査区では8世紀初頭の土器埋納遺構が出土している。土器埋納遺構の存在は当該期に積極的な活動がされたことを示しているといえ、調査区周辺では、7・8世紀代の土地に対しての働きかけは濃厚といえる。そういった中で、南北方向の342溝は重要であり、表層の条里地割に先行する正方位の地割の存在を補強するものとなった。更にいえば、福万寺地区で検出した水路35と距離にして447m、約4町であり、「条里型地割」であったことはほぼ確定できよう。詳細は先に述べたが、溝の掘削時期に関しては、7世紀の遺物は10-1a層の下限の問題もあり、今後の調査成果を待って考えたい。しかし、地割内部をみれば、9面の地形は、地形の凹凸が解消されておらず、前節で見たように、地形に沿った畝の畝溝や溝などがみられた。02-1調査区や97-3調査区でも斜め方向の溝を検出している。この段階では地割内はむしろ地形に即した利用が多かったことも考えられる。地割内部が正方位を意識して使用されるのは当調査区では表層の条里地割が施工された後と考えられる。

第4節 弥生時代の調査

12～14面では弥生時代中期～前期の水田を4面検出した。

12面の記述に至る前に11層の状況について若干述べたい。基本層序で述べたように11層は5枚に細分したが、11-3～11-5層は基本的にはb層の細分と考え、平面的な調査は行っていない。しかし、11b層の堆積の間、当調査区において人々の活動痕跡がまったくみられなかったわけではない。その一つに杭列があげられる。杭の打設面の判断は非常に困難ではあるが、検出した位置から判断して11層に関連したものである可能性が指摘できる。まず、12面全体が細粒のシルトを主体とする氾濫堆積物によって埋没する。この段階では湿地状の環境であったことが想定される（11-5層）。12-1a面に残された足跡の多くはこの段階以降のものである。その後、12面段階に機能していた河川が埋没、水田面であった低い場所が流路化したと考えられる。分厚い砂礫～粗砂を主体とする11-4層は細部を観察すると、流芯を移動させながら埋没していったことが分かる。平坦な低地であった水田面も流路の周囲、あるいは流路自体が埋没し、ある程度埋没が進んだ段階には12面を下刻するような流路となり、最終的にはこの部分が自然堤防化、周囲は後背湿地となり、シルトを主体（11-3層）に堆積が進んだものと考えられる（図版1-3）。またクレパスプレーも確認できる。ただし、11-4層における各流路の把握はそれぞれに伴う肩部、土壌層が確認できず困難である。12-1a面の抉られた部分、及び土層断面を手掛かりにするなら11b層の大きな流れは図94の範囲を中心に流芯を移動させながら土砂を堆積させている。これを見ると、調査区南西隅で分岐し、1本は北東方向に向かい、調査区中ほどで北西方向に蛇行している（流路1）。屈曲部分は、南半では西側の微高地が大きく抉れ、屈曲後は東側の微高地縁辺が攻撃面となり大きく抉れている。途中、クレパスプレーが調査区中央の南北側溝付近にみられる。この範囲では12-1a層上部が削平されており、足跡が多くみられた（図94の細かい点は足跡である）。もう1本は調査区外、西側を北方向に向かうと想定される（流路2）。

検出した杭はいずれも自然木の先端を尖らせただけのもので、樹皮が残るものが多い。

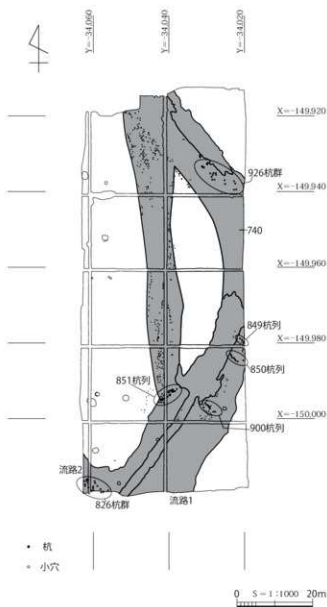
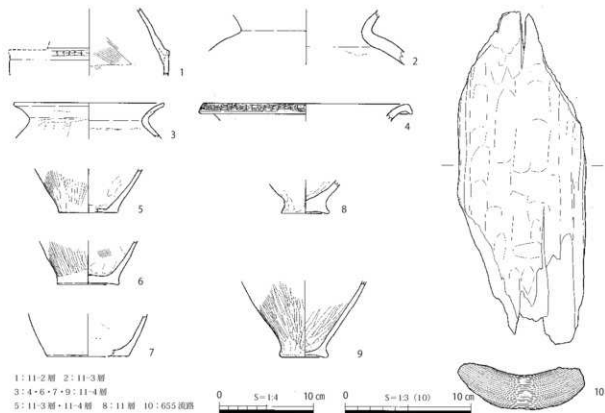


図94 第11b層流路・杭位置図

直径は2～5cm程度で大きなものはみられない。任意に一部をサンプリングし、樹種同定を行った(表9参照)。826杭群は調査区南西隅、流路1・2の分岐する箇所分布しており、851杭列は流路2が破壊した部分に分布する。杭が遺存しない部分でも杭痕跡の小穴が多く見られた。流路の固定を行ったものであろうか。826杭群の杭は現状で0.32mのものが最も長い。ヤナギ属・アカガシ垂属・ヤマグワが使用されている。851杭列の杭は現状で0.41mのものが最も長い。ヤナギ属、ホウノキ、ヤマグワなどが使用されている。849・850・900杭列は平行しており、流路1の流れに対して直行している。丁度大きく下面が抉られた範囲の東側に分布している。926杭群は杭自体の遺存状況は悪いが、周辺で杭穴が多くみられた。大きく抉られる範囲の西側に位置している。849杭列の杭は現状で0.32mのものが最も長い。ヤマグワが使用されている。850杭列の杭は現状で0.4mのものが最も長い。ヤナギ、ケヤキが使用されている。900杭列の杭は2cm前後と小さく、現状で0.26mのものが最も長い。ヤマグワ、ヤナギ、サカキが使用されている。既往の調査でも同様に11b層中に打設されたと考えられる杭が検出されている。こういった活発な流路への働きかけが見られることから、氾濫の中心部より離れた安定した部分ではこの段階に対応する土壌層が確認できる可能性は高いと考えられる。なお、杭について放射性炭素年代測定(AMS法)を行った(第5章参照)。

出土遺物(図95) 11層からの遺物出土は少ない。1・8は11-2層から出土した。1は手焙形土器である。8は鉢底部。1・8は弥生時代後期後半の時期が与えられる。3～7・9は11-3～4層から出土した。2は壺体部である。3は甕口縁部。4は広口壺口縁部で、櫛描簾状文を施す。弥生時代中期(河内Ⅲ様式)。5・6・9は甕底部。底部は時期の詳細が不明であるが弥生時代中期の範疇に含まれるものである。7は甕底部。弥生時代前期か。10は655流路から出土した。木目に沿って割れており、自然木の可能性も否定できない。



1: 11-2層 2: 11-3層
3: 4-6・7・9: 11-4層
5: 11-3層・11-4層 8: 11層 10: 655流路

図95 第11層 出土遺物

第12面

12層は3枚の土壌層に細分した。12-1a層と12-2a層は暗青灰色の細～粗砂混じりシルト層でb層を挟まず、明確に細分できない部分が多い。調査区南西部では12-1a層が砂を多く含むのに対して12-2a層は少ないなど比較的違いが明瞭な部分もあった。高まり部分では間に明緑灰色のシルトが粒状に点在する部分があり、それを境に12-2a面とした。12-2a面は微高地部分で平面的な調査を行ったが、水田部分ではほとんど細分できなかったことから面的な調査は行っていない。12-3a層は調査当初、725・727大畦畔より西の高い部分でのみ確認しており、古土壌が遺存していると考えていた。しかし、1区の第13面調査時に、水田部分でも12-3a層がみられ、13-1a層が削平されている状況が明らかとなった。また、畦畔・擬似畦畔が検出されるなど、作土層であることも明らかとなった。

12-1a面は1期地区の調査で「12-2a面」、第2黒色粘土層と呼称されている面に対応する。弥生時代中期後半の遺構面である。12-3a面は今回新たに検出された水田面であるが、詳細な時期は遺物がなく不明である。調査区外西側では、先にふれた11b層と同じように、12b層が13面の水田域を中心に流路化して埋積しており、12-3a面はこの間の土壌層と考えられる。ただし、12-1・2a層と12-3a層の間のb層は薄く、12-3b層は調査区西側では比較的厚さがあり、ある程度12b層の堆積が進んだ段階といえる。

第12-1a面 (図96)

11-5層 (b層) に覆われ遺存状況は良好である。微高地、水田、溝を検出した。図94で示した11b層によって挟まれた範囲では遺構は検出できなかった。また、調査区中央の南北断面付近で多くの足跡を検出したが、この足跡は11-5層が残った状況で検出することができ、11-4層で埋まっていることから、12-1a面に伴うものではない。この部分では、11-4層が12-1a面を若干削り込んでおり、畦畔の遺存状況が悪い。761水口付近も11-4層の粗砂によってけずられていた。

調査区の西側は12b層の堆積が厚いため高く、東が低い地形を呈している。しかし、調査区北東及び南東隅には微高地が位置しており高い (737・930微高地)。この2箇所の微高地は13b層によって形成されたもので、11b層によって削られているが、一連のものであったと考えられる。

737微高地 調査区北東に位置しており、既往の06-2調査区「B225微高地」に繋がると想定される。T.P.2.6～2.7mを測る。微高地西縁辺にはわずかに土手状の高まりがみられた。微高地の東肩は西肩に比して緩やかである。06-2調査区では微高地上に「B240溝」が位置しており、東肩はこの溝に繋がる可能性も考えられる。微高地には立木がみられた。樹種はヤマグワ、エノキ属である (表10参照)。このうち、Na3について放射性炭素年代測定 (AMS法) を行った (第5章参照)。また、微高地上では土器を検出した (図99)。遺物は12-1a面直上ではなく、やや上部で出土しており、11-5層堆積中の遺物である。

930微高地 調査区南東隅に位置しており、774大畦畔 (図97) を検出した。既往の05-2調査区「287大畦畔」に繋がる。この畦畔は微高地の西縁辺に位置しており、774大畦畔より東側は微高地であると推測できる。大畦畔の西側はT.P.2.5mの平坦面となっており、立木を検出した。約5mのところまで西側に一段落ち、T.P.2.3mを測る。下段の平坦地は畦畔を検出していることから水田として利用されているが、上段に関しては段の境界部分に畦畔を検出できなかったこと、細かい凹凸もあることから、水田として利用されていなかったと考えられる。

929微高地 調査区北西に位置しており、水田面との比高差はあまりないものの、微高地として捉えておきたい。微高地は12b層を芯とするもので、縁辺には724・725・726の土手状の高まりを施す。928高

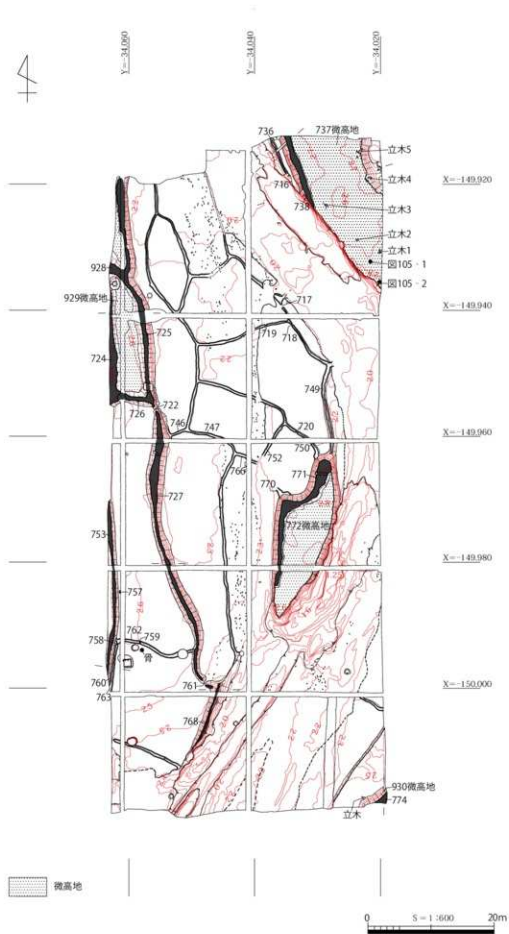


図96 第12-1a面 遺構平面図

まりは725高まりが「く」の字状に屈曲する部分から西に向かつてのびる。928高まりを挟んで微高地南側はT.P.2.6m、北側はT.P.2.7mと高く、北接する02-1調査区の「A532微高地」につながる。なお、微高地下部には12-3b層中にやや土壌化した層がみられた(図97-土層9)。725高まりは幅1.2m、高さは微高地上から0.2mを測る。724高まりは0.4m以上、高さは725高まりと同じく0.2mを測る(図97)。928高まり(図97)は他の高まりとは盛土が異なっている。他は12-2a層と盛土が類似し、細分できなかったが、928高まりは12-3a層を基底面として、細礫〜粗砂混じりシルトを盛土の芯としている。幅は3m前後を測り、高さは0.1〜0.2mを測る。

水田城

水田城は737・930微高地より西側、929微高地及び753大畦畔より東側の低地部分に広がる。737・930微高地西側は11b層によって12層が流出した部分も多いが、737微高地西側では僅かに12-1a層が遺存しており、溝および溝の西側に畦畔を検出した。また、930微高地西側でも一部12-1a層が遺存しており、畦畔を検出している。このことから、水田城は11b層で流出した部分も含めて広がっていたものと考えられる。

先に述べたように、調査区は西が高く東に傾斜する地形を呈していることから、725高まり・727・768大畦畔によって、水田城を東西に区画している。

西側の水田面は高さT.P.2.5〜2.6m、東側の水田面は高さT.P.2.1〜2.3mを測る。大畦畔を境に比高差は0.25mと大きい(図版15-1)。727大畦畔は幅約0.7m、高さは西側水田面から0.2m、768大畦畔は幅0.6m、高さは0.3mを測る(図97)。水口を2箇所で見出した。722水口(図98)は727大畦畔と725高まり間に設けられたものである。761水口(図98)は727大畦畔と768大畦畔の間に設けられたものである。先に述べたように、11-4層によって削られており、東側の水田面には足跡がみられた。

・西側水田城

753大畦畔と727・768大畦畔、929微高地間の水田城である。753大畦畔は929微高地に調査区外で接すると推測できる。この間を東西に支線畦畔で区切って一枚の水田としている。今回の調査区では3枚の水田を検出した。753大畦畔に沿って東側では760溝を検出した。

760溝(図104・図版15-3) 幅約0.3m、深さ約5cmを測る。753大畦畔と平行する763畦畔間を溝としている。溝底部は水田面の高さとはほぼ同じであり、溝を掘削したというより、畦畔を設置することによって溝として機能しているといったほうがよい。溝の埋土は粗砂で機能時の堆積層と考えられる。東西方向の762畦畔と交わる部分で途切れて758水口が切られている。762畦畔にも759水口が切られており、水田面の高低差から北から南への水まわりが想定できる。なお、760溝は作りなおされており、12-2a面では更に北側にのびている。

その他に753大畦畔の東側で757土坑を検出した。

757土坑(図98・図版16-2) 直径0.4m、深さ0.45mを測る。埋土1は自然堆積層であり、11-5b層に対応し、埋設時には土坑は開放していたことが分かる。埋土3・4は自然堆積層で、埋土2は12-1a層に類似しており、中程に細砂が筋状にみられる。12-1a面で一旦ここまで埋設していることが分かる。水溜めのような機能が考えられる。

・東側水田城

水田は基本的に南北方向に幹線畦畔を設けているが、中央付近に島状に772微高地があるためこれに規制されていると考えられる。

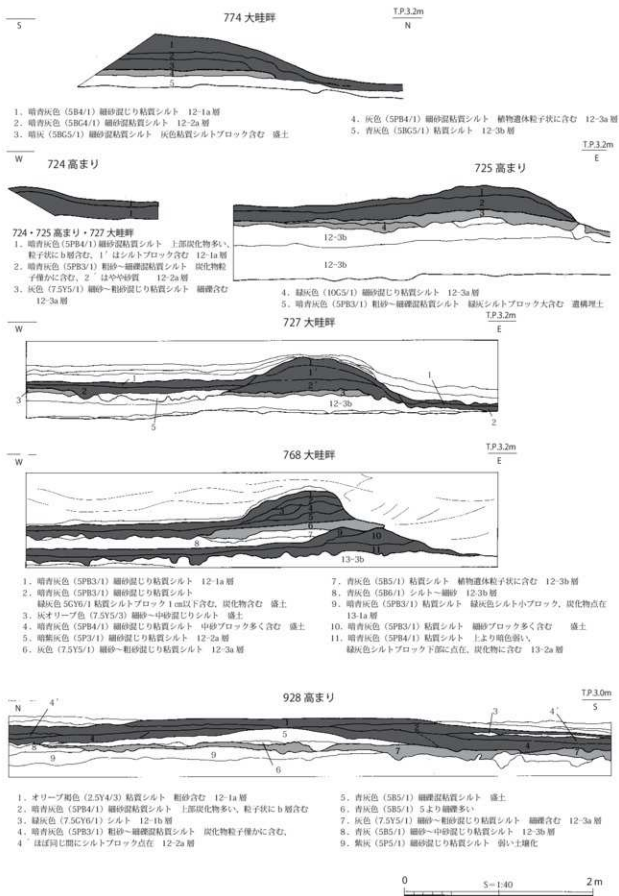


図97 774・727・768大畦畔 724・725・928高まり 断面図

772微高地 この微高地は13b層の氾濫堆積層によって形成されている。T.P.2.8mを測る。この部分が高いのは14-2a面の溝を中心に13b層があふれ微高地を形成したためと考えられ、島状の高まりとなって残っている（詳細は第13面）。772微高地の西側はほぞ状になっており、そこから西縁辺には土手状に幅広の高まりがみられる（771高まり）。ほぞ状になった部分は770・752・750畦畔で区画された水田となっており、微高地を整形して水田としている。その際の掘削土を微高地縁辺に盛土した可能性が高い。この772微高地と768大畦畔、749畦畔によって、東側水田域は更に東西に区画されている。

西側はほぞ状の部分にすりつく770（766・746・747）畦畔を境に南北で水田の区画が異なる。南側の水田はT.P.2.3mと平坦で南北方向の畦畔で大きく2分し、北側は地形に合わせて、南北方向の畦畔を弧状に配し、比較的細かく東西の畦畔で区画している。水田面の高さがT.P.2.1~2.3mと比高差があることによる。水口を4箇所で見出した（717~720水口）。719水口は木材でふさがれていた（図98・図版16-1）。木材の片側は畦畔の土盛りの中に埋めていることから、埋設時には水口は塞がれていたと考えられる。樹種はヤマグワである。727大畦畔の水口は761水口が東側水田域の南側に、722水口が北側水田域にそれぞれ対応している。

東側は11b層の撓乱が著しく詳細は不明であるが、北側がT.P.2.1m、南側が2.3mを測り、北に向かって傾斜する。東西に支線畦畔を配するものと考えられる。737微高地に平行して716溝を検出した。

716溝（図99・図版15-2） 716溝は737微高地の西肩に沿って位置する。溝の西肩には736畦畔が設置され、760溝と同様に、溝を掘削したというよりは、大畦畔と畦畔間を溝として利用しており、溝底部と水田面の高さはほとんど同じである。溝の北側は調査区外に延び、南側は11b層によって挟られ、遺存しない。幅約1.0m、深さは0.4m（畦畔上から）を測る。溝は最下層に細～中砂混じりの粘質シルトが堆積しており、機能時の堆積と考えられる（土層8）。それより上部は11b層によって埋没している。細かくみると粘質シルト主体の11-5層堆積後、11-4層は2つに大分でき、溝を中心に細砂主体の11-4層が堆積し、溝が完全に埋没したのち、粗砂～細礫を主体とする11-4層が厚く堆積している（土層4）。この堆積によって、微高地、溝が挟られた他、溝の西側に展開する水田が削平されている。

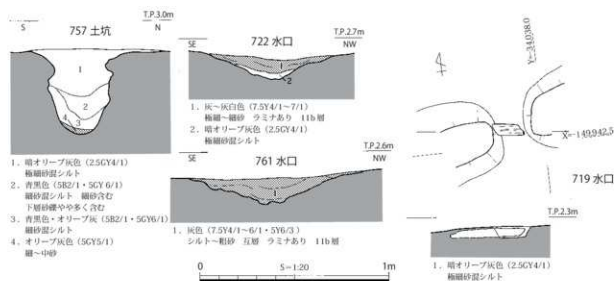


図98 757土坑・722・761・719水口 平・断面図

第12-3a・3b面 (図100・101)

12-3a層は砂を含む灰色のシルト質の土壌である。12-1a面の南北に区画する大畦畔より西側は12-3a層が連続して遺存している。12-2b層はほとんど残っていないが、調査区南西でわずかに確認することができた。この範囲に関しては12-1・2a層除去面を12-3a面 (図100)、12-3a層除去面を12-3b面 (図101) として調査を行った。一方東側は12-1・2a層を除去した時点で12-2b・12-3a・12-3b層のいずれかが露出し、部分的に13層が帯状に露出する状況であった。このことは、12-3b層が調査区西半に比較的厚く堆積するものの調査区西半では非常に薄く、その下面である13面は東側が高く西側が低い地形を呈するためである。その結果、12-3a層が13層を削平するのと同様に、12-3a層が12-1・2a層に削平され、それぞれの遺存状況が悪いことによる。加えて、12-3a層は灰色を呈し、12-1・2a層とは明確に区分できたが、層厚が数cmの間にある12-2b、3a、3b層は色調などが類似し、また連続して遺存しないことから、断面観察ではうまく細分しきれない部分もあった。このような状況から東側に関しては12-3a面、12-3b面の調査を厳密に分けて行うことができず、12-1・2a層除去面を12-3b面として調査を行った。ここで検出した遺構の多くは13a層が帯状に見えるもので、すりついている周囲の土壌が12-3a層であれば、12-3a面の疑似畦畔であるし、12-3b層であれば13面の畦畔ということになる。また12-2b層が遺存していれば12-3a面の畦畔と考えることができる。その他、帯状に色調が異なる部分を検出したが、これについては転写の畦畔と考えられ、12-3b層の上面であれば、12-1a～12-3a面いずれかの転写畦畔ということになる。上記のことに十分留意し、それぞれの畦畔の帰属を判断した。また、畦畔が検出できなかったところに関しても、水田面の高さの差に留意し、できる限り12-3a面の水田を復元した。西側の12-3b面と合成したのが図101である。

第12-3a面 (図100)

土坑、溝、ピットを検出した。

12-1a面の南北に区画する大畦畔に沿って落ち込み状の土坑を3か所で検出した。平面形態は不定形で深さは5cm以下、底部には比較的凹凸がある。埋土は12-1・2層に類似しており、同層の下面遺構と捉えられる。大畦畔の構築に際して、土坑の掘削土を横に盛り土して大畦畔とし、土坑は周囲を平らにならして埋めたものと考えられる。土坑埋土には炭化物が集中して見られる部分があった。

他に12-1a面で検出した760溝に先行する806溝を検出した。

806溝 (図104) 760溝と同位置で検出した。760溝より北側10mのびる。12-2a層上部に溝埋土である粗砂 (埋土6) が見られることから12-2a面に伴うものと判断でき、12-1a面段階に作り直したものである。溝の断面付近では12-3a層はみられなかった。

調査区南西では直交する2本の畦畔を検出した。この範囲は1cm程度ではあるが青灰色シルトの12-2b層が遺存していた。

他に**807・820土坑 (図104)**を検出した。土坑は直径約45cm、深さは807ピットが約15cm、820ピットが約20cmを測る。

第12-3b面 (図101)

ここで検出した遺構は先に示したように、12-1a面の南北の大畦畔より東側は12-1・2層を除去した面である。12-3a面に関連する疑似畦畔、上層に関連する転写畦畔、溝、ピットなどを検出した。

転写畦畔としたのは図101の破線で示したものである。12-1a面で検出した畦畔下部の12-3b層が帯状に変色しているもので、炭酸鉄の集積もみられる (写真17)。

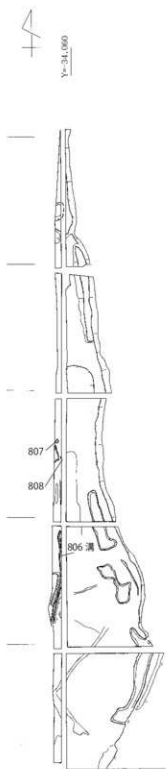


图100 第12-3a面 遺構平面図

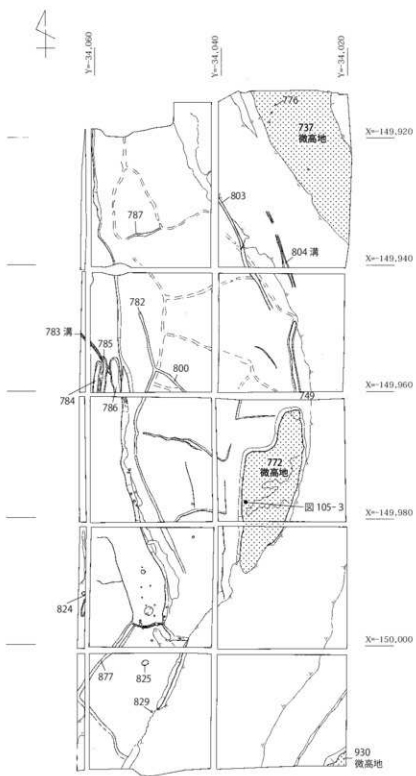


图101 第12-3a・12-3b面 遺構平面図

調査区南西では先述したように、12-3a面の畦畔を検出したが、他では擬似畦畔として12-3a面に関連する畦畔を検出した。基本的には13a層が帯状に露出しており、これに12-3a層がすりついていることから13a面ではなく、12-3a面に伴うものと判断した。同時に13a面の畦畔もその上部を検出したが図には入れていない。

12-3a面は12-1a面と地形的には大きな変化はなかったと考えられる。737・772微高地では12-3a層に対応する土壤層は確認できないが、13面以降、12-1a面まで継続して微高地である。12-1a面で大畦畔を検出した位置で段差をもっており、同様に東と西の水田域に分けることができる。ただし、大畦畔自体は検出することができなかった。この段を境に12-3b層上面ではあるが、0.15m前後の比高差を測る。929微高地は12-3a面でも一段高くなっており、やはり微高地と捉えられる。微高地上では溝、土坑を検出した。

783溝 (図104) 783溝は微高地南縁辺付近を北西-南東方向に延びる溝で、東側水田域に開口する。幅35cm、深さ約20cmを測る。溝の埋土は3層に細分できるが流水堆積は確認できない。12-3a面では検出できず、その段階には埋没していると考えられる。周辺では溝状の浅い土坑(784~786土坑)を検出した。幅0.7~1.5m、深さ5cm前後の南北方向に長い土坑である。土坑は溝より後出する(図版16-5)。土坑は12-3a面で検出した大畦畔に沿った土坑に類似している。785・786土坑は埋土に12-3a層をブロック状に含み、12-3a面の大畦畔、あるいは微高地の高まり構築に伴う土坑と考えられる。

・西側水田域

西側の水田域では、調査区南西側12-3a面で検出した畦畔以外、畦畔は検出できなかった。しかし、水田面のレベル差を反映していると考えられるわずかな段差がみられた。これを推定の畦畔とする(以下同様の段差を推定畦畔と表す)。877畦畔と推定畦畔は角度をもって接しており、概ね東西水田域を区画する段に平行している。877畦畔と推定畦畔交点から東側水田域にのびる小規模な溝を検出した。

828溝 (図103・104・図版16-6) 幅20cm、深さ5cmと小規模なものである。埋土は12-3a層に近似しており、12-3a面下面遺構として捉えられる。図版16-6で溝と直交しているのは13-1a面の畦畔である。

・東側水田域

段に平行して782擬似畦畔を検出した(写真18)。図版17-2、写真19の第13-1a面で白線の入っていない黒い帯は12-3a面畦畔痕跡である。13-1a層が帯状に露出しているが、帯の周囲が12-3b層ではなく、



写真17 擬似(転写)畦畔 検出状況(南東から)



写真18 擬似畦畔 検出状況(南東から)

黒く見えているのは12-1a面 で検出した畦畔の痕跡。土質自体は変わらず、炭酸鉄の集積がみられる。

黒く見えるのは12-3a面の782擬似畦畔。奥にうっすらと見えるのは、12-1a面の転写畦畔。

12-3a層であったため12-3a面の擬似畦畔と判断したものである。段と782擬似畦畔までの距離は約2mと狭い。同様に772微高地の西側2mで12-3a層のすりつきによる推定畦畔を検出した。微高地と推定畦畔までの間はやはり狭い。この間は水田というよりは、溝としての機能を有していたと考えるのが妥当であろう。東西方向にも擬似畦畔及び推定畦畔を検出しており、南北の幹線畦畔間を東西に支線畦畔を配置する水田が復元できる。

この水田域は12-1a面と同様に772微高地を中心に弧状に区画されている。1区側では調査当初12-3a層を認識できていなかったことから、擬似畦畔等、十分に検討できなかったが、772微高地より北側では12-1-2層を除去した段階で、粗砂が混じったシルトが薄くみられ、これがすりつく灰白色のシルト層(12-3b層)を帯状に検出している。12-3a面の擬似畦畔であったと考えられる(803擬似畦畔)。この擬似畦畔の延長にあたる部分で、13-1a面の調査の際に浅い溝を掘削しており、12-3a面の擬似畦畔を溝と誤って掘削してしまった可能性が高い。図101では溝の部分もあわせて記載した。12-1a面の749畦畔は12-1-2a層相当層を除去した段階でも高まり状を呈しており、12-3a層との関係は確認できなかったも



写真19 782擬似(転写)畦畔 検出状況(南から)

白線は13-1a面の畦畔。黒くみえるのは782擬似畦畔。13-1a層が帯状に見えるが、周囲に12-3a層が僅かに残っており、12-3a面の擬似畦畔であることが分かった。



写真20 782擬似畦畔 断面

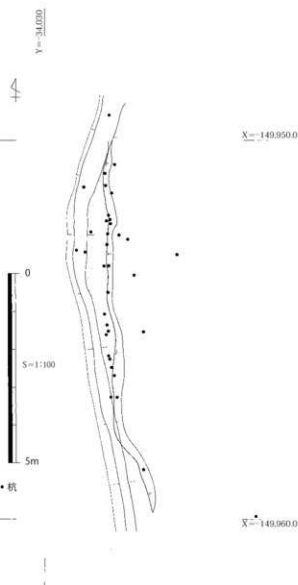


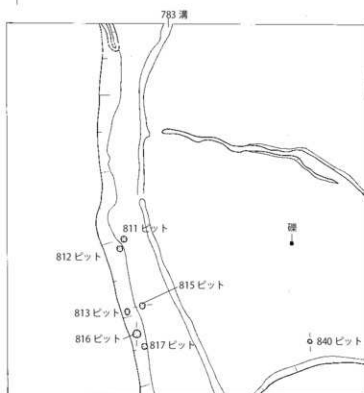
図102 781杭列 平面図



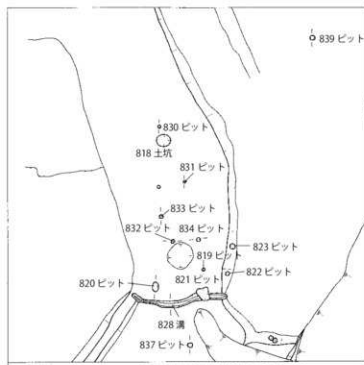
Y=34,000

Y=34,040

X=149,960



X=149,980



X=150,000

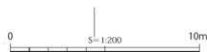


図103 第12-3a・12-3b面 ビット集中部 平面図

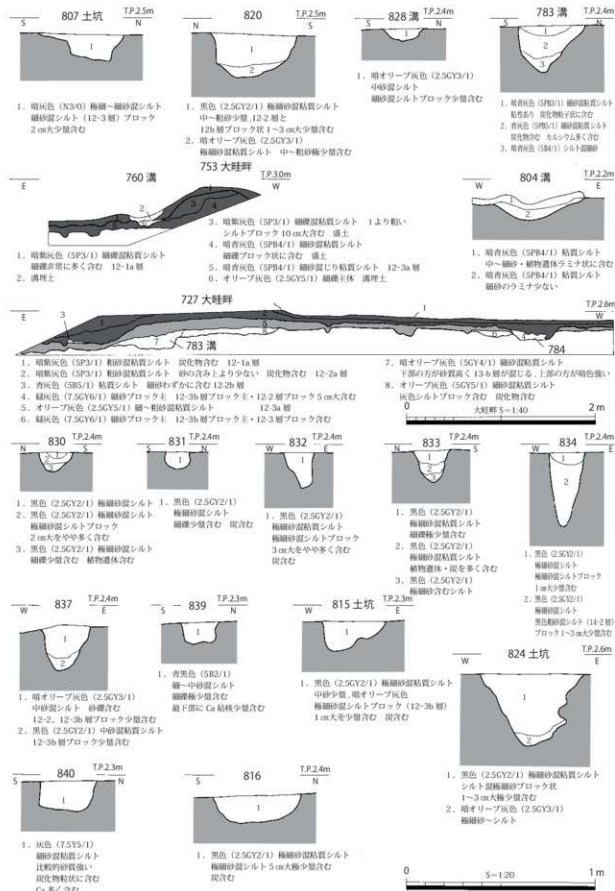


図104 828・783・760・804溝・第12面関連土坑・ピット 断面図

の、この段階でも畦畔である可能性が考えられる。12-1a面とはやや位置がずれて、東西に区画する幹線畦畔が復元できる。749畦畔を除去した段階で781杭列を検出した。杭は畦畔の東肩に沿って分布している。

781杭列 (図102・図版16-4) 749畦畔を除去した12-3b面検出の際に確認したものである。杭周辺は12-3b層に相当する粗い砂層が見られた。杭の打設面の検証は困難であるが、検出した位置から12-1a面・12-3a面の749畦畔に関連する可能性が高い。図では12-1a面の畦畔の位置を重ねて表示した。杭は直径2～3cm前後のものが多く、現状で0.44mのものが最も長く、0.3m以上のものが6本あった。任意にサンプリングしたところ、アカガシ亜属・ヤナギ属・ヤマグワ・ホノキがみられた(表9参照)。なお、杭に関して放射性炭素年代測定(AMS法)を行っている(第5章参照)。

これより東側では水田の痕跡は確認できなかった。749畦畔の西側で溝を1条検出した。

804溝(図104) 幅0.4m、深さ10mを測る。埋土下層に12-3a層に似通った埋土がみられ、上部は自然堆積層で埋没している。12-2b層で埋没していることから12-3a面では溝として機能していたものと考えられる。この溝が途切れた部分から南側でも溝を検出したが、この溝は12-3b層と考えられる粗砂を埋土としており、13-1a面の溝と判断した(804(古)溝)。

12-3b面では他にピット、土坑を検出した。ピットは西側水田域、特に12-1a面の南北大畦畔付近に集中している(図103・104)。直径15～30cm前後を測り、深さは834ピットが約40cmと深い、他は概ね10～20cmを測る。埋土の状況から12-1・2a層下面遺構と考えられる。東側水田域では839・840ピットを検出した。規模は同様である。837・839・840ピットは埋土の状況から12-3a層下面遺構と考えられる。824土坑は調査区西側で検出した。直径55cm、深さ40cmを測る。埋土の状況から12-1・2層下面遺構と考えられる。

以上、できる限り12-3a面の水田面を復元した。12-1a面と比較すると、地形に大きな変化はなく、水田域の大きな区画は基本的に同様である。12-1a面では南北の大畦畔に水口が設けられていたが、12-3a面では溝が掘削されている。廃絶段階には埋まっていたと考えられるが、西から東の水田域への取水の溝であったと考えられる。ただし、細部を見ると違いも指摘できる。西側水田域では水田域を東西に分かつ段に平行して幹線畦畔を設置し、更に内部を支線畦畔で区画しており、12-1a面より1枚あたりの水田が小さい。また、東側水田域では12-1a面では南北で畦畔の区切り方が異なっている点が指摘できたが、12-3a面では復元できる限り、東西に支線となる畦畔で区切っていると考えられる。また、微高地や西側水田域の落ち際は幅約2mほど水田として利用していない、など違いがみられた。

出土遺物(図105)

12層からは遺物の出土は非常に少なかった。1・2は722微高地上で出土した弥生土器である。出土位置は図96に示している。1は先述したように12-1a面出土としているが、厳密には12-1a面よりやや上部、11-5層中と考えられ、12-1a面の廃絶時期を示すものである。1は小形の広口壺である。体部の下半に最大径がある下膨れのものである。頸部には2個一組の紐孔を有する。2は台付鉢。口縁部を2条の凹線文で飾るもので、脚台は欠損しているが、4箇所に透かし孔を有する。底部には穿孔を有する(図版30)。4は高杯の脚裾部である。端部は上方に肥厚し、面を有する。1・2・4は弥生時代中期後葉(河内IV様式)。この時期に12-1a面は廃絶したものと考えられる。3・6～8・10は12-1a(12-2a層も含む)層から出土した。3は壺底部である。6は壺蓋。下層の混入品。7・8は壺体部片である。7は櫛描簾状紋、8は櫛描直線紋を施している。10は木製ヤスである。5は12-3a層から出土

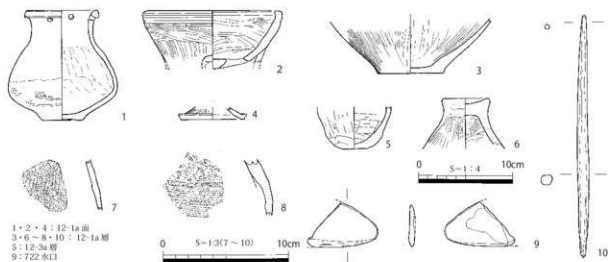


図105 第12層関連 出土遺物

した。ミニチュア鉢か。底部は平たく、コップ状の体部、上部は欠損している。胎土には粗粒砂を含み、内外面は粗く削る。9は石庵丁である。722水口から出土した。その他、759水口付近でテンの骨が出土している。

第13面

13-1a層は暗紫灰色のシルト質土である。池島I期地区の「13層」第3黒色粘土層に対応する土層である。弥生時代前期末～中期初頭の遺構面である。13-1a層上面を13-1a面とした。下部は色調が薄く13-2a層とした。13-3a層は土壌化してはいるものの、植物遺体を多く含んだ層であり、水田耕作土ではないと考えられる。13-3b層は基本的に下層が細粒のシルト、あるいはシルト～細砂の互層であり、中層はやや粗いラミナの明瞭な粗～細砂層である。微高地はこれを芯としたものである。この堆積が薄い部分は湿地状を呈し、粘質シルト層が堆積している。その上部の土壌化した部分が13-3a層と考えられる。13-2a層と13-3a層の間には緑灰色の粘質シルト層が薄くみられ、これを13-2b面とした。

第13-1a面 (図106)

細砂～シルトを主体とした氾濫堆積層である12-3b層除去面が13-1a面である。水田、微高地を検出した。調査区東側は12面と同様に、微高地が位置しており、それより西側が水田域となる。微高地より西側は、南東から北西に向かって標高を減じる地形で、12-1a面の929微高地が位置していた北西隅が最も低く、東西方向でみれば、地形の傾斜が反転している。そのため、西側は12-3b層によって13-1a面が覆われて、畦畔の遺存状況は良好であるが、12-1a面の南北の大畦畔より東側は12b層の堆積が薄く、12-3a層の耕作によって13-1a層の遺存状況は極めて悪い(写真22)。13-2a層が露出する部分がほとんどであった。12層が11b層によって削られた範囲では13-1a層も同様に流出している。

737・930微高地は13b層によって形成されたことは先に述べた(写真21)。氾濫堆積層である13-3b層は14面の低地部分を中心に流路化し、厚く堆積したものと考えられ、13面では微高地としてその痕跡を示している。そのため、微高地は蛇行した形状を示す。12面同様、737・930微高地は06-2調査区の「B337微高地」、05-2調査区の「340微高地」と一連のものと考えられる。

737微高地 (図99) T.P.2.3m～2.5mを測る。微高地の中央部分は0.2m程度窪んでいる。微高地の東端で778溝を検出した。肩部のみであり、溝かあるいは流路か区別できないが、06-2調査区の「B335溝」

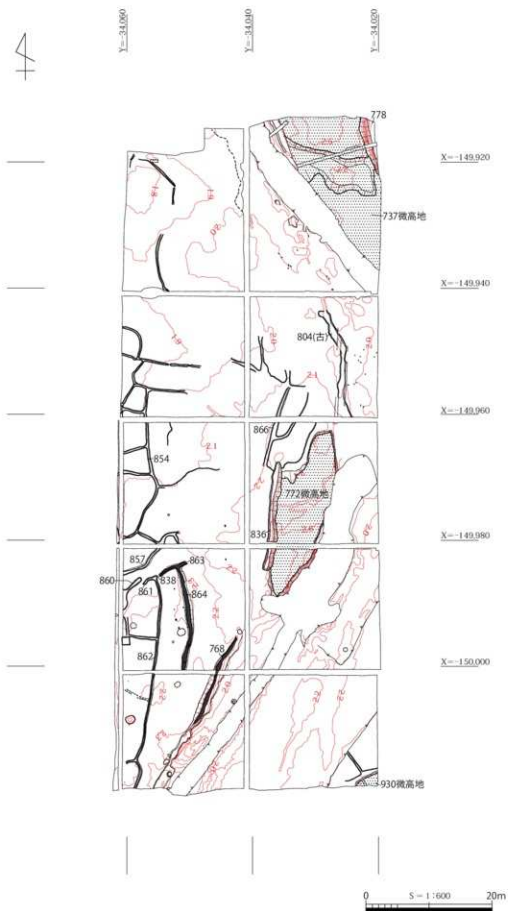


图106 第13-1a面 遺構平面図

に繋がる可能性が高く、ここでは溝と呼称しておく。溝は14-2a層を削っており、深さは1.1m以上を測る。溝の埋土の内、(土層18・19)は流水堆積であり、植物遺体を多く含んでいる。(土層16)には自然木が含まれており、上流側から流されたものであろう。断面観察では(土層20)は5～10cm大のブロックを含んでおり、盛土と考えられる。平面では盛土の範囲は分からなかったが、落ち込み周囲に盛土をしていると考えられる。

水田城

調査区西側で検出した水田城は先に述べたように、12-1面の西側水田城下部では遺存状況がよく畦畔を検出した。ただし、13-1a面を直接覆う12-3b層は粗い粗～砂礫層を主体としており、畦畔上部が削られた部分もある。畦畔が検出できた範囲では、南が高くT.P.2.3m、北西端ではT.P.1.8mと比高差が大きい。水田の区画は1筆が小さく、形状もバラバラな印象をうけるものの、860・861・863畦畔を境に南北2つのまとまりに分けることができる。13-1a層が削られている部分もあるが、等高線をみると、860・861・863畦畔を境に地形の傾斜が変わっている。

南側の水田城は標高2.2～2.3mと高く、全体に平坦である。南北方向にのびる864大畦畔と平行する862畦畔を幹線畦畔とし、東西に支線畦畔で区画している。864大畦畔の南側は検出できなかったが768大畦畔に接するものと考えられる。772微高地までの範囲は不明であるが、推測すると、768・863大畦畔が866畦畔に繋がり、その間を864大畦畔に平行するように畦畔を幹線設置していると考えられる。一方、北側の水田城は標高T.P.1.8～2.2mを測り、南東から北西に標高を減じており、南側の水田城に比して傾斜が大きい。857・854畦畔が弧を描くように設置されており、これに支線畦畔がとりつく。畦畔が途切れた部分から北側は等高線が一旦屈曲することから別の区画である可能性が高い。北側の水田面で花崗岩が1点出土した。20×8cm、厚さ6cmを測る。特に加工は施されていない。

調査区中央付近は13-1a層が削平されている部分が多く、畦畔の様子は不明である。

772微高地は12面同様に微高地である。微高地西縁辺に沿って836溝を検出した。

836溝(図108) 13-2b面で検出した846溝の上部であり、この段階には(埋土11・12)は埋まっていたと考えられる。また、13-2b面で検出した微高地上を横断する873溝は13-1a面でも機能していた可能性が高い。詳細は13-2b面で述べる。一方微高地の東縁辺の延長上では804溝を検出した。

804(古)溝 溝は11b層によって削平されていること、矢板の引き抜きによって攪乱されていること



写真21 737微高地 断面 (南西から)



写真22 畦畔 検出状況 (東から) ※

※13-1a面の畦畔検出状況。手前側は13-2a層が露出している。その奥、検出作業をしている辺りのまだらに見える部分は13-3a層が薄く残っている範囲で、13-1a層が削られている。一番奥の盛り上がりしているのは13-1a面の畦畔。

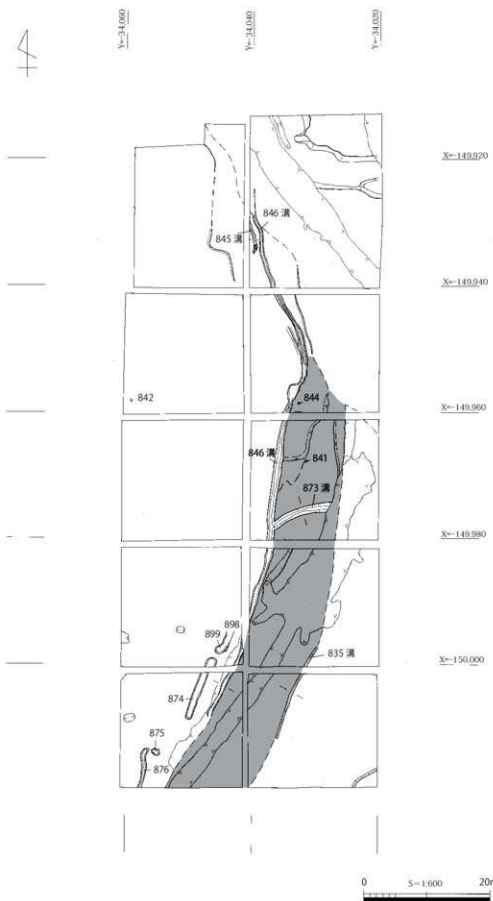


図107 第13-2b面 遺構平面図

から非常に分かりにくい幅は1～1.5mを測り、深さは0.1m以下である。804溝（古）は当初、12-3a面 で検出した804溝と一連の溝として掘削したが、溝の埋土が異なっており、粗砂～砂礫層を主体とすることから、13-1a面に帰属すると判断した。位置的に非常に似通っていることから、13-1a面、12-3a面 いずれも同様の場所に溝が位置していた可能性は高い。

微高地772、768大畦畔、804溝より東側の微高地間は11b層によって削平されよく分からないが、13-2b面の状況からは772微高地がもう少し規模が大きかったことも考えられる。少なくとも、調査区南東隅に位置する930微高地から下がった平坦面で畦畔を1条検出していることから、東側の平坦部にも水田が広がっていたことが考えられる。なお、この平坦面はT.P.2.35mを測る。

第13-2b面（図107）

13-2a層は13-1a層と連続しており、上面での遺構検出は困難と思われた。また調査区東半では13-1a層がなく、13-2a層が大部分で露出したが顕著な遺構は検出できなかった。そのため、13-2a面として面的な調査は行っていない。

13-2b面は13-3a層上部にみられた薄い緑灰色シルト層上部である。溝、土坑、ピットを検出した。

874・899・876土坑（図107） 768大畦畔の西側で874・899土坑を検出した。874土坑は幅1.2mを測り、深さは8cm程度と浅い。899土坑は深さ5cm以下である。埋土は13a層と13b層のブロック土である。862畦畔の脇でも同様に876土坑を検出した。幅0.7m、深さはやはり8cm前後と浅い。埋土は13a層と13b層のブロック土であるが、周辺の13b層が粗砂を主体とするため粗砂を多く含んでいる。12-3面で検出したのと同様に畦畔の構築に関連した土坑と考えられる。なお、876土坑の東側で875土坑を検出した。深さは5cm以下と浅く、埋土は同様のブロック土である。13-1a面では畦畔が検出できなかったが本来は862畦畔に直交する畦畔があった可能性が考えられる。

841・842・844土坑（図108） 土坑を3基検出した。いずれも単発的であり、遺構の性格は不明である。841土坑は直径30cmの円形を呈し、深さ20cmを測る。842土坑は直径50cmの円形を呈し、深さ約30cmを測る。844土坑は直径30cmの円形を呈し、深さ約25cmを測る。いずれの土坑からも遺物の出土はみられなかった。

846溝（図108） 772微高地西縁で846溝を検出した。13-1a面の836溝と同一の溝である。幅0.5～0.8mを測る。13-1a面の768大畦畔、866畦畔に沿って東側に位置している。溝の底部の高さは南断面付近でT.P.1.95m、北断面付近でT.P.1.85mを測り、南から北に傾斜している。溝はX=-149.960ライン付近で屈曲しており、この部分では浅くなっている。北側に向かっているびているが徐々に浅くなり、北端では痕跡程度になる。溝の埋土は3層に大分でき、上層（埋土5・6）、中層（埋土11）、下層（埋土12）に細分できる。上層は12-3b層に相当し、772微高地の西側のみで確認できる（836溝）。これより北側は13-1a面では溝は検出できない。断面観察でも13-2a面までは立ち上がらないことから、13-1a面段階では北側は埋まっていたと判断できる。南側は周囲に13-1・2a層が遺存せず、13-3b層が露出する部分が大半であるが、溝埋土は中層以下と同様であり、検出した部分は少なくとも13-1a面では埋没していたと考えられ、13-2b面の帰属とした。図104の南側断面付近では下層に細～中砂がみられた。機能時の堆積層と考えられる。

873溝（図108） 772微高地を横断し、846溝に合流する。幅1.0m、深さ0.35mを測る。断面図でも明らかのように、この溝の本来の立ち上がりは更に上部であると考えられる。13-1a面検出時、溝にあたる位置で土壌層が確認できず、13-3b層が露出していると考えたが、13-3b層としたものは、溝埋土の

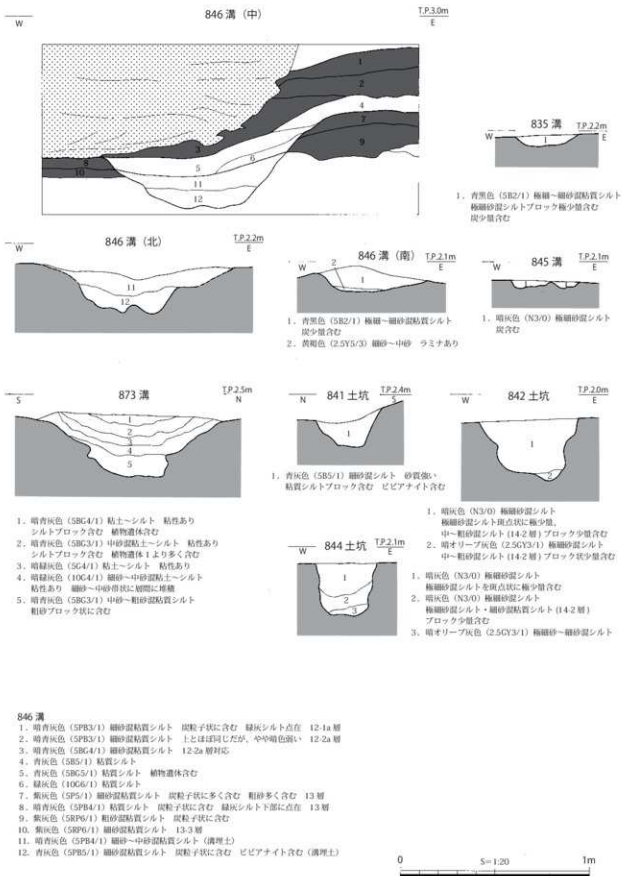


図108 846・845・873・835溝・841・842・844土坑 断面図

一部で12-3b層であったと考えられる。よって873溝は13-1a面で溝として機能していた可能性が高い。溝埋土1～4は粘質シルトの自然堆積層で1～3は12b層、4は機能時の堆積層である。5は中～粗砂混じり粘質シルトで加工時形成層と考えられる。873溝と846溝の関係をみると、873溝の加工時形成層（埋土5）の上部の高さと846溝の（埋土11）の上部、つまり836溝の底部がほぼ一致している。

835溝（図108） 調査区南東で846溝と平行する溝を検出した。幅0.3m、深さ5cmを測る。溝は13-1a面検出の際に既に露出していたが、周辺は13-1a層が削平されている。溝の帰属については推測にはなるが、埋土が13-1a層に類似すること、12b層がみられなかったことから13-2b面に帰属させた。

検出した溝は772微高地に関連するものと考えられる。ここで772微高地についてやや詳しく述べると、微高地は13-3b層によって形成された高まりであり、05-2調査区の14面、「390流路」から、当調査区の14-2a面871溝を中心に埋積したものである。当調査区の中程で871溝よりやや西側に流れを変えて772微高地下部が堆積の中心となっている。この部分はちょうど14-2a面で南側の微高地が途切れ、水田面になる部分にあたる。北側は14-2a面の低地部が広がっており、微高地としての盛り上がりは小さいものとなっていると考えられる。846溝の屈曲部分より北側は北東隅の737微高地を形成した13-3b層が比較的厚く、溝付近から西側では13-3a層が見られることから、737微高地の裾部が当初この辺りに位置していることが推測できる。772微高地もこの辺りで収束、あるいは737微高地と一体になっていたと考えられる。

写真23は772微高地の東肩の断面写真である（X=-149.980ライン）。粗い砂は11-4b層である。微高地縁辺を挟んでいるのが分かる。上部の黒色土は12-1a層と12-2a層である。東に向かって下がっており、本来の微高地の肩部がかろうじて残っている。微高地の下部にみえる細かい砂は13-3b層である。この上部やや、黒い部分が13-1a層である。13-1a層の肩部がかろうじて残っている。微高地東側の低地部では11-4b層が14-2a層を大きく削っている。この部分には14-2a面の871溝が位置しており、写真25（X=-150.000ライン）で見ると下部は13-3b層で埋積し、更に11-4b層（上部の粗い砂）で挟られていることが分かる。11b層で挟られているが、13b層の高まりは05-2調査区の390流路、及び当調査区14-2a面871溝を中心として、南西側に延びていたと推定できる。

図107に772微高地の推定範囲を示した。このように考えると、835溝は772微高地の東縁辺に、846溝は西縁辺に位置することになる。13-1a面の状況を再度整理すると、水田域は772微高地を挟んで、大きく2分されていると推測できる。微高地西縁辺には836溝が位置しており、おそらくは768大畦畔の東側

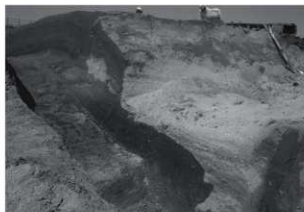


写真23 772微高地東肩付近（X=-149.980ライン）
（南から）



写真24 2区 X=-150.000ライン断面

と微高地間も溝が続いていたと推測できる。836溝は微高地が途切れた部分より北側の水田域に開口している。835溝も13-1a面で検出した804溝と一連で、772微高地東縁辺部の溝として機能していた可能性が考えられる。微高地両側の水路が微高地を横断する873溝で繋がれていたのではないだろうか。836(846)・835溝は少なくとも13-1a面より古い段階に掘削されており、当初の水田ともなうものか、あるいは水田開発に先立って微高地縁辺に溝を掘削したものと考えられる。その後、微高地の一部であった北側は水田として利用され、当初、溝が位置していた部分には畦畔が設置されていることが分かる。

出土遺物(図109) 13層からは非常に遺物の出土が少なかった。1は13-1a層(13-2a層含む)から出土した。広口長頸壺である。やや細長くした算盤玉形の体部に太い頸部がのびる。口縁部は欠損している。頸部外面には櫛描直線紋を7帯めぐらす。弥生時代中期初頭(河内Ⅱ-1様式)の時期が与えられる。2~4・6は13-3b層から出土した。2は壺の底部片である。3、4は弥生時代前期の壺体部片である。3は有軸木葉紋、4は沈線紋を施す。3は13b面で出土しているが、14-2a面の大畦畔が既に露出しており、その付近から出土している。6はサヌカイト製の楔形石器である。上下端が潰れており、両側縁が折損している。5は13-1a面で検出したが、周囲は13b層が露出していた。サヌカイト製の石剣。先端が折損している。13b層の上部で出土した。

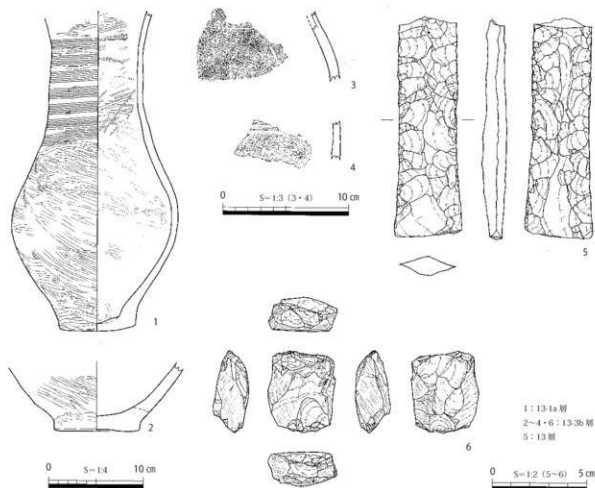


図109 第13面関連 出土遺物

第14面

14層は2層の土壤層に細分した。14-2a層は「14-2a層」第4黒色粘土層に対応する。

14-2b層の堆積をみると、下層は細砂を主体とし、中層はシルト主体、上層は粗砂～細礫を中心とした粗い堆積物で、小さい微高地を形成し、周辺の低い部分にはシルトが堆積している。そのため、これを母材とする14-2a層は高い部分では粗砂を多く含む粗い印象を受け、低い部分では細粒となっている（調査区東西断面西側参照）。水田面を検出した部分は比較的粗粒の14-2a層であった。14-2a層の上層には緑灰色のシルト層の剥層がみられ、その上部にはやや暗色のシルト層がみられる。これを14-1b、14-1a層とした。14-2a層は上層から下層に向けて暗色が斬意的に弱くなり、2層に細分した部分もあるが境界は不明瞭である。一方、14-2a層が比較的砂質な北東側では14-2a層と14-1a層が混ざった状況が認められ、地震の痕跡と考えられる。

14-2a面で水田畦畔が検出できなかった北半部のうち、先の落ち込み以外の部分では14-2a層の上層に粗砂礫を多く含む緑灰色シルト層と混じった土壤層が細分できた。その上部にはやや暗色のシルト層が見られる部分があり、先の14-1a層に対応する。14-2a層上部に部分的に粗砂、砂礫層がもたらされ、土壤化した面と捉えられる。14-2a（上）層と仮称する。なお、97-2調査区で14-2a層上部に確認されているものに対応すると考えられる。

14-2a面は土層断面の観察で水田である可能性が高く、14-1b層あるいは14-1a層の途中で畦畔上部の検出を行う必要があった。14-1a・b層は非常に薄く、14-2a面の畦畔検出作業と区別して行うことが困難であり、また全体的に湿地状の堆積であると判断されたため、14-1層に関して14-1a、b面としての遺構面の調査は行っていない。しかし、14-2a面の畦畔検出作業に伴って遺構を検出したので、14-1b面として報告する。

第14-1b面（図110）

調査区中央付近で溝を検出した。図版19-1で、青灰色の土層が十字に交差している部分がある。溝の性格は不明であるが十字に直交していることから、人為的に掘削されたものと考えられる。埋土は13-3b層に類似し、14-1a面に帰属すると判断した。ただし、13-2b面で既に14-2a面の大畦畔が露出する状況もあり、13層の下面遺構である可能性も否定できない。他に2条、同様の埋土の溝を検出した。

調査区南東部では東西方向に溝を検出したが、輪郭も不明瞭であり、人為的なものではないと判断した。05-2調査区で検出されている地震による地割れと同様のものであろう。その他ピットを1基検出した。ピットは浅く、13層下面遺構の可能性が高い。

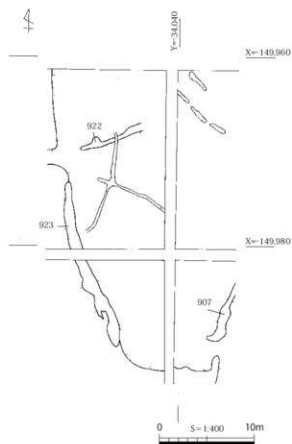


図110 第14-1a面 遺構平面図

第14-2面 (図111)

14-2a面では水田、溝、水口を検出した。調査区は南側が高く、北に向かって下降する地形を呈している。水田を検出したのは調査区中央付近、T.P.1.7~1.9mの範囲である。調査区北東側、破線で示した範囲より北東側は低地であり、T.P.1.4~1.65mを測る。その中間の部分では畦畔が検出できなかった。この部分は前述のとおり、14-2a(上)層が分布する範囲である。14-2a(上)層上面でも遺構検出を試みたが、遺構面は凹凸があり畦畔などの遺構は検出できない。調査区西側6c・d地区では粗砂~細礫層がシルトとあまり混じっていない部分がみられ、この辺りを中心に突帯土器の破片が比較的多く出土した。他では14-2a層も含めて突帯土器の出土は極めて少ない。土器片はさほどローリングは受けていないが、小さい破片が多く、近辺から流されたものと考えている。14-2a(上)層の分布する部分では14-2a層が粗砂~細礫層による削平や、14-2a(上)層によって攪乱されたと考えられる。

水田城

水田城を検出したのは微高地の縁辺部の緩斜面で、微高地と水田面との比高差は0.1~0.2mを測る。微高地縁辺には土手状の高まりを設ける(923高まり)。水田城はこの高まり、水路と考えられる溝及び大畦畔によって4つまとまりに区画されている。水田城の北端に関しては、畦畔を検出できず、復元できなかった。

水田城は871溝を挟んで西と東に大きく分けられ、東側は922大畦畔を挟んで南側(A地区)と北側(B地区)、847溝及び微高地が途切れた地点から北側(C地区)の3つの地区に分けることができる。922大畦畔より南側のA地区は南北方向に弧状の畦畔で区画し、これを東西の畦畔で区画することで1筆あたり、20m前後の小規模な方形の水田としている。東の区画の大きい水田は更に畦畔で区画されていたと考えられる。水田面の高さはT.P.1.8~1.9mを測り、全体としては西側が高く、東側が低い。922大畦畔より北側のB地区は畦畔の遺存状況があまりよくないが、東西方向を幹線畦畔とするようである。水田面の高さはT.P.1.7~1.8mを測る。微高地より北側のC地区はT.P.1.6~1.7mを測る。B、C地区は大畦畔などでは区画されていない。畦畔をうまく検出できず、水田の全体の状況は不明であるが、ある程度の推測を加えると、B地区は1.7mの等高線に沿って東側にのび、C地区は低地部の東側に広がっていると考えられる。871溝より東側では微高地縁辺部の高まりは確認できなかった。一段落ちた部分で遺存状況が悪かったが、畦畔状の高まりを検出しており、大部分が調査区外になるが、水田城であると考えている(D地区)。T.P.1.6m前後を測る。

微高地上では水路と考えられる847・871・912溝の3本と、付随する溝、水口を検出した(図112)。水路はいずれも両側に堤状の高まりを有している。

847溝 調査区西端を南北方向にはしるもので、微高地の高い部分に位置している。この部分が高いのは14-2b層中の流路が位置していることによる(図6、7調査区東西断面参照)。溝は両側に堤状の894・924高まりを有しており、893高まりは溝の堤と微高地縁辺部の高まりを兼ねるものである。幅1.3~1.5m、堤からの深さ0.3~0.45mを測る。溝の埋土は大きく3層に分けられ、下層は14-2b層である粗砂~細礫を主体とする加工時形成層、中層は細砂~細礫を含んだ粘質シルト層で、14-2a層を含んでおり、溝の肩部が崩れたり、削ったりしたものと考えられる。機能時の堆積層である。流水堆積は顕著ではない。上層は13b層~14-1層で埋没している。北側は微高地が途切れる部分で溝も途切れ、C地区の水田城に向かって開口している。溝が開口した位置より西側の水田面は高さが約T.P.1.6mより低く、西に向かって下降している。西側と北側に向かう傾斜変換点に取水口が位置しているといえる。15m南

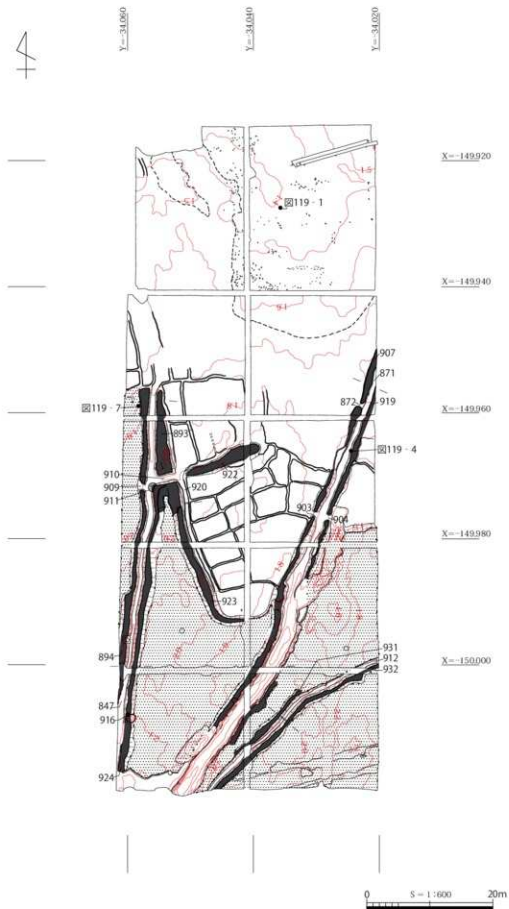


图111 第14-2a面 遺構平面図

ではA・B地区に向かって溝が分岐している(910溝)。

910溝 910溝は847溝から水田域に取水する導水路である。幅1.5m、深さ0.3mを測る。埋土は最下層にラミナを有する粗砂がみられ、機能時の堆積層と考えられる。847溝との交点付近の溝肩口では、土器が出土した(図113、911土器溜り)。土器は破片が散らばった様子であったが、図119-3に復元できた。弥生時代前期の甕である。910溝の延長上には水田をA・B地区に分ける**922大畦畔**が位置している。910溝から水田域にひかれた用水は922大畦畔によってA・B地区に振り分けられる。南側は920溝に分水され、北側は直接水田に落ちる。

920溝 微高地縁辺の高まりに平行して、畦畔をつくり、その間を溝として利用している。そのため溝の底部と水田面にはほとんど高低差はみられない。幅は0.7m、畦畔からの深さは5～10cmを測る。910溝から導水された用水をA地区の南端まで送るための溝と考えられる。溝の最下層は細～粗砂で、910溝と同様、機能時堆積層と考えられる。

871溝 水田域を東西に分けて、南西～北東方向にはしる溝である。溝の南半部は13b層で抉られており、堤の遺存状況は悪いが**919・907高まり**を両側に有している。溝の肩部も内側が大きく抉られて、溝の底部も削られている(図112・写真25)。両側の堤が遺存する部分で幅1.5m前後を測る。水田域と接して堤が途切れる部分(水口)を3箇所検出した。**904水口**は871溝の東側の919高まりに設けられた水口である。幅0.8mを測る。**903水口**は871溝の西側の907高まりに設けられた水口である。幅0.8mを測る。904水口のちょうど東側に位置している。水口が位置するのは、溝の東側の微高地が途切れる部分に一致している。904水口はD地区の取水のための水口と考えられ、903水口は西側の水田域の傾斜を考えれば、排水のための水口と考えられる。**872水口**は903水口の北西側18mの位置で検出した。幅約0.7mを測る。溝の両脇の堤は痕跡程度であった。西側では畦畔は検出できなかったが、903水口同様、排水のため水口と考えられる。871溝は微高地が途切れた部分より北では、西側のA～C地区の水田域より低地に位置しており、排水路としての機能も有すると考えられる。

912溝 912溝は871溝の東側、微高地上を南西～北東方向に走る溝である。溝の両脇には**931・932高まり**を有する。幅1.3m、深さ0.3mを測る。溝の埋土は847・871溝と同様で、規模も847・871溝に類似する。おそらく調査区外東側、微高地東縁辺にあるであろう水田域の取水のための水路と考えられる。

他に堤の下部で土器が出土した。847溝の東側の924高まりの下部で916土坑を検出した。土坑は1面の井戸に攪乱されているが、直径0.55mの円形と推定でき、深さは検出面から0.2mを測る。土坑内から、弥生時代前期の鉢が1個体出土した(図115)。土器の一部は井戸の埋土より出土しており、本来は完形の鉢であったと考えられる(図119-2)。土坑の掘り込みは14-2b面で検出しており、土坑の立ち上がりは14-2a層では確認できなかったが、溝の掘削に伴って土坑を掘削し、土器を故意に埋めたものと考えられる。また、871溝の東側の919高まり下部でも土器が出土した(図114)。ほぼ完形の弥生時代前期の甕に復元できる(図119-4)。土器は溝の肩口に近く、堤の上部から5cm前後下部で潰れて出土している。いずれも溝の掘削に伴って土器を埋納したのと考えられる。

以上、水田域と水路、付随する施設について個別にみてきたが、ここで簡単にまとめたい。

847・871・912溝は、調査区の南西部から放射状に広がっていることが指摘できる。05-2調査区では、13b層の攪乱によって詳細が不明な部分もあるが、複数の溝が集中していることが分かる(図122)。これより南側から取水して、05-2調査区南西部から当調査区南西側を中心に放射状に各溝がのび、微高地上を長く導水して、微高地縁辺の水田域にそれぞれ用水を回していることが指摘できる。こ

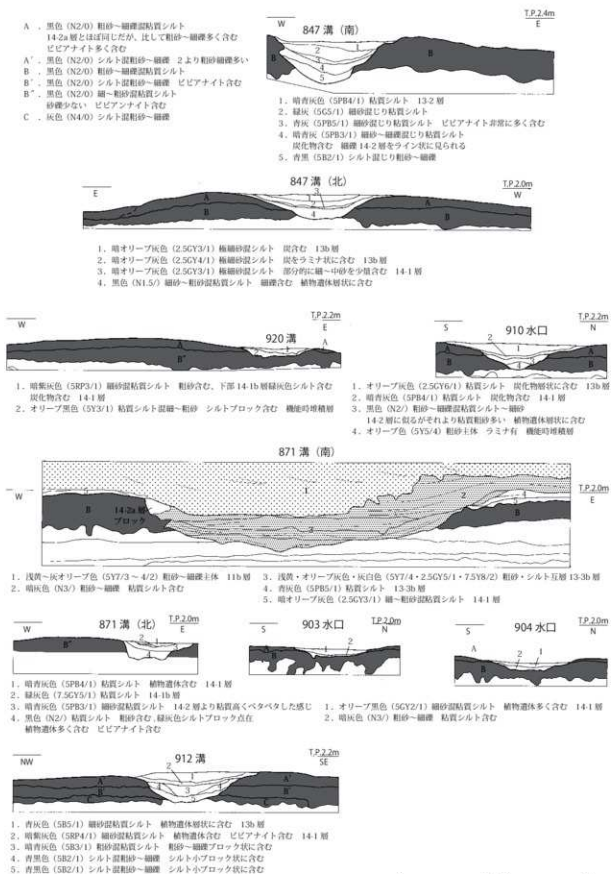


図112 溝・水口断面図

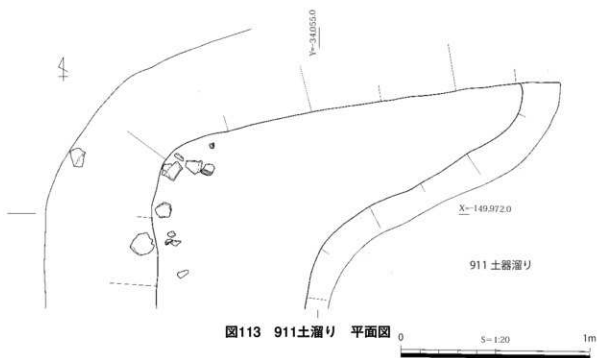


図113 911土溜り 平面図

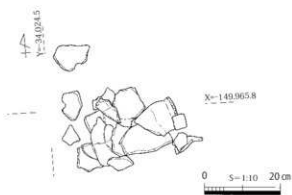
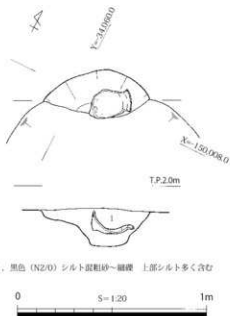


図114 919大畦群内 土器出土状況図



1. 黒色 (N2-0) シルト質粗砂～細礫 上部シルト多く含む

図115 916ピット 平・断面図



写真25 足跡 検出状況 (西から)

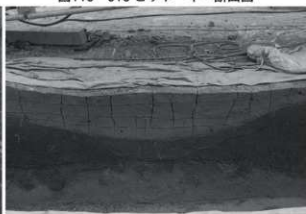


写真26 847溝断面 (X=-149,960ライン) (南から)

の点は非常に重要であり、一見独立的に立地し、有機的な繋がりは見えにくい、水路のもとをただせば、河川からの取水は同じである可能性が高いのではないだろうか。当調査区の水田もこれまで指摘されているように、微高地縁辺の緩斜面に作られている。各水田域は幹線畦畔と支線畦畔が比較的明瞭であり、小さく区画している。低地部との境界がどのようであったかは確認できなかった。

847溝はA～C地区の水田域の取水路である。水路からの取水口はそれぞれの地区に設けられている。C地区には直接開口して、A・B地区に対しては910導水路によって分水し、更に922大畦畔で2つの地区それぞれに振り分けられ、B地区は直接水田に、A地区は920溝によって最も南の水田にも水をいきわたらせている。3つの水田地区の西側には871溝が位置しており、水田域の西を区画するとともに、微高地が途切れた部分では水田域より低所となり、排水路としての機能を有している。ここでも水口は2か所に切られており、取水同様、地区ごとに排水施設を有している可能性が高い。903水口はA地区の排水のための水口であり、872水口は周辺の畦畔の遺存状況が悪い、推測になるが、B地区の排水の水口と考えられよう。871溝はD地区に対しては取水の溝でもあり、取水、排水の溝を兼ねている。

以上のように、それぞれの地区は取水、排水の施設を別個に有しており、水田ブロックに当てはめることができよう。A～C地区は同じ847溝から取水する大きなまとまりとして捉えることができる。D地区の詳細は不明であるが、取水路が異なっており、水路を挟んで区画されていることから別のまとまりとして捉えられよう。

低地部

調査区北東の低地部では、先に述べたように地震によって14-1層との混じりが大きい。人やシカなど、多くの足跡を検出した(写真25)。足跡は13b層が充填されており、14-1a面に帰属するものである。低地部では遺構は確認できないが、土器の出土がみられた(図119-1)。また特筆すべき点として、3～4cm大の自然礫が複数点出土した(図版37-e～o)。先述のとおり、14-1層と14-2a層は混じりが多く、14-1層の層厚が薄いこともあり、14-1層中あるいは14-2a層上面の区別が厳密にはできなかった。しかし、いずれにしても両層は細粒のシルト質土であり、このような礫が「自然に出土する土層ではない。よってこれらの礫は人為的に持ち込まれた「遺物」と考えることができる。石材はチャート、砂岩、花崗岩、閃緑岩など複数のものが見られる。いずれも自然礫であり、加工の痕跡はみられない。角のとれた円礫であり、形状は先に示したように3～4cm前後を測り、球形度(長×短×厚×1/3)は0.8前後が多く、似たような大きさの球形であるといえる。重さは最大で55.5g、最小で25.3gを測る。ある程度規格が揃っており(表2)、自然礫は人為的に、また選択的に持ち込まれているといえよう。「投弾」として使用されたと考えられる。水田域や微高地では1点のみの出土で、調査区北側の低地部を中心に10点出土している点から、低地部は「狩場」として利用されていたのではないだろうか。同様の遺物は既往の調査でも14層に関連して出土している。

表2 出土投弾 観察表

図版番号	地区	層名	長(cm)	短(cm)	厚(cm)	平均(cm)	球形度	重(g)	石材	
37 i	15-10j	5.6d	14-1層	4.15	3.4	3.1	3.55	0.86	55.5	薄白頁岩花園カベマタイトの一部
37 j	15-10j	5.6d	14-1b層	3.9	2.8	2.3	3	0.77	31.9	チャート(白色)
37 e	15-10j	3d	14-1層	3.45	2.6	2.3	2.78	0.81	30.5	花崗岩・花崗閃緑岩
37 g	15-10j	5c	14-1層	4.7	3.15	2	3.28	0.7	42.3	砂岩
37 n	15-10j	5e	14-1層	4	3.45	2.4	3.28	0.82	40.7	チャート(白色)
37 k	15-10j	3.4e	14-1b層	4.1	2.6	2.4	3.03	0.74	40.3	チャート
37 l	15-10j	4c	14-1層	3.9	2.7	3	3.2	0.82	42.3	チャート
37 m	15-10j	4c	14-1層	3.5	3.2	2.9	3.2	0.91	45.1	チャート(白色)
37 f	15-10j	6e	14-1b層	4.65	2.7	1.5	2.95	0.63	26.2	砂岩
37 o	15-10j	3b	14-2a層	4.35	3.55	2.9	3.6	0.83	58	チャート(白色)
37 h	11-1A	5-6a	14-2a層	3.5	3.05	1.8	2.78	0.8	25.3	閃緑岩(緑色)

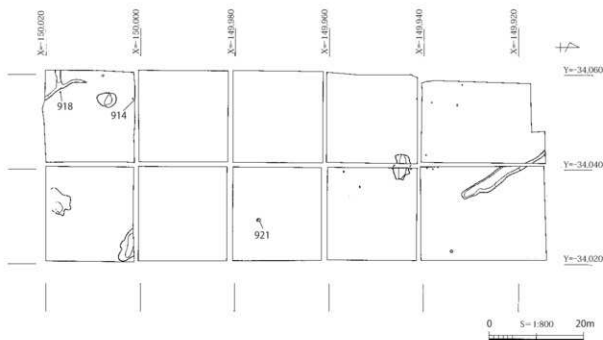


図116 第14-2b面 遺構平面図

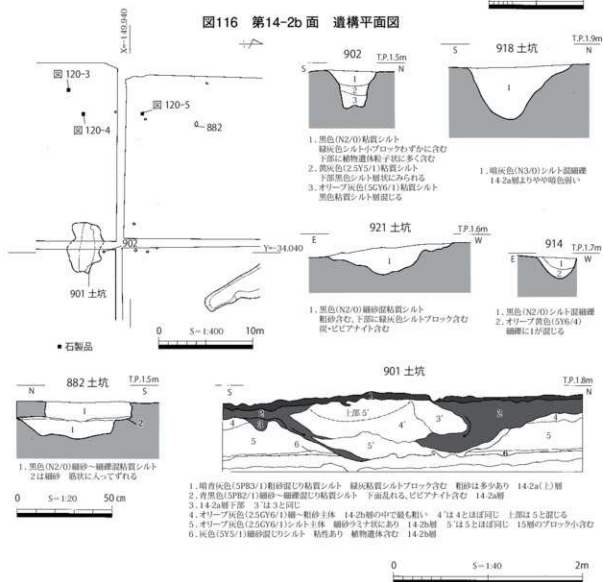


図117 902・914ピット・918・921・882・901土坑 断面図

第14-2b面 (図116)

14-2b面ではピット、土坑を検出した。14-2a層下面是凹凸が激しく、生痕が多くみられる。検出したピットは散発的である。先に述べたように生痕が著しく、ピットではないものも含まれていると考えられる。図117に図化したピットは深さがある程度あり、埋土からも人為的な遺構である可能性が指摘できるものである。ピットは直径0.2m前後、深さ0.1~0.2mを測る。882土坑は調査区北西で検出した。直径0.45m、深さ約0.2mを測る。土坑は細砂の筋を挟んで上半が南に約10~15cmほどずれていることが分かる。地震の痕跡と考えられる。この面では他にも地震の痕跡を確認した。一つは通称「縄文土坑」と呼称されるもので、土坑の両側に14-2a層が落ち込んだ形状を示すものである。今回の調査区では4基確認した。他に14層に関連して噴砂などがみられた。詳細は第3章で述べたので参照されたい。

14-2a層からは特に1調査区北西側で石棒やタタキ石などを検出した。図117に出土位置を示している。調査区北西部6e・d地区では14-2a(上)層の粗砂~礫層に混じって、突帯文土器片が比較的多く出土したことは先に述べた。土器は細片ではあるが、摩滅はさほど著しくなく、周辺部から流されたものと考えられる。縄文時代晩期の遺構が調査区外西側近辺に分布している可能性が考えられる。

出土遺物 (図118・119)

14層からは12~13層までと比べて多くの遺物が出土した。図118は1~10・20は14-1a層、11~19・21・22は14-2a(上)層から出土した遺物である。1~10は弥生時代前期の土器である。1は蓋である。紐穴が1箇所確認できる。2は鉢である。内外面に細かいミガキを密に施す。3は広口壺である。

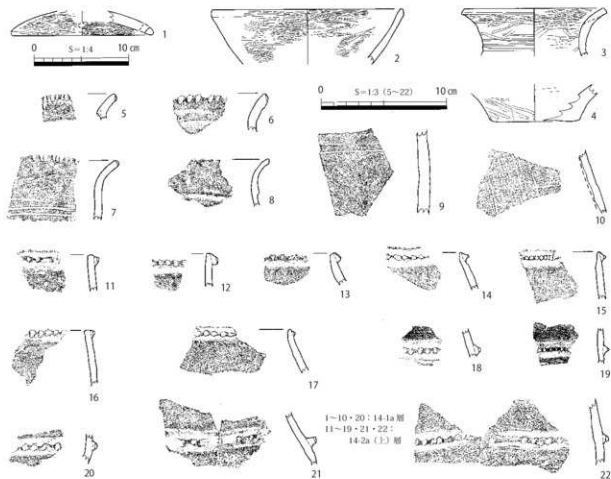


図118 第14層関連出土遺物 (1)

頸部にヘラ描き沈線を3条施す。4は底部である。5～7は甕の口縁部である。いずれも端部に刻みを施す。5は口縁部の屈曲が強い。6は段を有する。7は体部に2条のヘラ描き沈線を施す。8は器壁が薄い。頸部に段を有する。壺か。9・10は体部片である。9は甕か。沈線が2条めぐり。10は壺か。これらの土器は弥生時代前期の年代が与えられる。3・5などはその中でも新しい特徴を有している。先にも述べたように調査区西側6e・d地区では粗砂・礫層に混じって、突帯文土器が多く出土した。11～22は突帯文土器である。他にも細片は出土しているが、口縁部を中心に突帯が残る遺物を掲載した。底部片なども出土している。全体の形状は不明であるが、深鉢と考えられる。口縁部の突帯は口縁端部に張り付けている。端面は11・16のように面を有するものから、14・15・17のように断面三角形に尖るもの、12・13のようにその中間的なものがみられる。15・16などは刻目が非常に細かい。体部の調整は胴部突帯より上は工具によるナデ、下半はケズリである。縄文時代晩期長原式の時期が与えられる。

図119-1～10は14-2a面に関連して出土したものである。出土位置が分かるものは図111にポイントで示している。1は低地部分、14-2a面から出土した。2は溝の堤下部で916土坑内から出土した。3は910溝付近の肩部より出土した。4は堤状の919高まり内から出土した。5は溝から出土したものと堤から出土したものが接合した。6は871溝から出土した。7は微高地縁辺部より出土した。8は907高まりより出土した。1～8は弥生土器である。1は広口壺である。頸部と体部の境に段を有する。体部にはヘラ描き連弧紋を施す。2は鉢である。口縁部が外反する。内外面とも丁寧にミガキを施す。底部はやや中凹みを呈する。3～5は甕である。3は口縁端部に刻みを有し、頸部には2条のヘラ描沈線紋を施す。4は口縁端部に刻みを有し、体部は上半で段を有する。工具で段の下部を押さえた痕跡が明瞭ではあるが、整っていない。頸部の指頭圧痕が明瞭である。5は口縁端部に刻みを有するが、刻みは全周せず、5方向に施していることが復元できる。頸部には螺旋状にヘラ描き沈線を3周させ、沈線間に竹管紋を配する。体部には縦方向に2列6個を一単位として8方向（復元値）に竹管紋を配する。6は蓋である。7は広口壺の口縁部である。紐穴が2個1対対する2箇所確認できる。頸部には段を有している。8は底部である。以上の土器は弥生時代前期の時期が与えられ、河内I-2様式を中心とするものである。9・10は突帯文土器深鉢である。口縁端部に面を有し、刻目を施す。突帯は口縁端部よりやや下がついて貼り付け、刻目を施す。

11～17は14-2a層から出土した土器である。弥生時代前期～縄文時代晩期の土器が出土した。11は甕の体部片である。段を有しており、刻みを施す（I-1様式）。14～19は突帯文土器の深鉢である。14は口縁端部に刻みを有し、貼り付け突帯にも刻みを施す。18は口縁端部近くに突帯を貼り付け、口縁端部が三角形に尖る。縄文時代晩期長原式の時期が与えられる。16・17は直接接合しないものの同一個体の可能性がある。縄文時代晩期滋賀里式。16は口縁端部にO字状に刻目を施す。17は体部が「く」の字に屈曲し、屈曲部より下半は外面を削る。

18～21は14-2b層から出土した。18・19は突帯文土器深鉢。20は器種不明。器壁は摩滅しているが、わずかに条痕が残る。縄文時代晩期滋賀里式。21はローリングを受けている個体である。縄文時代中期末、北白川C式。

図120は14-2a層から出土した土製品、及び、石製品である。図117に出土地が分かるものはドットで示した。1は板状土鉢である。中央に孔を1か所有し、長軸の端部に対向するように抉りが入れている。胎土に角閃石を含む。2は磨き石である。欠損しており、一部しか出土していない。石材は花崗斑岩。3は叩き石である。非常によく使用されている。敲打による楕円形の窪みが、表表面、側面いず

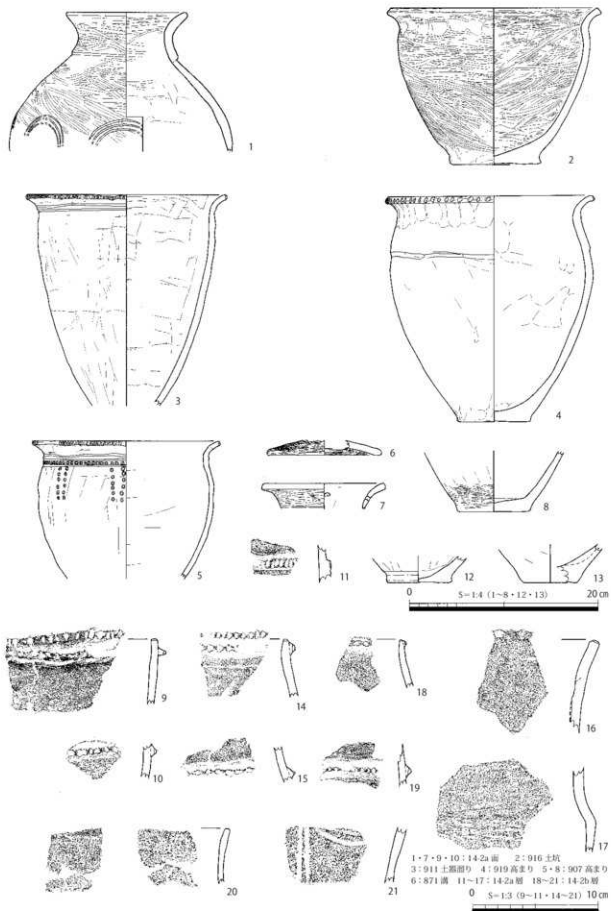


圖119 第14層関連出土遺物(2)

れにも確認できる。また、上下面は敲打によって全体に平坦になっており、全面が使用されている。石材は砂岩である。4も3に非常に似た形状をしており、敲打による明瞭な楕円形の窪みは、1箇所のみである。叩き石として使用されたと考えられる。石材は花崗岩（片状）。5は石棒の欠損品と考えられる。断面は凹形を呈しており、非常に丁寧に研磨されている。かんらん石安山岩。調査区の北東150mに位置する04-2調査区では、縄文時代晩期の遺構、遺物が多数出土しており、石棒などの出土もみられた。当調査区では遺構、遺物とも少ないが、石棒などは縄文時代晩期の時期が与えられよう。

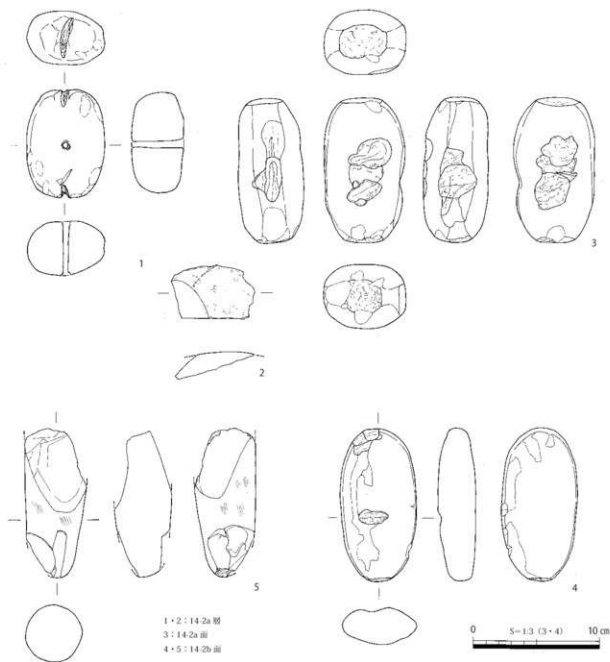


図120 第14層関連出土遺物(3)

第15面 (図121)

第15-1a層は「第5黒色粘土層」と呼称されるものである。植物遺体が層中でも多く残る腐食土層である。ピビアナイトも多く見られた。15-1a面は調査区中央部が南西-北東に馬の背状に高く、北西、南東側に低い地形が復元できる。最も高い部分ではT.P.1.3mを測る。15-1a面の地形と14-2b層をみると、15-1a面の南東、北東の低い部分が14-2b層の下層とした細砂を主体とした流路堆積物によって微高地化し、低い部分には中層としたシルトが堆積している。調査区西側ではその後、粗粒の流路堆積が見られ、調査区西側が流路にそって高くなり、この上部には14-2a面の847溝が掘削されている。なお、この粗粒の堆積物の上部には先に述べたが土壌化した層があり、14-2b層とした中にも安定した面があることを示している。15-1a層からは遺物は出土しなかった。断面観察で15-1a層より約10cm下層で暗色帯を確認した。15-1a層に比して暗色は弱く、灰色の細砂混じりシルト層である。15-2a層と仮称することとする。調査区南西部6j地区、15-2a層上面で土器小片が数点出土した。遺物は体部の小片であり、時期の詳細は不明である。また、床付け付近で円形の落ち込みを検出した。人為的なものか不明であるが15-2a層に類似した埋土であった。今回の調査区では遺構面としての調査は行っていないが、西側に向かって微高地は延びており、今後の調査で注意される土層である。

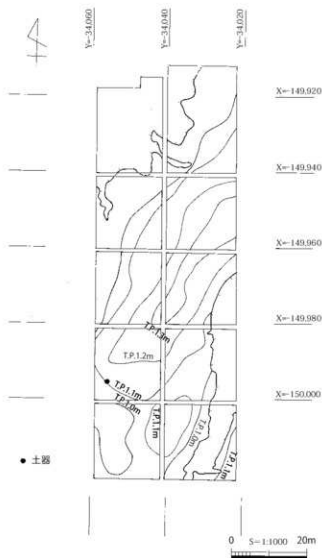


図121 第15a面 遺構平面図

小結

縄文時代晩期・弥生時代前期から中期にかけては氾濫堆積物の供給が活発で、地形が大きく変化している。地形に対応して、既往の調査区同様、水田として利用されていることがわかった。

既往の調査区も含め、当時の地形を概観すると、14-2a面を形成した14-2b層は15面で網目状とも表される流路を埋積しながら自然堤防を形成している。自然堤防はあまり長くはのびず、I期地区の南東側ではほぼ収束している。巨視的にみれば、2つの南東方向の微高地のようにみえるが、複数の小河川による自然堤防があわさっていると考えられ、微高地縁辺部は入り組んでおり、微高地上も旧河川の名残をとどめた凹凸が比較的めだつのではないかと考えられる。13b層以降、11b層までの堆積は、前段階の自然堤防間の低地部を、流芯を移動させながらも帯となって、南北、あるいは南東-北西方向に長く土砂を運搬し、その結果、南北、南東-北西方向に細長い微高地を形成している。微高地間の低地部は

次の段階にはやはり流路の帯となり、地形の逆転現象もみられる。14-2a面で低地部であった1期地区北西部も13面の段階には自然堤防が形成され、低地部には水田が広がっている。こうした地形環境の大きな変化の中で、当調査区では弥生時代前期～中期にかけて4枚の水田面を検出した。

弥生時代前期（14-2a面）の水田は、これまで指摘されているのと同様に、微高地縁辺の緩斜面に位置している。水田区画も小さい。水田域は取水路の違いから、2つのまとまりとして捉えることができ、その内部は取水・排水の施設をもつブロックが組み合わさって構成されている。これまでの調査では、灌漑水路は、入り組んだ微高地縁辺に散在する各水田域に対して、微高地上を長く導水していることが指摘されている。これらの水路は当調査区に南接する05-2調査区の南西部から当調査区西側を中心に放射状に延びていることが分かる（図122）。逆にいえば、水路は05-2調査区の南西部から、放射状に各微高地縁辺の水田域に延びている。このことから、河川から水路への取水は05-2調査区の南側で、一箇所である可能性が高い。そのように考えると、一見独立しているようにみえる散在した水田域では



図122 第14-2a面 池島地区

あるが、水利系統は根幹を同じくするユニットのようなまとまりとしてとらえることも可能ではないだろうか。当調査区や05-2調査区では北東に向かって延びる水路があることから、この微高地の東側の緩斜面にも水田が広がっている可能性は高い。また、05-2調査区南半をみると、調査区南東隅から延びる数条の溝があることが分かる。13面で何度か触れた微高地772を形成する13b層（05-2調査区「390流路」）がこの部分を挟んでいるため、分かりにくいのが、水路が付け替えられていることも考えられる。また、この「390流路」は取水元の河川から破堤したものである可能性も高い。今回は、十分検討できなかったが、当該期の河川の状況は今後の大きな課題の一つである。

この05-2調査区から放射状に延びる水路は南側の微高地に対応するものと考えられる。もう一つ北側の微高地、その範囲は捉えにくいのが、例えば、06-2調査区に広がる微高地などがそれにあたる。06-2調査区では微高地南側緩斜面に水田域が位置しているが、地形の傾斜から考えると、当調査区の北東側は低く、湿地状となっており、この放射状に延びる一群の溝からの取水は困難であると考えられる。河川からの取水は別系統である可能性が考えられ、未調査部分が多いものの、現時点では別のまとまりとして捉えておきたい。

水田域ではない低地部では投弾が出土した。低地部での活動を推測する上で重要な遺物と考えられる。当遺跡近辺では山賀遺跡の弥生時代前期面や、新上小阪遺跡の前期相当面、同様の遺物が出土しており、当該期における投弾の利用に関して積極的に評価してもいいのではないだろうか。なお、調査区では、打製石器、およびサヌカイト片の出土は極めて少なかった。また、I期地区の北西、水田が検出されていない低地部に位置する溝からは、杭列が検出されており、「築」など漁撈に関わる施設である可能性が指摘されており〔国乗1998〕、出土した土鍾など、水田耕作以外の活動も重要である。

13面～12面の水田をみると、可耕地はほぼ同じといえる。弥生時代前期末～中期初頭の微高地を形成する13b層は調査区東側、及び調査区外東側に中心があり、737・930微高地は12面でも埋没することなく存在している。この微高地上には05-2調査区、06-2調査区の成果をみれば、13～12面にかけての幹線的な水路が存在している。また、調査区中央に島状に位置する772微高地も13b層に由来し、12面でも微高地として遺存している。一方12b層の堆積の中心は調査区外の西側にあり、13-1a面とは地形の傾斜が逆転している。水田域として利用されているのは傾斜の違いはあるが、微高地以外の部分であり、14-2a面に比して広範囲のものとなっている。また、772微高地をみると、水田域は微高地を加工しながら拡大していることが分かる。13-2b面で詳細を述べたが、当初の微高地は図107で示したように大きかったと想定でき、その縁辺には溝を掘削している。この溝の機能に関しては不明であるが、水田として使用する前に排水などを行ったものか、先行する水田面に伴うものであろう。その後、13-1a面では846溝の北側を埋めて、804溝（古）より破線で示したあたりまでは水田域としている。12-1a面では微高地は島状に残り、716溝までは水田域としている。微高地縁辺の改変を行って、東側の水田域を広げていることが分かる。772微高地より東側ではブロック状に混じった土層をわずかに確認した（図107遺構ライン東側、調査区東西断面1の土層65）。11b層によって削られているため、対応層は不明であるが、13～12面で微高地縁辺部を改変している痕跡と考えられる。

各水田域のまとまりをみると、12-1a面と12-3a面は地形的にはほとんど変わらず、同じようなまとまりに分かれている。先に述べた西側水田域、東側水田域がまず分けられ、東側水田域はさらに微高地772・768大畦畔を中心に東西に分けることができる。3つのブロック（西・中央・東）と捉えるのが最も妥当であろう。13-1a面は12面と同様、772微高地に規制され、東側のブロックは同様である。これよ

り西側は12面と傾斜が変わっている。畦畔の遺存状況が悪くよくわからないが、幹線畦畔の状況から先述のように3つ程度のまとまりがあると考えられる。

次に水田域への取水の方法をみることにする。05-2調査区では東側の微高地で、12面、13面それぞれに伴う導水路が検出されている。737・930微高地上の水路から導水路を通して、東側水田域に用水を送っていると考えられる。12-1a面では西側が高いため、西側からの取水が考えられ、水口によって西側ブロックから中央ブロックに用水を送っている。この水口に近接して12-3b面では溝を検出しており、当初溝で導水していたものが、その後埋められて、12-1a面では水口によって東側の水田域に用水を落としていることが分かる。13-1a面では、772微高地縁辺に水路を有しており、西側の水田域に関連する水路と考えられる。地形の傾斜が反転した西側・中央では、当然取水の方法も変わっているが、東側のブロックではほぼ同じといえる。

次に水田域内、東側ブロックは詳細が分からないので、中央、西側のブロックをみると、1筆あたりの水田区画が13面から12面にかけて非常に大きくなっていることは一目了然であり、最も大きな変化として捉えることができる。地形の傾斜は変わっているものの、比高差は12-1a面の西・中央が大きく、13-1a面は全体に緩やかな傾斜である。13-1a面では等高線に平行して大畦畔あるいは幹線畦畔を設置しているが、ある程度平坦な調査区南西側でも非常に細かく支線畦畔で区切っている。また、傾斜が変化する部分では幹線畦畔が乱れているようにみえる。12-1a面では13面で幹線畦畔が変化するような部分が水田単位となっていて、間の支線畦畔をとりはらったものが水田1筆の区画になっている。可耕地の範囲、まとまり自体は12・13面でさほど差はないが、その中の区画の仕方が異なっている状況が考えられる。このことは、水田域における水回りが影響しているのではないだろうか。12-1a面では716溝・760溝を水田域内で検出している。底面がほぼ水田面と等しく、大畦畔ではなく小畦畔を堤状に有する点が特徴的で、設置位置は微高地縁辺に沿って、あるいは大畦畔に沿って設けられている。14-2a面の920溝と同様なつくりである。幹線水路やそこからのびる導水路との関係が不明ではあるが、水路として捉えられるものというより、水田ブロックの中で、地形の傾斜や導水路からの距離など、水回り問題がある部分に設置して、水回りを補助するような、あるいは用水を振り分けるような機能が考えられる。溝を掘削するのではなく、小規模な畦畔を設置している点で、水路というようなものではなく、あくまで補助的な溝といえる。12-3a面でも大畦畔があったと考えられる傾斜変換点や772微高地西側から2m前後の位置に並行する畦畔を設置しており、同様の機能を有するものであろう。こういった水回りを補助するような溝によって1筆あたりの水田区画を大きくしながら、水田間の水回りが可能となっているのではないだろうか。当然のことながら、水田面の平坦化も行っていたと考えられ、大畦畔脇の溝などは畦畔を盛り上げると同時に水田面の平坦化にも関連したものと考えられる。

13-12面では水田域が広くみられたが、次の11b層の堆積ではこの水田域が流路の帯となり、堆積の中心地となっている。この間の活動痕跡として杭の打設を確認することができたが、対応する土壌層は不明である。12-3a層のように、堆積の中心部から離れた部分では安定した土壌層が確認できる可能性もあろう。11b層堆積後の調査区は微高地となり、前節で触れたように、水田域としては使用されていなかったと考えられる。

第5章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村堅太郎・藤根久

1. はじめに

大阪府に位置する池島・福万寺遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表3のとおりである。

試料は池島・福万寺遺跡 07-2 調査区より出土した木製の遺物3点である。試料 No.1 (PLD-14048) は、第12-3b面の781杭列-23より採取された木製の杭である。試料 No.1 は丸木であり、最外5年輪を採取した。試料 No.3 (PLD-14049) は、第12面の737微高地 (No.3) より採取された自然木の可能性のある材である。試料 No.3 は最外年輪が確認できなかったため、より外側3年輪を採取した。試料 No.4 (PLD-14050) は、第11b層の850杭列-3より採取された木製の杭である。試料 No.4 は丸木であり、最外4年輪を採取した。試料の時期は、発掘調査所見により、試料 No.1 と3が弥生時代中期、試料 No.4 が弥生時代中期～後期と推定されている。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表3 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14048	試料No.1 地区割:10-3f 遺構面:第12-3b面 遺構:781杭列-23 出土年月日:20090520	試料の種類:木製の杭(丸木,直径37mm,9年輪,エノキ属) 試料の性状:最外年輪(最外5年輪) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム,1N,塩酸1.2N)
PLD-14049	試料No.3 地区割:10-4d 遺構面:第12面 遺構:737微高地(No.3) 出土年月日:20090421	試料の種類:自然木(最外年輪確認できず,残存径16cm,エノキ属) 試料の性状:最外年輪以外部位不明(より外側3年輪) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム,1N,塩酸1.2N)
PLD-14050	試料No.4 地区割:10-3j 層位:第11b層 遺構:850杭列-3 出土年月日:20090630	試料の種類:木製の杭(樹皮付丸木,直径40mm,4年輪,ヤナギ属) 試料の性状:最外年輪(最外4年輪) 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム,1N,塩酸1.2N)

結果

表4に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年代校正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に校正した年代範囲を、図123に暦年代校正結果をそれぞれ示す。暦年代校正に用いた年代値は下1桁を丸めてい

ない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ:INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表4 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-14048 試料No.1	-29.25 \pm 0.16	2115 \pm 19	2115 \pm 20	181BC(68.2%)106BC	199BC(88.8%)88BC 77BC(6.6%)57BC
PLD-14049 試料No.3	-28.52 \pm 0.19	2078 \pm 20	2080 \pm 20	149BC(7.4%)140BC 112BC(60.8%)51BC	166BC(95.4%)45BC
PLD-14050 試料No.4	-29.45 \pm 0.12	2125 \pm 19	2125 \pm 20	197BC(45.3%)156BC 136BC(22.9%)114BC	336BC(0.8%)331BC 204BC(91.8%)90BC 73BC(2.8%)59BC

3. 考察

春成 (2004)、小林・春成 (2006)、小林 (2009) を参照し、 2σ 暦年代範囲に着目して結果を整理する。試料 No.1 (PLD-14048) は、199-88calBC (88.8%) および 77-57calBC (6.6%) の範囲を示した。これは紀元前 2 ~ 1 世紀で、弥生時代中期に相当する。

試料 No.3 (PLD-14049) は、166-45calBC (95.4%) の範囲を示した。これは紀元前 2 ~ 1 世紀で、弥生時代中期に相当する。ただし、試料 No.3 は最外年輪ではないため、枯死・伐採年よりもある程度古い年代が得られている可能性に注意する必要がある。

試料 No.4 (PLD-14050) は、336-331calBC (0.8%)、204-90calBC (91.8%)、73-59calBC (2.8%) の範囲を示した。これは紀元前 4 ~ 1 世紀で、弥生時代中期に相当する。なかでも紀元前 3 世紀末 ~ 紀元前 1 世紀初頭の確率が高い。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

春成秀爾 (2004) 近畿・中国の実年代, 弥生時代の実年代, 20-33, 学生社.

小林謙一・春成秀爾 (2006) 近畿地方における年代測定の成果. 新弥生時代のはじまり第1巻 弥生時代の新年代, 96-97, 雄山閣.

小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散. 新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 55-82, 雄山閣.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.

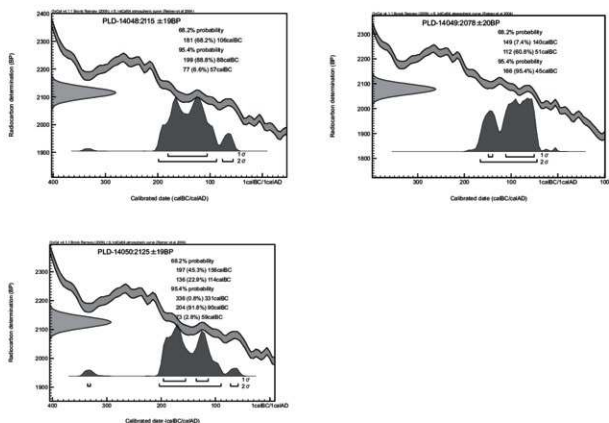


図123 暦年較正結果

第2節 植物珪酸体・花粉・珪藻分析

株式会社 古環境研究所

中世の耕作土および鳥畠に関連したと考えられる溝の埋土に関して、植物珪酸体分析・花粉分析・珪藻分析を行った。分析試料は、調査区東西断面(X=-149.960 ライン)において採集した(図6)上位より、第4a層(サンプルⅠ)、第5a層(サンプルⅡ)、第6-1a層下部層(サンプルⅢ)、254溝上層(サンプルⅣ)、254溝下層(サンプルⅤ)の計5点である。

1. 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体(プラント・オパール)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

2. 分析方法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(ここでは1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75である(杉山, 2000)。

3. 結果

分析試料から検出された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科(メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、

その結果を表5、図124に示した。主要な分類群については顕微鏡写真(写真27)を示す。以下に植物珪酸体の検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違することから、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

- 1) 4a層(サンプルⅠ) イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型およびネザサ節型が検出された。イネは比較的高い密度であるが、他は低い密度である。
 - 2) 5a層(サンプルⅡ) イネ、ヨシ属、ススキ属型、メダケ節型およびネザサ節型が検出された。イネが高い密度である以外は、いずれも低い密度である。
 - 3) 6-1a層下部層(サンプルⅢ) イネ、ススキ属型およびネザサ節型が検出された。イネは高い密度であるが、他は低い密度である。
 - 4) 254溝上層(サンプルⅣ) イネ、ヨシ属、ススキ属型およびネザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。
 - 5) 254溝下層(サンプルⅤ) イネ、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型およびチマキザサ節型が検出されたが、いずれも低い密度である。
4. 池島・福万寺遺跡07-2調査区における稲作

植物珪酸体分析において水田跡の可能性を判断する際の基準は、試料1gあたり5,000個以上の密度でイネ機動細胞珪酸体(プラント・オパール)が検出された場合とされている。これは、発掘調査に先だって行われた分析において、イネ機動細胞珪酸体が5,000個/g以上の密度で検出された地点をもとに推定された水田跡の分布範囲と、実際の発掘調査において検出された水田域とがよく対応する結果が得られていることによる(藤原ほか、1984)。ただし、その後の各地の調査事例で、2,000~3,000個/gの密度でも水田遺構が検出されている例が多々あることから、5,000個/gはあくまで目安であり、植物珪酸体の産出状況や遺構の状態をふまえて判断する必要がある。

上位の4a層、5a層および6-1a層下部層でイネの植物珪酸体が2,400~3,000個/gの比較的高い密度で検出されている。一方、イネ以外の分類群はいずれも低密度である。こうしたことから、これらの層の堆積時には調査地において稲作が行われていたものと考えられる。下位のⅣ層とⅤ層では、イネの植物珪酸体は1,800個/gとやや低い密度である。また、イネ以外の分類群も低い密度である。したがって、当時は近傍において稲作が行われており、254溝は稲作に関連するものであった可能性が考えられる。

文献

- 杉山真二(1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83。
- 杉山真二(2000) 植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学、同成社、p.189-213。
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -。考古学と自然科学、9、p.15-29。
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) - プラント・オパール分析による水田址の探査 -。考古学と自然科学、17、p.73-85。

表5 植物珪酸体分析結果

抽出密度 (単位: ×100個/g)		19-6g 北断面				
分類群 (和名・学名)	層位	試料				
		I	II	III	IV	V
イネ科	Gramineae (Grasses)					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	24	30	30	18	18
キビ族型	Panicaceae type	6				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	6	6		6	6
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	12	18	18	6	6
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)					
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		6			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	12	30	6	6	6
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.					6
その他	Others			6	6	6
未分類等	Unknown	132	186	168	96	114
植物珪酸体総数	Total	192	246	168	138	162

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.70	0.88	0.88	0.53	0.53
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.38	0.38		0.38	0.38
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.15	0.22	0.22	0.07	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>		0.07			
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.06	0.14	0.03	0.03	0.03
チマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.					0.04

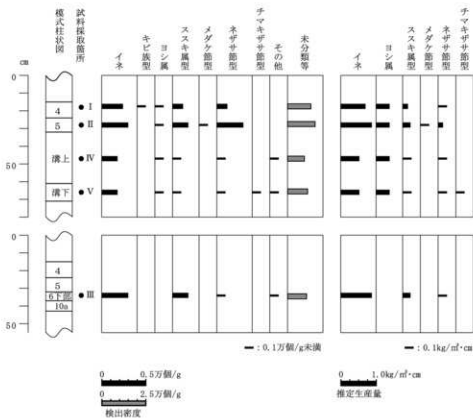


図124 植物珪酸体分析結果

II. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

3. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉21、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉20、シダ植物胞子3形態の計47である。これらの学名と和名および粒数を表6に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図125に示す。主要な分類群は顕微鏡写真（写真28）に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属椎輪管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、トチノキ、モクセイ科、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科

〔草本花粉〕

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ギシギシ属、ツバ属、アカサ科-ヒユ科、ナデシコ科、

キンポウゲ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、アカネ科、タンポポ科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

分析の結果、いずれの試料においても出現傾向に大きな差はなく、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高く、約 65～75%を占める。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）が高率に出現し、次いでカヤツリグサ科が多く、ヨモギ属が伴われる。上位に向かいイネ属型が微増し、ミズアオイ属、オモダカ属などの水田雑草が伴われ、第 8 層ではミズワラビも出現する。また第 5 層、第 4 層ではソバ属がわずかに出現する。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。

4. 花粉分析から推定される植生と環境

第 4a 層、第 5a 層、第 6-1a 層下部層、254 溝上層、254 溝下層は、イネ科と水生植物の多いカヤツリグサ科が繁茂する湿地の環境が考えられる。遺構が溝であることからその土手などにヨモギ属などと共に生育していたと考えられる。イネ属型が水田雑草を伴い出現することから、周辺に水田の分布が示唆される。また、第 5a 層、第 4a 層においてはソバ属花粉が検出され、ソバに代表される畑作も行われていたと考えられる。近隣には樹木は少なく、孤立木ややや遠方にシイ属、コナラ属アカガシ亜属などの照葉樹とコナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科などの針葉樹が分布していたと推定される。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法。角川書店。p.248-262。
 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集。60p。
 中村純 (1967) 花粉分析。古今書院。p.82-110。
 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として。第四紀研究。13,p.187-193。
 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉。考古学と自然科学。第 10 号。p.21-30。
 中村純 (1980) 日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集。91p。

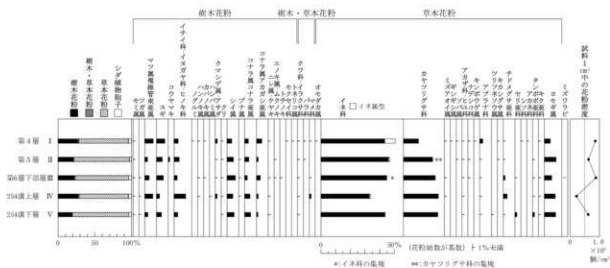


図125 花粉ダイアグラム

表6 花粉分析結果

学名	分類群	和名	10-0g 北断面					
			4層	5層	6層下部	254層上層	254層下層	
			I	II	III	IV	V	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Abies</i>		モミ属	1	3	1	1	1	
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1	1	1	
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属 複雑管束亜属	25	8	12	18	8	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	25	16	19	7	13	
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ		4				
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	12	14	8	26	9	
<i>Platycarya strobilacea</i>		ノグルミ	1					
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	3		1	1		
<i>Betula</i>		カバノキ属	1		1			
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				2		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシダ属-アサダ	6	2	1	4		
<i>Castanea crenata</i>		クリ	2	3	1	1	3	
<i>Castanopsis</i>		シイ属	14	18	23	13	18	
<i>Fagus</i>		ブナ属		1	1	1		
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	11	12	7	12	15	
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	16	5	11	4	4	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属-ケヤキ	1		2	2	2	
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属-ムクノキ		2	1			
<i>Aesculus turbinata</i>		トチノキ			1			
Oleaceae		モクセイ科	1					
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属	1					
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	3	1	3	2	2	
Rosaceae		バラ科	2	2				
Leguminosae		マメ科	2		1	4		
Nonarboreal pollen		草本花粉						
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	1					
Gramineae		イネ科	190	191	179 *	109	164	
<i>Oryza tye</i>		イネ属型	31	4	2	3	1	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	45	83 *	88	79	89	
<i>Monochoria</i>		ミスズアオイ属	2		1	2		
<i>Rumex</i>		ギンギン属	2					
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属	2	2				
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科	1	3	2	1	1	
Caryophyllaceae		ナデシコ科	1	1	1			
<i>Ranunculus</i>		キンボウグ属	2					
Cruciferae		アブラナ科	9	1	3	1	1	
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属					1	
<i>Rotula</i>		キカシグサ属	1	1				
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	1	2	5	9	3	
Apioidae		セリ亜科			2		5	
Labiatae		シソ科	1					
Rubiaceae		アカネ科	1					
Lactucoideae		タンポポ亜科		3	3	2	5	
Asteroidae		キク亜科	3		2	2	3	
<i>Arenaria</i>		ユモギ属	18	33	20	25	29	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単葉溝胞子	8	3	5	5	8	
Celatopteris		ミスワラビ			1			
Tritilate type spore		三葉溝胞子	10	9	10	9	7	
Arboreal pollen		樹木花粉	120	88	91	93	74	
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	7	3	4	6	2	
Nonarboreal pollen		草本花粉	311	324	308	233	302	
Total pollen		花粉総数	438	415	403	332	378	
Pollen frequencies of 1cm ²		試料1cm ² 平均の花粉密度	8.6	6.3	8.8	2.3	6.2	
			$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	$\times 10^{-3}$	
Unknown pollen		未同定花粉	12	9	5	11	12	
Fern spore		シダ植物胞子	18	12	16	14	15	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	

*:集塊

Ⅲ. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗(5~6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

3. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種(淡水生種)11分類群である。表7に分析結果を示す。また、主要な分類群について顕微鏡写真(写真29)を示した。以下に出現した分類群を記載する。

[貧塩性種]

Amphora copulata, *Diploneis* spp., *Eunotia praerupta*, *Gomphonema acuminatum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula cuspidata*, *Navicula mutica*, *Navicula* spp., *Pinnularia borealis*, *Pinnularia schroederii*, *Stauroneis acuta*

(2) 珪藻群集の特徴

254 溝下層、254 溝上層、第6層下部層、第5層、第4層では、いずれの試料も珪藻密度が極めて低く、ほとんど検出されない。254 溝下層では珪藻は検出されず、254 溝上層では流水不定性種の *Amphora copulata*, *Navicula cuspidata*, *Diploneis* spp., 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praerupta*, 陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*, *Pinnularia schroederii*, 好止水性種の *Stauroneis acuta*, 好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Gomphonema acuminatum* がわずかに検出される。上部の第8層では珪藻は検出されず、第5層では流水不定性種の *Navicula cuspidata*, 陸生珪藻の *Navicula mutica* がわずかに検出される。第4層では流水不定性種の *Navicula cuspidata*, *Navicula* spp., 陸生珪藻の *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis* がわずかに検出される。

4. 珪藻分析から推定される堆積環境

第4a層、第5a層、第6-1a層下部層、254 溝上層、254 溝下層からは極めて低密度の珪藻しか検出されなかった。このことから、これらの層準は安定した環境ではなく、流れていたり、滞水していたりあるいは乾燥したりを繰り返す不安定な環境であったと推定され、生育環境に敏感な珪藻類は繁殖しにくかったと考えられる。

参考文献

- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p. 131-506.
- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- K. Krammer · H. Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae · 1-4.
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophylic and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理. 42. p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6. p. 23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究. 第1号. 植生史研究会. p. 29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究. 27. p. 1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DALpo, pH 耐性能. 内田老鶴圃. pp. 666.

表7 珪藻分析結果

分類群	10-6g 北断面				
	4層	5層	6層下部層	254溝上層	254溝下層
	I	II	III	IV	V
貧塩性種 (淡水生種)					
<i>Amphora copulata</i>				7	
<i>Diploneis</i> spp.				4	
<i>Eunotia praerupta</i>				1	
<i>Gomphonema acuminatum</i>				1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>				3	
<i>Navicula cuspidata</i>	1	2		7	
<i>Navicula mutica</i>	1	1			
<i>Navicula</i> spp.	1				
<i>Pinnularia borealis</i>	1				
<i>Pinnularia schroederii</i>				2	
<i>Stauroneis acuta</i>				2	
合計	4	3	0	27	0
未同定	2	0	1	2	0
破片	23	14	11	116	16
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	1.2	6.0	2.0	5.8	0.0
	$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	
完形殻保存率 (%)	-	-	-	-	-

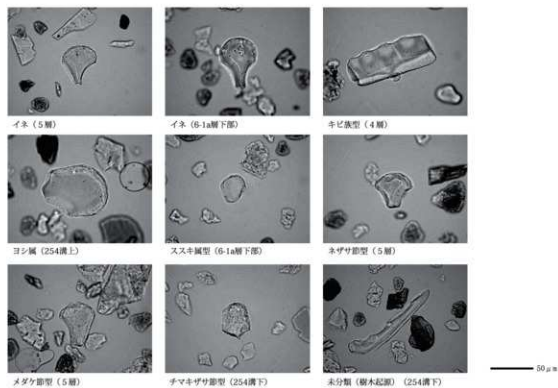
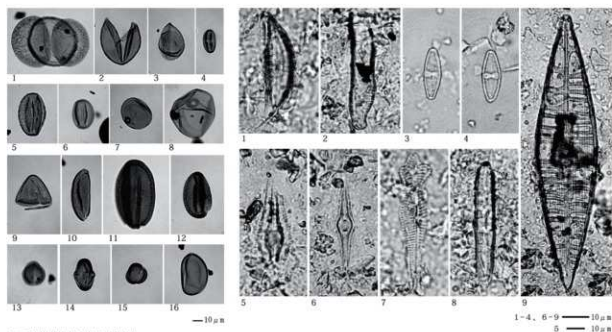


写真27 植物珪酸体の顕微鏡写真



1 マツ属雄穂管束糸属(6-1a解下部)

2 スギ(6-1a解下部)

3 イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科(5種)

4 シイ属(6-1a解下部)

5 コナラ属コナラ亜属(254横上)

6 コナラ属アカガシ亜属(254横上)

7 イネ科(4種)

8 イネ属型(6-1a解下部)

9 カヤツリグサ科(254横下)

10 ミズアオイ属(4種)

11 ソノ属(4種)

12 ソノ属(4種)

13 アブラナ科(4種)

14 チドメグサ亜科(254横上)

15 ヨモギ属(254横上)

16 シダ植物単葉溝胞子(254横下)

1. *Amphora copulata* (254横上)

2. *Eaotia praerupta* (254横上)

3. *Navicula musica* (5種)

4. *Navicula musica* (4種)

5. *Diploneis* spp. (254横上)

6. *Diploneis* spp. (254横上)

7. *Gomphonema acuminatum* (254横上)

8. *Pinnularia schoederii* (254横上)

9. *Navicula cuspidata* (254横上)

写真28 花粉・胞子の顕微鏡写真

写真29 珪藻の顕微鏡写真

第6章 まとめ

今回の調査区でも地形の形成過程と密接に関連して、弥生時代から近世にかけて人々の活動をみる事ができた。第4章では、土砂の供給が活発な段階(第4節)と堆積速度が遅く、安定した段階(第3節)、条里型地割の施工によって土地に規制された段階(第2・1節)に分けて調査成果について記述を進めてきた。それぞれ小結をしており、ここでは少し大きく全体的な流れをまとめることとしたい。

当調査区で最初に水田が検出されるのは弥生時代前期中頃の14-2a面である。突帯文土器の出土はあったものの、当該期の明確な遺構は検出できなかった。その後、弥生時代中期にかけて13-1a面、12-3a面、12-1a面で水田が広がる景観が復元できた。各水田面は氾濫堆積物の供給によって、地形が大きく変わる中、微高地間の低地部で水田域が広がっており、これまでの既往の成果・認識と大きく変わる部分はない。しかし、いくつか今後の課題となる部分もあった。

14-2a面では小結で述べたように、個別的な水田域のようにみえるが、その内部は取水、排水を個別に有する小ブロックの複合体であり、それぞれのまとまりにのびる水路は、放射線状に延びており、河川からの取水は同じである可能性が高い。このことから、ひとつのユニットともとらえられるのではないかと指摘した。また、北側の微高地縁辺に点在する水田域に関しては、水路の系統が異なる可能性が高く、別の単位と考えた方が良いのではないだろうか。この点に関しては、今後の調査で明らかになるものと考えられる。また、水田耕作以外の活動、漁撈や狩猟が近辺で行われていることも考えられた。今回は資料の集成・検討が不十分であったが、今後検討したい課題である。

12-3a面は新たに検出した水田遺構面である。このことは12b層とひとくりにされる氾濫堆積層ではあるが、周辺に土壌を形成するような段階があったことを示しており、土砂の供給が安定している場所では水田耕作が行われていたことが分かった。供給源から更に離れた場所では、上層に削平されて遺存していない可能性が高い。同様のことは11b層に関しても言え、既往の調査区でも「11b層中の安定した段階」と表現されている。今回の調査区でも多数杭列・杭群を検出したが、11b層堆積間の活動痕跡と考えられ、流路化していた当調査区の流路の固定など行っていたのではないだろうか。氾濫堆積層の中心部分では土壌層の把握は困難であるが、今後対応する遺構面が確認できる可能性もあり、その間の活動痕跡があることを念頭に入れなければならない。上記の杭と12-1a面廃絶後の立木、12-3b面に伴う杭に関して、放射性炭素年代測定(AMS法)を行った。結果は5章で示したとおりである。紀元前2～1世紀(試料4は紀元前4～1世紀)と弥生時代中期の年代が測定されたが、年代差を示すことができなかった。この時期は、較正曲線の形状から、測定値に幅ができてしまうことが問題の一つとしてあげられる。年輪など、その年数の幅が分かるのであれば、較正曲線の凹凸(ウイグル)を比較させることによって更に年代をしばりこむことも可能となっている(ウイグルマッチ法)(坂本・春成・小林2006)。ある程度の年輪幅が必要であろうし、杭などに適用できるのか分からないが、このような高精度な測定もなされており、今後の展望として更に細かな年代測定が期待される。

もう一点、杭に関して、前述の杭と立木および古墳時代(布留式期Ⅲ・Ⅳ)の落ち込みに打設された杭の樹種鑑定を実施した(表9・10参照)。その結果、古墳時代と弥生時代で大きな違いが指摘できた。737微高地の立木は、ヤマグワ、エノキ属で河畔に生息する樹木である。この結果はこれまでの樹種同定結果と同様である。弥生時代中期の杭はアカガシ亜属・サカキなど丘陵上に生育する照葉樹林とヤナ

ギ・ヤマグワ・ケヤキ・ホオノキなど、先の微高地の立木同様、河畔林を構成する広葉樹がみられた。一方、古墳時代の杭列にはアカガシ亜属・クスノキの照葉樹、スギ、ヒノキといった針葉樹が使用されており、弥生時代中期に多くみられた河畔林を構成する広葉樹がみられない。同様の状況はⅠ期地区の樹種同定でもいえ、10層に関連した樹種はアカガシ亜属が多く、次いでスギ・ヒノキ・マツ科の針葉樹、落葉広葉樹であるコナラ亜属・クリなどで占められている〔福田2007〕。このことは、遺跡周辺の植生の変化を示していると考えられ、その一つには人的攪乱も指摘されている〔日本はか2007〕。

植生の変化は、弥生時代後期以降、土砂の供給が少なく、調査区周辺は安定した環境となったことと大いに関連するものと考えられる。層序の把握が困難な7～10-I層に関して、これまでも出土遺物が上下層混じる状況が指摘されているが、まさに安定した段階であることを示しているといえる。ただ、この段階でもⅡ面で水田域であるような低地部分では土砂の供給による土壌の更新が認められる。広範囲な堆積物ではないが、小規模な堆積を重ねながら、凹凸が徐々に埋まっている状況が想定される。それぞれの土壌層がどのように遺存しているのか、その判断は難しいが、10層に関しては第4章で述べたように、当調査区では布留式期Ⅲ・Ⅳ、及び古墳時代後期後半（TK10型式～TK209型式中心）の遺構、遺物の出土がみられ、当該期の居住域が周辺に位置していると考えられる。これまでの調査でも、古墳時代前期初頭（～弥生後期末）～後期にかけて、多くの遺構、遺物が出土しており、Ⅳ期の変遷が整理されている〔廣瀬編2007・市村2007〕。遺構が比較的希薄であった後期後半（Ⅳ期後半）や、布留式期Ⅲ・Ⅳ段階（Ⅲ期）の遺構・遺物がみられたことは重要といえよう。福万寺地区を含めて、この段階の遺構群は前段階に形成された南東・北西方向の微高地上に立地しており、大きく3つの微高地が200～300m離れて存在している。それぞれの地点において、時期的な強弱があり、建物等は復元できなかったが、中心を変えながらも途切れることなく居住域が存在している状況がより具体的になったといえる。池島Ⅱ期地区の南東側は沖積扇状地が迫ってきており、古墳時代前期の遺構、遺物が出土している。ここでの古墳時代の状況がどのようなものであるか、今後の成果に期待されるところである。微高地間の低地部は遺存状況がよくないものの、既往の調査成果では弥生時代後期（Ⅱ面）、古墳時代前期の水田域は地形的にも大きな違いはなく、同じような場所に水路を掘削し、基本的な様相はあまり変化がないことが指摘されている。弥生時代後期の居住域に関しては良く分からないが、一連の流れの中で理解できるのかもしれない。一方、古墳時代中期後半～後期は福万寺地区で居住域が良好に検出されており（中心はTK47～TK10型式）、出土遺物に渡来系の要素が見られる点〔江浦1991〕が注目される。また周辺地域の集落様相から、「渡来文化を初めとする河内平野の新展開と初期群集墳の形成期における新たな集落の形成という周辺地域の動向と非常に符号する様相を示している。」との指摘もなされている〔廣瀬2009〕。当調査区の遺構、遺物はこれに続く古墳時代後期後半の時期が中心となっている。微高地上の遺構、遺物の出土状況からは先述のように途切れることなく、地点を変えて活動痕跡がみられる。その中で先の指摘のように古墳時代中期後半が一つの画期となろうが、より具体化して示すことが今後の課題といえる。

古代以降は地割が施工され、それに沿った土地利用が行われる段階となる。福万寺Ⅰ期地区では、これまで詳細に変遷が整理されている〔江浦1992・井上1995〕。今回の調査では、若干の時期差などは認められるものの、福万寺地区で示された変遷と良く対応することが分かる。本来であれば、図等を提示し、池島地区を含めて述べねばならないところではあるが、現時点では、当調査区を中心に大枠を捉えた状況にある。ここでは井上のⅠ～Ⅵ期の変遷にそって、当調査区の状況を述べることでまとめたい。

I期は「正方位地割」の出現期である。福万寺地区では7世紀中葉～後葉の時期が与えられており、この段階の地割の導入は律令国家が主導する開発であることが指摘されている。当調査区で検出した342溝がこの段階に対応する。7世紀代については10-1a層の下限が現状では不明で、保留したいが、少なくとも8世紀には機能していたと考えられる。福万寺地区の南北溝とは距離にして約447mを測り、約4町である。福万寺地区で土器埋納遺構の分布より推定南北地割が指摘されているが、さらに「条里型地割」であることを補強する成果となった。土器埋納遺構に関しても、江浦が当初より指摘するように、水田開発（再開発）の地鎖の一つとして考えられ（江浦1992）、今回の出土状況も7・8世紀段階の開発を支持するものといえる。池島I期地区では削平も著しく、I段階の様子は不明な部分が多かったが、やはり飛鳥Ⅱ・Ⅲ段階、8世紀の土器埋納遺構が多くみられ、この時期における積極的な活動を見ることができる。ただし、この段階では地割内部はまだ凹凸の残る状況であったと考えられ、当調査区では地形にそった249溝を検出している。02-1調査区から97-3調査区で検出された「25 = 134溝」も正方位ではない。地割内部で正方位の土地利用がどこまでなされていたのが、問題となろう。当調査区で検出した土器埋納遺構は区画に沿うというより、前段階までに形成された微高地縁辺に位置しているといえる。こうした点からは、地形の高所、凹凸を改変するような土地への関わりが土器埋納遺構として表れているのではないだろうか。土地改変の様子や、実際の耕作土は遺構面が上層で攪拌されている部分が多く検証できないが、地割施工後、内部に関しては開発が徐々に進行していく状況が考えられるのではないだろうか。また、今回の調査区ではTK10型式～TK209型式に加えて飛鳥時代の遺物も出土しており、10-1面の下限がどこにあるのか、明らかにできなかったが、I期の大きな変化に関連する時期であり、今後の遺構の広がりが見えてくる。

II期は表層の「条里型地割」が施工される段階である。この開発は10世紀と考えられており、荘園開発と関連した土地開発として捉えられている。この段階では、地割内部も方位にそった利用が広がっている。当調査区では、水田ではなくもっぱら畠として利用されていたことが分かる（7・8面）。当調査区が位置する二十一ノ坪、二十二ノ坪以外でも十七ノ坪、三十四ノ坪で多数の平行する溝が検出され、畠として利用されていたことが分かる。7・8層に関しては層厚も薄く、遺存状況も悪いため、帰属面に問題があるが、II期の段階に対応するものと考えられる。畠として利用されているのは、いずれも10面の微高地にあたり、周囲との高低差、特に坪内部の高低差によって水田として利用するには困難な条件であったと推測される。金田が指摘する「微細微地形の制約を克服できない段階」といえる（金田1993）。

III期は島畠の出現期とされる。「この段階の島畠はIV期以降とは様相が異なる」、とされている点は重要である。当調査区では7面以降、6-2-2a面の島畠が初現である。詳細な時期は示せないが、6-1a面の方形土坑から出土した瓦器が12世紀末～13世紀初頭頃であり、8面の廃絶が11世紀末～12世紀初頭とすれば、6-2-2a面は12世紀後半～末頃とできる。福万寺地区では7面が島畠の初現となり、当調査区が若干遅れている。この段階の島畠は畠というより大畦畔に近い。今回検出した島畠は溝を掘削して土を盛ることによって作られている。溝は周囲の土を削って平らになしながら埋めると推測できる。地割に沿った水田をつくるには全体が高所であることもあろうが、それ以上に坪内部での傾斜が問題となろう。大畦畔とも表現できる島畠を扶んで平坦な水田1筆を確保できれば、それぞれの水田は高低差があっても機能することができる。島畠の形成と新田開発に関して述べた原田は「限られた可耕地のなかで部分的に田を確保するためのもの」と指摘している（原田2008）。当調査区の初現期の島畠

も、前段階で水田として利用できなかった地点での「田を確保する」ために造成された大畦的なものの、ということができよう。6-1a 面では再度大きく溝を掘削し、7 面で認められた傾斜が解消に向かい、二十一ノ坪ではまとまった水田面が確保されている。また、もう一つの方向として、1 基あたりの島高の面積が拡大しており、畝としても有効に活用できるようになっている。この段階に特徴的な遺構として方形土坑があげられるが、島高の有効利用と関連したものではないだろうか。1 面での井戸の分布との共通性から水溜めといった施設、主に島高に対しての簡易な灌漑施設であることが指摘できる。ただし、他の調査区や他遺跡でも同様の遺構が中世期にみられ、それらも含めて今後、検討せねばならない。また、ここで強調したいのは、島高の造成はただ地形的に高い部分を適当に盛りあげたわけではない点である。当然とはいえるが、他の坪の畦畔同様、ほぼ 10 等分する計画的な配置の中に分布している点が指摘できる。なお、当調査区ではⅡ期からⅢ期に至る過程で、北半が先行して水田化し、利用の違いから二十一ノ坪は坪内をほぼ半分に、南半が南北方向の半折型、北半が東西方向の長地型といった混在型になっている。表層の地割で混在型となっている場合は、このような理由があるのかもしれない。

I 期～Ⅲ期の変遷には当然ながら水利の変化も対応していると考えられる。I 期では 342 溝が幹線水路であるが、その後西へと移動している。水利に関しては十分検討できなかったが、思智川の整備とも関わって、各段階に水利の改変、整備が行われたものと考えられる。

Ⅳ・Ⅴ期は島高の発達段階である。この間の島高の発達に関しては「商品作物栽培」の活発化といった社会情勢が指摘されている。Ⅳ期は 3a～5a 面の段階に、Ⅴ期を 2 面の各段階に対応させたい。当調査区ではⅣ期に相当する氾濫堆積物の供給は少なく、大きな変化がみられなかったが、池島Ⅰ期地区では 5 面より島高がみられ、4 面以降、洪水砂の供給が活発で、洪水砂を芯にした島高が造成される。いわば、「災害復旧型」の島高である。池島Ⅰ期地区の 3 層の各段階の島高の発達過程と氾濫堆積物の供給がよく対応していることが指摘されており〔中尾・福田 2001〕、当調査区の 2-4b 層とこれを契機にした島高の状況もこれに続くものである。Ⅴ期は福万寺地区では島高の減少がみられるが、当調査区を含めて池島地区では島高が卓越した状況がみられる。特に 2-1a 面の島高は「地下げ」によるものであることが指摘されている〔岡本・市村・河角 2002〕。当調査区では水田ではなく、水路として機能を限定している部分が確認でき、より島高が主体となっている状況が考えられる。Ⅵ期は 1 面に対応し、大規模な洪水による大量の土砂によってⅤ期の島高は埋没する。当調査区では周辺の調査区同様、災害復旧に関連する溝状の土坑（1b 土坑）が密集して掘削されていた。

今回の調査区では池島Ⅰ期地区で遺存状況が悪く、不明瞭であったⅠ期からⅢ期の変遷を追うことができたことは幸いであった。Ⅰ期・Ⅱ期の変化は地割の変更に目に見えて大きな変化であるが、Ⅲ期・Ⅳ期の違いは単に島高の出現から発展段階ととらえられがちである。しかし、このⅢ期の島高の出現はあくまで、水田開発が前提となり、その確保のための島高造営であり、地形の積極的克服といえるものである。その点ではⅠ期・Ⅱ期と同様、開発主体が問題となる。井上が指摘するようにこういった開発を促した社会情勢が今後の大きな課題であろう。一方、Ⅳ期の島高は「地割」に規制された中で、洪水の頻発に対応するものであり、災害復旧を目的として土地を有効に利用する手段といえる。このことと商品作物の需要という社会的情勢が合致して、Ⅴ期以降、島高が卓越する状況に繋がっていき、Ⅲ期までの変化とは大きく性格が異なるものと考えられる。

以上、成果とともに課題も多く残ることとなった。当遺跡はこれまで長年にわたる調査を行っており、成果は膨大なものである。面の繋がりとして調査を行っており、遺構面の広がり考えることができる

遺跡といえる。新たな調査ではこれまでの成果の中での位置付けが非常に重要であるとともに、再度、過去の調査に立ち返って、検討することもまた重要である。こういった点で、調査・整理兩段階において、さまざまな課題があった。それぞれについて、十分に咀嚼できなかったが、今回はもっとも基本となる層序認識について、既往調査区との関係を含めてできる限り述べてきた。今後の調査の進展の中で、今回の調査成果が更に検討されることを期待したい。

【引用・主要参考文献】

- 秋山浩三・朝田公年編 2000「池島・福万寺遺跡」1 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博 1995「八尾市福万寺地区における現景観の変遷過程-池島・福万寺遺跡(福万寺I期地区)の調査から-」『大阪文化財研究』第9号 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 井上智博 1999「高島の考古学的研究-池島・福万寺遺跡の事例の再検討-」『光陰如矢-荻田昭次先生古稀記念論集-』『光陰如矢』刊行会
- 井上智博 2002「古代～近世における耕作地景観の動態」『池島・福万寺遺跡』2 (財)大阪府文化財センター
- 井上智博・畑 暢子 2002「池島・福万寺遺跡」2 (財)大阪府文化財センター
- 井上智博 2010「池島・福万寺遺跡周辺における表層地形の形成過程」『大阪文化財研究』第36号 (財)大阪府文化財センター
- 市村慎太郎 2007「庄内式・布留式における池島・福万寺遺跡および周辺遺跡の様相整理」『池島・福万寺遺跡』3 (財)大阪府文化財センター
- 内田真雄 2008「池島・福万寺遺跡」7 (財)大阪府文化財センター
- 江浦 洋 1991「古墳時代集落の変遷と特質」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』II (財)大阪文化財センター
- 江浦 洋 1992「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』VII (財)大阪文化財センター
- 大野 薫 1994「河内平野の古代中世条里遺構」『ヒストリア』第145号 大阪歴史学会
- 岡戸哲紀・信田真美世 1997「池島・福万寺遺跡発掘調査概要」XXII (財)大阪府文化財調査研究センター
- 岡本茂史・井上智博・河角龍典 1998「池島・福万寺遺跡発掘調査概要」XXI (財)大阪府文化財調査研究センター
- 岡本茂史・市村慎太郎・河角龍典・清水 哲 2002「池島・福万寺遺跡発掘調査概要」XXVI (財)大阪府文化財調査研究センター
- 荻田昭次 1973「池島町の条里遺構-調査概要-」東大阪市遺跡保護調査会
- 金田章裕 1993「微地形と中世村落」吉川弘文館
- 河角龍典 2002「池島・福万寺遺跡および周辺の地形」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XXVI (財)大阪府文化財センター
- 日下古文書研究会 2005「『日下村森家庄屋日記』享保一三年度 日下古文書研究会
- 国乗和雄編 1998「池島・福万寺遺跡発掘調査概要」XX (財)大阪府文化財調査研究センター
- 五井若菜・松田順一郎 2001「楽音寺遺跡第1・2次発掘調査報告書」(財)東大阪市文化財協会
- 坂本 稔・春成秀爾・小林謙一 2006「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生中期木棺の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集 国立歴史民俗博物館
- 佐藤甲二 1999「水田址に関する擬似畦畔Bと連続耕作」『人類誌集報』1999 東京都立大学人類誌調査グループ
- 寒川 旭 2007「池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡」『池島・福万寺遺跡』3 (財)大阪府文化財センター
- 島崎久恵・池田 晋・吉田知史 2007年「新上小阪遺跡」II (財)大阪府文化財センター
- 高橋 学 1995「臨海平野における地形環境の変貌と土地開発」『古代の環境と考古学』日下雅義編 (株)古今書院

- 田中龍男・瀧口洋美 2006 「02-7 の調査」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』33 (財) 大阪府文化財センター
- 田中龍男・林日佐子・廣瀬時習 2008 『池島・福万寺遺跡』5 (財) 大阪府文化財センター
- 地学団体研究会大阪支部 1999 『大地のおいたち』築地書館株式会社
- 辻本裕也ほか 2007 『池島・福万寺遺跡の古環境変遷 2』『池島・福万寺遺跡』3 (財) 大阪府文化財センター
- 富田克敏 2007 『新上小阪遺跡出土 石製遺物の石質について』『新上小阪遺跡』II (財) 大阪府文化財センター
- 中尾智行・福田和浩 2001 年 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要』XXVII (財) 大阪府文化財調査研究センター
- 中原 計 2008 『樹種同定からみた池島・福万寺遺跡の古植生とその利用』『池島・福万寺遺跡』6 (財) 大阪府文化財センター
- 新倉 香 2000 『河内平野における中・近世の耕作形態の一様相』『池島・福万寺遺跡』1 (財) 大阪府文化財調査研究センター
- 橋本久和 2005 『畿内』『中世窯業の諸相 ～生産技術の展開と編年～ 発表要旨』シンポジウム実行委員会
- 原田信男 2008 『中世の村のかたちと暮らし』(株) 角川学芸出版
- 廣瀬時習・鹿野黒・福田由里子 2006 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』32
- 廣瀬時習編 2007 『池島・福万寺遺跡』3 (財) 大阪府文化財センター
- 廣瀬時習 2009 『中河内における古墳時代集落の再検討 - 池島・福万寺遺跡 - 』『大阪府立近つ飛鳥博物館館報』12 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 廣瀬時習・飯田浩光編 2009 『池島・福万寺遺跡』9 (財) 大阪府文化財センター
- 福田由里子 2007 『池島・福万寺遺跡の自然科学分析』『池島・福万寺遺跡』3 (財) 大阪府文化財センター
- 森本 徹・信田真美世・佐伯信之 1998 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』XIX (財) 大阪府文化財調査研究センター
- 森井貞雄・高橋雅子ほか 1983 『山賀 (その2)』(財) 大阪文化財センター
- 山崎朝人・秋山浩三・朝田公年 2000 『池島・福万寺遺跡における土器埋納遺構ほかの集成とその特質』『池島・福万寺遺跡』1 (財) 大阪府文化財調査研究センター
- 六万寺郷土研究会 2005 『郷土史 六萬寺』

遺物に関しては以下の文献を参考にした

- 奥井智子 2007 『畿内における土製煮沸具の様相』『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年-九州近世陶磁学会 10 周年記念-』九州近世陶磁学会
- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器 1 都城の土器集成』
- 古代の土器研究会編 1997 『古代の土器研究-律令的土器様式の西・東 5 7 世紀の土器-』
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群 1』平安学園考古学クラブ
- 中世土器研究会編 1995 年 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 辻 美紀 1999 『古墳時代中・後期の土器に関する一考察』『国家形成期の考古学-大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集-』大阪大学考古学研究室
- 寺沢 薫・森井貞雄 1989 『河内地域』『弥生土器の様式と編年 近畿 1』木耳社
- 藤澤良祐 2002 『瀬戸・美濃大窯編年の再検討』(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要 第 10 輯 (財) 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 米田敏幸 1991 『土器の編年 1 近畿』『古墳時代の研究』第 6 巻 雄山閣出版株式会社

表8 遺物観察表

国番号	番号	図版番号	順序	遺構地区	種別 器形	法量 (1)は残存率1/12	特徴 外:内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時期
12	1	22	第1層	123 井戸	土製品 泥面子(魚)	長:23 幅:1.05(最大) 厚:0.55(最大)	型ナデ	橙(5YR6/6)	19世紀
12	2	22	第1層	10 2+3 3a+3	土製品 泥面子(茶の蓋)	径:33(9/12) 厚:0.8	指押さえ・ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	19世紀
12	3	22	第1層	筋掘	土製品 用途不明	長:49 径:3.4(上部) 2.3(断面最小)	ナデ 二次焼成	灰黄褐(10YR6/2)	19世紀?
12	4		第1層	123 井戸	陶器 信楽 灯明具	底径:4.3(147定) 残存高:3.65	外:抽輪(貫入)、スス付着 内:抽輪(貫入)	黄赤(2.5Y8/3)	19世紀
12	5	22	第0~1層	10 7	土器器 灯明具	口径:3.4(147定) 底径:2.05 器高:1.75	外:ココナテ 内:ナデ・ココナテ 底:回転糸切り	にぶ橙(5YR7/4)	19世紀
12	6	22	第1層	1 溝	土器器 灯明具	口径:3.4(147定) 底径:3.0 器高:1.45	外:ココナテ、スス付着 内:ナデ・ココナテ 底:回転糸切り	灰黄(2.5Y7/2)	19世紀
12	7		第1層	筋掘	磁器 碗	高台径:4.2(3/12) 残存高:2.7	染付け 一重網目文 高台端部:砂付着	青みがかった乳白色	18世紀
12	8		第1層	筋掘	磁器 碗	高台径:4.2(定) 残存高:2.6	染付け 内:見込み蛇の目輪割ぎ	灰白(7.5Y7/1) 露胎部>灰白(N8/)	18世紀
12	9		第1層	筋掘	磁器 小丸皿	口径:6.7(小片) 高台径:3.0(1/12) 器高:2.5	染付け	灰白(2.5GY8/1) 露胎部>灰白(N8/)	19世紀
12	10		第1層	10 6d	陶器 皿	口径:6.9(1.5/12) 器高:1.15 底径:5.0	外:回転ナテ 内:回転ナテ、沈線 底:糸切り	灰黄褐10YR6/2	
12	11		第1層	筋掘	陶器	高台径:7.3(1.5/12) 残存高:2.4	外:抽輪(貫入) 内:抽輪(貫入)、見込み砂目肌	灰白(2.5Y8/2)	17世紀前半
12	12		第1層	13 井戸	陶器	底径:4.6(5/12) 残存高:2.1	外:抽輪 内:抽輪(貫入)、見込み砂目肌	灰白(5Y7/1)	17世紀前半
12	13	22	第1層	筋掘	青磁 三田? 志 転用円盤か	口径:4.5(ほぼ定) 器高:2.5	口径:4.5(ほぼ定) 器高:2.5	明緑灰(5GY8/1)~オリーブ灰 (5GY6/1)	
12	14	22	第1層	10 5-6	磁器 皿	口径:13(小片) 高台径:6(4/12) 器高:3	染付け 口縁端部:口紅 高台端部:砂付着	青みがかった乳白	17世紀
12	15		第1層	10 3b	磁器 器種不明	口径:10.1(小片) 残存高:3.15	外:内:抽輪 内面突起あり	明緑灰(10GY8/1)	
12	16	22	第1層	10 5-6	土質質土器 溜鉢?	口径:21.1(小片) 残存高:3.5	外:転ナテ・ナテ 内:変形あり、転ナテ・ナテ 押目、スス付着	にぶい橙(7.5YR7/4)~橙 (7.5YR7/6)	
12	17		第1層	119 井戸	瓦質土器 伝染	口径:21.6(1.5/12) 器高:3.75	外:ナテ・ヘラミガキ 内:ナテ	暗灰(N3/)	
12	18		第1層	筋掘	銭貨	直径:2.4 厚:0.15	「寛永通寶」	/	-
12	19	35	第0~1層	筋掘	石製品 硯	長:4.3(幅:3.75(最大) 厚:0.65(最大)		凝灰岩	-
12	20		第1層	筋掘	骨角器 歯ブラシ	長:10.35 幅:1.2 厚:0.6			-
13	1	22	第1b面	22 土坑	土製品 土人形(簡)	長:4.5 幅:2.45(最大)	型づくり	黄橙(10YR7/2)	18世紀~19世紀
13	2		第1b面	30 土坑	陶器 転用円盤	径:3.8 幅:3.25 厚:0.85(最大)	外:回転ヘラケズリ 内:ナデ、抽輪	にぶい橙(7.5YR5/3)	-
13	3		第1b面	51 土坑	磁器 転用円盤	径:4.0 幅:4.0(147定) 厚:0.8~0.95(最大)	外:内:抽輪	明緑灰(7.5GY8/1)	-
13	4		第1b面	130 土坑	陶器 転用円盤	底部径:4.6(3/12) 残存高:1.4	外:ヘラケズリ 内:抽輪	にぶい黄(2.5Y6/4)	-
13	5	22	第1b面	5 土坑	白磁 肥前系 器 灯明具転用	口径:9.65(3/12) 高台径:3.86(5/12) 器高:2.65	外:回転ヘラケズリ、抽輪 内:見込み蛇の目輪割ぎ 口縁:打ち欠き、スス付着 高台:露胎	黄地>灰白(7.5Y8/1) 抽輪部>灰白(10Y8/1)	18世紀
13	6		第1b面	47 土坑	磁器 碗	口径:9.4(3.5/12) 高台径:3.2(3/12) 器高:5.7	染付け 紅紫・菊花文	少し青みがかった乳白	19世紀?
13	7		第1b面	25 土坑	磁器 碗	口径:10.8(4/12) 残存高:4.6	染付け 草花文 内:見込み蛇の目輪割ぎ	灰白(N8/)	18世紀

国番号	図版番号	図版番号	扉序	造機地区	種別形	法量 (○は残存率1/12)	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時期
13	8		第1b面	7 土境	磁器 碗	口径:9.4(1.5/12) 器高:5.4 高台径:3.6(2/12)	染付け	灰白(2.5Y8/1)	18世紀
13	9		第1b面	3 土境	磁器 碗	高台径:4.2(8/12) 残存高:3.4	染付け 高台端部:砂付着	明緑灰(10GY8/1)	18世紀
13	10		第1b面	43 土境	磁器 皿	高台径:6.2(完存) 残存高:2.8	染付け 草花文 高台端部:砂付着	青みがかった乳白(○)	17世紀後半?
13	11		第1b面	5 土境	陶器 碗	高台径:4.2(6/12) 器高:2.85	内・外:施釉 灰色 高台:磨り出し	黒地>にぶい黄(5YR6/4)施釉 高台:磨り出し	17世紀後半
13	12		第1b面	27 土境	陶器 肥前系 京焼碗	高台径:5.0(5/12) 残存高:1.5	外・内:施釉(貫入) 高台:露胎、刷印あり	施釉>灰白(5Y7/2)露胎>に ぶ澄7.5YR6/4 灰白(5Y8/1)	17世紀後半
13	13	24	第1b面	55 土境	青磁 碗	口径:13.6(小片) 残存高:3.5	富絞帯連弁文	灰白(10Y8/2)~オリーブ灰 (10Y5/2)	15世紀
13	14	22	第1b面	25 土境	陶器 丹波 漆鉢	口径:(小片) 残存高:6.25	外:回転ナデ、北魏あり 内:回転ナデ、磨り目	暗赤褐(10R3/3)~にぶい澄 (2.5YR6/3)	17世紀
13	15	26	第1b面	30 土境	瓦 平瓦	厚:1.8	内面:布目肌 外面:縄目タタキ	暗青灰(50P4/1)	古代末~中世
13	16		第1b面	3 土境	瓦 軒丸瓦	瓦当部:(4/12) 瓦当部径:13.4 厚:1.9	巴文 難れ砂付着	暗灰(N3/)	
13	17	34	第1b面	10 4d	木製品 用途不明	長:8.05 幅:3.5 厚:1.05(最大)	内面長軸側両側溝溝状に窪む、 その内側に赤色漆塗布		-
13	18		第1b面	98 土境	木製品 灰板	直径:14.0 厚:1.1	釘孔3		-
13	19		第1~3刷		磁器 碗	高台径:5.8(4/12) 残存高:2.75	外・内:施釉 高台:露胎、磨り出し	灰白(7.5Y7/1)	
13	20	24	第1~3刷		青磁 碗	高台径:4.9(完存) 残存高:2.9	外:見込み印花 高台:露胎	明オリーブ灰(2.5GY7/1)灰白 (N7/)	15世紀
13	21	24	第1~3刷		青磁 碗	口径:11.8(1.5/12) 残存高:3.7	外:細連弁文	灰オリーブ(7.5Y6/2)	16世紀
13	22		第1~3刷		土師質土器 短壺	径:不明(小片) 残存高:5.8	外:ナデ、ヨコナデ、スス付着 内:ヨコナデ、スス付着	明褐(7.5YR5/6)	
13	23		第1~3刷		陶器 備前 漆鉢	口径:34.2(12/12) 残存高:6.9	外:ナデ、ヨコナデ 内:ヨコナデ、磨り目	にぶい黄(5YR6/4)	
13	24		第1~3刷		瓦質土器 火鉢	口径:23.7(小片) 残存高:5.2	外:ハラミガキ 内:ヨコナデ、スス付着	暗灰(N3/)	14世紀~
13	25	22			瓦質土器 風鈴	口径(内):22.4(小片) 残存高:4.0	外:ハラミガキ 内:ハラケスリ・ナデ	青灰(5B5/1)~暗青灰(5B4/1)	15世紀
13	26	22	第1~3刷		土師質土器 五徳	脚部径:29.4(2/12) 器高:6.4	外・内:ヨコナデ、スス付着	にぶい黄褐(10YR7/3)	
13	27				瓦質土器 火鉢	口径:不明(小片) 残存高:4.4	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ 脚部面:砂付着	灰(N4/)	14世紀~
21	1		第2-3a面	162 水1	瓦 丸瓦	長:29.05 幅:14.2 厚:2.7(最大)	外面:縄目タタキ・板ナデ 内面:コビキA、布目肌・磨り粗 肌	灰(4/)	16世紀
21	2		第2-3a面	162 水1	瓦 丸瓦	長:26.3 幅:13.0 厚:2.1	外面:縄目タタキ・板ナデ 内面:コビキA、布目肌・磨り粗 肌	灰(N5/)	16世紀
21	3		第2-3a面	163 水1	瓦 丸瓦	長:25.5 幅:13.2 厚:2.1(最大)	外面:板ナデ 内面:コビキB、布目肌	灰(N4/)	17世紀以降
21	4		第2-3a面	170 水1	瓦質製品 土管	長:24.6 径:11.0	外:ハタ 内:指押さえ・ナデ	灰(N4/)	
21	5		第2-3a面	170 水1	石製品 石臼(横さき臼)	径:35.0 高:14.2 重:8.6kg	/		-
26	1		第2-1a面	10 5a-b	青磁 肥前系 碗 転用内腹	底径:5.1(4/12) 残存高:1.5	外:見込み蛇目輪割さ 高台端部:砂付着	明緑灰(7.5GY7/1)	17世紀
26	2	22	第2-1a面	1A 5a-b 6a-b	陶器 黒 有明重転用	口径:11.6(1.5/12) 残存高:1.8	外:ナデ、施釉 内:ハタ、施釉 1脚部打ち欠き、スス付着	砂(2.5YR6/8)~明赤褐 (2.5YR5/8)	
26	3		第2-1a- 2-2a刷	1A 3-fa	磁器 皿	口径:10.6(3/12) 残存高:6.2	染付け	明緑灰(10GY8/1)	17世紀
26	4	24	第2-1a刷	1A 2a-b 3a-b	磁器 京焼煎茶 皿	口径:9.5(1/12) 器高:2.2 高台径:5.4	染付け 高台:染付け輪かきとり	明緑灰(10GY8/1)	15世紀後半 ~16世紀前半
26	5	22	第2-2a刷	10 4b	陶器 備前 天目茶碗	底径:4.0(8/12) 残存高:3.3	外:回転ヘラケズリ、施釉 内:施釉 高台:露胎	明黄褐(10YR6/8)	
26	6		第2-2a刷	10 4d	土師質 皿	口径:11.0(1.5/12) 残存高:2.2	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	
26	7	22	第2-1a刷	1A 7a	陶器 皿	口径:24.9(3/12) 残存高:4.2	内・外:施釉	灰白(10YR8/1)~明黄褐 (10YR7/6)	17世紀前半
26	8	22	第2-3a刷	10 5g	陶器 天目茶碗 転用内腹	縦:4.8 横:4.85 厚:1.2	外:回転ヘラケズリ 内:施釉	灰白(5Y8/1)~にぶい黄澄 (5YR6/4)	

図 番 号	図 版 番 号	図 番 号	図 番 号	造 機 地 区	種 別 形	法 量 (○は残存率1/12)	特 徴 外・内調整、文様など	胎 土・色 調の特 徴	時 期
26	9	22	第2-3a期	102 祝野	細器 碗	口径:11.4(小片) 残存高:4.75	染付け 菊歯状の刷目文	明緑灰(7.5GY7/1)	17世紀
26	10	22	第2-4a期	102 祝野	細器 碗	口径:11.3(2/12) 残存高:5.9	染付け	灰白(2.5G8/1)	17世紀
26	11	22	第2-3a期	10 3	陶器 刷目 列線器	口径:8.8(12/12) 残存高:2.2	外・内:施釉	オリーブ黄(7.5Y6/3)	16世紀末
26	12		第2-3a期	10 3	陶器 皿	口径:12.6 残存高:2.6	外・内:施釉	素地>にふい青(7.5YR6/4) 釉かけ>灰白(7.5YR8/1)	16世紀
26	13	22	第2-4a期	10 4	瓦質土器 次鉢	径:18.4(2/12) 残存高:4.2	外・内:ナデ	にふい青5R7/4	14世紀~
26	14	22	第2-4a期	10 5	陶器 皿	口径:32.4(小片) 残存高:4.0	外・内:施釉	灰白(2.5Y8/2)・灰白(2.5Y7/1) ~灰黄(2.5Y6/2)	17世紀前半
26	15		第2-4a期	10 4	瓦質土器 羽釜	口径:26.6(小片) 残存高:6.3	外:ヨコナデ 内:ハケ・ナデ	灰白(2.5Y8/2)	16世紀
26	16	24	第2-3a期	10 6	青磁 碗	底径:6.7(3.5/12) 残存高:2.0	内:見込み除箱、圓縁	施釉>オリーブ灰(2.5GY6/1) 露胎>灰白(2.5GY8/1N7/)	15世紀後葉 ~16世紀前葉
26	17		第2-1a~ 2-4a期	1A 2-3a	青磁 碗	底径:5.4(3/12) 残存高:2.3	外:遺文文 内:見込み施釉	緑灰(10GY6/1)	15世紀後葉 ~16世紀前葉
26	18		第2-5b期	10 2-3	須恵器 鉢	底径:10.9(24/12) 残存高:2.15	外:回転ヘラケズリ 内:回転ナデ	灰(N6/)	
26	19		第2-2a期	134 鳥島	瓦 軒丸瓦	瓦当径:13.1(1/12)	巴文か 磨れ砂付着	灰(N4/)	
26	20		第2-1b期	10 6d	瓦 丸瓦	厚:1.3	凸面:刷目タテキ・ナデ 凹面:布目痕	灰白(5Y7/1)	古代末~中世
26	21	35	第2-1a・ 2-2a期	1A 3-4a	木製品 碗	残長:8.05 残幅:4.15 厚:1(高)最大 幅:47mm		結晶片岩	-
26	22	34	第2-3a期	10 4c	木製品 下駄	長:21.1 幅:8.1 厚:2.35(最大)	差面下駄	/	-
26	23	34	第2-5b期	10 4	木製品 納付(楕)	長:21.8 幅:24(最大) 厚:1.5(最大)	釘孔あり		-
30	1		第3-5期	鳥島 新田	陶器 転用内盤	幅:33 厚:1.9~1.7	断面:硬質	にふい赤陶(5YR4/4)	
30	2		第3-2a期	10 5-6f	土師器 皿	口径:5.6(2/12) 残存高:1.0	内:ヨコナデ	にふい黄褐(10YR6/4)	16世紀?
30	3		第3-2a期	10 6e	土師器 皿	口径:7.6(3/12) 残存高:1.6	外・内:ヨコナデ	にふい黄褐(10YR7/3)	
30	4		第3-2a期	10 5-6e	土師器 皿	口径:8.0(1.5/12) 残存高:1.5	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	にふい黄褐(10YR5/3)	
30	5		第3-2a期	10 5c-d	土師器 皿	口径:8.0(2/12) 残存高:1.6	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄褐(10YR5/12)	15世紀後半 ~16世紀前半
30	6		第3-2a期	10 2-3b	土師器 皿	口径:7.2(2/12) 残存高:1.7	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	明褐色(7.5YR5/6)	15世紀後半 ~16世紀前半
30	7	23	第3-2a期	10 4c-d	土師器 皿	口径:7.4(3/12) 器高:1.7	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	黒褐色(10YR3/1)	15世紀後半 ~16世紀前半
30	8		第3-1・ 3-2a期	177 鳥島 盛土	土師器 皿	口径:8.2(2/12) 残存高:2.0	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	にふい黄褐(10YR6/4)	15世紀後半 ~16世紀前半
30	9		第3-2a期	10 3c	土師器 皿	口径:12.0(1.7/12) 残存高:2.2	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	褐色(10YR3/1)	15世紀末 ~16世紀初葉
30	10		第3-2a期	10 5e-f	土師器 皿	口径:15.0(小片) 残存高:1.4	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	浅黄(2.5Y7/3)	15世紀末 ~16世紀初葉
30	11		第3-1a・ 3-2a期	184 鳥島 盛土	瓦器 碗	口径:13.3(1.5/12) 残存高:1.35	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰白(N7/)	13世紀末 ~14世紀
30	12		第3-1・ 3-2a期	179 鳥島 盛土	瓦器 碗	口径:13.8(小片) 残存高:2.75	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰(N6/)	13世紀後半
30	13	24	第3-2a期	10 5c-d	白磁 碗	底径:1.55(12/12) 残存高:1.6	外:施釉 内:施釉、胎土目痕 高台:四方向きぐりあり	露胎>灰(7.5Y6/1) 施釉> 灰白(5Y8/1)	15世紀
30	14	23	第3-3期	178 鳥島 盛土	瓦質土器 羽釜	口径:19.7(小片) 残存高:4.6	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	灰(N4/)	14世紀
30	15		第3-1a・ 3-2a期	179 鳥島 盛土	須恵器 鉢	口径:28.8(1.3/12) 残存高:6.0	内・外:回転ナデ	灰(N6/)	14世紀前半
30	16		第3-1a・ 3-2a期	190 鳥島 盛土	瓦 丸瓦	厚:1.7	凸面:ナデ 凹面:布目痕	青黒(5B2/1)	古代末~中世
30	17	34	第3期	10 4g-h	木製品 柄?	長:12.9 幅:1.5 厚:1.35	/	/	-

国番号	図版番号	図版番号	扉序	遺構地区	種別	法量 (○は残存率1/12)	特徴 外-内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時期
30	18	37	第3-2a層	10 6f	石製品 石皿	長:4.4(先端-基部欠け) 幅:1.9 厚:0.6 重:50g	凸底式	サヌカイト	弥生
32	1		第4a層	177 跡高	土師器 皿	口径:6.8(2/12) 残存高:1.3	外-内:ナゲ・ヨコナデ	にぶい黄緑(10YR6/4)	13世紀
32	2		第4a層	10 5c	土師器 皿	口径:8.2(2/12) 残存高:1.75	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ナゲ・ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	
32	3		第4a層	10 7g	土師器 皿	口径:11.4(1.6/12) 残存高:1.8	外:ヨコナデ 内:ナゲ・ヨコナデ	黄灰(2.5Y6/4)	
32	4		第4a層	10 5-6c	土師器 皿	口径:7.2(1.9/12) 残存高:2.3	外:指押さえ・ナゲ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	褐(7.5YR4/4)	15世紀後半 ～16世紀前半
32	5	23	第4a層	10 6f	土師器 皿	口径:7.6(3.6/12) 器高:1.95	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ナゲ・ヨコナデ	褐(7.5YR4/3)	15世紀後半 ～16世紀前半
32	6		第4a層	10 5-6e	土師器 皿	口径:10.0(2/12) 残存高:2.0	外:ナゲ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄褐(10YR5/2)	15世紀
32	7		第4a層	10 4j	磁器 海折鉢	口径:13.2(1.2/12) 残存高:3.3	外-内:施釉	灰白(7.5Y7/1)	
32	8		第4a層	10 6e	陶器 海折鉢	口径:13.8(1.2/12) 残存高:4.4	外-内:施釉	にぶい黄(2.5Y6/4)	
32	9	24	第4a層	10 5b	白磁器	径・焼き:不明(小片)	口縁端部:口調だけ	灰白(2.5GY8/1)	13世紀中頃 ～14世紀初頭
32	10		第4a層	10 7i	青磁 瓦器	直径:5.2(2/12) 残存高:2.6	/	明緑灰(10GY7/1)	
32	11		第4a層	179 跡高 盛土	瓦器 鉢	口径:14.9(小片) 残存高:3.6	外:指押さえ・ヨコナデ ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	灰(N5/)	13世紀前半
32	12		第4a層	10 7i	瓦質土器 ミニチュア 羽釜?	口径:8.0(小片) 残存高:3.0	外:ナゲ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰白(2.5Y7/1)	
32	13	23	第4a層	1A 2a-b 3a-b	土師器 鉢	口径:17.6(3/12) 残存高:5.4	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ナゲ・ヨコナデ	橙(5Y8B/6)	
32	14		第4a層	10 2f	陶器 轆轤 磁鉢	径・焼き:不明(小片)	外:回転ナゲ 内:回転ナゲ, 振り目	暗青灰(5PB3/1)	
32	15	23	第4a層	10 6e	陶器 轆轤 磁鉢	径・焼き:不明(小片)	外:回転ナゲ, 振り目 内:回転ナゲ, 振り目	オリブ黄(5Y6/3)～灰白 (5Y8/1)	15世紀前半
32	16		第4a層	10 4g	瓦質土器 磁鉢	径:不明(小片) 残存高:3.9	外:ヘラケズリ・ナゲ 内:ナゲ・ハケ・板ナゲ 振り目	灰(N4/)	15世紀
32	17		第4a層	1A 3b	瓦質土器 磁鉢	底径:10.4(3/12) 残存高:6.25	外:指押さえ・ナゲ 内:ナゲ, 振り目 二次焼成	黒(N1.5/) 黄灰(10YR5/1)～黄灰 (10YR4/1)	15世紀?
32	18		第4a層	高島 盛土	須恵器 环蓋	口径:13.6(小片) 残存高:3.5	外:回転ヘラケズリ・回転ナゲ 内:回転ナゲ 口縁端部外面:刷目	青灰(5PB6/1)	TK43形式
32	19		第4a層	高島 盛土	須恵器 环身	口径:12.0(1.5/12) 残存高:3.4	外:回転ヘラケズリ・回転ナゲ 内:回転ナゲ	青灰(5B5/1)	TK209形式
32	20		第4a層	10 7b	須恵器 環蓋	径・焼き:推定(小片) 径:13.2(最大) 残存高:5.8	外-内:回転ナゲ	灰(10Y6/1)	7世紀
32	21	33	第4a層	10 4c	金属製品 鉄鏝	長:12.1 幅:2.7 厚:0.2	/	/	-
32	22		第4a層	10 3c	金属製品 鉄鏝	長:4.1 幅:2.8 厚:0.3	/	/	-
32	23	33	第4a層	1A 7a	金属製品 鉄針	長:12.25 幅:1.1 厚:0.8	/	/	-
32	24		第4a層	10 3-4i	木製品 用途不明	長:8.1 幅:2.8 厚:0.85	孔2	/	-
32	25	35	第4a層	1A 5a-b 6a-b	石製品 磁石	長:7.45 幅:2.3(最大) 厚:2.3(最大) 重:77.9g		褐灰岩	-
34	1		第5a層	184 跡高 盛土	土師器 皿	口径:7.3(2.4/12) 残存高:0.9	外:指押さえ・ナゲ・ヨコナデ 内:ナゲ・ヨコナデ	淡橙(5YR8/4)	13世紀
34	2		第5a層	10 3c-d 4c-d	土師器 皿	口径:8.6(2.5/12) 残存高:1.5	外-内:ナゲ・ヨコナデ	灰白(5Y8/1)	13世紀
34	3	23	第5a層	10 3-4f	土師器 皿	口径:10.0(2/12) 残存高:2.5	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい黄緑(10YR7/4)	
34	4	23	第5a層	10 4g	土師器 皿	口径:9.6(小片) 残存高:2.55	外:ナゲ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	14世紀後半 ～15世紀前半

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	遺構 地区	種 器 別 形	法量 ()は残存率1/12	特徴 外-内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
34	5		第5a層	1A 4a-b	土師器 甕	口径:9.3(1.5/12) 残存高:2.55	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	灰黄(2.5Y7/2)	14世紀後半 ～15世紀前半
34	6	23	第5a層	10 5d	瓦器 甕	口径:10.1(2.1/12) 残存高:1.7	外-内:ナデ・ヨコナデ	灰白(10YR8-/2)	
34	7	23	第5a層	10 4j	土師器 甕	口径:10.7(小片) 残存高:1.5	外-内:ナデ・ヨコナデ	灰白(10YR8-/2)	13世紀後半 ～14世紀前半
34	8		第5a層	島島 盛土	瓦器 甕	口径:13.0(1.7/12) 残存高:2.9	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰(N5/)	13世紀後半
34	9		第5a層	10 7i	瓦器 甕	口径:11.0(小片) 残存高:1.6	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	灰白(N8/)	13世紀
34	10		第5a層	10 3c-d 4c-d	瓦器 甕	口径:15.6(1.5/12) 残存高:2.15	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ、渦巻き状の 胎文	灰(N5/)	13世紀末 ～14世紀
34	11	23	第5a層	10 3c-d 4c-d	瓦器 甕	高台径:2.6(3/12) 残存高:1.55	外:指押さえ・ナデ 内:胎文	灰(N5/)	13世紀後半
34	12		第5a層	10 2b	土師器 甕	口径:16.0(1.5/12) 残存高:2.1	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	
34	13		第5a層	1A 3-fa	陶器 鉢	径・幅さ:不明(小片)	外-内:回転ナデ	暗赤褐(2.5YR3/3)	
34	14		第5a層	10 6e	瓦質土器 鉢	口径:20.6(1.5/12) 残存高:6.05	外:板ナデ 内:ハケ	明褐色(5YR7/2)～黒(N2/)	14世紀
34	15		第5a層	10 2-3j	瓦質土器 次鉢	口径:24.9(小片) 残存高:3.9	内-外:ヨコナデ	暗灰(N3/)	14世紀
34	16		第5a層	10 2-3f	瓦質土器 高	口径:28.4(小片) 残存高:2.5	外-内:ヘラケズリ・ヨコナデ	暗灰(N3/)	14世紀
34	17	23	第5a層	10 3-4i	土師器 鉢	口径:28.0(1.5/12) 残存高:5.7	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ、振り目	にぶい黄橙(10YR7/2)～にぶ い黄橙(7.5YR7/4)	14世紀後半 ～15世紀前半
34	18		第5a層	10 3f	瓦質土器 鉢	口径:33.0(小片) 残存高:5.7	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰(N4/)	15世紀
34	19	28	第5a層	10 6g	須恵器 環蓋	口径:13.0(1.7/12) 器高:4.4	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・ナデ	明青灰(5B7/1)～青灰(5B5/1)	TK43～209型式
34	20		第5a層	10 6c	須恵器 壺	底径:11.2(2/12) 残存高:2.85	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)	
34	21		第5a層	10 6g	弥生土器 広口壺	口径:12.0(3/12) 残存高:4.15	外:ナデ・ヨコナデ 内:ハケ 口縁部外部面:クシ楎直状文 胴部外面:クシ楎直線文	明褐色(7.5YR5/6)	弥生中期
34	22	33	第5a層	10 5c	金属製品 鉄剣小	長:12.2 幅:2.7(最大) 厚:0.45(最大)	/	/	-
34	23	33	第5a層	10 6i	金属製品 鉄釘	長:9.9 幅:0.75 厚:0.7	/	/	-
34	24		第5a層	10 3-4i	金属製品 鉄釘	長:8.6 幅:0.6 厚:0.55	/	/	-
34	25		第5a層	10 5i	木製品 用途不明	長:12.15 幅:1.9 厚:1.05	加工痕あり	/	-
34	26		第5a層	10 3c	木製品 蓋or残板	径:14.4 厚:0.7	/	/	-
34	27	34	第5a面直上	10 6e	木製品 板	長:14.9 幅:3.65(最大) 厚:0.85	木釘7	/	-
34	28		第5a層	10 3e	瓦 平瓦	厚:1.9	四面:布目痕 凸面:ナデ	暗青灰(5B3/1)	
34	29	36	第5a層	184 島島 盛土	石製品 石鏝 転用砥石	底径:不明(20cm以下) 残存高:1.7 厚:1.5～1.3	滑石 スス付着	灰白(N8/)	-
34	30		第5a層	10 6g	石製品 砥石	長:3.7 幅:3.4(最大) 厚:2.8(最大)	花崗閃岩	/	-
54	1		第6-2a層	327 溝	土師器 甕	口径:7.0(3.5/12) 残存高:1.05	外-内:ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	13世紀
54	2		第6-1a層	10 2-3b	土師器 甕	口径:7.6(2/12) 残存高1.1	外-内:ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	13世紀
54	3		第6-1a層 下部	10 5j	土師器 甕	口径:7.9(小片) 残存高:1.1	外-内:ナデ・ヨコナデ	にぶい黄橙(7.5YR7/3)	13世紀
54	4		第6-1a層 下部	10 4i	瓦器 甕	口径:8.9(1.5/12) 残存高:1.4	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ、ヘラミガキ	灰白(10YR8-/1～8/2)	13世紀
54	5		第6-1a層	185 島島 盛土	瓦器 甕	口径:9.0(1.5/12) 残存高:1.5	外:指押さえ・ナデ ヨコナデ	灰(N5/)	13世紀
54	6		第6-1a層 下部	10 4i	土師器 甕	口径:11.7(6/12) 残存高:2.4	外-内:ナデ・ヨコナデ	浅黄橙(10YR8-/3)～橙 (5YR6/6)	14世紀

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	造機 地区	種 器 別 形	法量 (口は残存率1/12)	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
54	7		第6編-08 扉	10 3-4i	土師器 皿	口径:12.2(2/12) 残存高:1.9	外:指押さえ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	浅黄褐色(10YR8/3)	13~14世紀
54	8		第6-1a編 扉	10 2-3c	土師器 皿	口径:13.7(小片) 残存高:19.05	外:ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄褐色(10YR6/2)	
54	9		第6-1a編 扉	10 3-4c	土師器 杯	口径:16.4(小片) 残存高:2.9	外:ヘラミガキ 内:ヨコナデ	にぶい黄褐色(10YR7/2)	
54	10	24	第4-10編	個類	青磁 同安楽 赤 皿	径・縁さ:不明(小片)	外:クシ楕文 内:クシ楕文・割花文	オリーブ黄(7.5Y6/3)	12世紀中頃 ~後半
54	11	24	第6-1a編 下部	10 6f	青磁 同安楽 赤 皿	口径・径:不明 残存高:4.2	外:回転ヘラケズリ、透背文 内:楕文	オリーブ灰(10Y4/2)	12世紀中頃 ~後半
54	12	24		個類	青磁 赤 皿	底径:4.7 残存高:3.1(4/12)	外:クシ楕文 内:楕文 高台:露胎	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	12世紀中頃 ~後半
54	13	24	第6-1a編 下部	10 5h	白磁 皿	口径:15.2(小片) 残存高:2.3	外・内:施釉	灰白(7.5Y8/1)	11世紀後半 ~12世紀前半
54	14	24	第6-1a編 下部	10 4i	白磁 皿	底径:6.8(2/12) 残存高:3.1	外:回転ヘラケズリ、施釉 内:施釉 高台:露胎	灰白(5Y8/1)	-
54	15	24	第6-2-2a 扉	10 3	陶器 皿	径・縁さ:不明(小片)	外・内:施釉	灰オリーブ(7.5Y6/2)	-
54	16		第6-1a編	10 6d	瓦器 瓶	口径:13.6(小片) 残存高:2.1	外:指押さえ・ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	黒(N2/)	13世紀後半
54	17		第6-1a編	10 5b	瓦器 瓶	口径:14.4(小片) 残存高:2.45	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ 見込み:平行縦状暗紋	灰(N4/)	13世紀後半
54	18		第6-1a編	10 3i-j	瓦器 瓶	口径:15.4(1.5/12) 残存高:3.1	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰(N5/)	13世紀後半
54	19		第6-1a編	10 4d	瓦器 瓶	口径:14.3(1.5/12) 残存高:2.1	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヘラミガキ	灰白(10YR8/2)	14世紀
54	20		第6-1a編	10 3-5e	瓦器 瓶	口径:14.6(2/12) 残存高:2.95	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:調整不明	灰白(2.5Y7/1)~明期灰 (7.5YR7/2)	13世紀
54	21		第6-1a編	10 4j	瓦器 瓶	口径:15.0(小片) 残存高:3.1	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヘラミガキ	灰(N5/)	13世紀
54	22	23	第6-2-1a 扉	10 3h	瓦器 瓶	口径:14.9(2/12) 残存高:3.8	外:ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰(N4/)	12世紀後半
54	23		第6-1a編	10 3c	瓦器 瓶	口径:14.7(1.5/12) 残存高:3.3	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	灰(N4/)	12世紀後半
54	24	23	第6-1a編 下部	10 3e-f	瓦器 瓶	口径:15.3(12) 残存高:4.3	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヘラミガキ	灰白(2.5Y8/1)~にぶい橙 (7.5YR7/3)	12世紀末 ~13世紀初頭
54	25	23	第6-1a編	10 3b	瓦器 瓶	高台径:6.0(小片) 残存高:3.7	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヘラミガキ 見込み:平行縦状暗紋	灰(N4/)	12世紀末 ~13世紀初頭
54	26		第6-1a編	10 2-3i	瓦器 瓶	高台径:15.2(4.8/12) 残存高:1.5	外:ナデ・ヨコナデ 内:楕文 見込み:平行縦状暗紋		13世紀
54	27		第6-1a編 下部	10 6g	土師器 皿	底径:1.9(6/12) 残存高:1.45	外:板ナデ 内:指押さえ・板ナデ 底:糸切 り	灰黄褐色(10YR6/2)~黒黒 (2.5Y3/4)	中世
54	28		第6-1a編	10 5g	土師器 羽釜 大和型	口径:17.6(2/12) 残存高:3.35	外:ナデ・ヨコナデ、スス付着 内:板ナデ・ヨコナデ	灰白(10YR8/2)	12世紀後半~13 世紀
54	29		第6-2-2a 扉	10 4h	土師器 羽釜 河内型	口径:不明(小片) 残存高:3.5	外・内:ナデ・ヨコナデ	灰黄(2.5Y7/2)	13世紀
54	30	23	第6-1a編 下部	10 7j	土師器 羽釜 大和型	口径:25.8(1.5/12) 残存高:3.3	外・内:指押さえ・ナデ	灰白(10YR8/2)	14世紀前半
54	31	23	第6-1a編	10 5e	土師器 羽釜 山城型?	口径:18.0(1.5/12) 残存高:5.65	口縁:ヨコナデ 外・内:調整不明	浅黄褐色(10YR8/3)~にぶい橙 (5YR6/3)	13世紀?
54	32		第6-1a編	10 3-4h	土師器 羽釜 山城型?	口径:不明(小片) 残存高:4.2	外:ナデ・ヨコナデ、スス付着 内:ナデ、スス付着	灰白(2.5Y8/1)	13世紀?
54	33		第5編-06 扉	10 4g	瓦質土器 羽釜 河内型	口径:18.2(小片) 残存高:5.7	外:ヘラケズリ・ヨコナデ 内:ナデ・ハケ・ヨコナデ、スス 付着	灰黄褐色(10YR6/2)~黒(N2/)	14世紀
54	34		第6-2-2a 扉	177 島島 盛土	土師器 羽釜 大和型	口径:23.0(1.5/12) 残存高:4.9	内:ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ	灰白(2.5Y8/1)~にぶい橙 (7.5YR7/3)	14世紀
54	35		第6-2-2a 扉	328 島島 盛土	瓦質土器 漆鉢	口径:27.5(小片) 残存高:4.2	外:ヘラケズリ・ナデ 内:ナデ・掻り目	灰白(5Y8/1)	14世紀後半 ~15世紀前半
54	36		第6-1a編	178 島島 盛土	瓦質土器 漆鉢	口径:31.9(小片) 残存高:4.95	外:ヘラケズリ・ナデ 内:ナデ	灰(N6/)	14世紀後半 ~15世紀前半
54	37	23	第6-1a編 下部	10 6j	瓦質土器 漆鉢	口径:34.0(1.5/12) 残存高:6.4	外:板ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ、掻り目	灰白(7.5Y8/1)~灰(N4/)	
54	38	23	第6-1a編	10 7i-j	須恵器 鉢	口径:24.0(小片) 残存高:4.9	外・内:回転ナデ	青灰(5B6/1)	12世紀末 ~13世紀初頭

国 番号	図 番号	図版 番号	順序	遺構 地区	種 別 形	法量 (○は残存率1/12)	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
54	39	23	第6-1a層 下部	10 6c	須恵器 鉢	口径:27.0(小片) 残存高:6.8	外・内:回転ナデ, 二次焼成	明青灰(SB7/1)	12世紀末 ~13世紀初頭
54	40		第6-1a層	1A 3-1a	須恵器 鉢	口径:29.0(小片) 残存高:3.0	外・内:回転ナデ	青灰(SB6/1)	13世紀
54	41		第6-1a層	10 6i	須恵器 鉢	底径:12.6(2/12) 残存高:9.6	外:回転ナデ 内:ナデ 底:糸切り, 砂付着	灰白(N7/?)~灰(N6/?)	-
54	42		第6-1a層	10 5-g	須恵器 鉢	底径:11.0(3/12) 残存高:2.0	外・内:回転ナデ 底:回転糸切り, 砂付着	灰白(SY7/1)	-
55	1		第6-1a層 下部	10 4e-h	須恵器 坏蓋	口径:13.3(4/12) 残存高:4.55	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(SY7/1)~灰(NS/?)	MT15型式
55	2		第6-2a層	10 4b	須恵器 坏身	口径:10.9(2/12) 残存高:3.7	外・内:回転ナデ	灰白(N7/?)	TK47型式
55	3		第6-1a層 下部	10 6g	須恵器 坏身	口径:12.5(1.5/12) 残存高:4.25	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	明青灰(SB7/1)~灰(NS/?)	TK10型式
55	4		第6-1a層	10 5g	須恵器 坏蓋	口径:15.2(2/12) 残存高:3.4	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/?)~灰(NS/?)	TK10型式
55	5		第6-1a層	178 島島 盛土	須恵器 土	口径:16.7(2/12) 残存高:3.6	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ ヘラ記号 1層腐部, 船目 内:回転ナデ	灰(N6/?)	TK10型式
55	6		第6-1a層 下部	10 5g	須恵器 坏身	口径:15(小片) 残存高:3.6	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・仕上げナデ	明青灰(SB7/1)~灰(N6/?)	TK43型式
55	7		第6-1a層 下部	10 3-f	須恵器 坏蓋	口径:11.7(4/12) 残存高:3.35	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ ヘラ記号 内:回転ナデ	灰白(N7/?)	磯島1式
55	8	28	第6-1a層 下部	10 6g	須恵器 坏身	口径:11.6(2/12) 残存高:2.55	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ ヘラ記号 内:回転ナデ	灰白(N7/?)	磯島1式
55	9		第6-1a層	10 3-4g	須恵器 高台付坏身	高台径:8.9(6/12) 残存高:1.3	外:回転ヘラケズリ・ナデ 内:回転ナデ		8世紀
55	10	25	第6-1a層	190 島島 盛土	須恵器 團尾内面観	底径:16.6(小片) 残存高:2.7	外・内:回転ナデ 方形透かし孔16	暗青灰(SB3/1)	8世紀
55	11	25	第6-1a層	190 島島 盛土	須恵器 坏蓋 転用観	残存高:1.1	内:回転ナデ つまみ欠損	明青灰(SB7/1)	8世紀
55	12		第6-1a層 下部	10 6j	須恵器 長圓蓋	残存高:7.5	内・外:回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)~オリーブ黒 (7.5Y3/1)	8世紀
55	13		第6-1a層 下部	10 2-3e	須恵器 蓋	底径:3.7(8/12) 残存高:1.6	外:回転ナデ内:ナデ 底:回転糸切り	暗青灰(SB4/1)	8世紀末 ~9世紀
55	14		第6-1a層	178 島島 盛土	須恵器 蓋	口径:12.6(小片) 残存高:3.7	外・内:回転ナデ	暗青灰(SB3/1)	TK47 ~MT15型式小
55	15		第6-1a層 下部	10 6b	須恵器 蓋	口径:12.6(1.5/12) 残存高:4.55	外:回転ナデ・溝状文 内:回転ナデ	灰白(N7/?)~灰(N4/?)	TK10型式
55	16		第6-1a層 下部	10 5g	須恵器 蓋	底径:10.0(2/12) 残存高:6.2	外:回転ヘラケズリ・カキメ 内:回転ナデ	青灰(SB6/1)	7世紀
55	17		第6-1a層 下部	10 6e-h	須恵器 蓋	底径:13.0(4/12) 残存高:4.2	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・ナデ		7世紀
55	18		第6-1a層 下部	10 5f	須恵器 蓋	底径:15.2(2/12) 残存高:7.0	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:指押さえ・回転ナデ		7世紀
55	19		第6-2-1a層	10 3g-h	土師器 杯	口径:15.3(1.2/12) 残存高:3.8	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ヨコナデ, 放射線状腐文	浅黄褐色(10YR8/3)	8世紀か
55	20		第6-1a層	10 3-4h	瓦 九瓦	厚:1.4	凸面:縄目タタキ 凹面:春日根	にがし黄褐色(10YR7/4)	古代か
55	21	26	第6-1a層	10 5e	瓦 平瓦	厚:21~2.2	凹面:春日根 凸面:縄目タタキ	灰(N4/?)	古代末~中世
55	22	26	第6-2-2a層	207 島島 盛土	瓦 平瓦	厚:23~2.5	凹面:春日根, 横溝痕か 凸面:縄目タタキ	灰白(SY7/1)	古代
55	23	26	第6-2-1層	10 3b	瓦 平瓦	厚:2.0	凹面:春日根 凸面:縄目タタキ	青灰色(SB5/1)	古代末~中世
55	24	33	第6-1a層 下部	10 5e	銭貨	直径:2.5 厚:0.15	「景徳元寶」	/	
55	25	33	第6-1a層	10 4j	銭貨	直径:2.5 厚:0.15	「元祐通寶」	/	
55	26		第6-1a層	10 5-f	金属製品 釘	長:4.0 幅:0.5 厚:0.3	/	/	-
55	27		第6-1a層	10 4e	金属製品 釘?	長:10.4 幅:0.45 厚:0.5	/	/	-
55	28		第6-1a層	10 5g	金属製品 鉄鎌	長:5.4 幅:1.4(最大) 厚:0.28	/	/	-

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	遺構 地区	種 器 別 形	法量 ()は残存率1/12	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
55	29		第6-1a層 下部	10 5f	金属製品 刀子	長:96 幅:135 厚:0.3	/		-
55	30	33	第6-1a層	10 6d	金属製品 刀子	長:20.3 幅:1.5 厚:0.15	/		-
55	31	34	第6-1a層	10 6b	木製品 用途不明	長:106 幅:15 厚:1.45	/	/	-
55	32		第6-1a層	10 4c	木製品 用途不明	長:6.25 幅:4.35 厚:2.5	本釘あり	/	-
55	33	35	第6-1a層	178 島高 盛土	石製品 砥石	長:965 幅:46(最大) 厚:1.65(最大)		角閃石変山岩	-
55	34	35	第6-1a層	10 6c-j	石製品 砥石	長:46 幅:31 厚:1.3		黒色片岩	-
56	1		第8層	10 2-3d	瓦器 甕	口径:8.4(4/12) 残存高:1.4	外:指押さえ・ヨコナテ 内:ナテ・ヨコナテ	灰白(N8 ⁺)	
56	2		第8層	10 3b-c	瓦器 甕	口径:12.4(小片) 残存高:2.3	外:調整不明 内:ハウミガキ	灰白(2.5Y7/1)	12世紀
56	3		第8層	10 7c-d	土師器 杯	口径:14.9(小片) 残存高:2.8	外:指押さえ・ヨコナテ 内:ヨコナテ	浅黄橙(10YR8/3)	9世紀?
56	4		第8層	10 2-3d	土師器 羽釜 大和型	口径:17.8(12/12) 残存高:3.8	外:ナテ 内:指押さえ・ナテ	灰白(10YR8-/2)	13世紀
56	5		第8層	10 5c	須恵器 甕	底径:12.7(15/12) 残存高:2.05	外:回転ヘラケズリ・回転ナテ 内:回転ナテ	青灰(SB6/1)	
56	6		第7-8層	10 4b	須恵器 杯蓋	口径:14.6(小片) 残存高:3.25	外:回転ヘラケズリ・回転ナテ 内:回転ナテ 1線溝部:筋目目	灰白(N7 ⁺)	MT85型式
56	7		第8層	10 7c-d	須恵器 杯蓋	口径:14.6(15/12) 残存高:4.2	外:回転ヘラケズリ・回転ナテ 内:回転ナテ	灰(N6 ⁺)	TK10 ~MT85型式
56	8	28	第8層	10 6c	須恵器 瓿瓶	口径:5.6(2/12) 残存高:17.5	外:回転ナテ・カキメ 内:回転ナテ	灰白(N8 ⁺)~灰(N7 ⁺)	TK10 ~MT85型式
56	9	33	第8層	10 4b	瓦貨	直径:2.5 厚:0.15	「秤符元書」	/	
57	1	25	第9層	335 土坑	瓦器 甕	口径:15.1(11/12) 高台径:3.65~4.15 器高:4.5	外:指押さえ・ナテ・ ヨコナテ・ハウミガキ 内:ナテ・ハウミガキ 見込み平行線状暗文	灰(N4 ⁺ ~5 ⁺)	12世紀末 ~13世紀初頭
57	2	23	第9層	361 墓ち込み	瓦器 甕	口径:10.1(2/12) 残存高:1.85	外:ナテ・ヨコナテ・ハウミガキ 内:ハウミガキ	灰(N5 ⁺)	12世紀
57	3		第9層	464 溝	瓦器 甕	口径:14.3(小片) 残存高:3.2	外:指押さえ・ナテ・ヨコナテ 内:ヨコナテ・ハウミガキ	灰(N4 ⁺)	12世紀後半
57	4	23	第9層	253 溝	瓦器 底部	高台径:4.7(5/12) 残存高:0.9	外:ナテ 見込み・螺旋状暗紋	灰(N5 ⁺)	13世紀
57	5	28	第9層	252 溝	須恵器 杯蓋	口径:11.0(4/12) 器高:3.35	外:ハウオコシ・回転ナテ 内:回転ナテ	灰白(N8 ⁺)~灰(N6 ⁺)	飛鳥1~II式
57	6		第9層	254 溝	須恵器 杯身	口径:9.0(4/12) 器高:2.65	外・内:回転ナテ 底:ハウオコシ	灰(N6 ⁺)	飛鳥1~II式
57	7		第9層	497 土坑	須恵器 杯身	口径:12.4(小片) 残存高:3.2	外:回転ナテ・沈線 内:回転ナテ	灰(N6 ⁺)	TK43型式
57	8		第9層	253 溝	須恵器 杯身	径・傾き:不明(小片)	外:回転ヘラケズリ・回転ナテ ヘラ記号 内:回転ナテ	青灰(SB6/1)	TK43~2099型式
57	9		第9層	232 溝	黑色土器 大甕 甕	高台径:6.0(4/12) 残存高:1.0	外:ナテ 内:調整不明	明黄橙(10YR8-/6)	10世紀
57	10		第9層	227 溝	土師器 羽釜	口径:不明(小片) 残存高:2.7	外:ナテ・スス付着 内:ナテ	にぶい・黄(7.5YR6/3)	-
57	11		第9層	270 溝	土師器 甕	口径:不明(小片) 残存高:2.8	外:ヨコナテ 内:調整不明	にぶい・黄(2.5Y6-/3)	-
57	12	33	第9層	10 4j	金属製品 刀子	長:11.95 幅:1.4 厚:0.4	/	/	-
57	13	25	第10層	418 ピット	土師器 高台付甕	口径:12.55(14/12) 器高:3.45	外:指押さえ・ナテ・ヨコナテ 内:ナテ・ヨコナテ	にぶい・黄橙(10YR7/3)	10世紀中葉
57	14		第9層	307 溝	土師器 甕	口径:13.0(小片) 残存高:2.1	外・内:ナテ・ヨコナテ	にぶい・黄橙(10YR7/3)	
57	15		第9層	313 溝	土師器 甕	口径:16.0(小片) 残存高:2.0	外・内:ナテ・ヨコナテ	にぶい・黄橙(10YR7/3)	
57	16	26	第9層	雑倉 10 6g	土師器 甕	口径:15.5(25/12) 残存高:6.4	外:指押さえ・板ナテ ヨコナテ 内:ナテ・ヨコナテ	にぶい・橙(7.5Y7/4)~橙 (5YK7/8)	7世紀末~8世紀初?

国番号	図版番号	図版番号	扉序	遺構地区	種別 器形	法量 ()は残存率1/12	特徴 外-内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時期
57	17		第3~10層	彌生	土師器 杯	口径:18.4(小片) 残存高:4.3	外:ヘラミガキ 内:調整不明	橙(7.5YR6/6)	8世紀
57	18		第9層	227 (229) 溝	須恵器 釜	口径:14.8(18/12) 残存高:7.25	外:平行タタキ・カキメ 回転ナデ 内:同心円状帯て具痕あり 回転ナデ	灰白(N8/)~灰(N6/)	TK10型式
57	19	26	第9層	228 溝	須恵器 甕	底径:11.6(4/12) 残存高:8.15	外-内:回転ナデ	灰白(N7/)~灰(N5/)	8世紀後半
57	20	26	第9層	321 溝	須恵器 甕	底径:10.2(12) 残存高:14.5	外-内:回転ナデ 底:回転赤きり	灰(N6/)~赭灰(N3/)	8世紀末 ~9世紀
57	21	26	第9層	293 溝	瓦 平瓦	厚:2.5	凹面:春日旗,ヘラズリ 凸面:平行タタキ	青灰(5PB6/1)	古代
58	1		第9層	10 3d	須恵器 杯蓋	口径:14.8(小片) 残存高:2.6	外-内:回転ナデ	青灰(5B6/1)	TK43型式
58	2		第9層	10 6g	須恵器 杯蓋	口径:12.6(15/12) 残存高:2.9	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/)~灰(N4/)	TK209型式
58	3		第9層	10 4g	須恵器 杯蓋	口径:10.4(15/12) 残存高:3.1	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	明赤灰(5B7/1)	飛鳥1式
58	4		第9層	1A 5a~b	須恵器 高台付杯蓋	底径:9.4(2/12) 残存高:1.7	外-内:回転ナデ	灰白(N7/)	7世紀末 ~8世紀
58	5		第9層	10 4b	須恵器 杯蓋	口径:15.2(13/12) 残存高:3.6	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/)~灰(N6/)	TK43型式
58	6		第9層	10 4g	須恵器 杯蓋	口径:15.4(2/12) 器高:4.3	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N8/)~灰(N4/)	TK43型式
58	7		第9層	10 5f	須恵器 杯蓋	口径:12.6(4/12) 残存高:5.0	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/)~灰(N5/)	MT15型式
58	8		第9層	10 4g	須恵器 杯蓋	口径:14.0(小片) 残存高:3.55	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)	TK10型式
58	9		第9層	10 4g	須恵器 杯蓋	口径:15.2(15/12) 残存高:3.55	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/)~灰(N6/)	TK10型式
58	10		第9層	10 4g	須恵器 高杯	口径:幅き固定 口径:13.0(小片) 残存高:6.6	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 波状文 内:回転ナデ	灰白(N7/)	TK23型式
58	11		第9層	10 4g	須恵器 甕	頸部径:7.0(8/12) 残存高:7.9	外-内:回転ナデ 自然磨きしい、土器片着着	オリーブ黒(7.5Y5/1)~青灰 (5B5/1)	
58	12		第9層	1A 6a~b	須恵器 甕	口径:8.4(4/12) 残存高:3.1	外-内:回転ナデ, 沈線	青灰(5B6/1)	7世紀後半
58	13		第9層	10 3j	土師器 杯	口径:15.4(小片) 残存高:3.15	外:押押しナデ 内:ナデ	灰白(10YR8/2)	8世紀後半
58	14		第9層	10 4g	土師器 鉢	口径:15.6(小片) 残存高:4.0	外-内:調整不明	明赤陶(5YR5/6)	
58	15		第9-2層	10 2h	土師器 杯	口径:13.1(小片) 残存高:3.3	外-内:マメツましく調整不明	橙(5YR6/6)	
58	16		第9層	1A 7a~b	土師器 2ニテ ア土器 高杯	口径:7.0(小片) 残存高:2.8	外-内:調整不明	にぶい黄橙(10YR7/3)	古墳
58	17		第9層 (8層説じ り)	10 2h	土師器 高杯	頸部径:2.2(小片) 残存高:2.7	外-内:調整不明	浅黄橙(10YR8/3)	古墳か
58	18		第9-2層	10 2h	弥生土器 甕	底径:6.65(14/12) 残存高:3.1	外:タタキ・ナデ 内:調整不明	にぶい黄橙(10YR6/4)	弥生後期
58	19		第9層	10 3i	青磁 甕	底径:4.4(4/12) 残存高:3.4	外:連弁文	明緑灰(10GY7/1)	13世紀初頭~中 頃
58	20	36	第9-2層	10 2h	石製品 砥石	長:11.3 幅:6.0 厚:3.1(最大)		凝灰岩質流紋岩	-
58	21	36	第9層	10 4g	石製品 用途不明	長:10.9 幅:6.3(最大) 厚:1.05(最大)		結晶片岩	-
58	22	33	第9層	10 6h	金属製品 刀子	長:19.6 幅:1.5 厚:0.25			-
61	1		第10-1a面	342 溝	須恵器 杯蓋	口径:8.6(2/12) 残存高:1.85	外:回転ナデ	青灰(5B6/1)	飛鳥Ⅱ~Ⅲ式
61	2	25	第10-1a面	342 溝	須恵器 杯蓋	口径:9.5(4/12) 残存高:3.75	外-内:回転ナデ 底部:未調整	灰(N7/)	飛鳥Ⅱ~Ⅲ式
61	3		第10-1a面	342 溝	須恵器 高台付杯	底径:15.0(6/12) 残存高:1.25	外:回転ナデ 内:回転ナデ・ナデ	灰白(10Y7/1)~灰(10Y6/1)	8世紀
61	4		第10-1a面	342 溝	須恵器 杯蓋	口径:14.3(25/12) 残存高:2.95	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N5/)	TK10型式
61	5		第10-1a面	342 溝	須恵器 杯蓋	口径:14(小片) 残存高:3.0	外-内:回転ナデ	灰(N5/)~赭灰(5YR5/1)	TK43型式
61	6		第10-1a面	342 溝	須恵器 杯蓋	口径:14.5(12/12) 残存高:3.3	外:回転ヘラズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)~灰(N5/)	TK43型式

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	遺構 地区	種 別 形	法量 ()は残存率1/12	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
61	7	第10-1a面	342 溝	須恵器 坏身	口径:11.9(15/12) 残存高:3.7	外・内:回転ナデ	灰白(N8/)-灰(5Y3/1)	MT15型式	
61	8	第10-1a面	342 溝	須恵器 坏身	口径:12.5(3/12) 残存高:4.8	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)	MT15型式	
61	9	第10-1a面	342 溝	土師器 杯	口径:12.3(15/12) 残存高:3.0	外・内:ナデ・ヨコナデ マメツ	浅黄橙(10YR8/3)	古代	
61	10	第10-1a面	342 溝	土師器 杯	口径:13.2(小片) 残存高:2.1	外・内:ナデ・ヨコナデ マメツ	橙(7.5YR6/6)	古代	
61	11	第10-1a面	342 溝	土師器 杯	口径:17.6(小片) 残存高:2.7	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	灰白(10YR8/2)	8世紀	
61	12	第10-1a面	342 溝	土師器 杯	口径:不明(小片) 残存高:2.7	外・内:ナデ・ヨコナデ マメツ	橙(5YR6/6)	8世紀	
61	13	第10-1a面	342 溝	土師器 高杯	残存高:6.1	外:ハケ・板ナデ 内:指押さえ・ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)		
61	14	26	第10-1a面	342 溝	瓦 丸瓦	厚:1.7	凸面:ナデ 凹面:巻目痕	灰白(5Y8/1)	古代
61	15	第10-1a面	503 ピット	土師器 壺	口径:11.6(6/12) 残存高:3.7	外・内:板ナデ・ヨコナデ	灰白(10YR8/2)～にぶい橙 (7.5YR7/4)		
65	1	25	第10-2面	626 ピット	口径:12.6(4.5/12) 残存高:2.95	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	にぶい橙(5YR7/4)	8世紀初頭	
65	2	25	第10-2面	529 土坑	口径:14.9(14/12) 器高:3.6	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	にぶい黄橙(10YR7/3)	8世紀初頭	
65	3	第10-2面	622 土坑	土師器 杯	口径:14.7(9/12) 残存高:2.6	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	灰黄(2.5Y7/2)	8世紀初頭	
65	4	25	第10-2面	622 土坑	口径:15(9/12) 器高:3.95	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文 I層:打ち欠きか	浅黄橙(10YR8/3)	8世紀初頭	
67	1	27	第10-2面	512 土坑	須恵器 坏蓋	口径:14.7(14/12) 器高:3.7	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ I層:打ち欠き	灰(N6/)	TK43型式
67	2	27	第10-2面	512 土坑	須恵器 坏身	口径:13.3(3/12) 残存高:3.8	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N5/-N6/)	TK43型式
67	3	27	第10-2面	512 土坑	須恵器 坏身	口径:13.2(小片) 器高:4.3	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・仕上げナデ,当て 瓦痕	灰N6/	TK43型式
67	4	27	第10-2面	512 土坑	土師器 杯	口径:10.5(10/12) 器高:4.1	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	灰白(2.5Y8/2)	飛鳥1～II型式
67	5	27	第10-2面	512 土坑	土師器 杯	口径:17.4(3/12) 残存高:6.4	外:指押さえ・ナデ・ ヨコナデ・ハラミガキ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	にぶい黄橙(10YR7/3)	飛鳥1～II型式
67	6	27	第10-2面	543 土坑	須恵器 坏蓋	口径:10.7(14/12) 器高:3.65	外:尖角部ヘラオコシ未調整 回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ・仕上げナデ	灰(N6/-N5/)	飛鳥1式
67	7	27	第10-2面	611 土坑	土師器 杯	口径:10.0(3/12) 残存高:2.65	外:指押さえ・ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ, 放射線状腐文	橙(5YR6/6)	飛鳥II式
67	8	第10-2面	611 土坑	須恵器 坏蓋	口径:13.3(15/12) 残存高:3.5	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)-灰(N5/)	TK209形式	
67	9	第10-2面	611 土坑	土師器 高杯	口径:17.8(小片) 脚柱径:2.15 残存高:4.05	外・内:調整不明	にぶい黄橙(10YR7/3)	古墳?	
67	10	第10-2面	581 土坑	土師器 高杯	底径:11.2(7/12) 残存高:4.8	外・内:調整不明 円孔3	橙(5YR6/6)～赤(10R5/6)		
67	11	第10-2面	647 土坑	須恵器 坏蓋	口径:14.3(小片) 残存高:3.75	外・内:回転ナデ	灰(N6/)	MT15型式	
67	12	第10-2面	352 ピット	須恵器 坏身	口径:11.1(24/12) 残存高:2.7	外:回転ヘラケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰(N6/)	TK209形式	
70	1	28	第10-2面	611 土坑	土製品 移動式壺(底)	/	外:ハケ・ナデ 内:指押さえ・ナデ	暗赤褐(5YR3/4) 生駒西麓産	-
70	2	第9面	253 溝	土製品 移動式壺(底)	/	外:ハケ・ナデ 内:調整不明	暗褐(7.5YR3/4) 生駒西麓産	-	
70	3	28	第9層	10 3b	土製品 移動式壺(炊 口)	/	外・内:指押さえ	明赤褐(5YR5/6) 生駒西麓産	-
70	4	28	第9層	10 3b	土製品 移動式壺 (炊口)	/	外・内:指押さえ	明赤褐(5YR5/6) 生駒西麓産	-
70	5	28	第10-1a面	342 溝	土製品 移動式壺(脚)	/	外:指押さえ 内:ハケ	暗褐(7.5YR3/4) 生駒西麓産	-
70	6	28	第9層	10 3b	土製品 移動式壺(脚)	/	外・内:調整不明	明赤褐(5YR5/6) 生駒西麓産	-

国 番号	号 番号	図 版 番号	扉 序	遺 構 地 区	種 別 形	法 量 ([○] は残存率1/12)	特 徴 外・内調整、文様など	胎 土・色 調の特 徴	時 期
70	7	28	第10-1a層	10 2b	土製品 移動式甕 (肥)	/	指押さえ	褐(75YR4/4) 生駒西麓産	-
73	1		第10-2面	375 土坑	弥平土器 外尻1線鉢	口径:28.0(小片) 残存高:5.1	外:ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ 内:ヨコナデ・ヘラミガキ	にぶい・黄橙(10YR6/3)	弥生後期か
73	2		第10-2面	605 土坑	土師器 布留式甕	口径:18.0(小片) 残存高:3.8	外:ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヘラタズリ・板ナデ	灰黄褐(10YR5/2)	布留式期Ⅳ
73	3		第10-2面	704 土坑	土師器 布留式甕	口径:13.8(小片) 残存高:10.0	外:ハケ・板ナデ・ヨコナデ スス付着 内:板ナデ	灰白(10YR8/2)～黒灰 (10YR5/1)スス>黒(N1.5/)	布留式期Ⅳ
73	4		第10-2面	612 溝	土師器 甕	口径:14.8(小片) 残存高:4.4	外:ナデ・ヨコナデ 内:指押さえ・ナデ・ヨコナデ	にぶい・黄橙(7.5YR5/4)	古墳?
73	5		第10-2面	612 溝	弥生土器 甕	口径:不明 残存高:4.0	外:調整不明、眉目 内:調整不明	にぶい・黄橙(10YR7/2)	弥生後期?
73	6		第10-2面	513 土坑	弥生土器 有稜高杯か	口径:22.0(小片) 残存高:2.8	外・内:調整不明	にぶい・黄橙(10YR6/4)	弥生後期?
73	7		第10-2面	530 ピット	土師器 甕	口径:21.5(最 大)(4/12) 残存高:11.25	外:ハケ、スス付着 内:指押さえ・ヘラタズリ スス付着	浅黄橙(10YR8/3)～黒(N1.5/)	布留式期
83	1	28	第10-1a層	10 3d	須恵器 坏蓋	口径:15.3(15/12) 残存高:3.2	外:カキメ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/?)～灰(N5/?)	TK43型式
83	2		第10-1a層	10 2e-1	土師器 短小	口径:17.8(小片) 残存高:4.0	外・内:調整不明	橙(7.5YR6/8)	古墳時代後期
83	3		第9-10層	10 3b	高杯	口径:10.4(3/12) 残存高:3.65	外:指押さえ・ナデ 内:ナデ	にぶい・黄橙(10YR7/2)	
83	4	29	第10-2b層	10 3d	弥生土器 小型鉢	口径:8.8～9.1(10/12) 底径:3.05 器高:3.9	外:ナデ・ヨコナ デ・ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	にぶい・黄橙(10YR7/3)	弥生後期後半 ～庄内式期
83	5	27	第10-1層	1A 6a	須恵器 坏蓋	口径:14.2(小片) 器高:3.6	外:回転ヘラタズリ・回転ナデ 1線外周・眉目 内:回転ナデ、当て具痕	灰白(N7/?)	TK10型式
83	6		第10-2a層	10 3-g	須恵器 坏身	口径:不明 全周径:15.8(4/12) 残存高:3.4	外:回転ヘラタズリ・回転ナデ ヘラミガキ 内:回転ナデ・仕上げナデ	青灰(5P6/1)	TK43 ～TK209型式
83	7		第10-1層	1A 7a-b	土師器 杯	口径:14.9(3/12) 残存高:4.55	外・内:調整不明	橙(5YR6/6)	古墳時代後期?
83	8		第10-2b層	10 4b	須恵器 甕	口径:9.2(5/12) 残存高:5.1	外・内:回転ナデ	灰(N6/?)	
83	9		第10-1面	精査 10 5j	須恵器 坏蓋	口径:12.4(小片) 残存高:2.9	外:回転ヘラタズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白(N7/?)～灰(N6/?)	TK209 型式
83	10		第10-1層	10 4g-h	土師器 把手	/	指押さえ	褐(7.5YR4/4)	
83	11	29	第10-1層	10 7j	土師器 高杯	口径:15.7(35/12) 残存高:4.85	外・内:マメツ	橙(2.5YR6/6)	古墳 中期か
83	12		第10-1面	精査 10 5g	土師器 甕	残存高:3.95	外・内:ヨコナデ	にぶい・橙(7.5YR6/4)	
83	13		第10-1層	10 4j	金属製品 釘	長:4.05 幅:0.65 厚:0.3	/	/	-
88	1		第11面	687 落ち込 み	土師器 高杯	口径:15.7(12/12) 残存高:3.1	外:ヨコナデ 内:板ナデ・ハケ	灰黄(2.5Y7/2)	布留式期Ⅳ
88	2		第11面	687 落ち込 み	土師器 高杯	口径:横き・縦定 口径:15.8 残存高:3.6	外・内:調整不明	にぶい・黄橙(10YR6/3)	布留式期Ⅳ
88	3		第11面	687 落ち込 み	土師器 高杯	脚柱径:3.2(不明) 残存高:7.55	外・内:調整不明	にぶい・黄橙(10YR6/3)	布留式期Ⅳ
88	4		第11面	687 落ち込 み	土師器 高杯	底部径:10.12(12) 口径:不明 高:3.8	外・内:調整不明	にぶい・橙(7.5YR7/4)	布留式期Ⅲ・Ⅳ
88	5		第11面	687 落ち込 み	土師器 高杯	残存高:7.25	外:ナデ・ハケ・ヘラミガキ 内:調整不明	浅黄(2.5Y7/3)～にぶい・黄橙 (10YR6/3)	布留式期Ⅲ・Ⅳ
88	6	29	第11面	687 落ち込 み	土師器 三連甕	口径:5.0(6/12) 残存高:4.5	外・内:調整不明 穿孔2小孔、この部分で接合 痕合1線状	にぶい・黄橙(10YR6/3)	布留式期Ⅲ・Ⅳ
88	7		第11面	687 落ち込 み	土師器 甕	口径:18.2(12/12) 残存高:7.0	外・内:調整不明	にぶい・橙(7.5YR7/4)	布留式期Ⅲ・Ⅳ
88	8		第11面	687 落ち込 み	土師器 布留式甕	口径:15.1(3/12) 残存高:4.0	外:ナデ、スス付着 内:ナデ	にぶい・黄橙(10YR7/3)	布留式期Ⅳ
88	9		第11面	677 土坑	右製品 用途不明	長軸:27.05(3/4) 短軸:22.2 厚:11.3 重:10.2kg	/	花崗岩	-

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	遺構 地区	種 別 形	法量 (○は残存率1/12)	特徴 外・内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
91	1	29	第10-11面	652 土坑	土師器 庄内式甕	口径:12.8(10/12) 器高:17.55	外:タタキ・ハケ・ナデ ヨコナデ、スス付着 内:板ナデ、スス付着	浅黄褐色(7.5YR6/4)～にぶい黄 褐色(10YR7/3)	庄内式Ⅳ
91	2	29	第10-11面	652 土坑	土師器 庄内式甕	口径:16.5(14/12) 器高:26.1	外:タタキ・ハケ・ヨコナデ ヘラミガキ、スス付着 内:指押さえ・ハラケズリ・ハケ ナデ・ヨコナデ、スス付着 11指:打ち欠き	にぶい褐色(7.5YR5/3) 生駒西麓産	庄内式Ⅳ
91	3		第10-11面	652 土坑	土師器 甕	残存高:15.65	外:ハケ、スス付着 内:ハラケズリ、スス付着	灰褐色(7.5YR4/2)～黒(N1.5/)	庄内式Ⅳ
91	4	29	第10-11面	652 土坑	土師器 直口甕	残存高:23.5	外:ハケ・ヘラミガキ 内:ハラケズリ・ハケ ヘラミガキ	浅黄色(2.5YR/3)	庄内式Ⅳ
93	1		第11面	459 溝	土師器 高杯	胴径:4.3(定) 残存高:7.6	外:内:ヘラミガキ	にぶい黄褐色(10YR5/3)	後期
93	2		第11面	459 溝	弥生土器 甕	胴径:12.5(15/12) 残存高:4.25	外:ナデ・ハケ、刺突文 内:ナデ	にぶい黄褐色(10YR6/3)	後期後半 河内Ⅳ様式
93	3		第11面	461 溝	弥生土器 手取り形土器	口径:15.5(小片) 残存高:5.9	外:貼付突帯網目 内:ナデ	にぶい褐色(7.5YR7/4)	後期後半 河内Ⅳ様式
93	4	29	第11面	460 溝	弥生土器 鉢	口径:24.8(15/12) 残存高:6.2	外:ハケ・ヨコナデ・ヘラミガキ 11指端部:辻織 内:調整不明	にぶい赤褐色(5YR5/4)	後期後半 河内Ⅳ様式
95	1	30	第11-2層	10 5d	弥生土器 手取り形土器	口径:17(鑑定) 残存高:7	外:貼付突帯網目 内:ハケ	にぶい黄褐色(2.5Y6/4)	後期後半 河内Ⅳ様式
95	2		第11-3層	10 5-g	弥生土器 甕	胴径:13.8(2/12) 残存高:5.8	外:内:ナデ	にぶい黄褐色(10YR6/3)	-
95	3		第11-4層	10 5j	弥生土器 甕	口径:15.7(小片) 残存高:3.75	外:板ナデ・ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	灰黄(2.5Y7/2)	後期
95	4		第11-4層	10 3d	弥生土器 広口甕	口径:21.6(小片) 残存高:1.75	外:板ナデ・ヨコナデ クシ楕圓状紋 内:ヘラミガキ、ローリング	にぶい褐色(7.5YR5/3)～褐 (7.5YR4/3)	中期 河内Ⅳ様式
95	5		第11-3・ 11-4層	10 2j・ 3j	弥生土器 甕(底部)	底径:6.1(5/12) 残存高:4.65	外:ヘラミガキ 内:指押さえ・ナデ	にぶい黄褐色(10YR7/3)	中期
95	6		第11-4層	10 5j	弥生土器 甕(底部)	底径:6.4(定) 残存高:4.6	外:ヘラミガキ、スス付着 内:ナデ、スス付着	灰黄褐色(10YR5/2) 生駒西麓産	中期
95	7		第11-4層	10 4g	弥生土器 甕(底部)	底径:8.7 残存高:4.55	外:調整不明 内:調整不明、ローリング	にぶい黄褐色(10YR6/3)	前期か
95	8		第11層	10 5j	弥生土器 鉢底部か	底径:4.9(11/12) 残存高:3.35	外:指押さえ・ナデ 内:板ナデ	灰黄(2.5Y6/2) 生駒西麓産	後期後半
95	9	30	第11-4層	10 5b	弥生土器 甕	底径:4.8(定) 残存高:3.1	外:内:ヘラミガキ	灰黄(2.5Y6/2) 生駒西麓産	中期
95	10	34	第11面	655 流跡	木製品 用途不明	長:26.2 幅:100 厚:2.85	/	/	-
105	1	30	第12-1a面 (11-5層 内)	721 土器	弥生土器 広口甕	口径:7.3(2/12) 器高:11.6 底径:4.2(定)	縦孔2個(1) 外:ヘラミガキ、スス付着、磨滅 著しい 内:ナデ	にぶい褐色(7.5YR6/4) 生駒西麓産	中期 河内Ⅳ様式
105	2	30	第12-1a面	723 土器	弥生土器 古付鉢	口径:13.5(10/12) 残存高:6.2	透かし孔4、底部穿孔 外:ヨコナデ・ヘラミガキ、円織 内:ヨコナデ・ヘラミガキ スス付着	にぶい褐色(7.5YR7/4) 生駒西麓産	中期 河内Ⅳ様式
105	3	30	第12-1a層	809 土器	弥生土器 甕(底部)	底径:6.9(定) 残存高:6.25	外:内:ヘラミガキ、スス付着 器型はせる	にぶい褐色(7.5YR7/4)	中期
105	4		第12-1a面	1A 2a	弥生土器 高杯	胴径:6.6(3/12) 残存高:1.3	外:ヘラミガキ	にぶい褐色(7.5YR6/4) 生駒西麓産	中期
105	5		第12-3 a 層	10 4g	弥生土器 器種不明	底径:2.4(6/12) 残存高:4.5	外:ハラケズリ・ナデ 内:ハラケズリ	にぶい黄褐色(10YR7/2)	-
105	6		第12-1a層	10 4b	弥生土器 夾蓋	径:4.75(定) 残存高:5.3	外:ナデ・ヘラミガキ 生駒西麓産	にぶい褐色(7.5YR5/4) 生駒西麓産	前期～中期
105	7		第12-1a層	10 6b	弥生土器 甕	径:幅き:不明(小片)	外:ヘラミガキ、クシ楕圓状文 内:ハケ・ナデ	褐色(10YR4/4) 生駒西麓産	中期 河内Ⅳ・Ⅴ様式
105	8		第12-1a層	10 3c	弥生土器 甕	径:幅き:不明(小片)	外:ヘラミガキ、クシ楕圓状文 内:ヘラミガキ	にぶい赤褐色(2.5Y4/4)	中期
105	9		第12-1a層	722 水1	石製品 石甕丁	長:5.5(最大) 幅:3.5(最大) 厚:0.6(最大)		緑泥片岩	弥生
105	10	34	第12-1a層	10 5g	木製品 ヤス	長:19.05(14/12定) 幅:0.4～0.9	/	/	弥生
109	1	30	第13-1a層	10 4b	弥生土器 広口甕	底径:7.7(11/12) 残存高:33.9	外:ヘラミガキ、クシ楕圓状文 内:板ナデ・ヘラミガキ	にぶい黄褐色(10YR5/3)	中期 河内Ⅱ・Ⅲ様式
109	2		第13-3b層	10 3c	弥生土器 甕(底部)	底径:9(底部のみ) 残存高:6.6	外:ヘラミガキ 内:調整不明、底部に指圧痕あり	にぶ黄褐色(10YR6/4)～にぶい黄 褐色(10YR4/3)黒濁>黒(N1.5/)	中期Ⅱ
109	3	32	第13-3 b 層	大明寺 土器	弥生土器 甕	径:幅き:不明(小片)	外:ヘラミガキ、クシ楕圓状文・有輪木葉文 内:ヘラミガキ	にぶい黄褐色(10YR7/2)	前期 河内Ⅰ様式

国 番号	図 番号	図版 番号	扉序	遺構 地区	種 別 形	法量 (又は残存率)1/12	特徴 外-内調整、文様など	胎土・色調の特徴	時 期
109	4		第13-3b層	10 3b-c 4b-c	張生土器 壺か	径・傾き：不明(小片)	外：ヘラミガキ、ヘラ楕沈織文 内：指押さえ・ナデ	灰黄(25Y7/2)	前期 河内1様式
109	5	37	第13層	777 石砌	石製品 石砌	長：11.6(先端欠ける) 幅：3.5 厚：1.2 重： 55.9g	先端欠損	サヌカイト	弥生
109	6		第13-3b層	10 3-b	石製品 模刻石器	長：4.3 幅：3.45(最大) 厚：1.75(最大)	左右折損、上下端部潰れ	サヌカイト	弥生
118	1		第14-1a層	10 5g	張生土器 壺	口径：14.7(3/12) 器高：2.6	穿孔1 外-内：ナデ・ヘラミガキ	にぶい・黄褐色(10YR5/3) 生駒西麓産	前期 河内1-3or4様 式
118	2		第14-1a層	1A 3-4b	張生土器 鉢	口径：19.8(15/12) 残存高：5.8	外-内：ヘラミガキ	灰黄褐色(10YR5/2) 生駒西麓産	前期 河内1様式
118	3		第14-1a層	10 4c	張生土器 広口壺	口径：14.6(3/12) 残存高：3.85	外：ヘラミガキ、ヘラ楕沈織文 内：ヘラミガキ	にぶい・黄(7.5YR6/4) 生駒西麓産	前期 河内1様式
118	4		第14-1a層	1A 5a	張生土器 壺	口径：9.9(6/12) 残存高：3.95	外：ナデ・板ナデ・ヘラミガキ 内：調整不明	にぶい・黄(7.5YR6/4)	前期か
118	5		第14-1a層	10 3g	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：調整不明 1線縁部：筋目 内：調整不明	暗灰黄(2.5Y4/2) 生駒西麓産	前期 河内1-3様式
118	6		第14-1a層	1A 5a	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：調整不明 1線縁部：筋目 内：ナデ	灰黄褐色(10YR4/2)	前期 河内1様式
118	7	32	第14-1a層	1A 5a	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ・ヘラミガキ 1線縁部：筋目 内：指押さえ・ナデ	灰黄褐色(10YR5/2)	前期 河内1様式
118	8		第14-1a層	10 5c	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：ヘラミガキ、段 内：指押さえ	オリーブ褐色(10YR4/3)	前期 河内1様式
118	9		第14-1a層	1A 5a	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：ヘラミガキ、ヘラ楕沈織文 内：ヘラミガキ	黒(10YR2/1)	前期 河内1様式
118	10		第14-1a層	10 3j	張生土器 壺	径・傾き：不明(小片)	外：調整不明、ヘラ楕沈織文 内：調整不明	浅黄(2.5Y7/3)	前期 河内1様式
118	11		第14-2a (上)層	10 5-6d	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	褐褐色(10YR3/4) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	12		第14-2a (上)層	10 6d	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	黒褐色(10YR3/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	13		第14-2a (上)層	10 6e	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	暗褐色(10YR3/3) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	14	32	第14-2a (上)層	10 6e	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	黒褐色(25Y3/1)	晩期 長原式
118	15	32	第14-2a (上)層	10 6e	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	灰黄褐色(10Y R 4/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	16		第14-2a (上)層	10 6d	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	暗オリーブ褐色(25Y3/3) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	17	32	第14-2a (上)層	10 6e	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	黒褐色(10YR3/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	18		第14-2a (上)層	10 5-6d	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	暗灰黄(2.5Y4/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	19	32	第14-1b層	10 6c	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ、貼付突帯筋目 内：ナデ	黒褐色(25Y3/1) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	20		第14-1a層	10 6f	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ・ハラケズリ 貼付突帯筋目 内：ナデ	にぶい・黄褐色(10YR4/3) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	21	32	第14-2a (上)層	10 6c	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ・ハラケズリ 貼付突帯筋目 内：ナデ	暗灰黄(2.5Y4/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
118	22	32	第14-2a (上)層	10 6c	縄文土器 深鉢	径・傾き：不明(小片)	外：ナデ・ハラケズリ 貼付突帯筋目 内：ナデ	黒褐色(25Y3/2) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	1	31	第14-2a面	10 4d	張生土器 広口壺	口径：12.25(12/12) 残存高：14.65	外：ヨコナデ・ヘラミガキ 段・遠弧文 内：ナデ・ヨコナデ・ヘラミガキ	灰黄(25Y6/2) 生駒西麓産	前期 河内1-2様式
119	2	31	第14-2b面	916 土坑	張生土器 鉢	口径：21.7(5/12) 器高：16.7 底径：9.3	外：指押さえ・ナデ・ヨコナデ ヘラミガキ 内：ナデ・ヘラミガキ	灰黄褐色(10Y R 4/2) 生駒西麓産	前期 河内1-2様式
119	3	31	第14-2a面	911 土器跡	張生土器 壺	口径：20.9(6/12) 残存高：22.35	外：板ナデ、ヘラ楕沈織文 1線縁部：筋目 内：板ナデ スス付着	黄灰(25Y5/1)～黒 黒(10YR3/1)スス >黒(10YR1.7/1) 生駒西麓産	前期 河内1-2様式
119	4	31	第14-2a面	919 大塚跡	張生土器 壺	口径：21.3(9/12) 底径：7.1 器高：23.9	外：板ナデ・板ナデ・ヨコナデ、 段 1線縁部：筋目 内：指押さえ・ナデ・ヨコナデ スス付着	にぶい・黄(7.5YR5/3) 生駒西麓産	前期 河内1-2様式
119	5	31	第14-2a面	907 大塚跡	張生土器 壺	口径：19.7(7/12) 残存高：14.5	外：板ナデ 1線縁部：筋目 内：板ナデ	にぶい・黄褐色(10YR6/3) ～黒(10YR3/1) 生駒西麓産	前期 河内1-2様式

図 番 号	図 版 番 号	扉 序	造 機 地 区	種 器 形 式	法 量 (○は残存率1/12)	特 徴 外・内調整、文様など	胎 土・色 調の特 徴	時 期	
119	6	31	第14-2a面	871 漆	弥生土器 蓋	口径:11.7(3/12) 残存高:1.6	外:指押さえ・ヘラミガキ 内:ヘラミガキ	褐灰(10YR4/1) 生駒西麓産	前期 河内1様式
119	7	31	第14-2a面	10 6f	弥生土器 灰口甕	口径:12.5(完存) 残存高:2.7	縦孔2個(1号2編 外:ヨコナデ・ヘラミガキ、殺 内:ヘラミガキ)	にぶい・黄褐(10YR5/3) 生駒西麓産	前期 河内1様式
119	8		第14-2a面	907 埋埋	弥生土器 甕(灰部)	底径:7.2(3.5/12) 残存高:6.45	外:板ナデ・ヘラミガキ 内:指押さえ・ナデ、スス付着	灰黄褐(10YR5/2) 生駒西麓産	前期 河内1様式
119	9	32	第14-2a面	精査 10 4j	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:指押さえ・板ナデ 貼付突帯類目 内:板ナデ	にぶい・黄褐(10YR4/3) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	10		第14-2a面	精査 10 5g	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ・ヘラケズリ 貼付突帯類目 内:ナデ	黒褐(10YR3/1) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	11	32	第14-2a面	10 5j	弥生土器 蓋	径:傾き:不明(小片)	外:板ナデ 内:ナデ	灰黄褐(10Y R 4/2) 生駒西麓産	前期
119	12		第14-2a面	10 6e	弥生土器 蓋	底径:6.4(12/12) 残存高:2.75	外・内:板ナデ	にぶい・黄褐10YR6/3 生駒西麓産	
119	13		第14-2a面	1A 6a	縄文土器 深鉢	底径:5.6(小片) 残存高:1.1	/	にぶい・黄褐(10YR5/3) 生駒西麓産	晩期
119	14	32	第14-2a面	10 6c	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ、貼付突帯類目 1号縁部:類目 内:ナデ	灰黄褐(10YR5/2) ～黒褐(10YR3/1) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	15		第14-2a面	10 6d	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ、貼付突帯類目 内:ナデ	暗褐色(10YR3/3) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	16	32	第14-2a面	1A 3a	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ 1号縁部:類目 内:ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	晩期 並貫型式
119	17	32	第14-2a面	1A 3a	縄文土器 深鉢	径:不明(小片) 残存高:6.7	外:ナデ・ヘラケズリ 内:板ナデ	にぶい・黄褐(10YR6/4)～灰黄 褐(10YR5/2)	晩期 並貫型式
119	18		第14-2b面	10 4f	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ、貼付突帯類目 内:ナデ	黒褐色(7.5YR3/1) 生駒西麓産	晩期 長原式
119	19	32	第14-2b面	10 4f	縄文土器 深鉢	径:傾き:不明(小片)	外:ナデ、貼付突帯類目、スス付 着 内:ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	晩期 長原式
119	20	32	第14-2b面	10 6g	縄文土器 深鉢?	径:傾き:不明(小片)	外:調整不明 内:全無 1号縁部:類みか	灰黄(2.5Y6/2)	晩期 並貫型式
119	21		第14-2b面	1A 6a	縄文土器 深鉢?	径:傾き:不明(小片)	外・内:調整不明、ローリング	灰白(2.5Y8/2)	中期
120	1	36	第14-2a面	10 3f	土製品 板状土鉢	長:8.5 幅:6.1(最大) 厚:4.2(最大)	指押さえ・板ナデ 円孔1・両端持ちこみあり	灰白(5YR8/2)～橙(5YR6/6)・ 褐灰(5YR6/1)～灰(N4/)	-
120	2		第14-2a面	10 4c	石製品 磨石	長:6.6 幅:4.3 厚:2.3	破片	花崗斑岩	-
120	3	36	第14-2a面	10 6e	石製品 叩石	長:11.4 幅:6.4(最大) 厚:5.1(最大)	敲打痕著しい	灰色砂岩	-
120	4	36	第14-2b面	10 6e	石製品 叩石	長:12 幅:5.95(最大) 厚:3.1(最大)	敲打痕あり	花崗岩(片状)	-
120	5	36	第14-2b面	10 6d	石製品 石棒	長:11.7 幅:4.8(最大) 厚:4.5(最大)		かんらん石安山岩	-
a	24		第1層	10 3g-h	総器 青磁		蓮弁文		13世紀初頭～中頃
b	24		第4a層	1A 6a-b	総器 青磁		内面陶織		
c	24		第9面	391 溝	総器 青磁		蓮弁文		13世紀初頭～中頃
a	37		第12-1a層	10 4c	石製品 サヌカイト		チップ	サヌカイト	-
b	37		第11-4層	10 4c	石製品 サヌカイト		チップ	サヌカイト	-
c	37		第14-2a面	10 5b	石製品 サヌカイト		チップ	サヌカイト	-
d	37		第14-2a面	10 6c	石製品 サヌカイト		チップ	サヌカイト	-

表9 出土杭材観察表

No.	直径	長さ	特徴	樹種	備考
第11組754杭列					
1	7×8	21		クスノキ	樹皮
5	7	53	先端加工あり	スギ	樹皮
6	10	62	先端加工あり		樹皮
7	5	195	先端加工あり		樹皮
8	4	73.5	先端加工あり		樹皮
9	10×3	41			樹皮
10	4	76	先端加工あり		樹皮
12	5	64	先端加工あり	スギ	樹皮
13	7.5~8	46	先端加工あり	アカガシ垂属	樹皮
14	3	22	/		/
15	10	11.8	先端加工あり		樹皮
16	6	88	先端加工あり		樹皮
17	2	10	/		/
18	7	90	先端加工あり		樹皮
19	6	128	先端加工あり	スギ	樹皮
20	3.5×2.5	20.5	/		/
第11組755杭列					
1	8	40.5	先端加工あり		/
2	5×2	33.5			/
3	5×3.5	21	/		/
4	8.5×6.5	92	先端加工あり		樹皮
5	7×3.5	27.5	先端加工あり		/
6	5	59	先端加工あり	スギ	樹皮
7	5.5	48	先端加工あり		/
8	6.5×3	25	先端加工あり		/
10	7×5.5	75.2	先端加工あり		/
11	5.5	47	先端加工あり	ヒノキ	樹皮
12	7×5	53	先端加工あり		/
13	3.5×3	12	/		/
14	7	45	先端加工あり		/
15	6	48.5	先端加工あり	スギ	樹皮
16	7	61	先端加工あり		/
17	5	56	/		/
18	8	93	先端加工あり		樹皮
第11b組826杭群					
4	2	13.5	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
6	2	15	先端加工あり	アカガシ垂属	樹皮
16	3.5×4.5	11	先端加工あり	アカガシ垂属	樹皮
18	5.5	29	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
25	3.5	11	欠損		樹皮
26	3	32	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
第11b組849杭列					
1	3	16.7	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
2	2.3	24.6	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
3	3	23.5	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
4	3.8	32.2	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
第11b組850杭列					
1	3.6	40.2	欠損	ヤナギ属	樹皮
2	2.5	21	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
3	3.5	40	先端加工あり	ヤナギ属 ●	樹皮
4	3.4	36	/		樹皮
5	3.2	10	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
6	4	26	先端加工あり		樹皮
7	3	20.3	/		/
8	3.1	27.4	先端加工あり	ケヤキ	樹皮
第11b組851杭列					
1	3.5	41	/	ヤナギ属	樹皮
2	4.5	39	先端加工あり	ホノノキ	樹皮
3	4.5	16.5	先端加工あり		樹皮
4	4.3×2.6	13	先端加工あり		樹皮
5	6.5	22	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
6	3.6	11	/		樹皮

No.	直径	長さ	特徴	樹種	備考
第11b組900杭群					
1	2	8	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
2	2	26.3	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
3	1.7	23.5	/	ヤナギ属	樹皮
4	1.8	24	/	ヤナギ属	樹皮
5	1	14	/	サカキ	樹皮
6	3	13.8	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
7	3.1	22.5	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
8	6	6.5	/		樹皮
第11b組926杭群					
1	2	9.5	欠損	ヤマダワ	樹皮
2	2.5	22	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
3	2	23	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
第12組781杭列					
1	3	27	先端加工あり	アカガシ垂属	樹皮
2	3.5	28	先端加工あり	ヤナギ属	樹皮
3	2.5	21.5	先端加工あり		樹皮
4	3~3.5	41.5	先端加工あり	アカガシ垂属	樹皮
5	2	17.5	先端加工あり		/
6	1.5	11	/		/
7	1.5~2	17	/		樹皮
8	1.5~3.5	24	/		樹皮
9	2.5~3	21	/		/
11	3	36	先端加工あり		/
12	3	6	小片		/
13	3×3.5	27.5	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
14	2.5~3.5	19.5	/		樹皮
16	2.5	10.5	小片		樹皮
17	2~2.5	10	小片		樹皮
18	2~2.5	14.5	先端加工あり		樹皮
19	3.5	22.5	先端加工あり		樹皮
20	1×0.5	3	小片		/
21	1.5	17	/		/
22	2	7	小片		/
23	4~4.5	40	先端加工あり	エノキ属 ●	樹皮
24	3	33.5	先端加工あり		樹皮
25	3	42	先端加工あり		樹皮
26	2	13	先端加工あり		樹皮
28	2.5~3	44	先端加工あり		樹皮
30	2	21	先端加工あり	ヤマダワ	樹皮
31	2.5	30	先端加工あり		樹皮
32	3.5	20	先端加工あり		樹皮
34	2	8.5	小片		/
35	2.5	25	/		樹皮
36	2	23	先端加工あり	ホノノキ	樹皮
40	2.5~3	8	小片		/

表10 出土立木観察表

No.	直径	長さ	特徴	樹種	備考
第12-1a組737微点地					
1	/	/	/	立木	ヤマダワ
2	/	/	/	立木	ヤマダワ
3	/	/	/	立木	エノキ属 ●
4	/	/	/	立木	ヤマダワ
5	/	/	/	立木	ヤマダワ

直径、長さの単位はcm
 ●はAMS分析試料、樹種鑑定はバシオラ・ボによる
 他は、中部調査事務所 図11の鑑定による

表11 先端炭化材観察表

図版番号	登録番号	地区	遺構面・層名	遺構番号	鑑定結果
図版35-a	243	10	6j	第1面	マツ科
図版35-b	1189	10	6i-j	第6-1a層	マツ科
図版35-c	1005	10	6e	第6-1a層	マツ科
図版35-d	908	1A	2-3a-b	第5a層	マツ科
図版35-e	1059	10	5e	第7層	マツ科
図版35-f	1004	10	5-6e	第6-1a層	マツ科
図版35-g	450	10	5-6f	第3-2a層	ヒノキ
図版35-h	1238	1 O	4g	第6-2a層	ヒノキ
	403	10	4j	第2-4a層	スギ
	511	10	6g-h	第3-2 a 層	スギ
	984	10	4b	第6-1 a 層	ヒノキ
	1057	10	2-3d	第8層	ヒノキ
	1104	10	4d	第6-8層	マツ科

表12 出土歯・骨類観察表

図版番号	登録番号	地区	遺構面・層名	遺構種類	遺物鑑定
	533	10	5i	第3-2 a 層	ウマ 歯面1個
	632	10	3d	第4 a 層	ウマ肩甲骨 関節窩片1個
	770	10	4e	第5 a 層	ウマ 臼歯片1個
	968	10	5-6d	第6-1 a 層	ウマ 臼歯片1個
	1310	10	6h	第6-1 a 層下部	ウマ 臼歯片1個
	1078	10	6e	第6-2 a 層下部	ヒト 大腿骨片2個
	1457	10	4b	第9面	ウマ 臼歯片5個
	1856	10	6j	第12-1a面	テン 右大腿骨1個

表13 植物遺体他 観察表

図版番号	登録番号	地区	遺構面・層名	遺構種類	同定結果
	243	10	6j	第1面	ウリ科種子1個、タニシ科蓋1個
	274	10	5i	第2-1a層	モモ核1個
	267	10	6d	第2-4b層	モモ核1個
	407	10	6g	第2-5b層	クルミ炭化半分
	426	10	2f	第3-1a層	モモ核1個
	430	1A	7a	第3-1a層	クロマツ植果1個
	445	10	5c-d	第3-2a層	モモ核1個
	450	10	5-6f	第3-2a層	モモ核半分1個
	460	10	4f	第3-2a層	モモ核片3個
	466	10	4c-d	第3-2a層	モモ核半分1個
	476	10	3-f	第3-2a層	モモ核半分1個
	482	10	2c-d	第3-2a層	モモ核1個、ウメ核1個
	485	10	3c-d	第3-2a層	モモ核破片1個
	521	10	6h	第3-2a層	モモ核1個
	567	1A	3a-b-4a-b	第3-2a層	モモ核1個
	578	1A	6a-b	第3-2a層	モモ核1個
	603	10	5e	第4a層	モモ核半分1個
	607	10	6e	第4a層	モモ核半分1個
	636	10	3d	第4a層	モモ核1個
	665	10	5b	第4a層	モモ核1個
	725	10	4d	第5a層	モモ核半分1個
	935	10	6i	第5a層	モモ核1個
	1480	1A	2-3a	第9層	モモ核1個
	1356	10	5g	第10-2b面	モモ核1個
	1674	10	3i	第10-2b面	モモ核半分1個
	1653	1A	7a	第10層	モモ核片1個
	1666	10	3c	第11-4層	トチノキ果皮1個
	1675	10	6g	第11-4層	クルミ炭化片2個
	1885	10	4d	第11-5層	コガネムシ科土塊片4個
	1738	10	6d	第13層	クルミ炭化片1個
	1774	10	3-4 b c	第13b層	トチノキ果皮1個
	1881	1 O	3 j	第15層	ウミユナ1個